

「子どもの生活に関する実態調査」結果報告書

令和 4 年(2022 年)8 月

目次

【実施内容】

1. 目的……………p1
2. 子どもアンケート……………p2
3. 関係機関アンケート……………p2

【アンケート結果】

1. 小学生アンケート結果について……………p3
2. 中学生アンケート結果について……………p35
3. 小学校(組織)アンケート結果について……………p67
4. 中学校(組織)アンケート結果について……………p82
5. 教職員(小学校)アンケート結果について……………p96
6. 教職員(中学校)アンケート結果について……………p102
7. 関係機関(教育・保育機関)アンケート結果について……………p108
8. 関係機関(相談支援機関)アンケート結果について……………p122
9. 関係機関職員(教育・保育施設)アンケート結果について……………p136
10. 関係機関職員(相談支援機関)アンケート結果について……………p144
11. 地域アンケート結果について……………p152

1. 目的

本市では、多様な主体が連携し、社会総がかりですべての子どもが笑顔で健やかに育つ社会を目指し、昨年の3月に制定した「子どもを守る条例」に基づき、「総合的・継続的・重層的」な支援を一人ひとりの子どもに届ける取り組みを進めています。

子どもが抱える課題は、昨今ヤングケアラーがクローズアップされるなど、さらに複雑・多様・複合性を増しています。そこで、本市における、今後取り組むべき子育て支援施策の資料とするため、「子どもの生活に関する実態調査」を実施しました。

2. 子どもアンケート

① 概要

	内容
対象	● 公立小学校 5 年生及び 6 年生の全児童 ● 公立中学校全学年の全生徒
方法	無記名アンケート方式による Web アンケート
調査期間	令和4年(2022 年)5月 13 日(金)～6月15日(水)

② 回収結果

対象	在籍数	回答数	回答率
小学校(5 年生及び 6 年生)	6,865 人	4,615 人	67%
中学校(全学年)	10,120 人	3,071 人	30%
計	16,985 人	7,686 人	45%

3. 関係機関アンケート

① 概要

	内容	
対象	市立小・中学校	小学校及び中学校
	教育・保育施設	保育所(園) 幼稚園 認定こども園 留守家庭児童会室 大阪府立枚方支援学校
	相談支援機関	枚方市社会福祉協議会 ファミリーポートひらかた 枚方市ファミリーサポートセンター 自閉症療育センター Link 市相談関係部署 地域包括支援センター 枚方市介護支援専門員連絡協議会
	地域	枚方市民生委員・児童委員 枚方市青少年育成指導員 子ども食堂 北大阪商工会議所
方法	無記名アンケート方式による Web アンケート及びアンケート用紙の配布・回収	
調査期間	令和4年(2022年)6月1日(水)～7月22日(金) ※上記期間において対象機関ごとに調査期間を設定し実施した。	

② 回収結果

(件)

対象	回答数(組織)	回答数(職員等)
市立小・中学校	63	698
教育・保育施設	60	324
相談支援機関	14	81
地域		716
計	137	1,819

1. 小学生アンケート結果について

小学生調査の結果(単純集計)

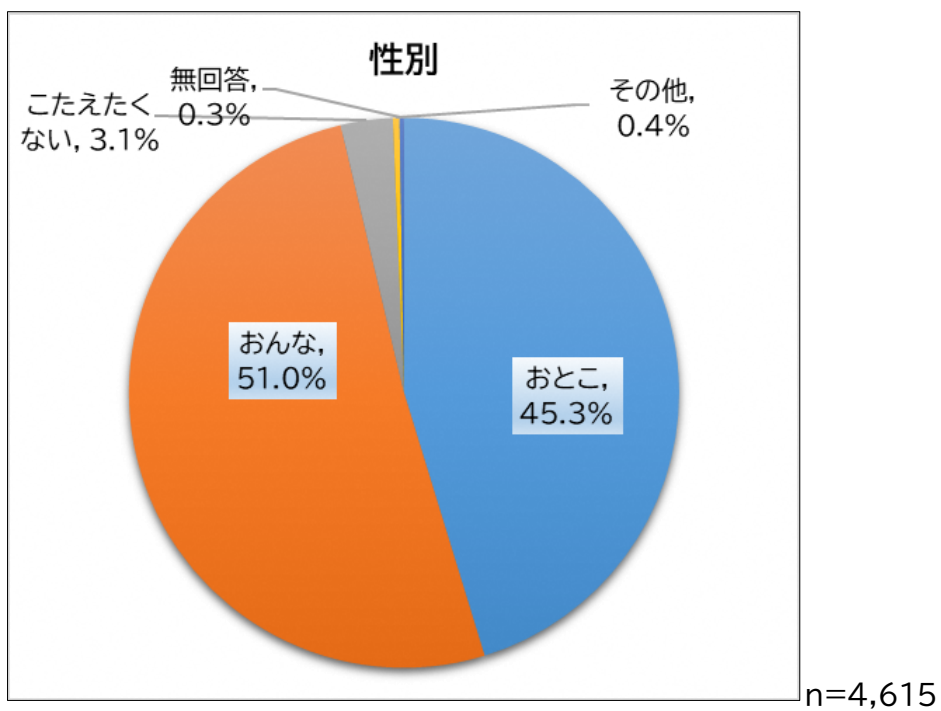
1. 学年

回答者の学年は以下の通り。

5年生	2,308 人	50%
6年生	2,307 人	50%
合計	4,615 人	

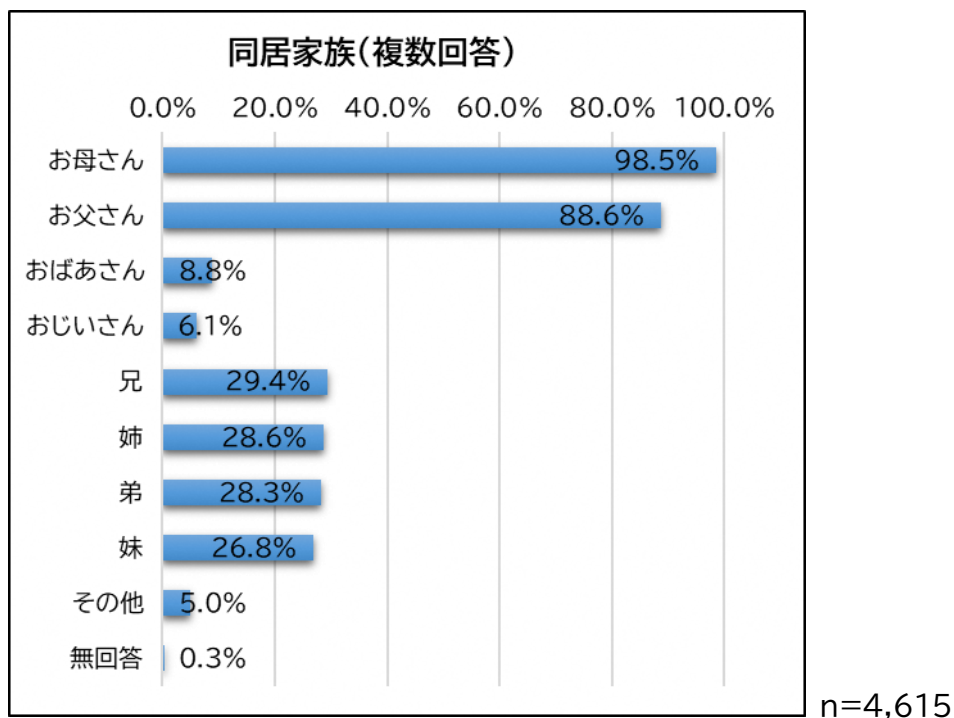
2. 性別

回答者の性別は以下の通り



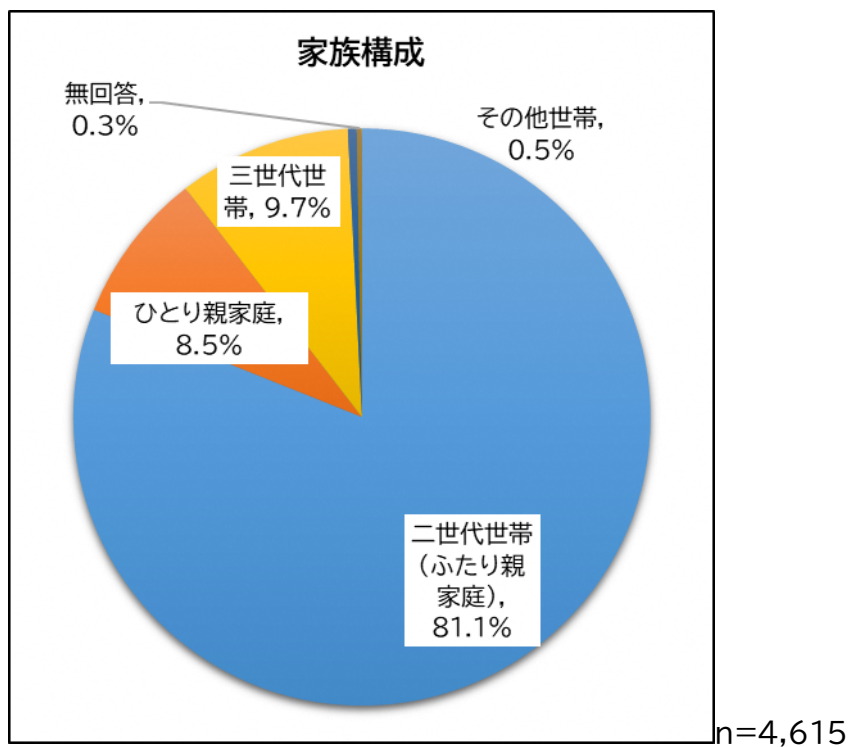
3. 同居家族

同居家族は、「母親」が 98.5%と最も高く、次いで「父親」が 88.6%、「兄」29.4%、「姉」28.6%となっている



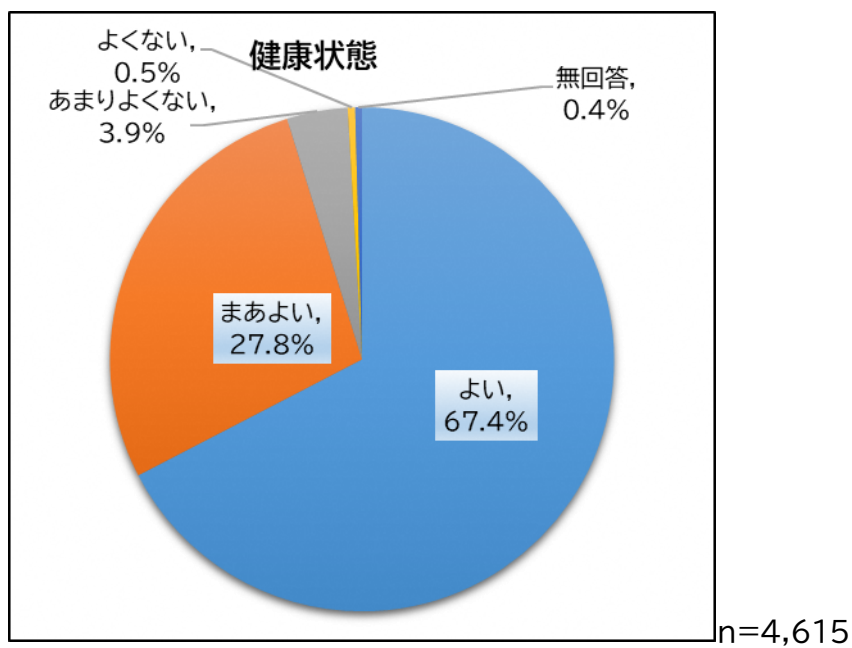
4. 家族構成

回答者の家族構成は以下の通り。



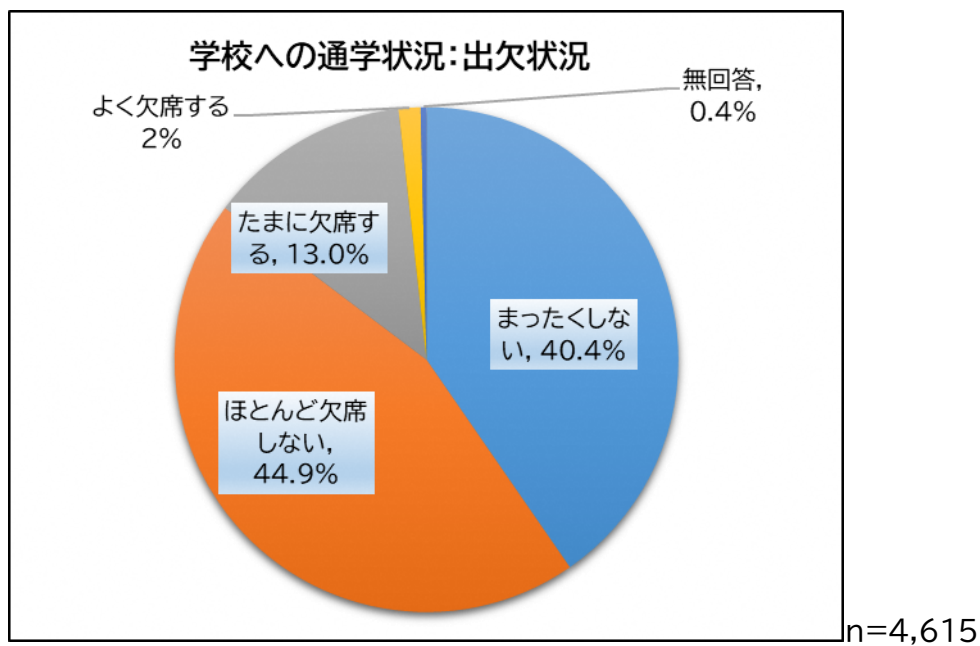
5. 健康状態

健康状態は「よい」が 67.4%と最も高く、次いで「まあよい」27.8%となっている



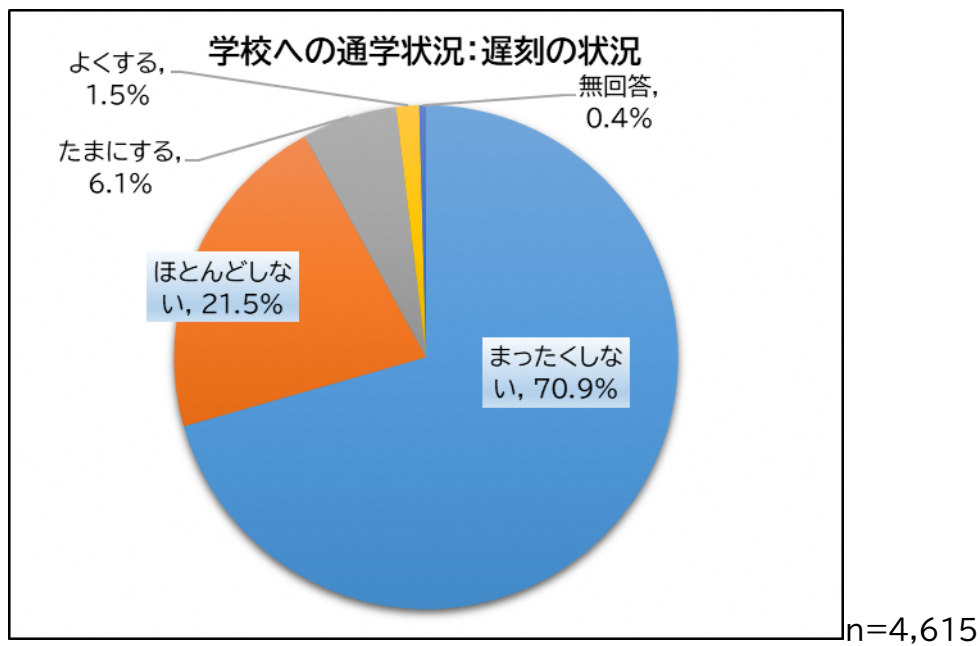
6. 学校への通学状況:出欠状況

学校への欠席状況は、「ほとんど欠席しない」が 44.9%と最も高くなっている。



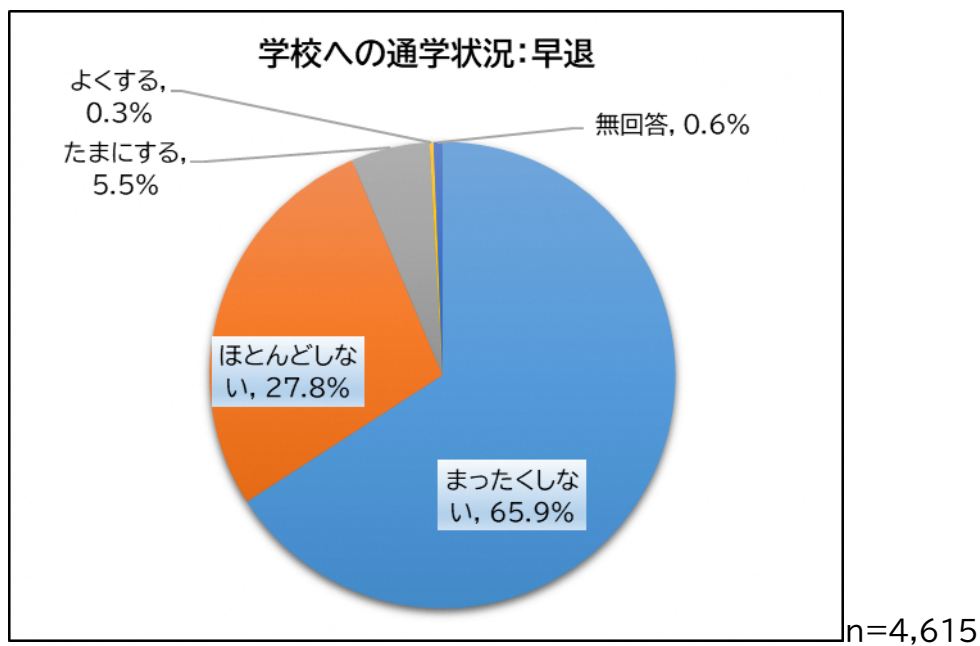
7. 学校への通学状況:遅刻の状況

遅刻の状況は「まったくしない」が 70.9%と最も高くなっている。



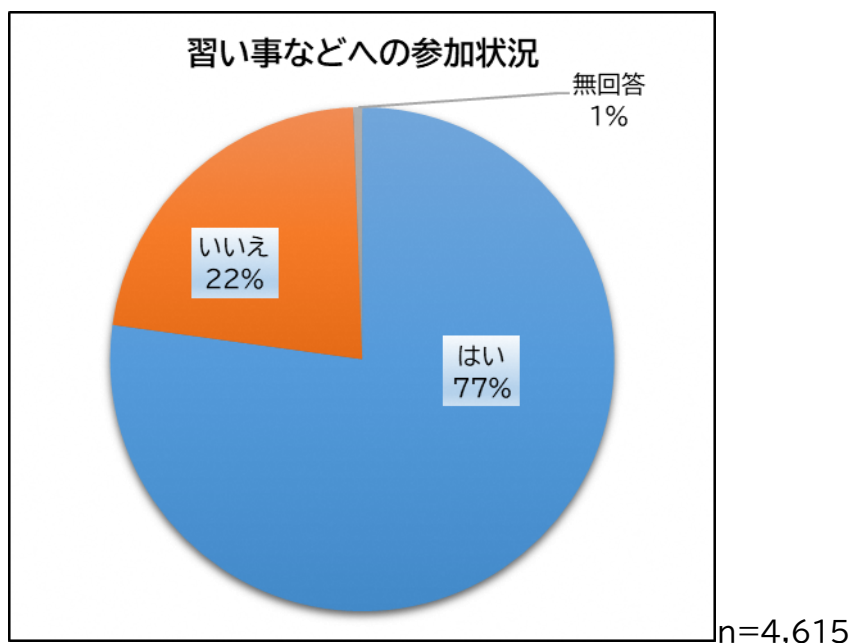
8. 学校への通学状況:早退の状況

学校の早退の状況は「まったくしない」が 65.9%と最も高くなっている。



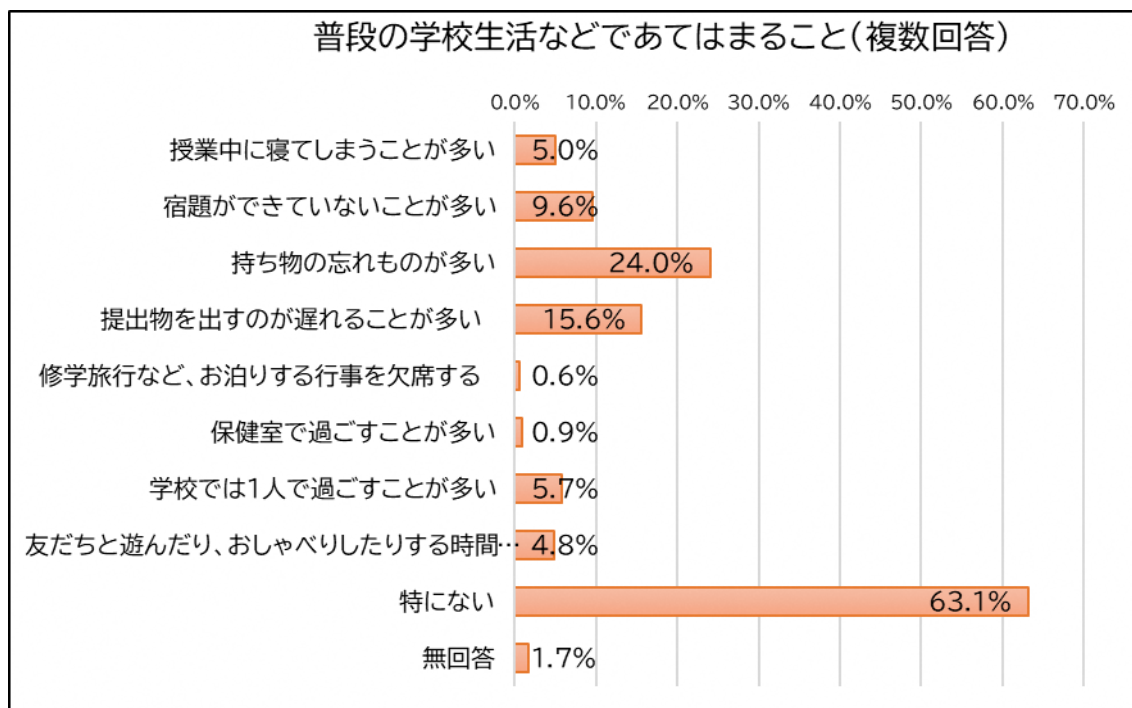
9. 習い事などへの参加状況

習い事などへの参加状況は、「はい(参加している)」が 77%となっている。



10. 普段の学校生活などであてはまること

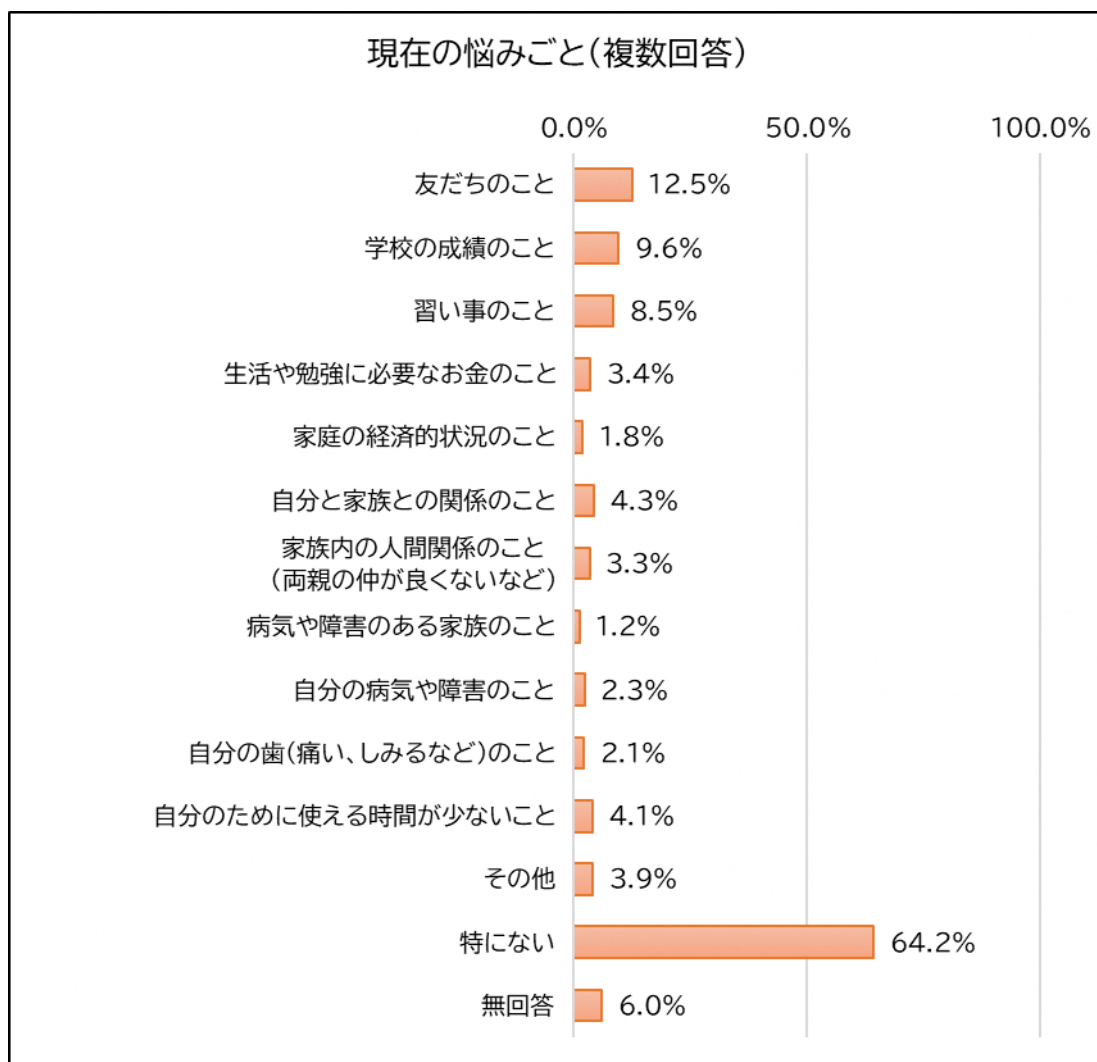
普段の学校生活などであてはまることについては、「特にない」が 63.1%と最も高くなっている。そのほかでは「持ち物の忘れ物が多い」(24%)、「提出物を出すのが遅れることが多い」(15.6%)がほかに比べてやや多い。



n=4,615

11. 現在の悩みごと

現在の悩みごとについては、「特にない」が 64.2%と最も高くなっている。そのほかでは、「友達のこと」(12.5%)、学校の成績のこと(9.6%)がほかに比べてやや高くなっている。



n=4,615

12. その他

その他の主な自由記述 ※複数回答あり

《友達》

悪口を言われる(4件)、友達との人間関係(2件) など

《勉強》

学習ペースについていけない(3件)、頭が悪い(2件)、宿題が終わらない(2件) など

《健康》

体質(9件)、体調がすぐれない(6件)、身体的発達や身長が伸びない(3件)、持病(3件) など

《家族》

きょうだいとの人間関係(6件)、親に相談しにくい(2件)、家族間の不和(2件) など

《学校》

先生のこと(6件)、登校班のこと(4件)、学校が楽しくない(2件) など

《将来》

将来のこと(6件)、中学校のこと(3件) など

《性別》

自分がLGBT当事者であること(3件)、男子と女子が区別される理由がわからないなど

《運動》

苦手な運動(水泳、跳び箱、鉄棒)がある など

《恋愛》

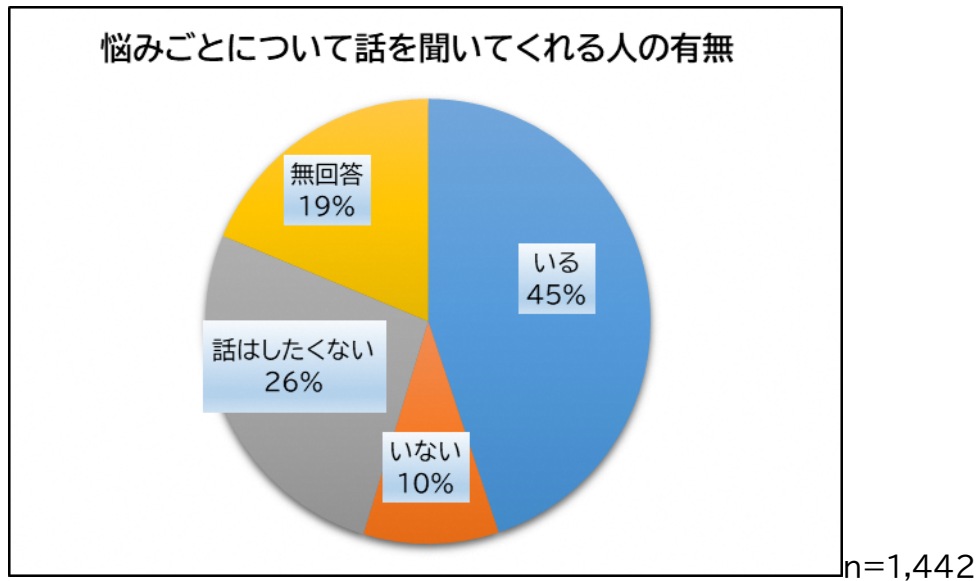
恋愛のこと(2件)、好きな人と会えると気まずい など

《その他》

自分の性格など(11件)、答えたくない(7件)、何に悩んでいるのかがわからない(5件)、イライラする(3件)、自信がない(2件)、忙しい(2件) など

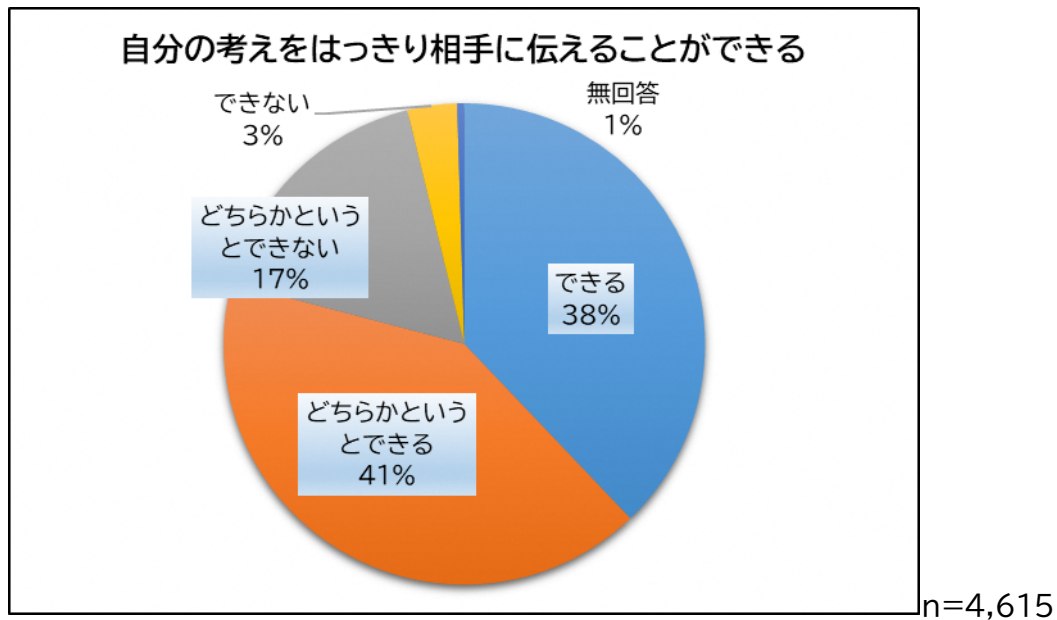
13. 悩みごとについて話を聞いてくれる人の有無

前問で何らかの悩みごとがあると回答した人に、話を聞いてくれる人の有無を聞いた結果、「いる」が45%と最も高くなっている一方で、「話はしたくない」という回答が26%となっている。



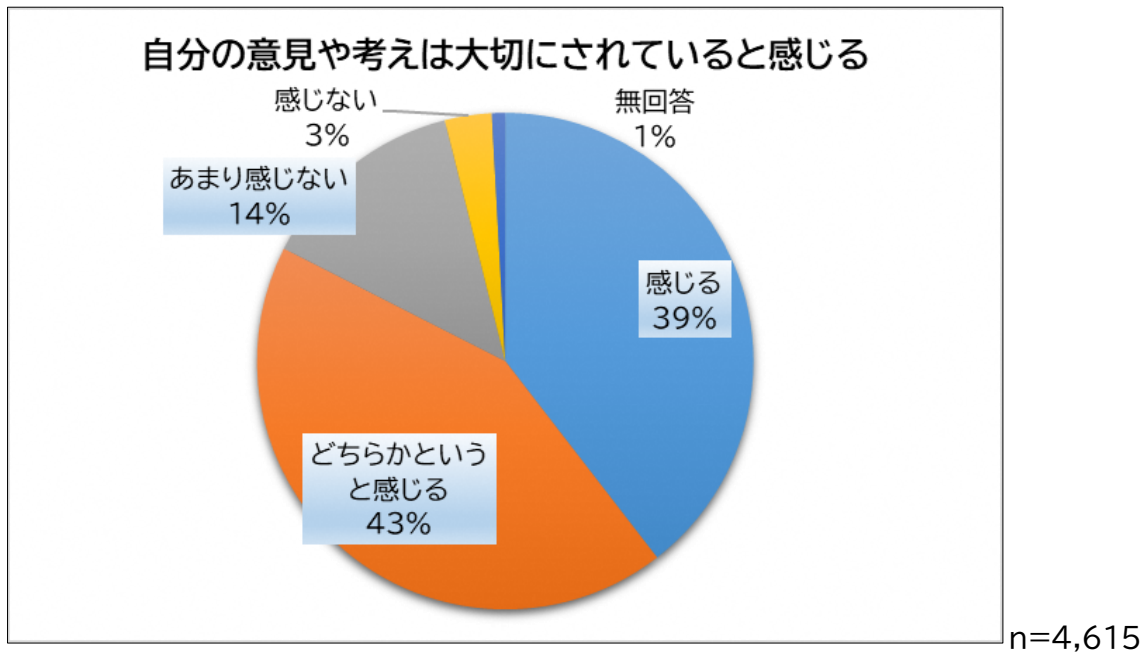
14. 自分の考えを、はっきり相手に伝えることができるか

「どちらかというところできる」が41%と最も高く、次いで「できる」が38%となっている。「できる」と「どちらかというところできる」を合わせると79%となっている。



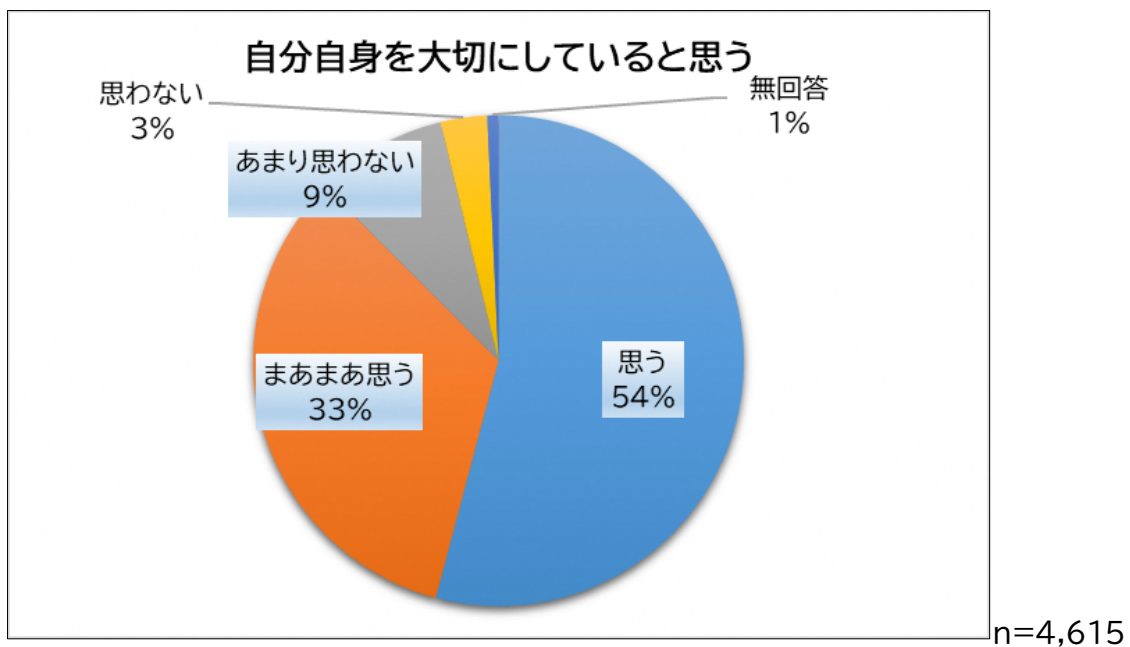
15. 自分の意見や考えは大切にされていると感じるか

「どちらかというと感じる」が 43%と最も高く、次いで「感じる」が 39%となっている。「感じる」と「どちらかというと感じる」を合わせると 79%となっている。



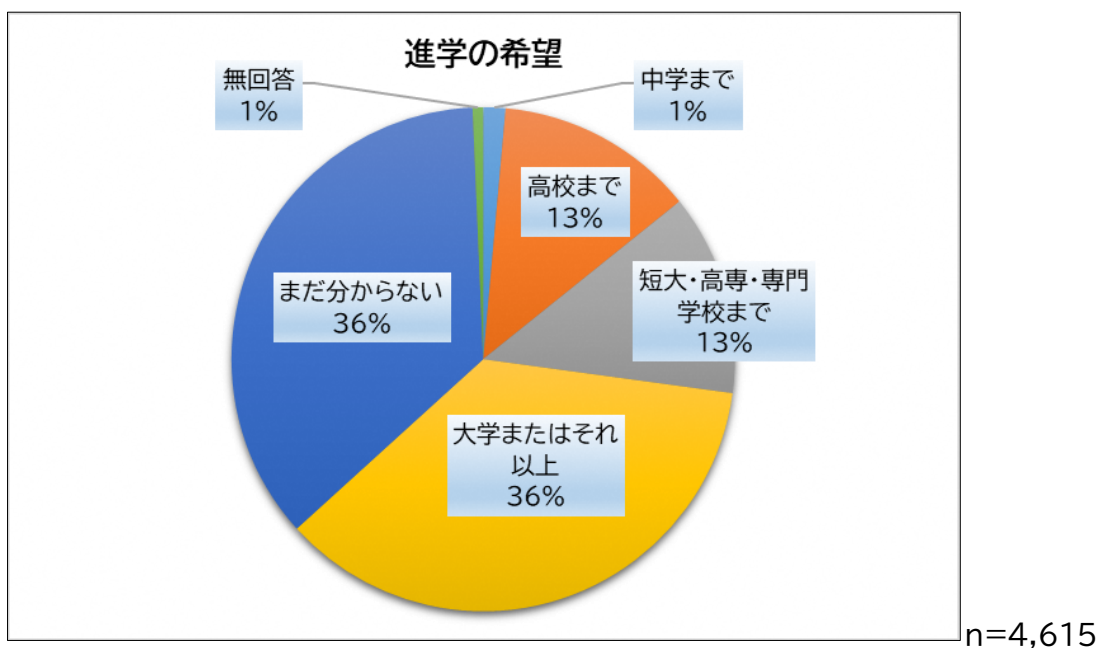
16. 自分自身を大切にしていると思うか

「思う」が 54%と最も高く、次いで「まあまあ思う」が 33%となっている。「思う」と「まあまあ思う」を合わせると、87%となっている。



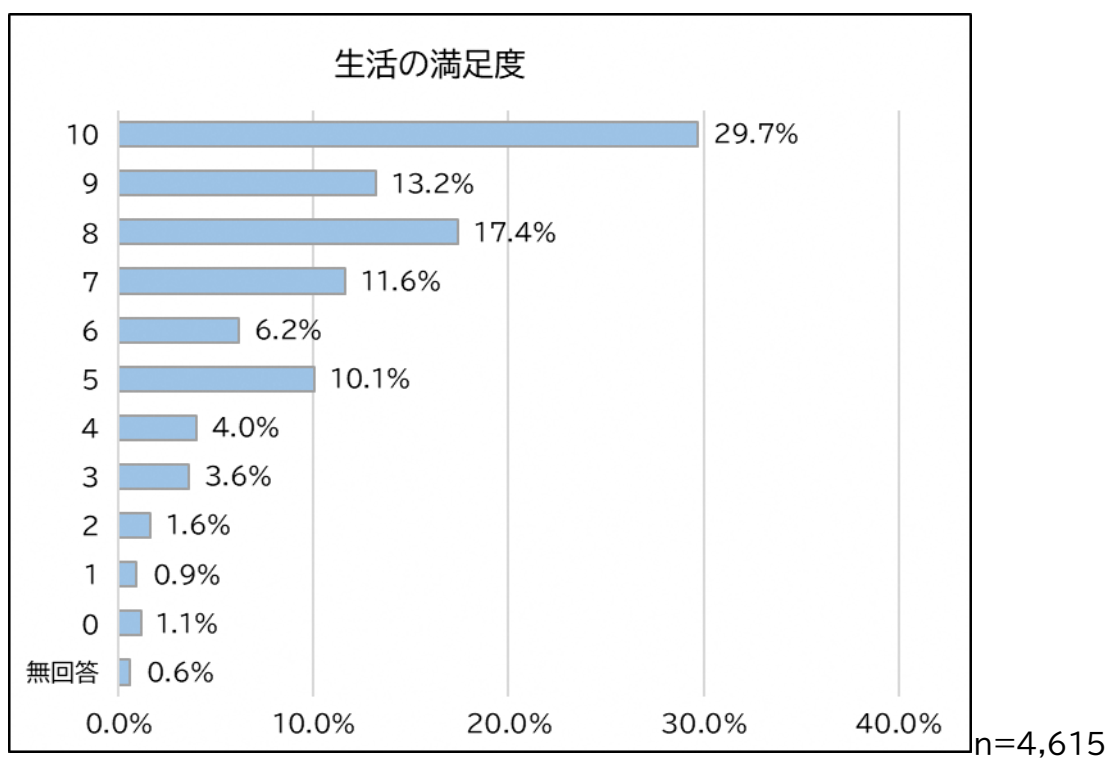
17. 将来、どの段階まで進学したいか

「大学またはそれ以上」が 36%と最も高い。同じ割合で「まだ分からない」も高い。

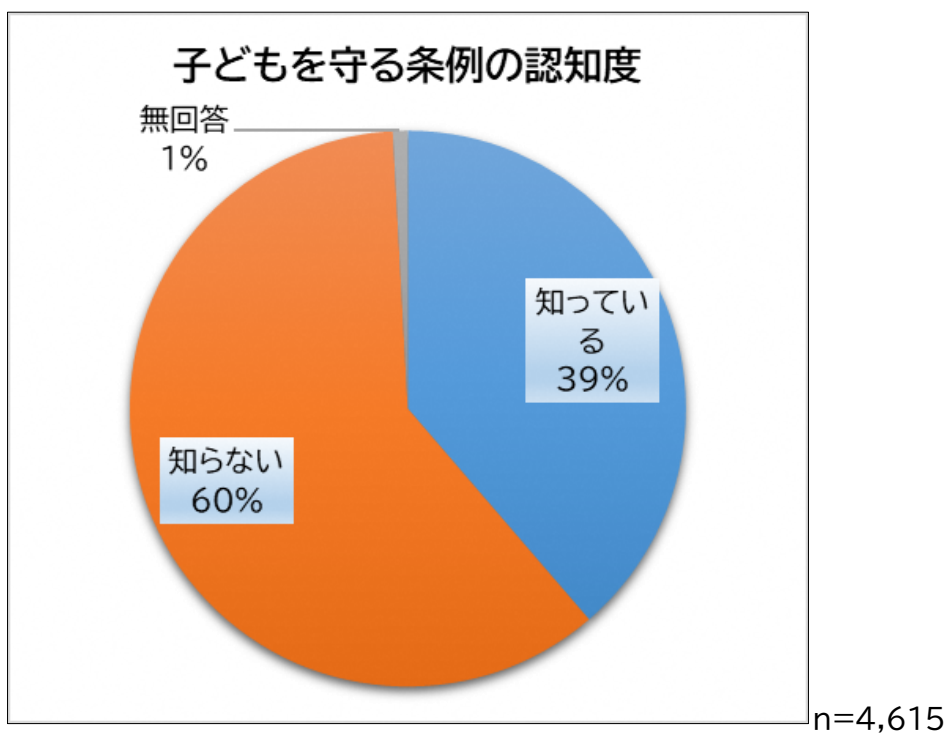


18. 全体として最近の生活にどのくらい満足しているか

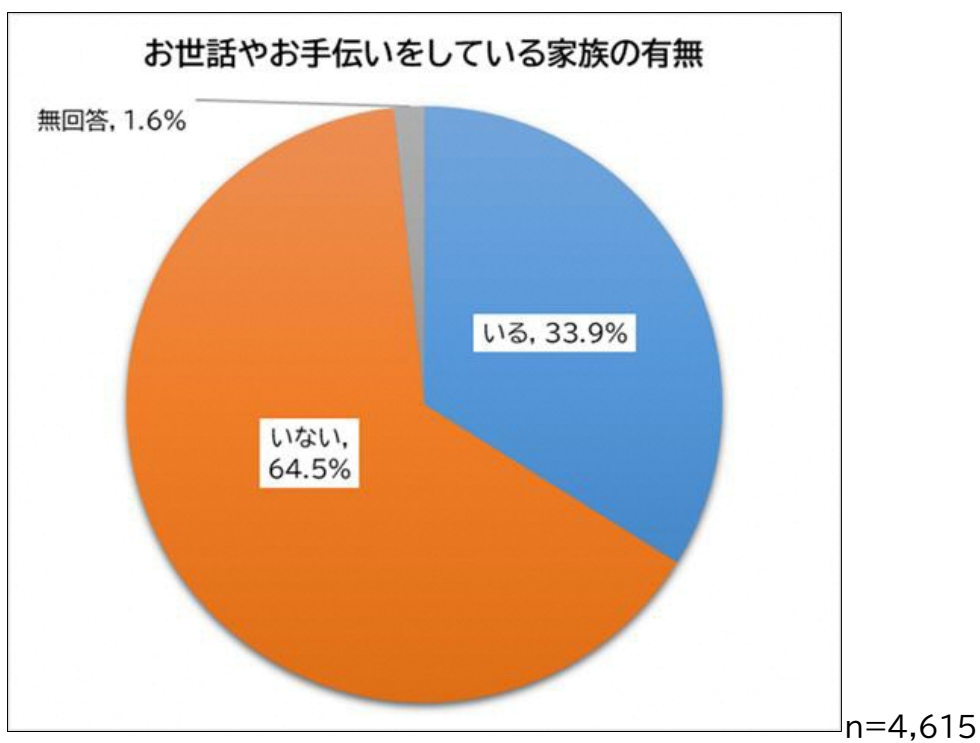
生活の満足度について 0 から 10 までの 11 段階で聞いたところ、「10」が 29.7%と最も高く、次いで「8」が 17.4%となっている。



19. 枚方市には「子どもを守る条例」があることを知っているか
「知っている」が39%で、「知らない」が60%となっている。

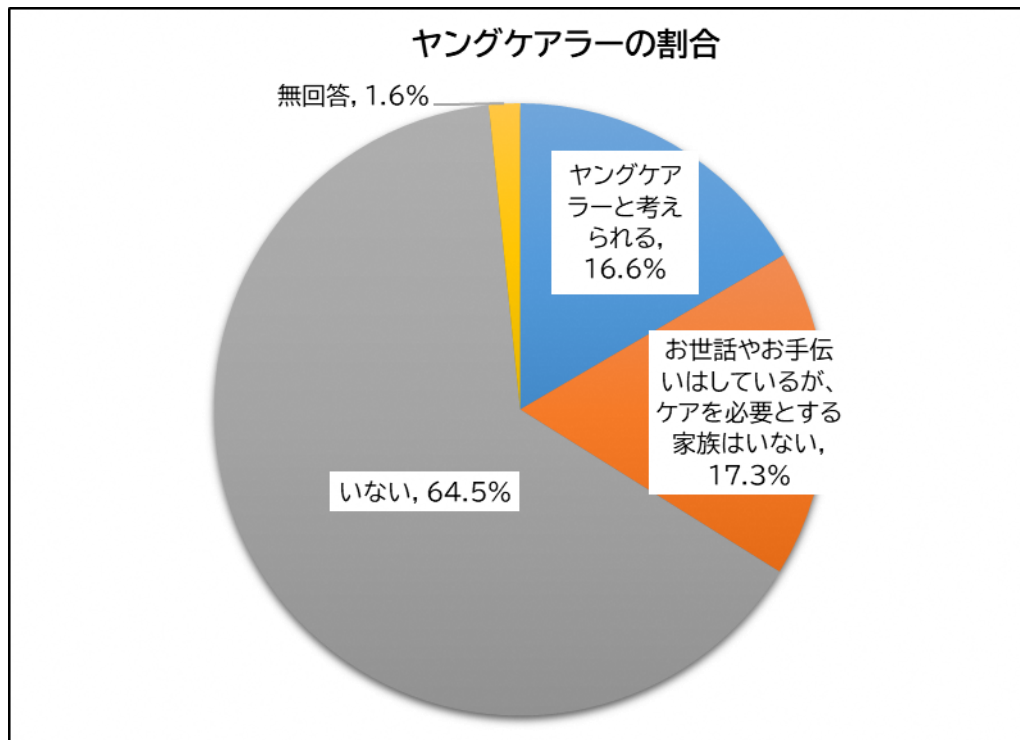


20. 家庭や家族のことについて
お世話やお手伝いをしている家族の有無については、33.9%が「いる」と答えている。



21. ヤングケアラーの割合

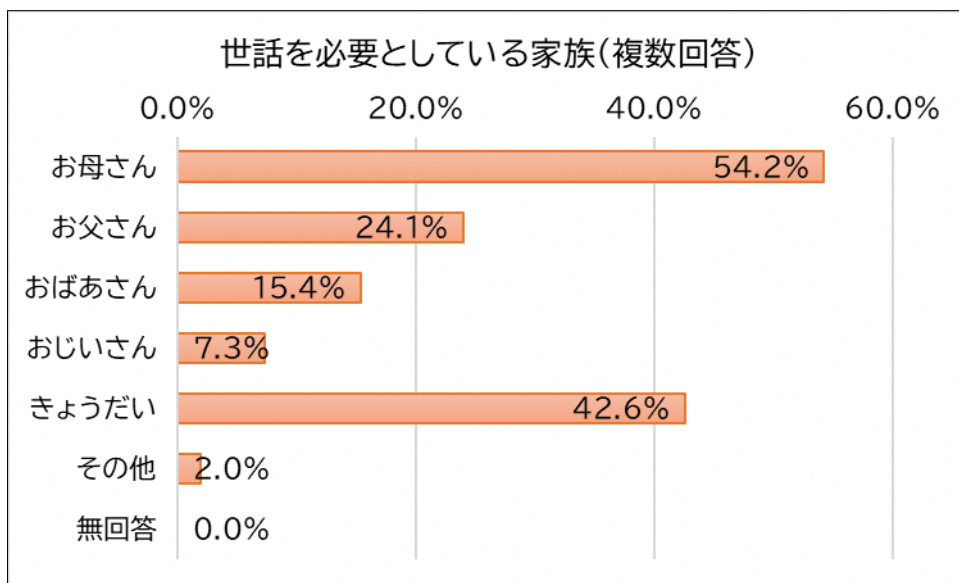
お世話をしている家族が「いる」と回答した小学生33.9%のうち、後の質問により、お世話やお手伝いをしている理由が、「ケアを必要とする家族のため」とであると明確に読み取れたのは、765 人であった。すなわち、ヤングケアラーの可能性があると考えられるのは全体の16.6%であった。



n=4,615

22. 世話を必要としている家族

世話を必要としている家族については、母親が54.2%と最も高く、次いで「きょうだい」が、42.6%となっている。

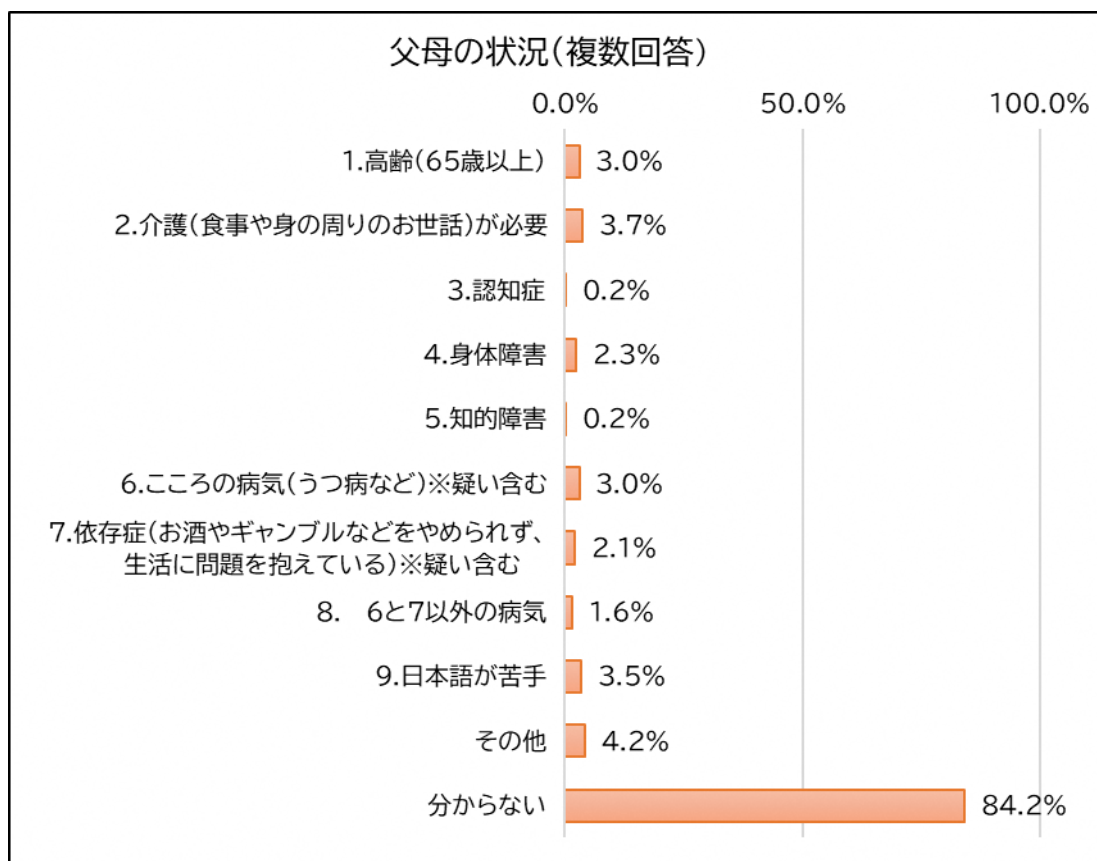


n=765

23. 父母の状況

世話を必要としている家族として「父母」と回答した人に、父母の状況を聞いたところ、回答として最も多かったのは「分からない」(84.2%)であった。

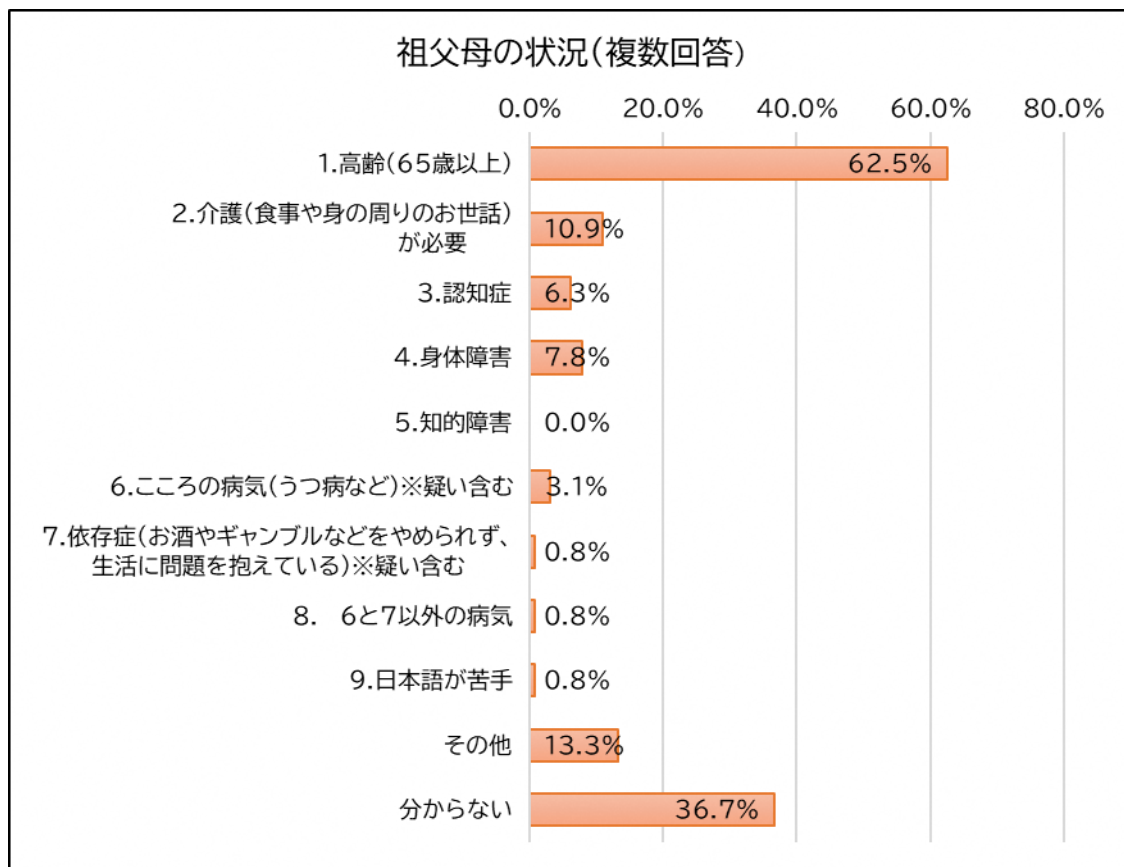
そのほか、日本語が苦手、介護、高齢、心の病気となっている。



n=431

24. 祖父母の状況

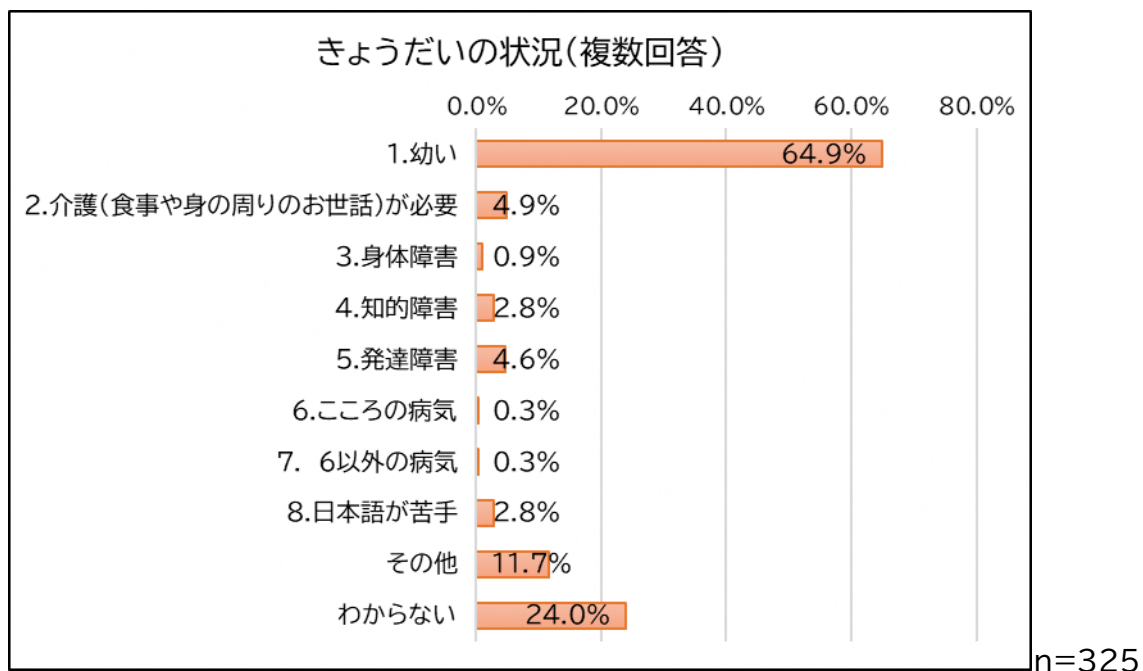
世話を必要としている家族として「祖父母」と回答した人に、祖父母の状況を聞いたところ「高齢」(62.5%)が最も高い。



n=128

25. きょうだいの状況

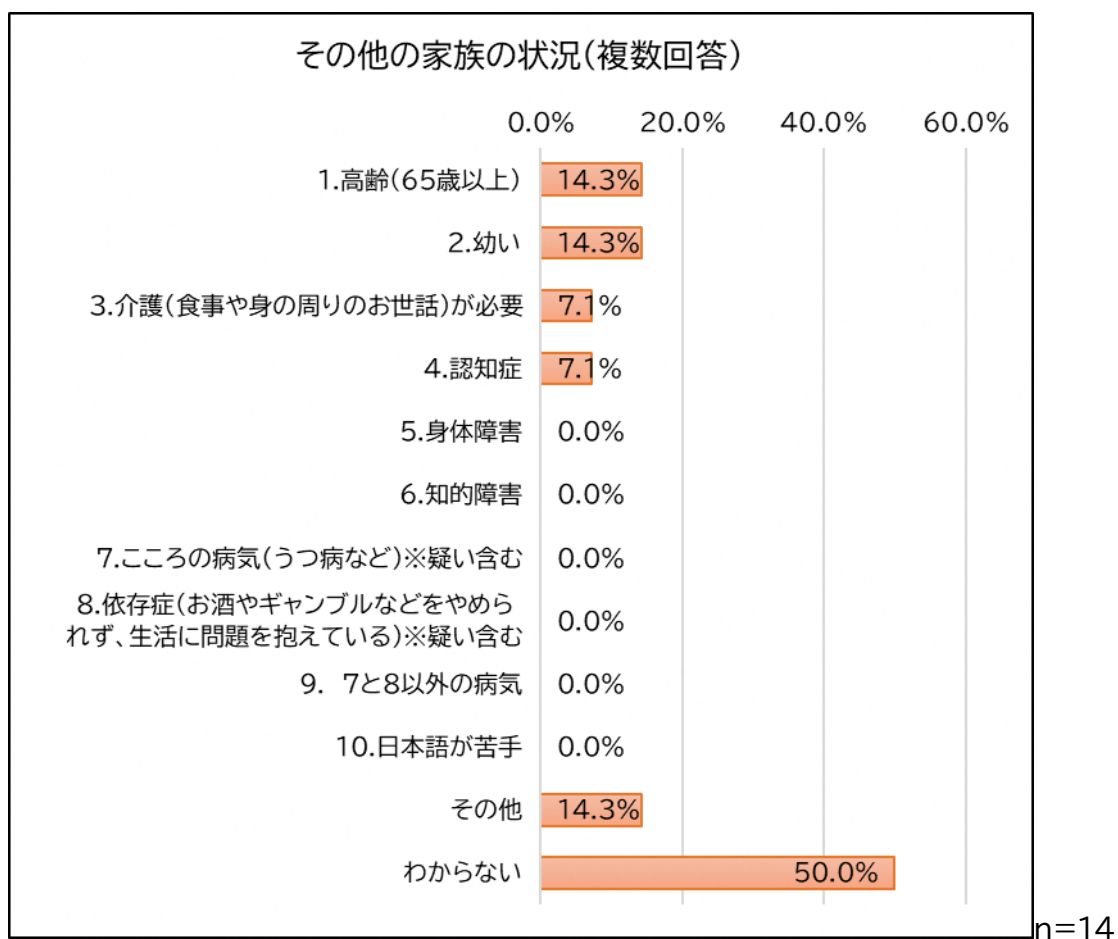
お世話を必要としている家族として「きょうだい」と回答した人に、きょうだいの状況を聞いたところ、「幼い」が最も高くなっている。



n=325

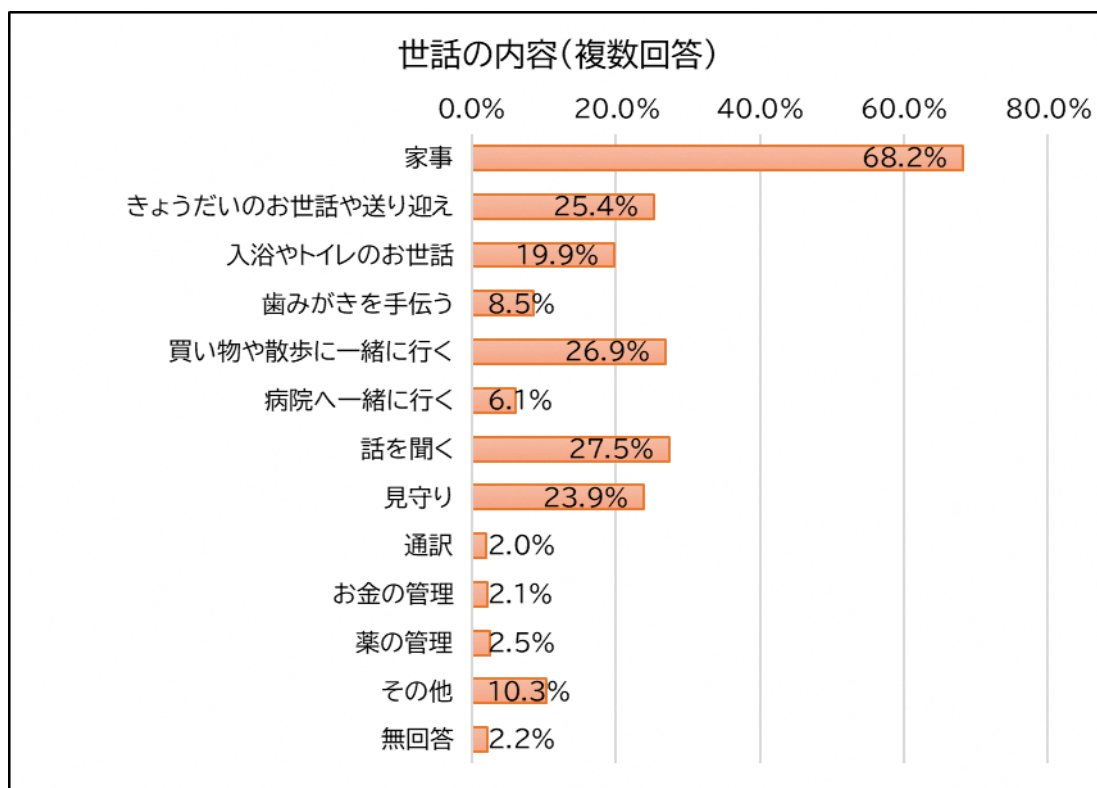
26. その他の家族の状況

世話を必要としている家族として「その他」と回答と回答した人に世話の内容について聞いたところ、「わからない」(50%)が最も高い。その他では、「高齢」と「若い」がともに 14.3%と最も高くなっている。



27. 世話の内容

世話をしている家族がいると回答した人に世話の内容について聞いたところ、「家事」(68.2%)が最も高く、次いで「話を聞く」27.5%「買い物や散歩と一緒にいく」(26.9%)となっている。



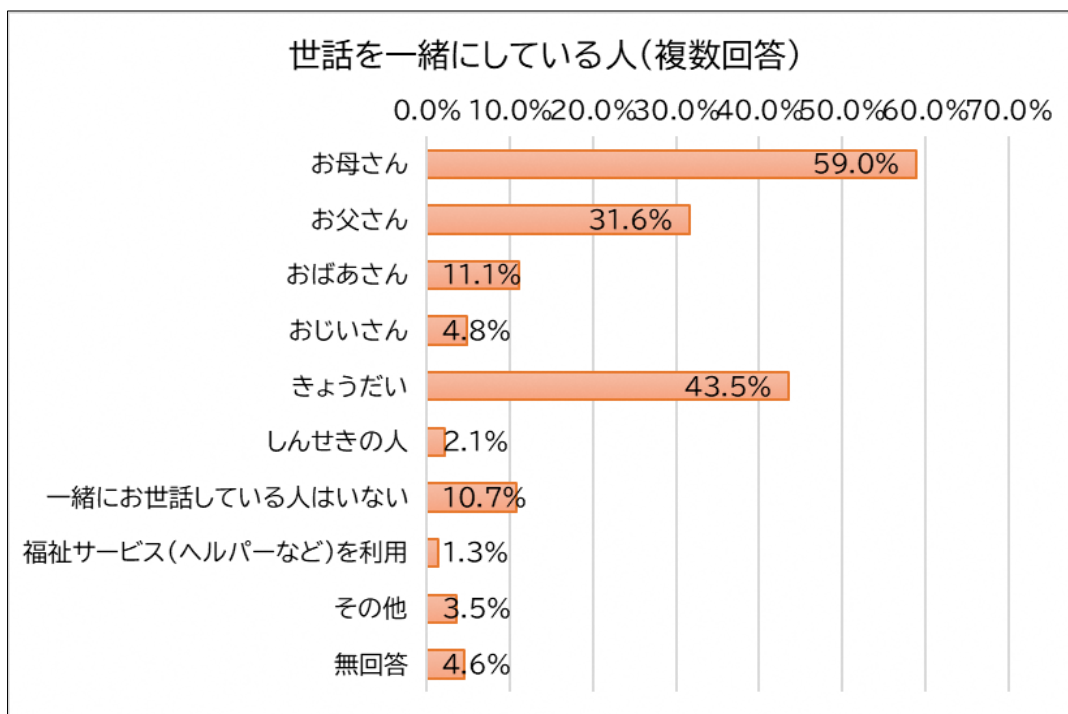
n=765

●その他の個別回答

勉強を教える きょうだいと遊ぶ など

28. 世話を一緒にしている人

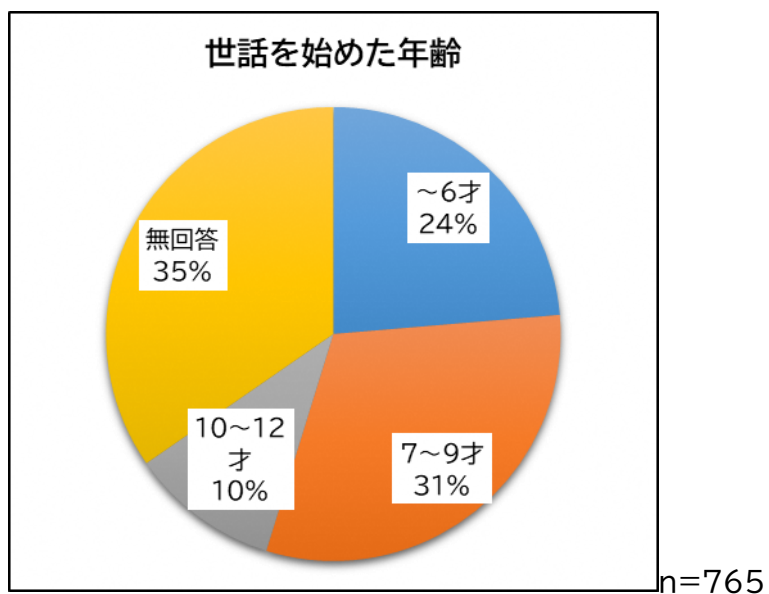
世話を一緒にしている人については、「お母さん」(59%)と最も高く、次いで「きょうだい」(43.5%)となっている。



n=765

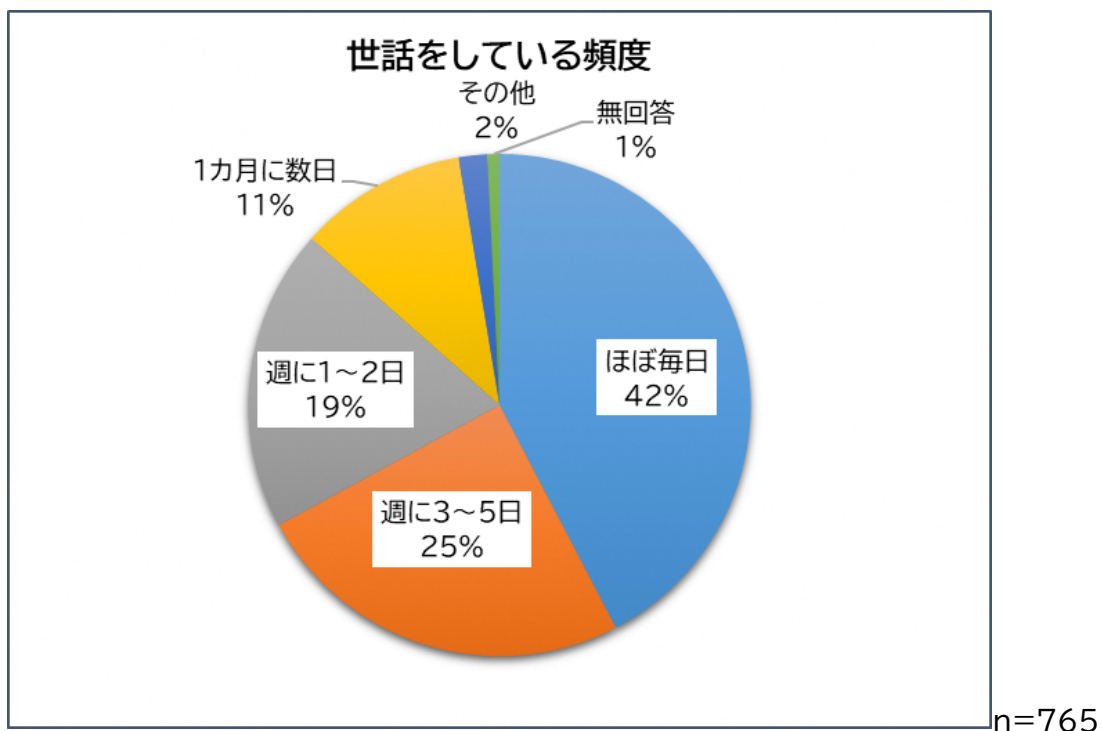
29. 世話を始めた年齢

世話を始めた年齢については、「7～9才」が31%と最も高くなっている。



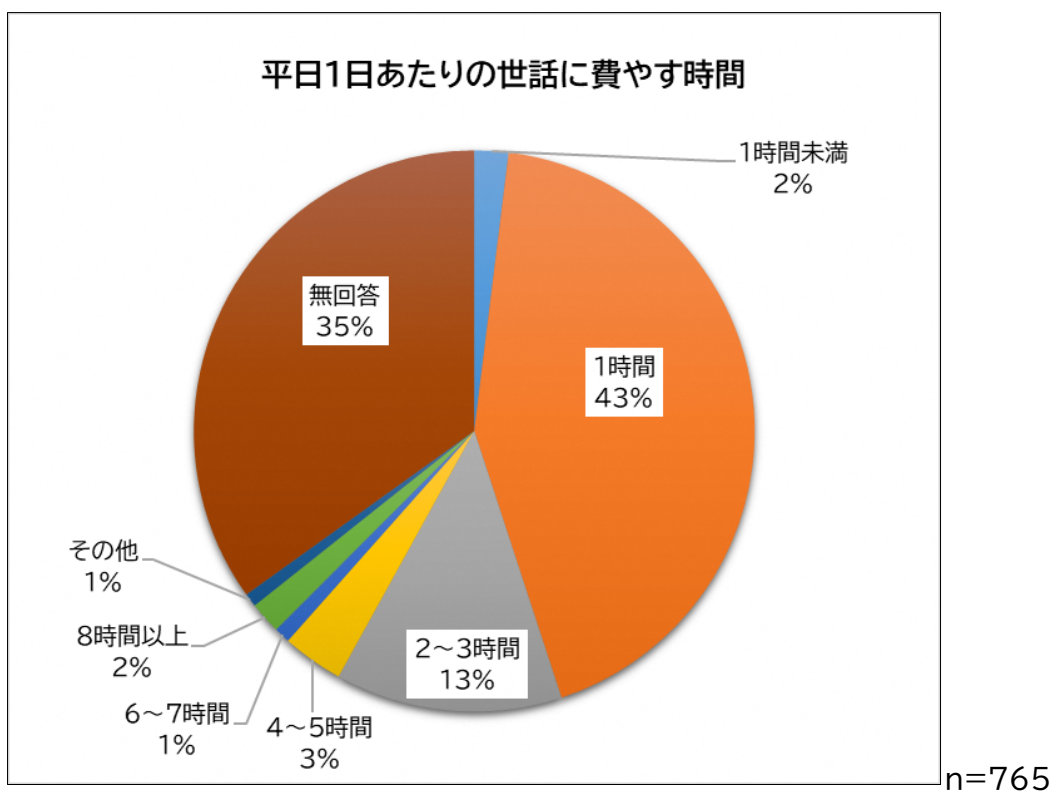
30. 世話をしている頻度

世話をしている頻度については、「ほぼ毎日」が42.4%と最も高くなっている。



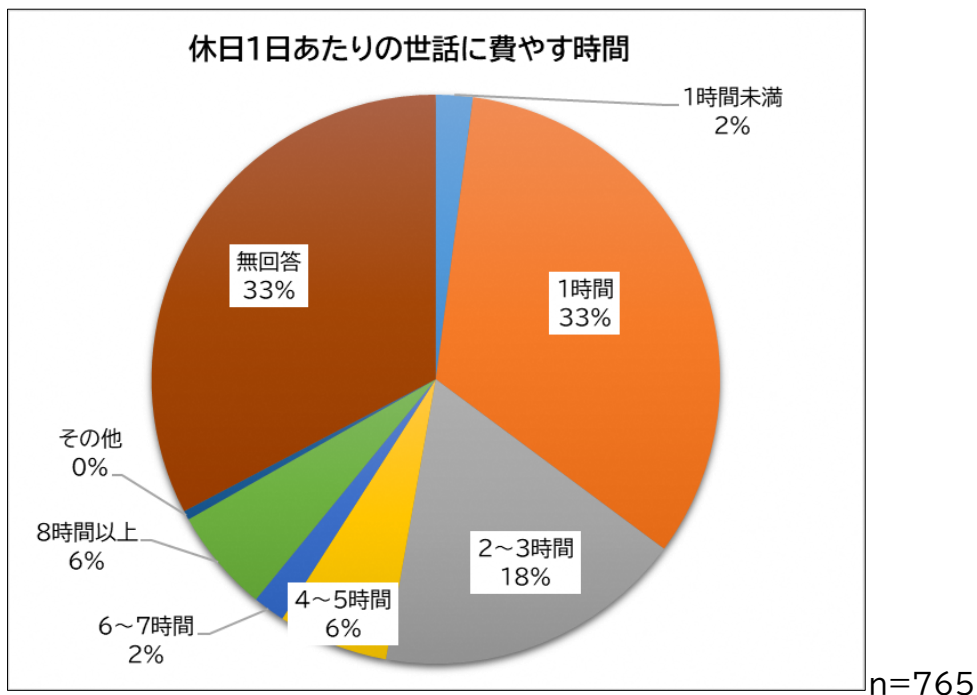
31. 平日1日あたりの世화에費やす頻度

平日1日あたりに世화에費やす時間については、1時間が43%と最も高くなっている。無回答やその他を除いた回答者の平均は1.8時間となっている。



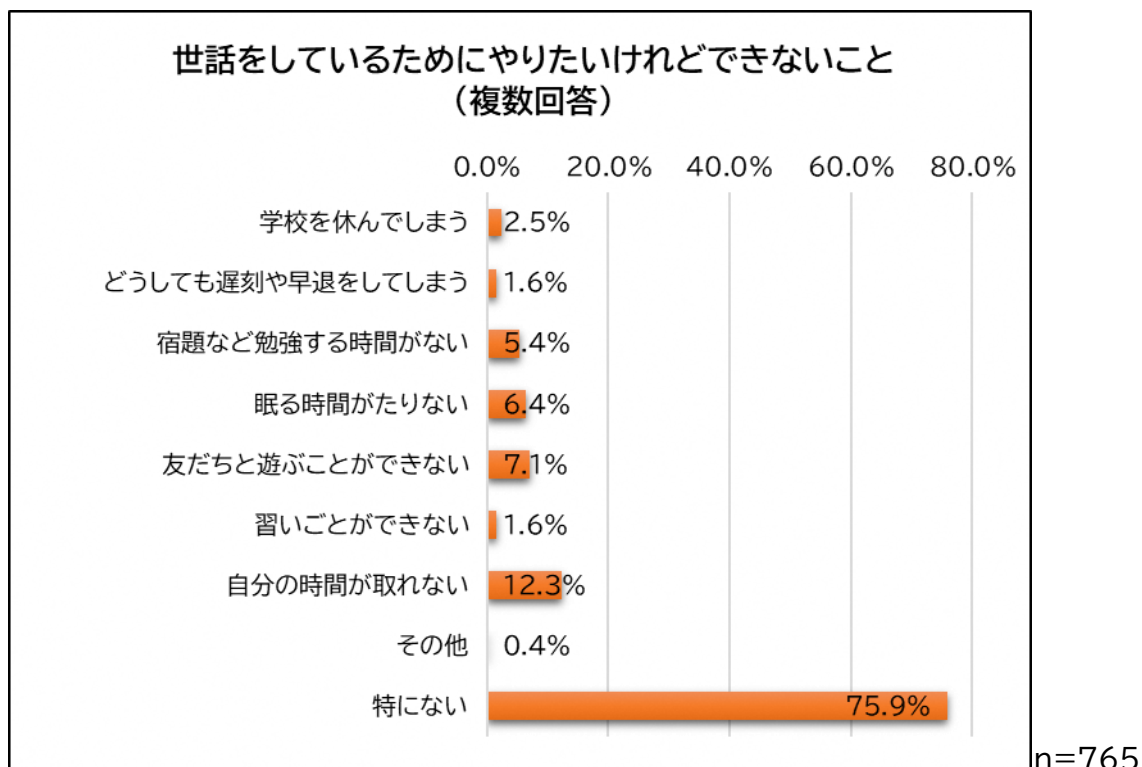
32. 休日 1 日あたりの世話に費やす時間

休日 1 日あたりの世話に費やす時間については、1 時間が 33%と最も高くなっている。無回答等を除いた回答者の平均は 3 時間となっている。



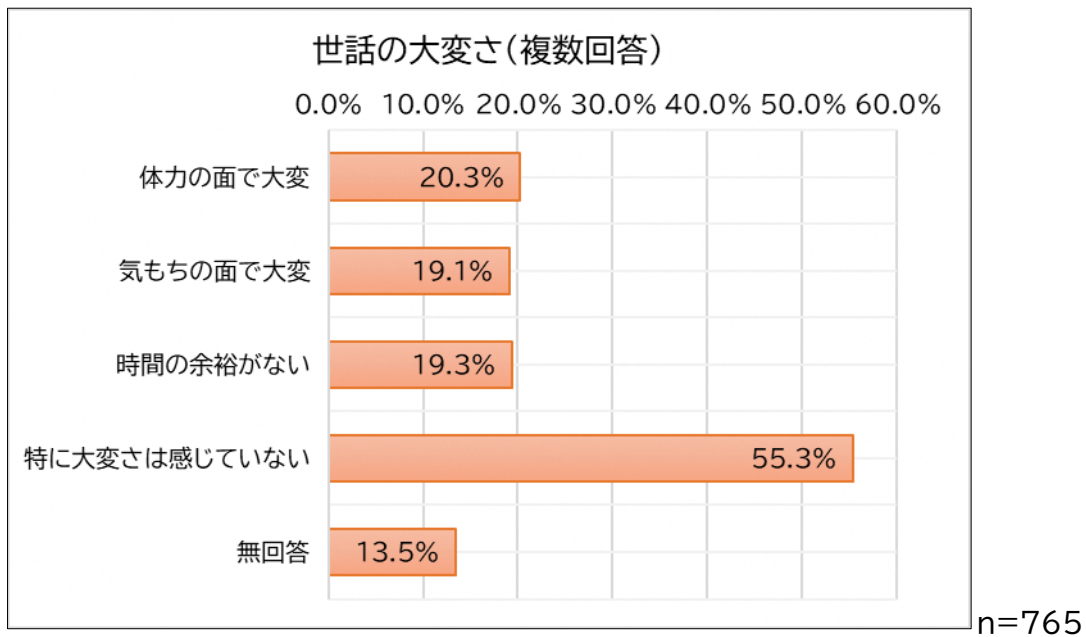
33. 世話をしているためにやりたいけれどできないこと

世話をしているためにやりたいけれどできていないことについては、「特にない」(75.9%)が最も高くなっているが、そのほかでは、「自分の時間が取れない」(12.3%)がほかと比べて高くなっている。



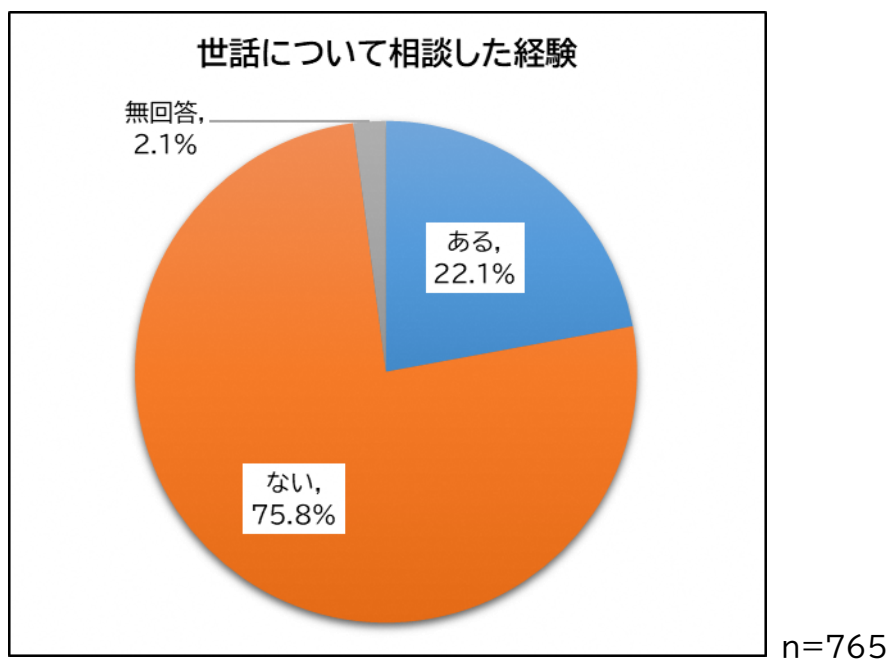
34. 世話の大変さ

世話の大変さについては、「特に大変さは感じていない」(55.3%)が最も高くなっている。そのほかはほぼ同程度(19%~20%)であった。



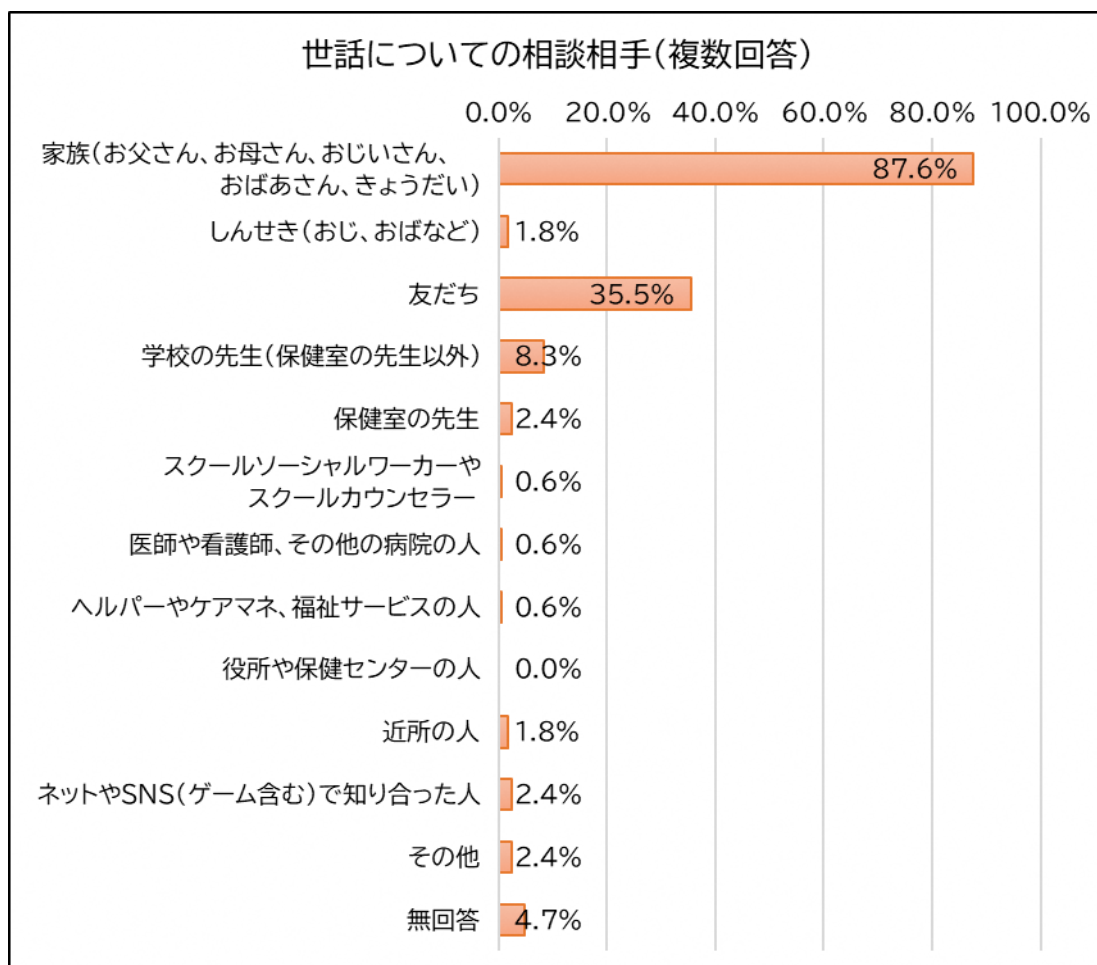
35. 世話について相談した経験

世話について相談した経験については、「ある」が、22.1%、「ない」が 75.8%となっている



36. 世話についての相談相手

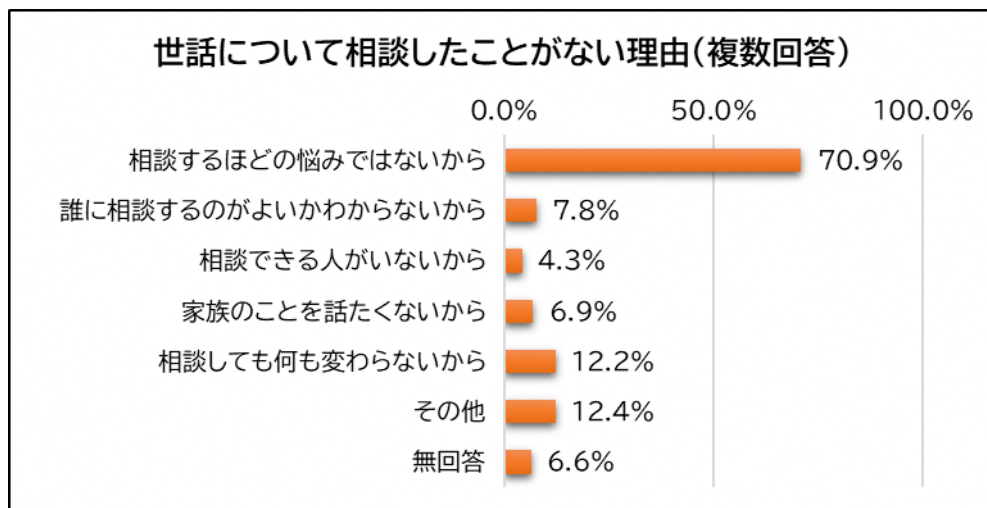
世話についての相談相手は、「家族(お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、きょうだい)」(87.6%)が最も高く、次いで「友だち」(35.5%)となっている。



n=169

37. 世話について相談したことがない理由

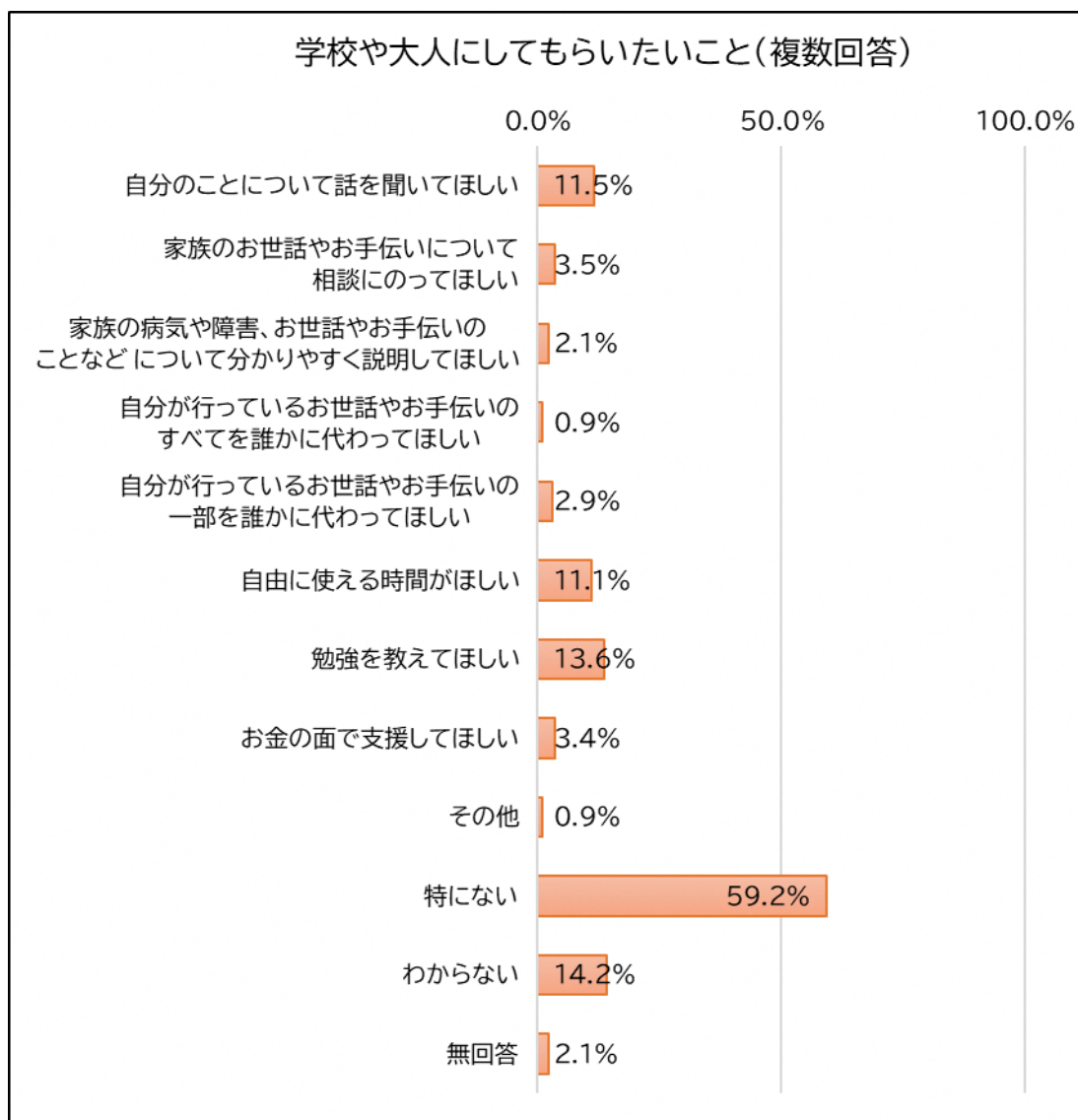
世話について相談した経験が「ない」と回答した人に、その理由について聞いたところ、相談するほどの悩みではないから」が 70.9%と最も高くなっている。



n=580

38. 学校や大人にしてもらいたいこと

学校や大人にしてもらいたいことを聞いたところ、「特にない」(59.2%)が最も高くなっているが、そのほかでは「勉強を教えてほしい」(13.6%)、「自由に使える時間がほしい」(11.1%)、「自分のことについて話を聞いてほしい」(11.5%)がほかと比べて高くなっている。



n=765

●自分が行っているお世話やお手伝いの一部を誰かに代わってほしいと回答した人に具体的な内容聞いた結果 ※複数回答あり

《家事》

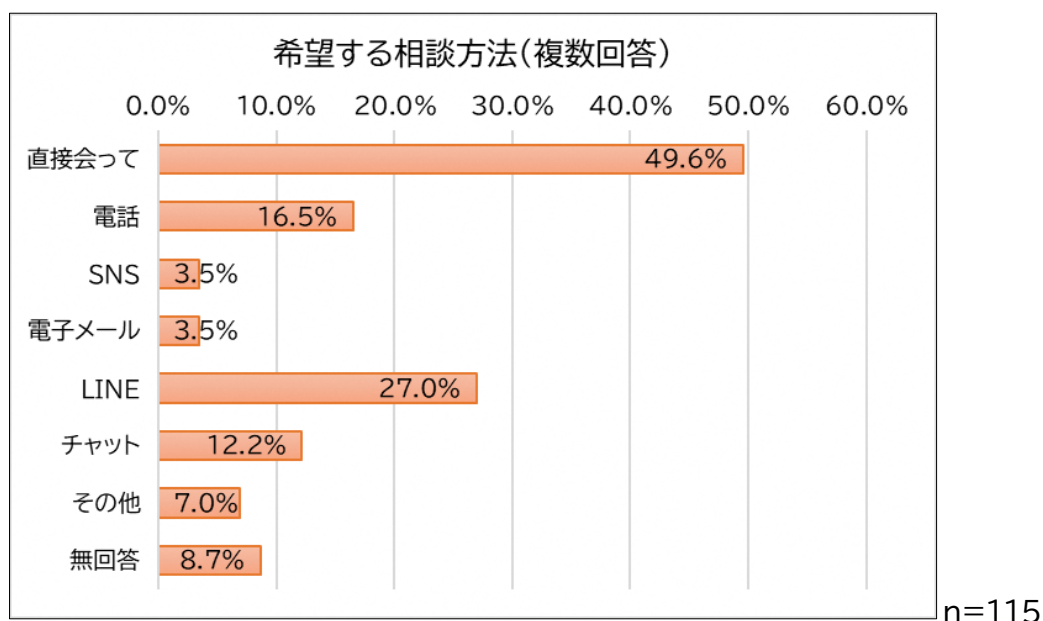
料理(5件)、掃除(3件)、洗濯(2件) など

《きょうだいの世話》

勉強(2件)、食事、お風呂 など

39. 希望する相談方法

前問で「自分のことについて話をきいてほしい」「家族のお世話やお手伝いについて相談にのってほしい」と回答した人に希望する相談方法について聞いたところ、「直接会って」が49.6%と最も高く、次いで「LINE」が27%であった。



40. 自由回答

家族の世話をしている子どものために必要だと思うことや学校や周りの大人にしてもらいたいことについての主な自由記述は以下のとおり。 ※複数回答あり

「家族の世話をしている子どものために必要だと思うこと」

相談や寄り添ってもらえる機会(16件)、自由な時間(14件)、家事を手伝ってくれる存在(12件)、休む時間(10件)、経済的支援(9件)、ご褒美(7件)、勉強する時間(5件)、褒められる(5件) など

「家族にしてもらいたいこと」

家事(7件)、お小遣いが欲しい(5件)、きょうだいの世話や遊び相手(2件) など

「学校や周りの大人にしてもらいたいこと」

子どもからの相談を聞いてほしい(7件)、勉強を教えてほしい(7件)、優しくしてほしい(5件)、家事を手伝ってほしい(4件)、大変そうな子どもに気づいてほしい(4件)、宿題を減らしてほしい(3件)、挨拶してほしい(3件) など

「自身の気持ちや困っている状況について」

お手伝いは必要(14件)、相談に乗ってほしい(8件)、自由な時間が欲しい(7件)、褒めてほしい(5件)、お手伝いを無理やりやらせないでほしい(3件)、怒らないでほしい(2件) など

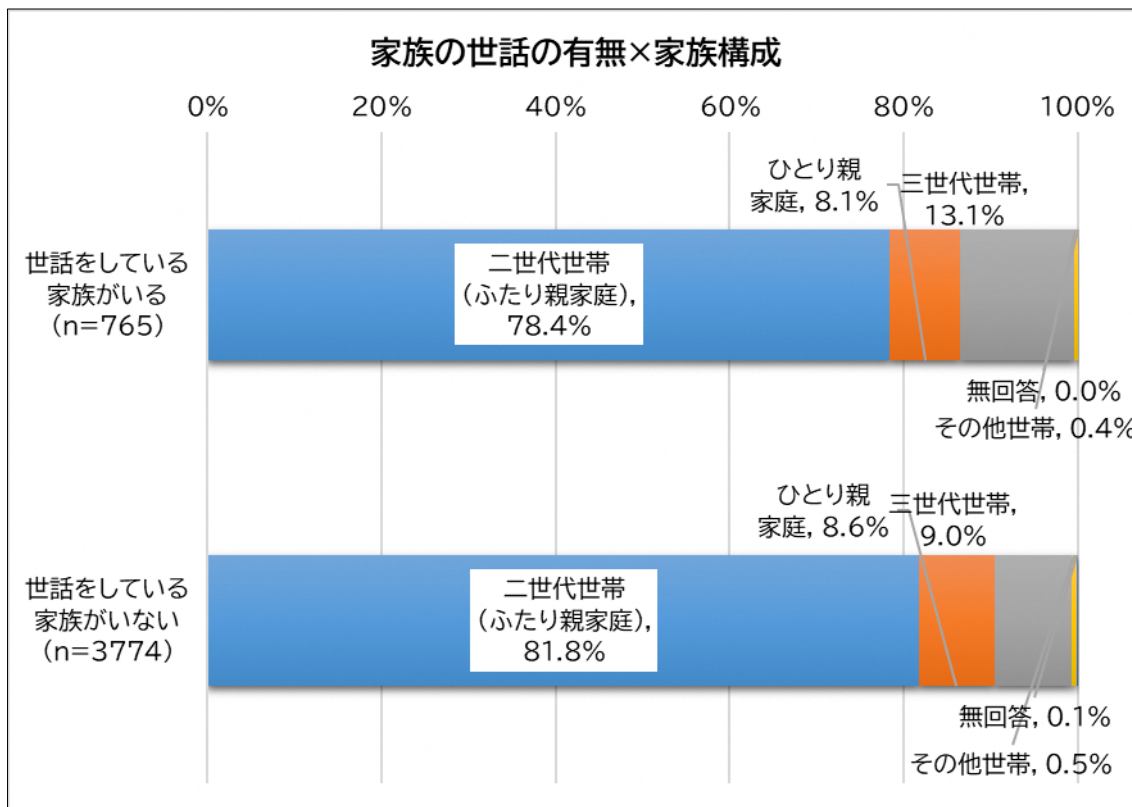
「その他意見」

お手伝いはいいことだけど無理しすぎないように(3件)、家族も大事だけど自分が疎かにならないように、自分も大人たちにも自由な時間があればいい など

小学生調査の結果(クロス集計)

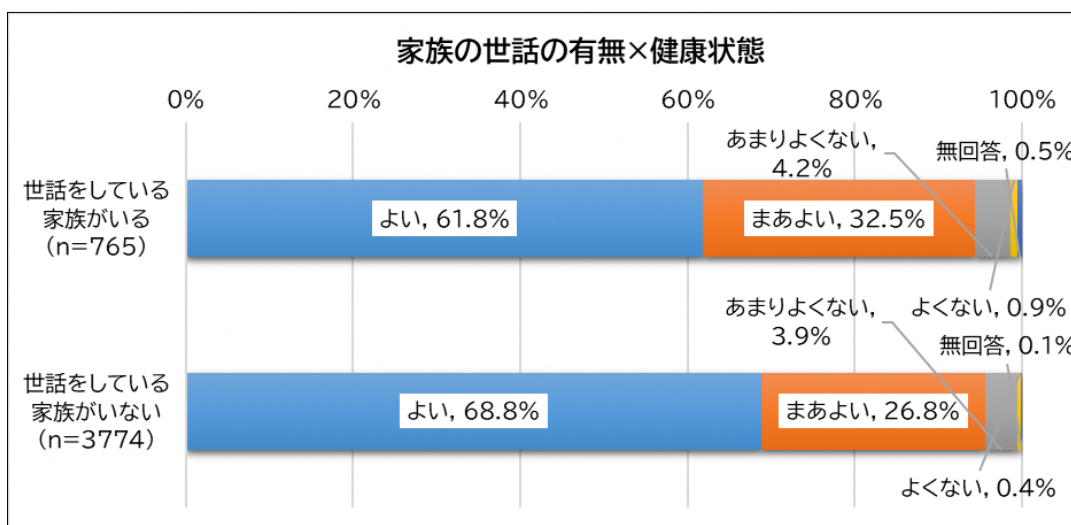
1. 家族の世話の有無×家族構成

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「三世代世帯」の割合が高くなっている。



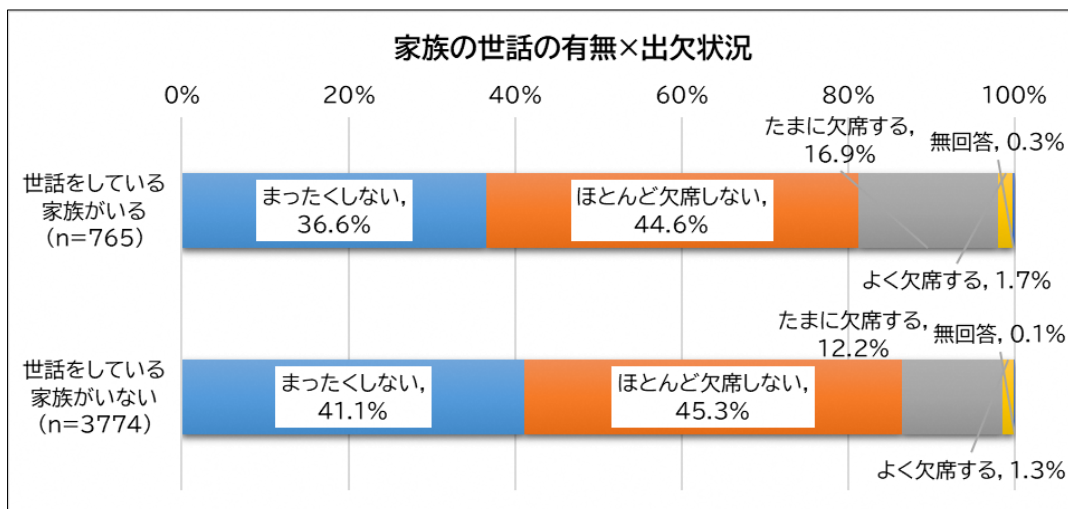
2. 家族の世話の有無×健康状態

世話をしている家族がいる場合は、「よい」「まあよい」が 94.3%であり、いない場合の 95.6%と比べると、割合が若干低くなっている。



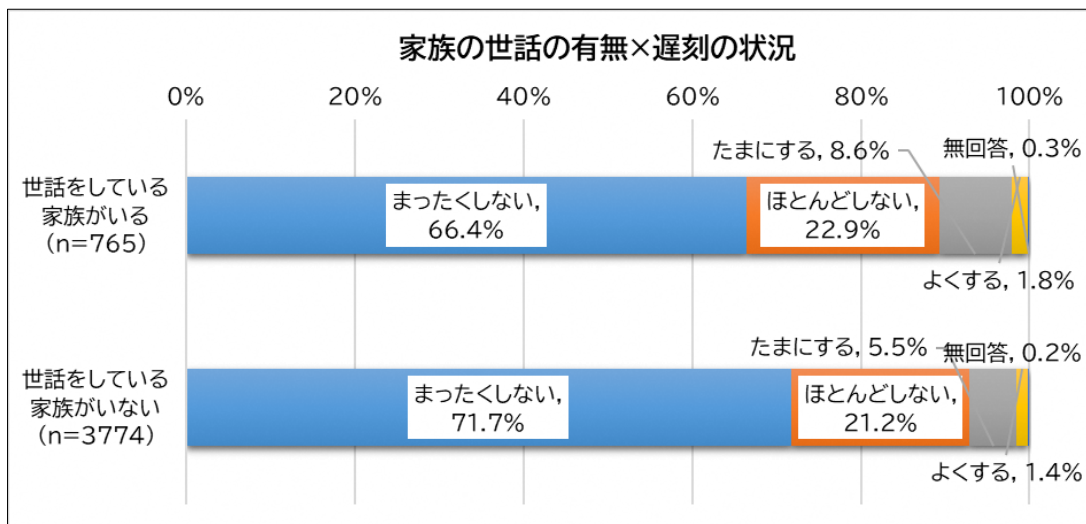
3. 家族の世話の有無×出席状況

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「たまに欠席する」「よく欠席する」の割合が高くなっている。



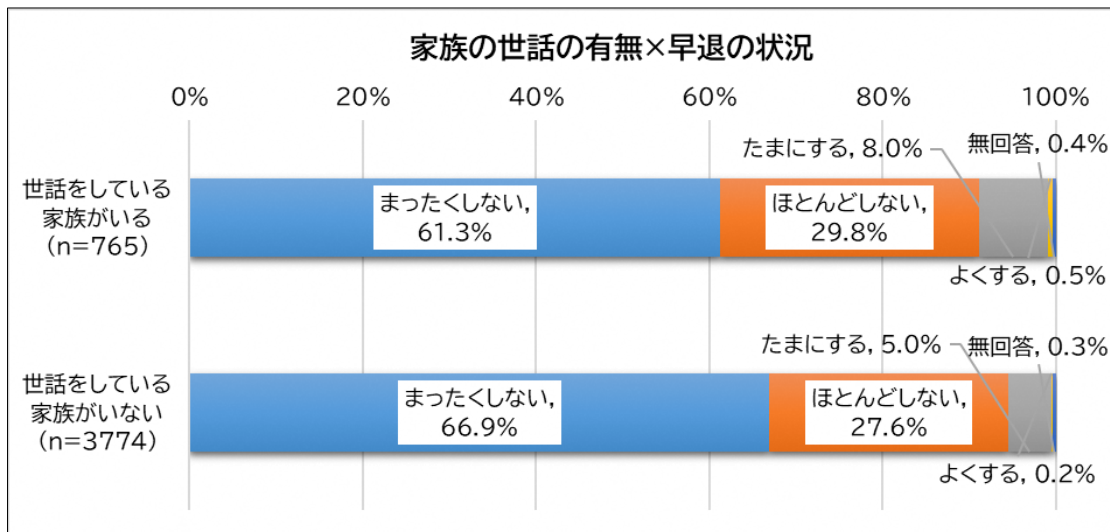
4. 家族の世話の有無×遅刻の状況

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「たまにする」「よくする」の割合が高くなっている。



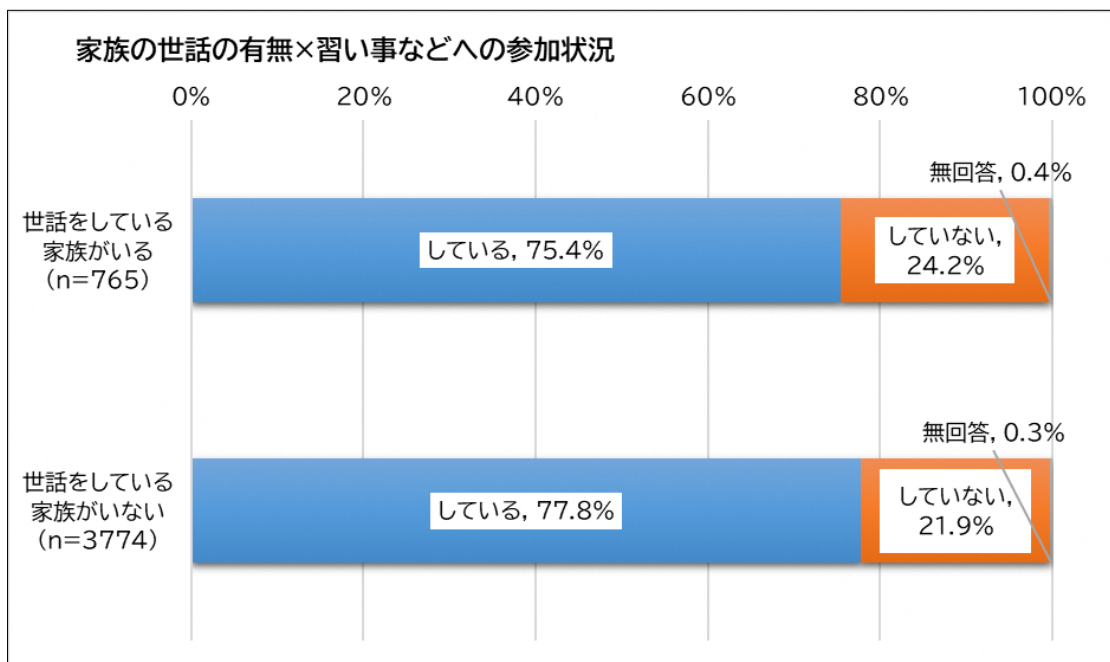
5. 家族の世話の有無×早退の状況

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「たまにする」「よくする」の割合が高くなっている。



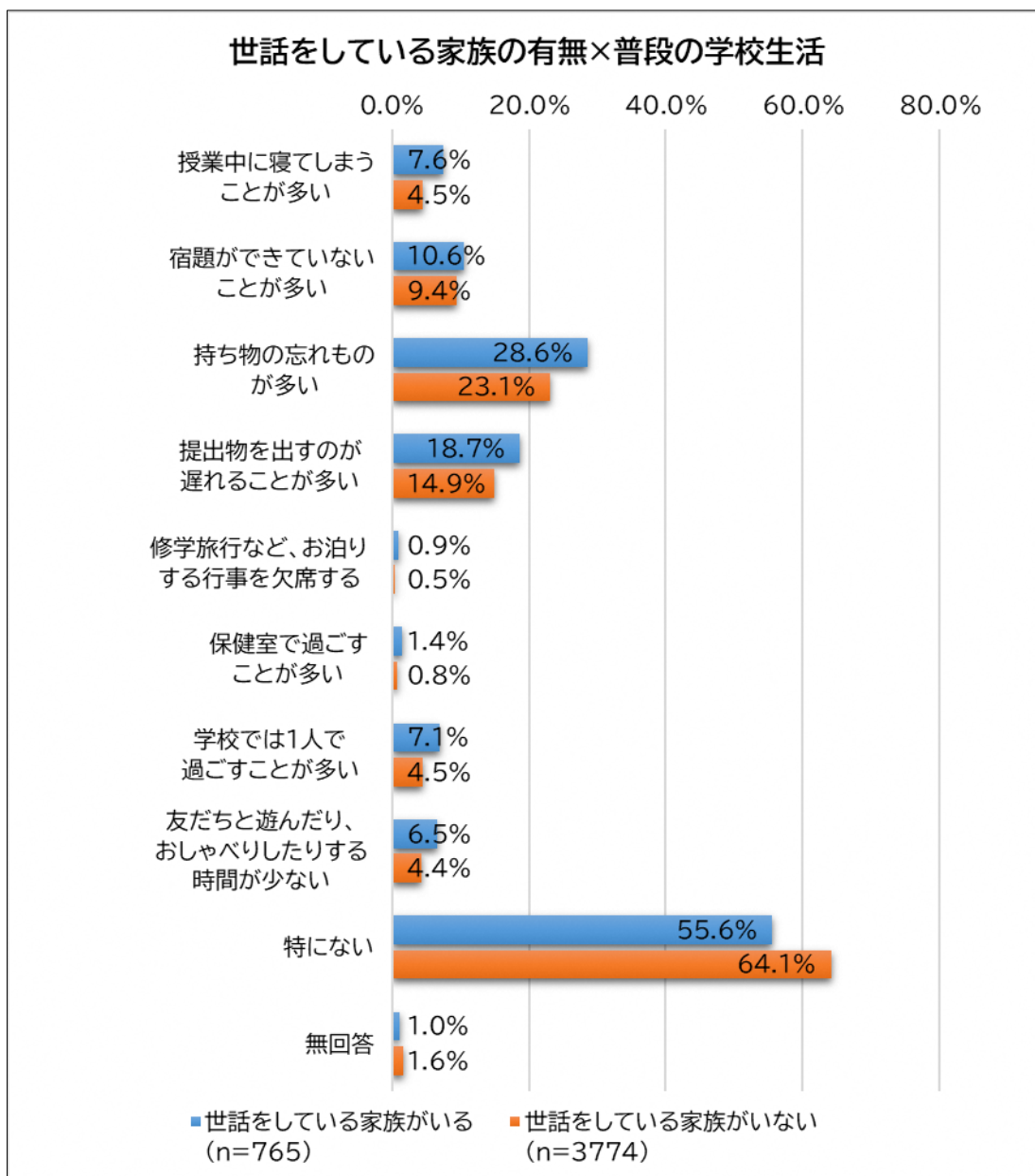
6. 家族の世話の有無×習い事などへの参加状況

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「していない」の割合が 2.3 ポイント高くなっている。



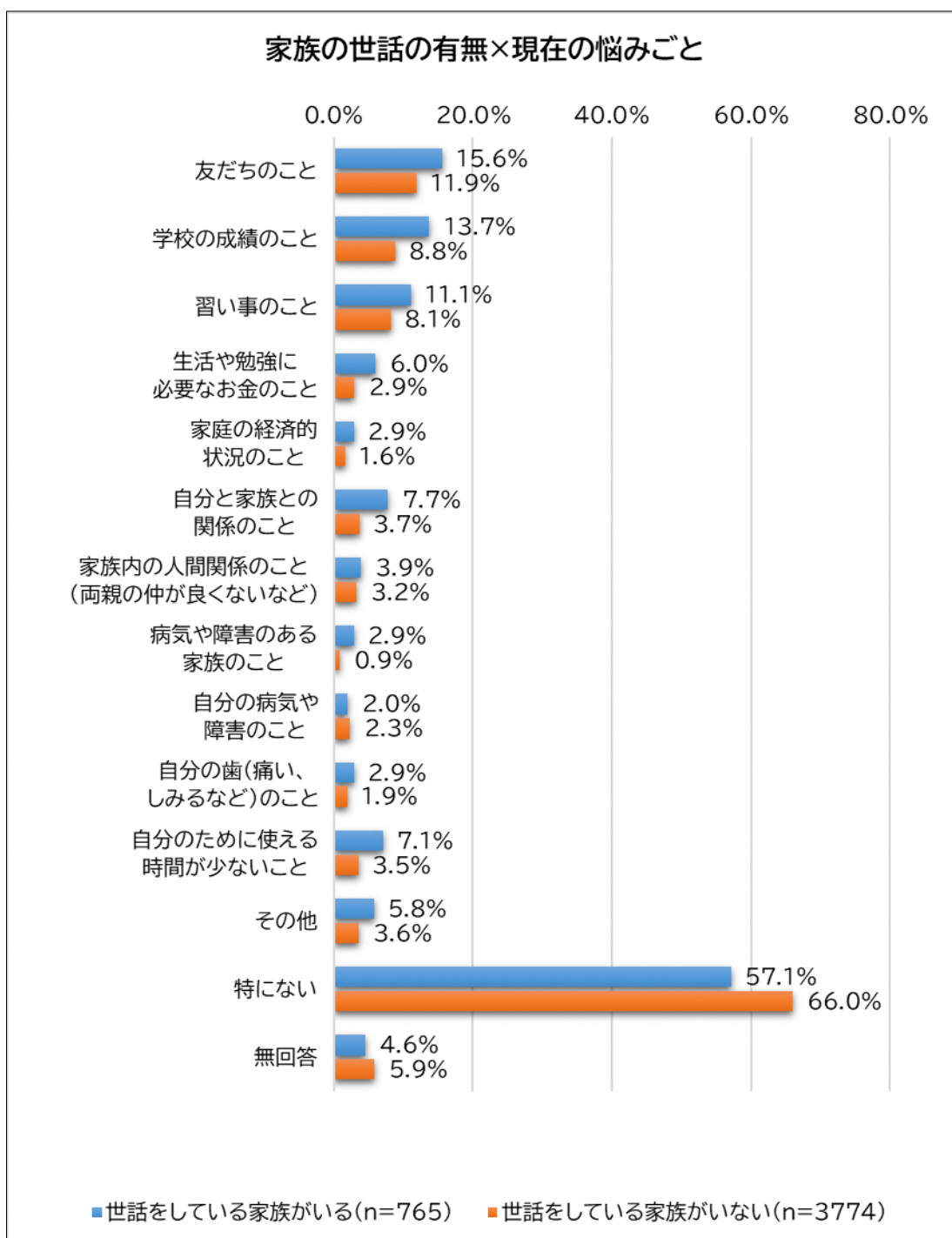
7. 家族の世話の有無×普段の学校生活などであてはまること

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて全体的に回答割合が高い傾向にある。特に「持ち物の忘れ物が多い」「提出物を出すのが遅れることが多い」「授業中に寝てしまうことが多い」「学校では一人で過ごすことが多い」が高くなっている。

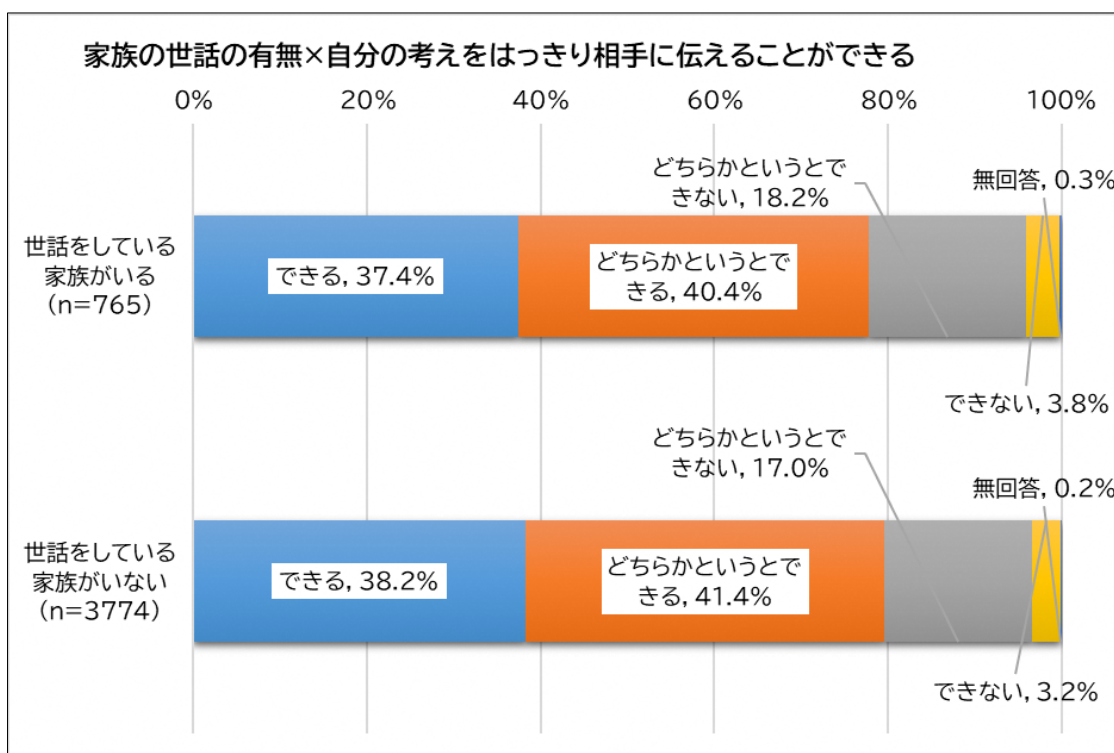


8. 家族の世話の有無×現在の悩みごと

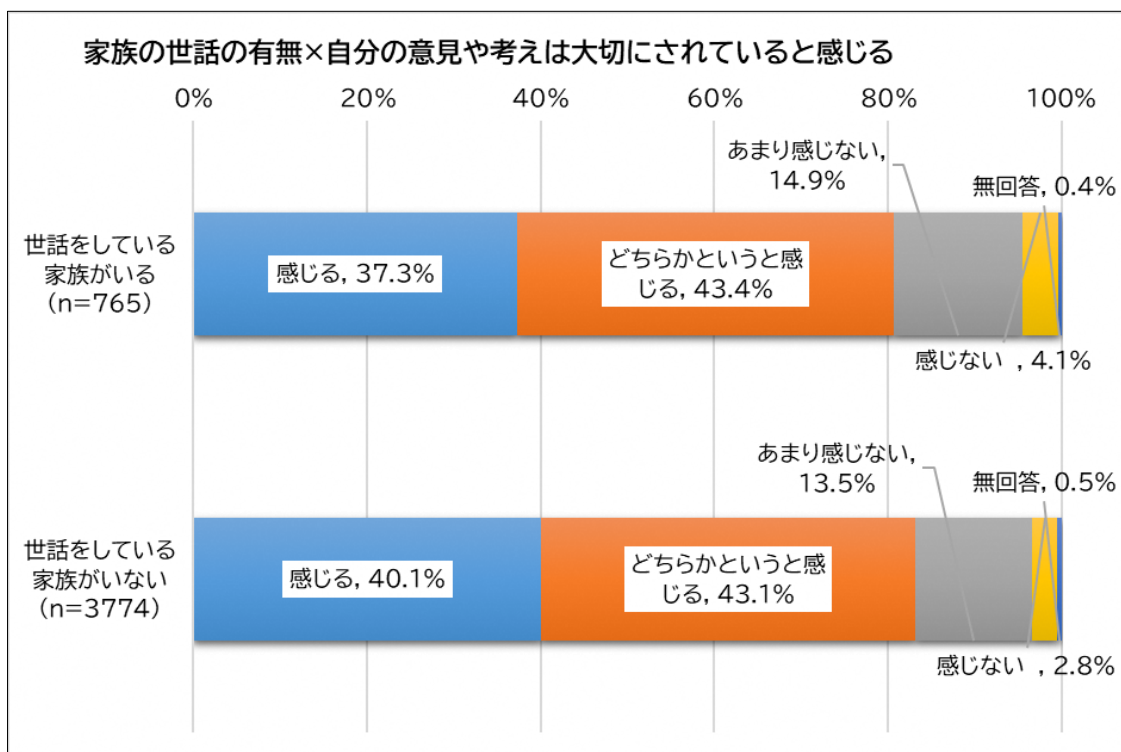
世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて全体的に回答割合が高い傾向にある。特に「自分と家族との関係のこと」「自分のために使える時間が少ないこと」「生活や勉強に必要なお金のこと」「学校の成績のこと」が高くなっている。



9. 家族の世話の有無×自分の考えをはっきり相手に伝えることができる
世話をしている家族がいる場合、いない場合を比べて大きな差はない。

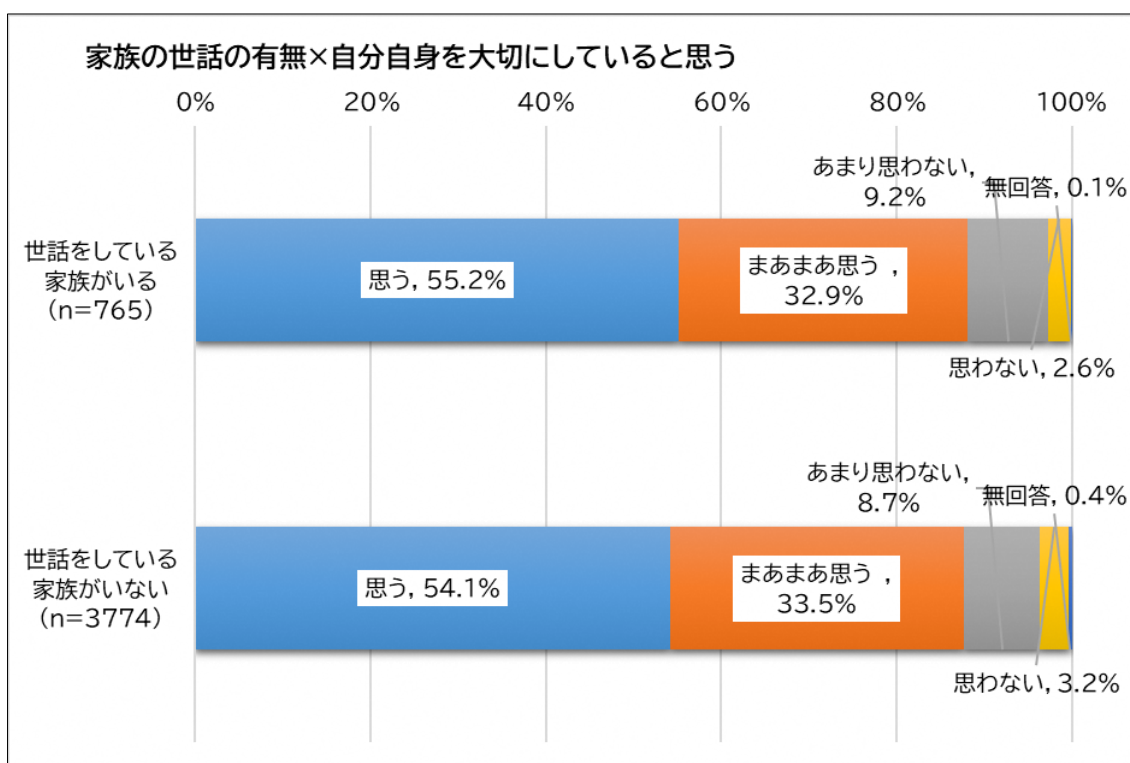


10. 家族の世話の有無×自分の意見や考えは大切にされていると感じる
世話をしている家族がいる場合、いない場合を比べて大きな差はない。



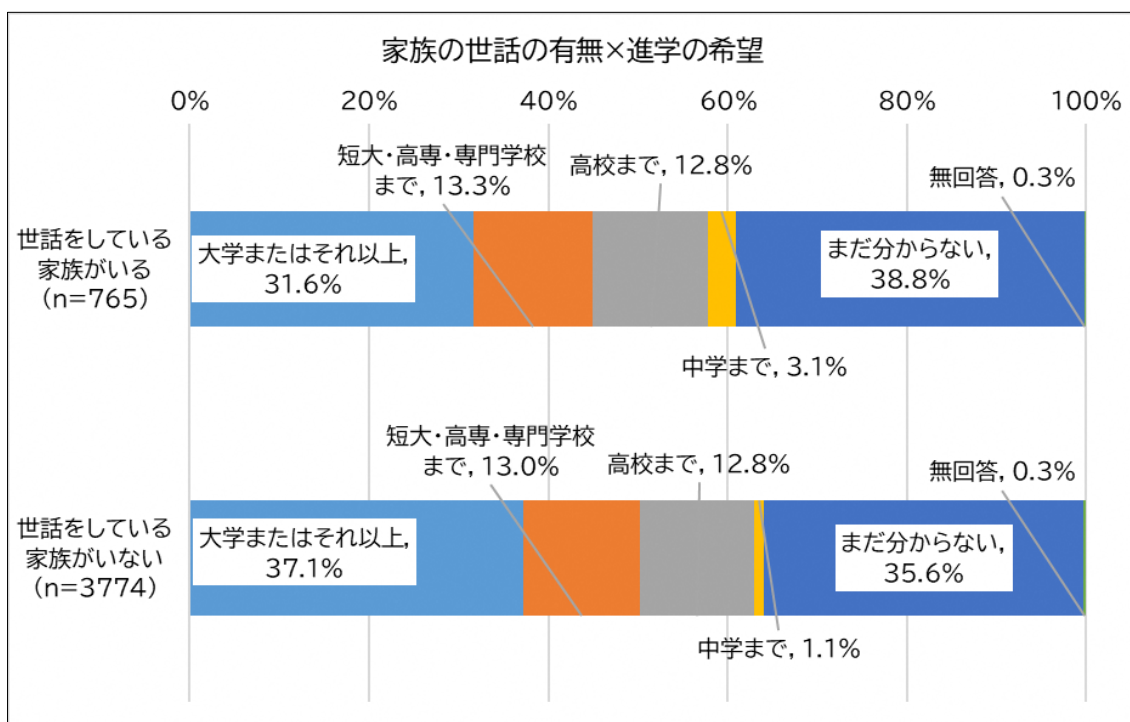
11. 家族の世話の有無×自分自身を大切にしていると思う

世話をしている家族がいる場合、いない場合を比べて大きな差はない。



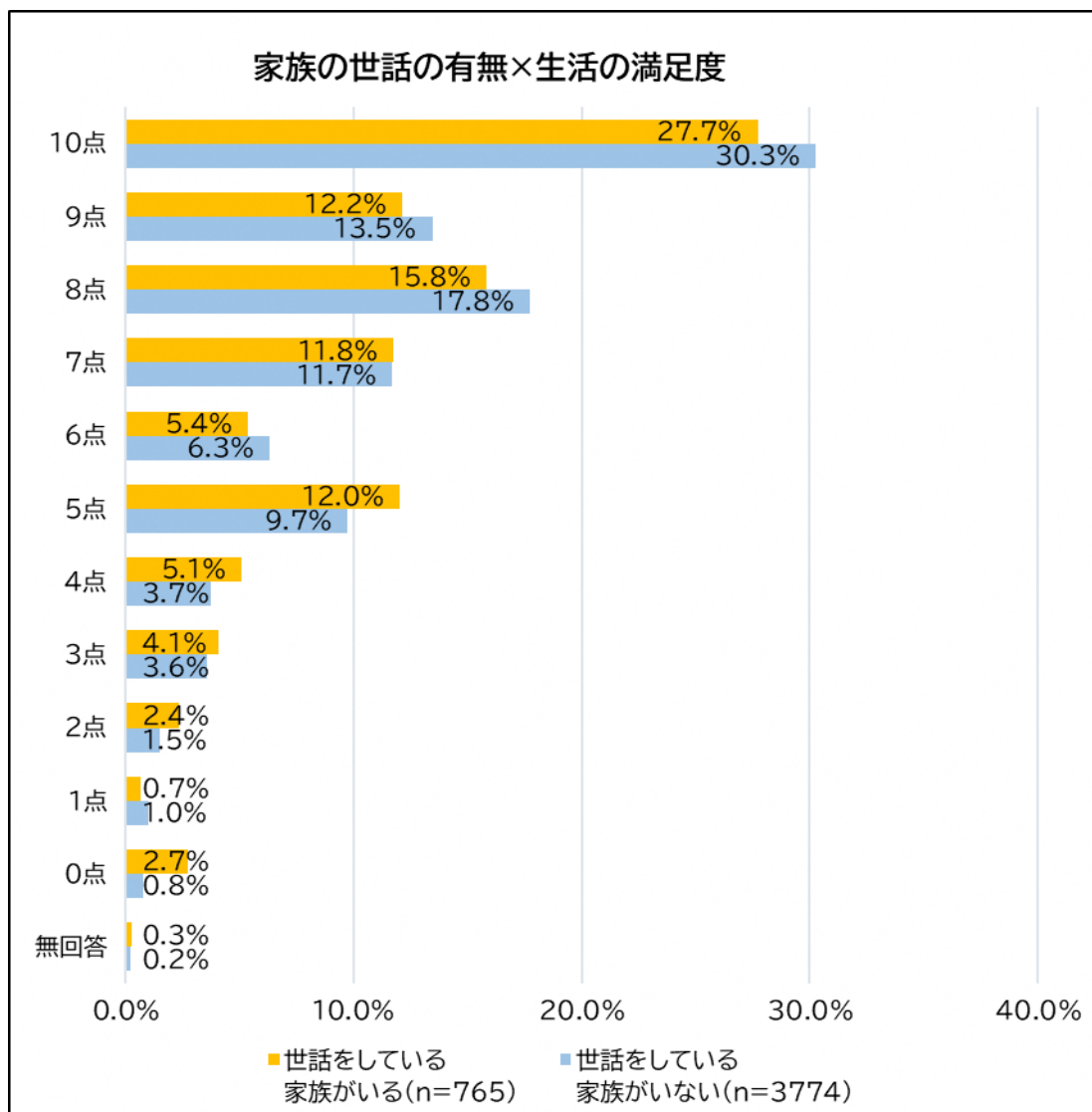
12. 家族の世話の有無×進学希望

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「大学またはそれ以上」を選択している割合が低くなっている。



13. 家族の世話の有無×生活の満足度

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて5点から0点がおおむね割合が高くなっている。



2. 中学生アンケート結果について

中学生調査の結果(単純集計)

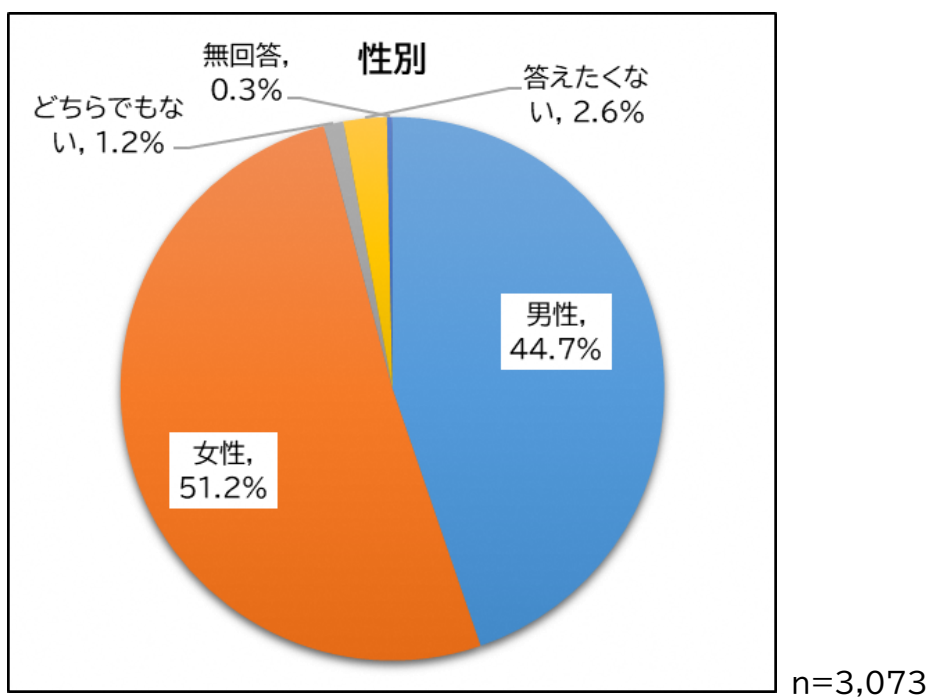
1. 学年

回答者の学年は以下の通り。

中学1年生	1,199 人	39.0%
中学2年生	907 人	29.5%
中学3年生	967 人	31.5%
合 計	3,073 人	

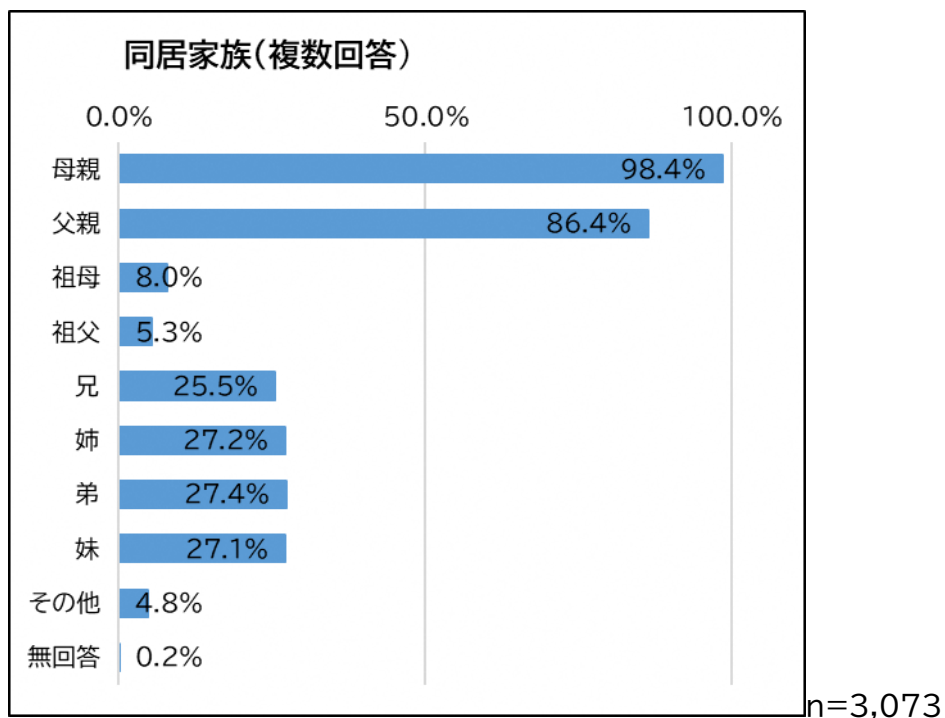
2. 性別

回答者の性別は以下の通り



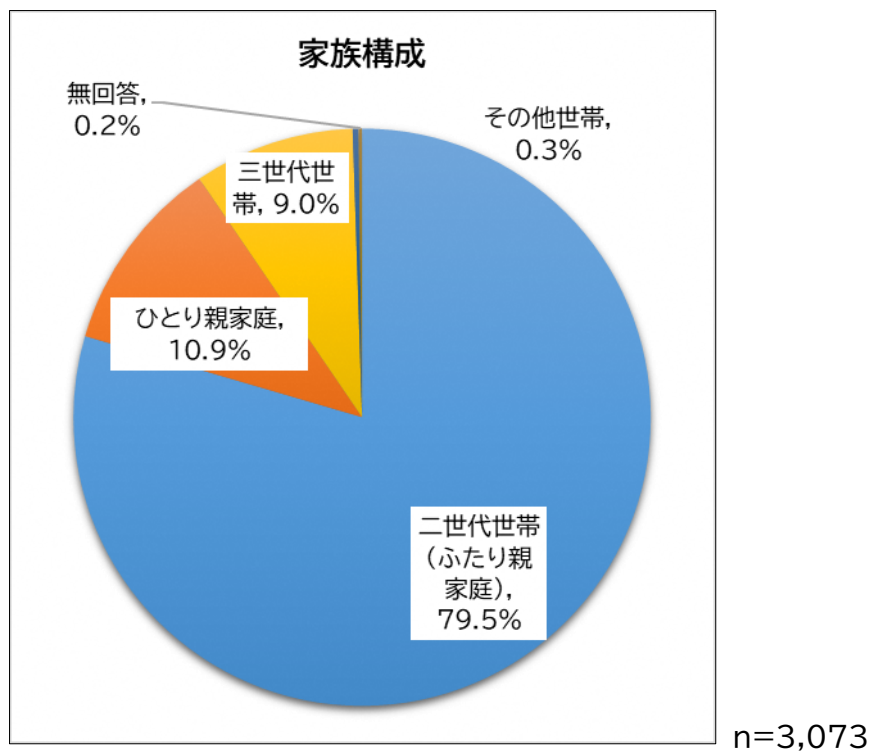
3. 同居家族

同居家族は、「母親」が 98.4%と最も高く、次いで「父親」が 86.4%、「弟」27.4%、「姉」27.2%となっている



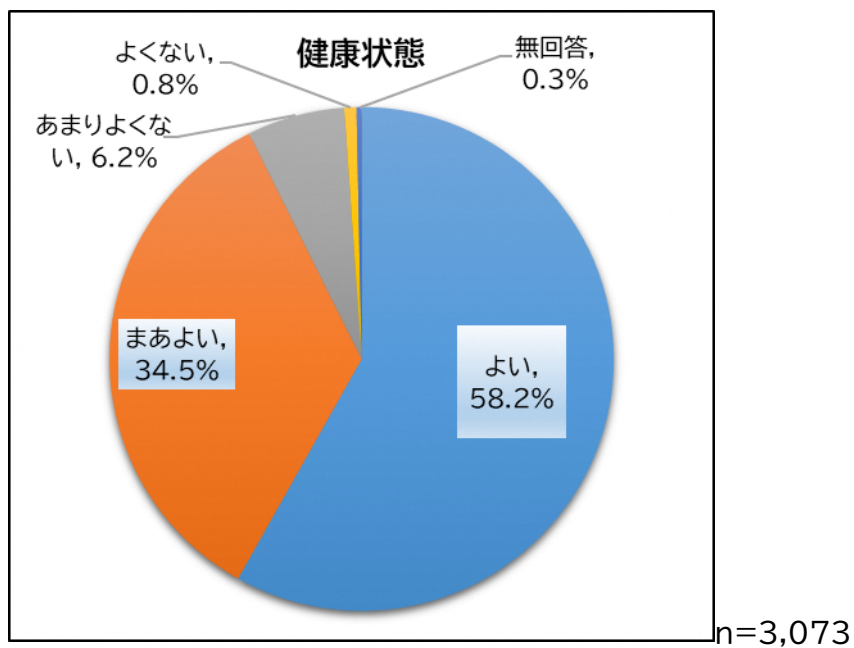
4. 家族構成

回答者の家族構成は以下の通り。



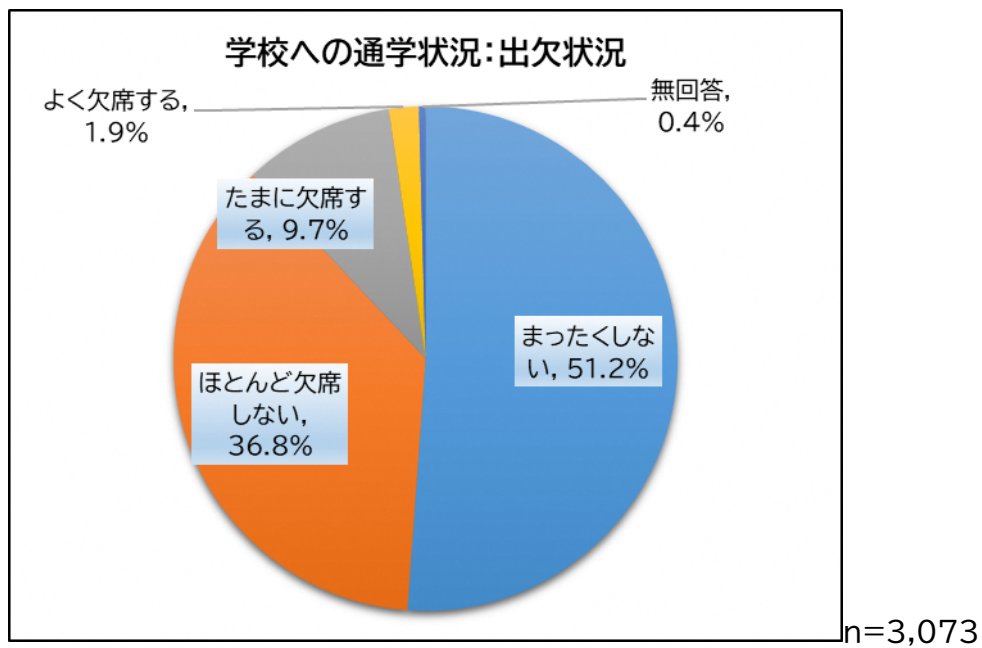
5. 健康状態

健康状態は「よい」が 58.2%と最も高く、次いで「まあよい」34.5%となっている



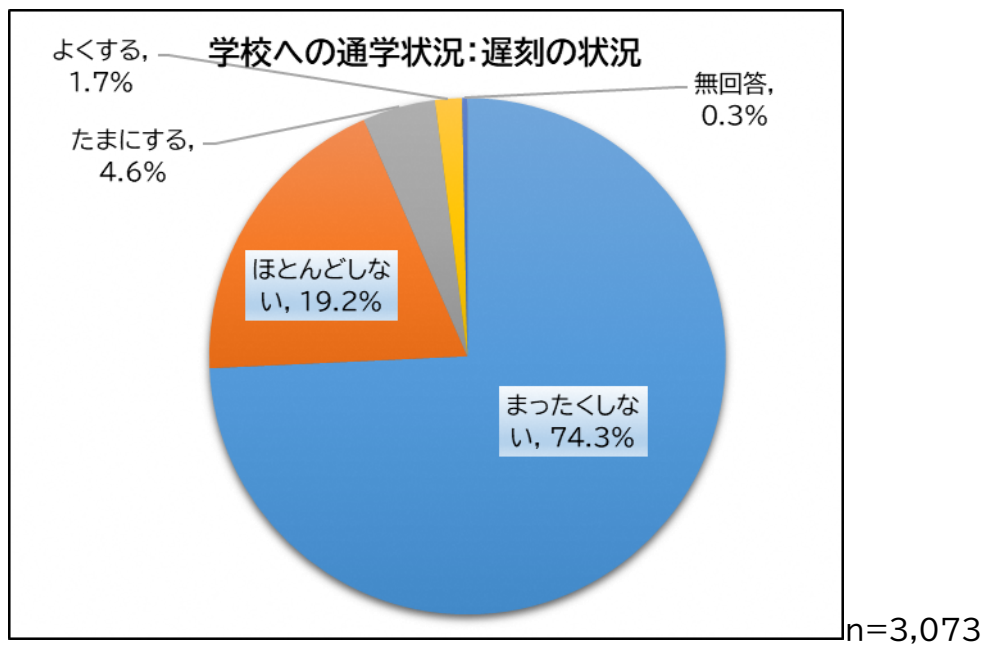
6. 学校への通学状況:出欠状況

学校への欠席状況は、「まったくしない」が 51.2%と最も高くなっている。



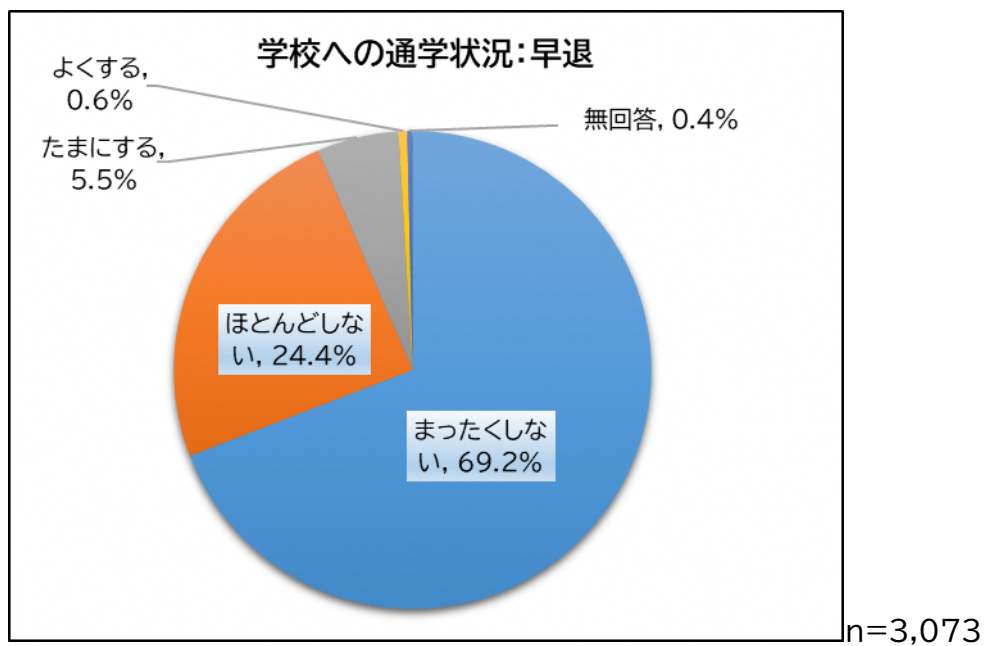
7. 学校への通学状況:遅刻の状況

遅刻の状況は「まったくしない」が 74.3%と最も高くなっている。



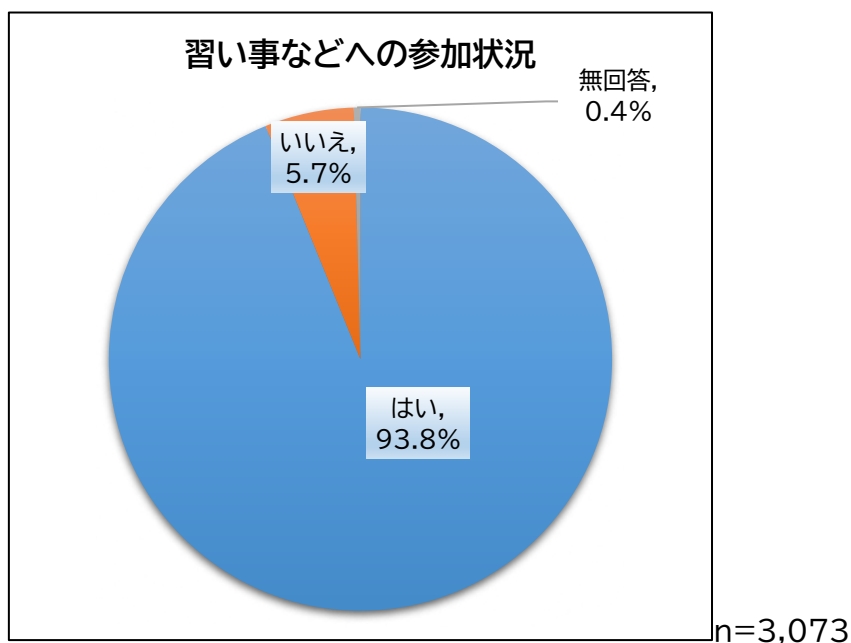
8. 学校への通学状況:早退の状況

学校の早退の状況は「まったくしない」が 69.2%と最も高くなっている。



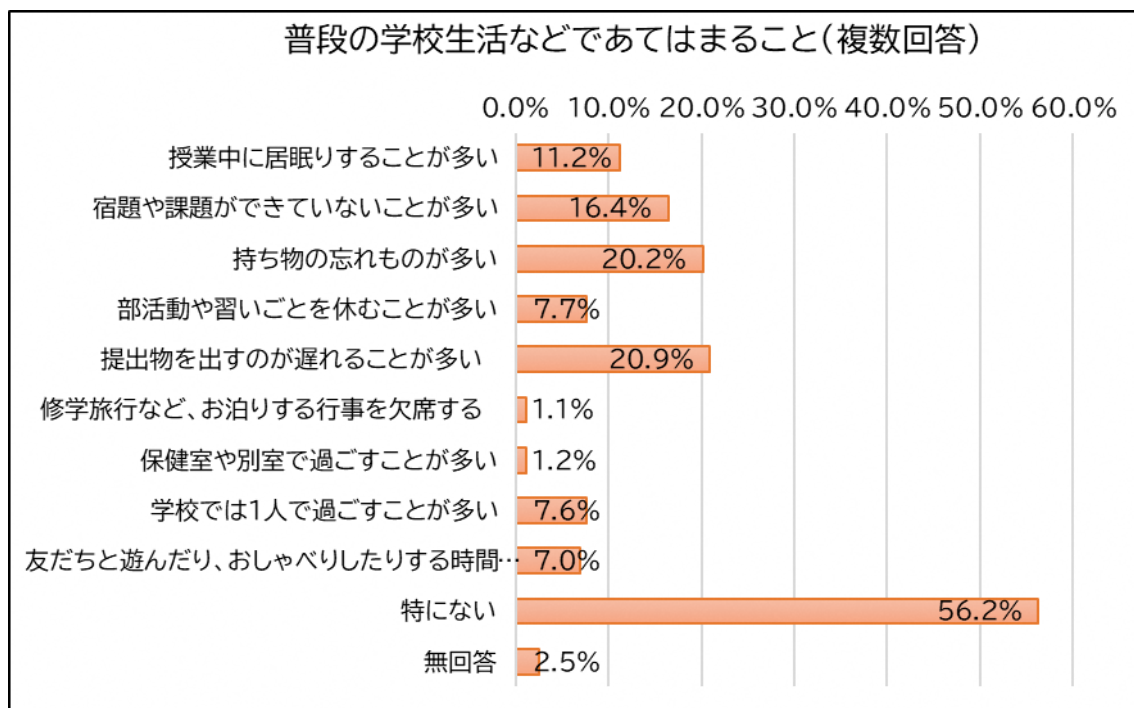
9. 習い事などへの参加状況

習い事などへの参加状況は、「はい(参加している)」が 93.8%となっている。



10. 普段の学校生活などであてはまること

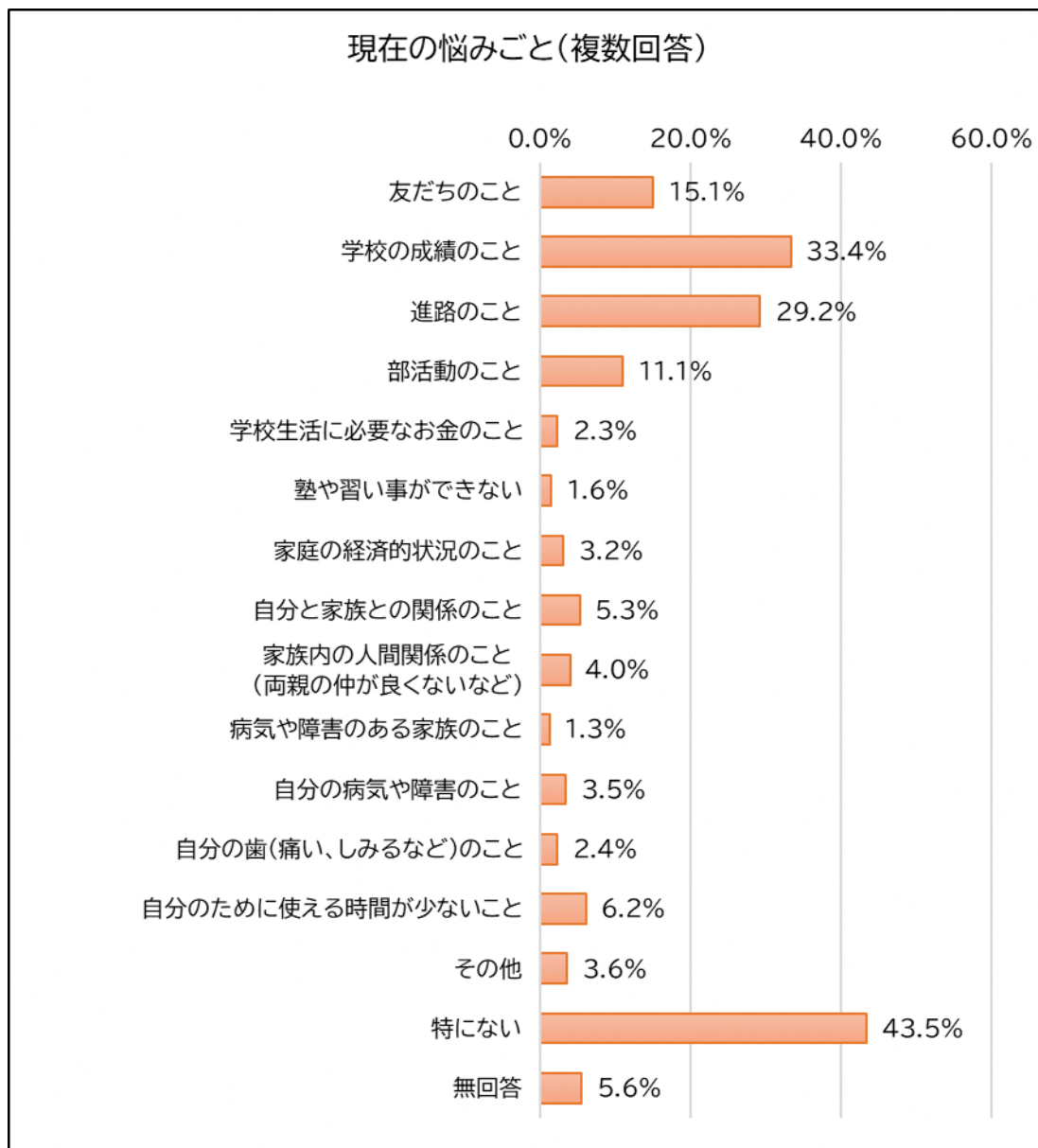
普段の学校生活などであてはまることについては、「特にない」が 56.2%と最も高くなっている。そのほかでは「提出物を出すのが遅れることが多い」(20.9%)、「持ち物の忘れものが多い」(20.2%)がほかに比べてやや多い。



n=3,073

11. 現在の悩みごと

現在の悩みごとについては、「特にない」が 43.5%と最も高くなっている。そのほかでは、「学校の成績のこと」(33.4%)「進路のこと」(29.2%)がほかにならべてやや高くなっている。



n=3,073

12. その他

その他の主な自由記述 ※複数回答あり

《友達》

クラスメイトとの人間関係、友達からのいたずら など

《勉強》

勉強に集中できない(2 件)、テストの成績が悪い、学習ペースについていけない など

《健康》

鬱である(5 件)、体調がすぐれない(5 件)、体質(2 件)、持病(2 件) など

《家族》

きょうだいの反抗期 など

《学校》

学校に行きたくない(2 件)、部活動(2 件)、非常に怖い先生がいる(2 件) など

《性別》

自分の性別や身体のこと(5 件)、自分が LGBT 当事者であること(3 件) など

《恋愛》

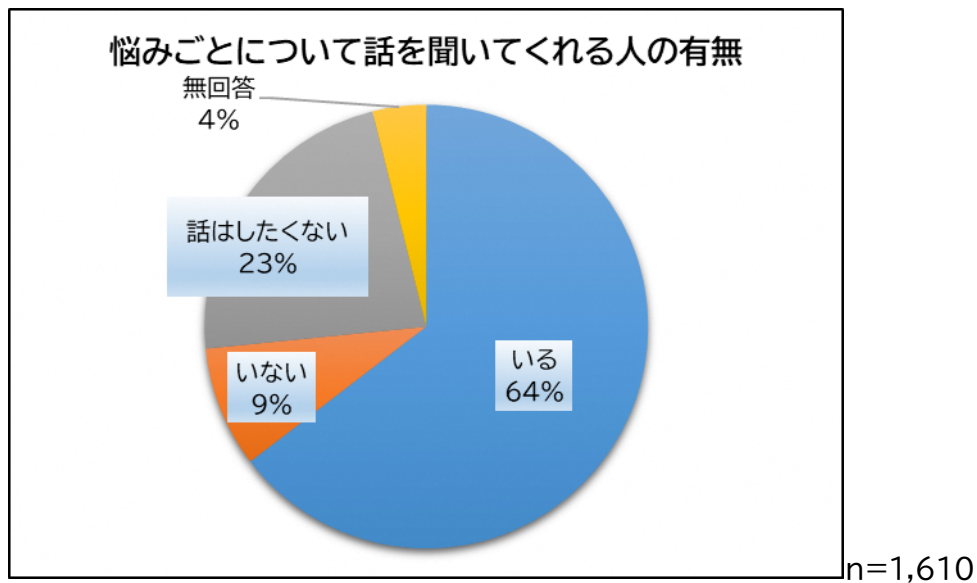
恋愛対象が同性であること、恋愛のことで授業に集中できない など

《その他》

自分の容姿(4 件)、自分の性格(3 件)、自信がない(2 件)、死にたいと思うことがある(2 件)、自分でもよくわからない など

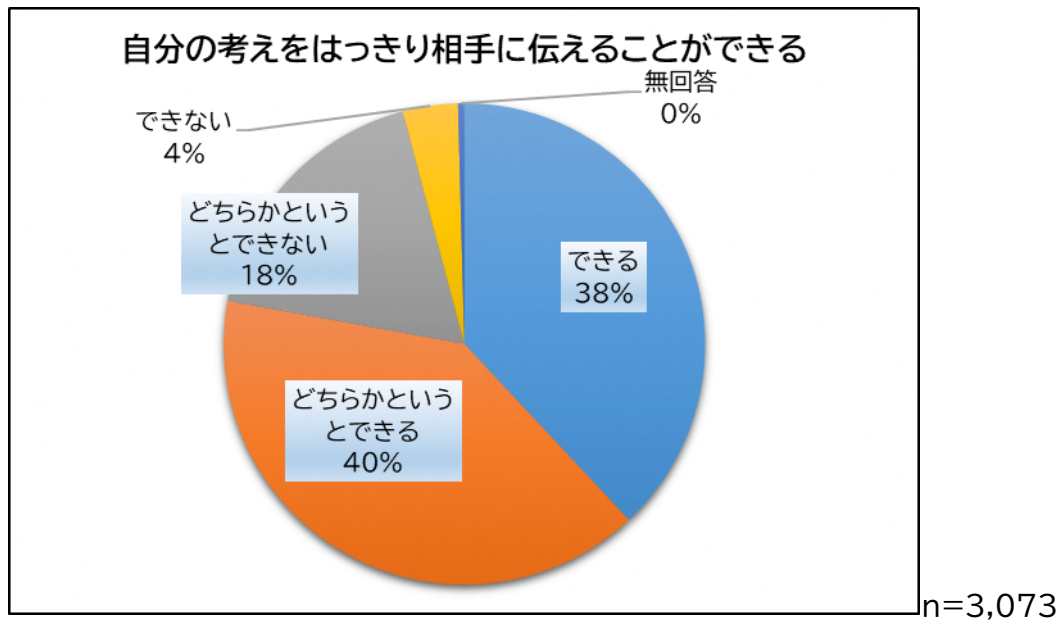
13. 悩みごとについて話を聞いてくれる人の有無

前問で何らかの悩みごとがあると回答した人に、話を聞いてくれる人の有無を聞いた結果、「いる」が 64%と最も高くなっている一方で、「話はしたくない」という回答が 23%となっている。



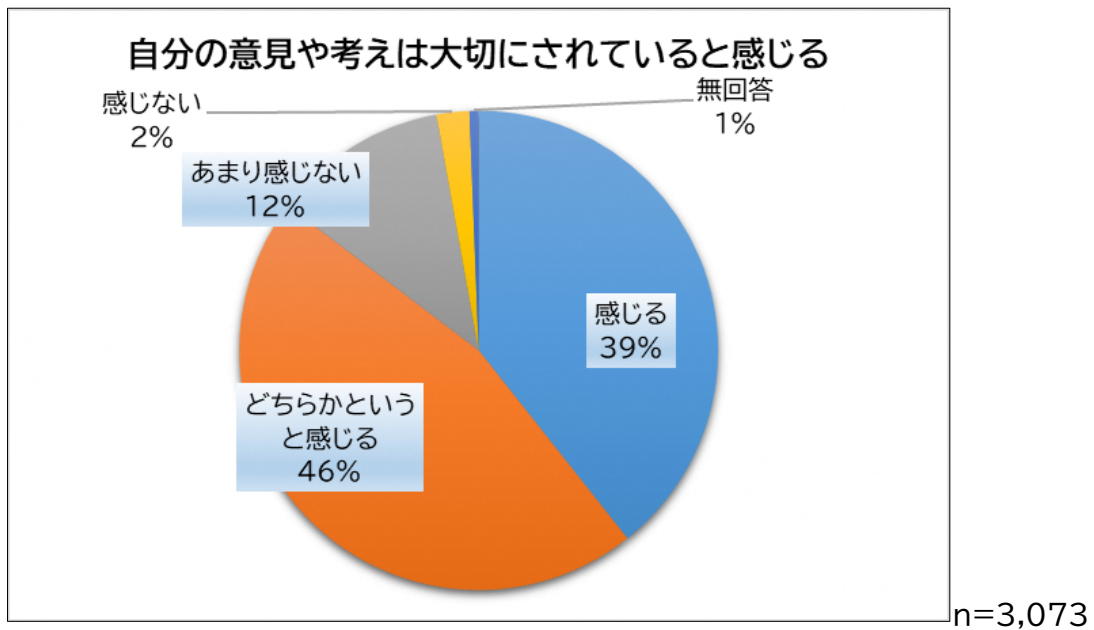
14. 自分の考えを、はっきり相手に伝えることができるか

「どちらかというところできる」が 40%と最も高く、次いで「できる」が 38%となっている。「できる」と「どちらかというところできる」を合わせると 78%となっている。



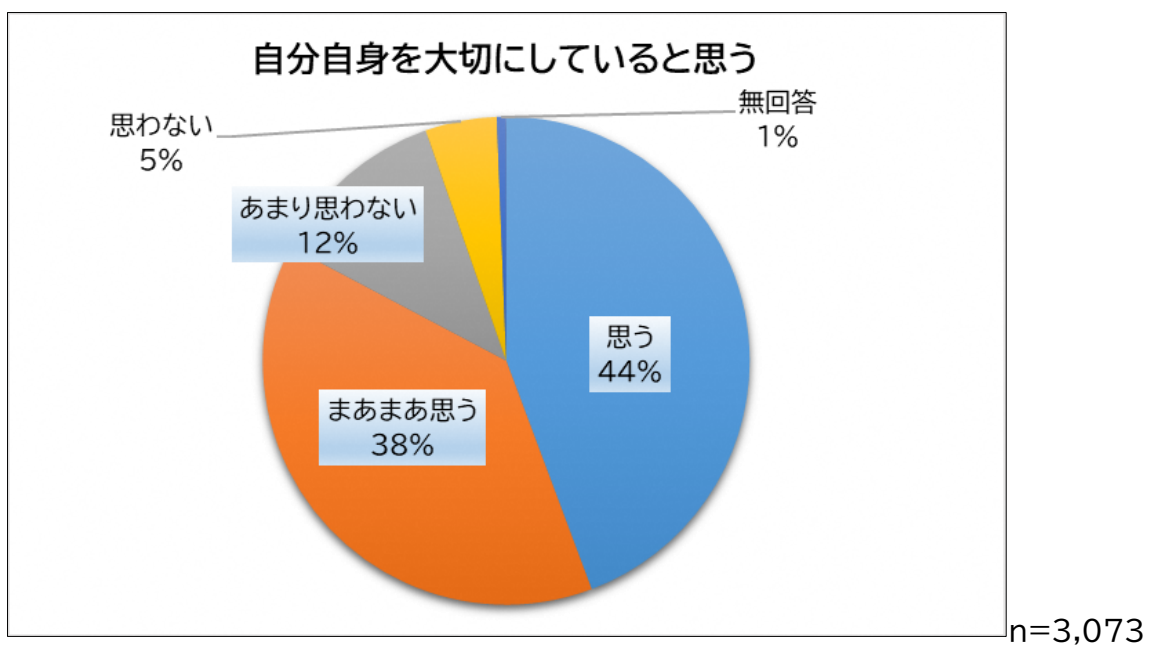
15. 自分の意見や考えは大切にされていると感じるか

「どちらかというと感じる」が 46%と最も高く、次いで「感じる」が 39%となっている。「感じる」と「どちらかというと感じる」を合わせると 75%となっている。



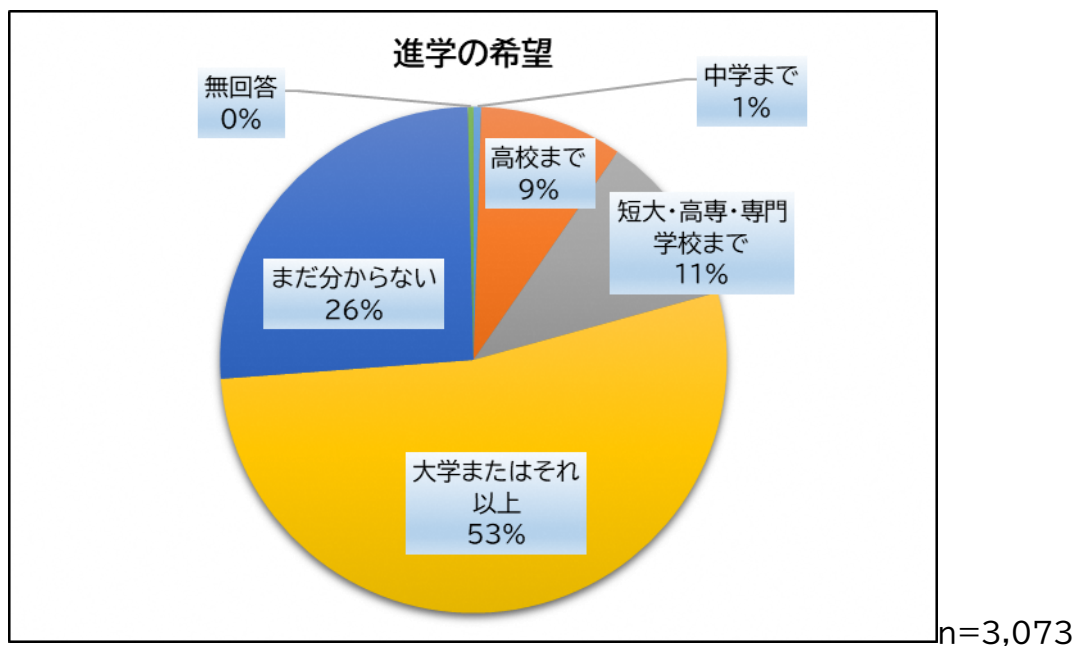
16. 自分自身を大切にしていると思うか

「思う」が 44%と最も高く、次いで「まあまあ思う」が 38%となっている。「思う」と「まあまあ思う」を合わせると、82%となっている。



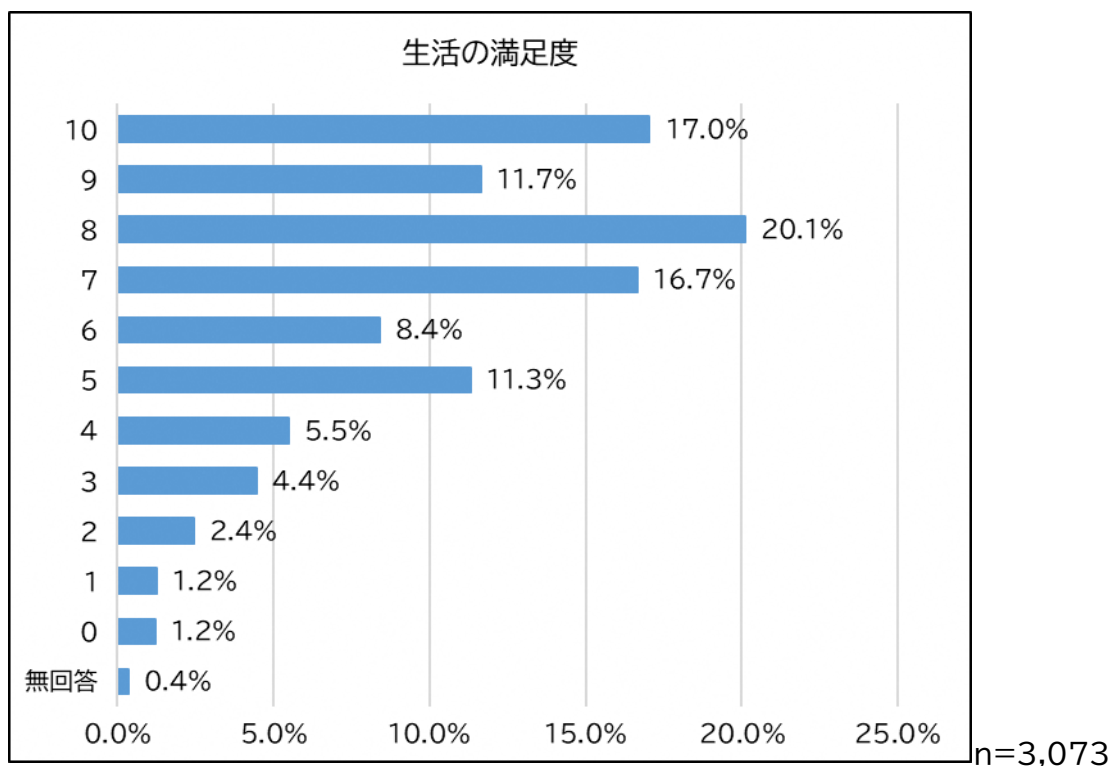
17. 将来、どの段階まで進学したいか

「大学またはそれ以上」が 53%と最も高い。次いで「まだ分からない」(26%)となっている。

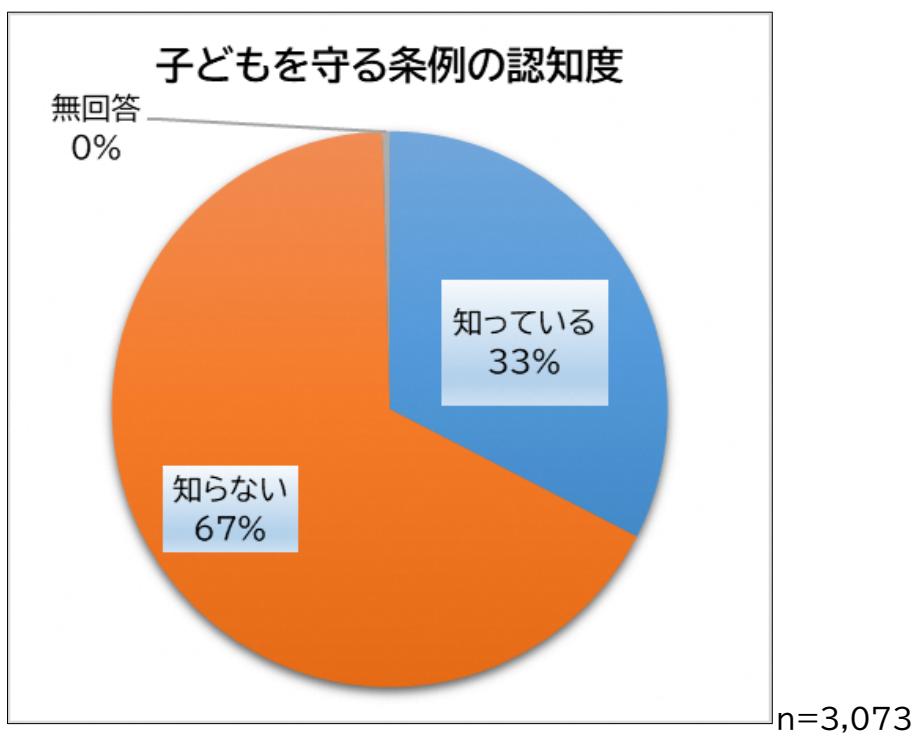


18. 全体として最近の生活にどのくらい満足しているか

生活の満足度について 0 から 10 までの 11 段階で聞いたところ、「8」が 20.1%と最も高く、次いで「10」が 17%となっている。

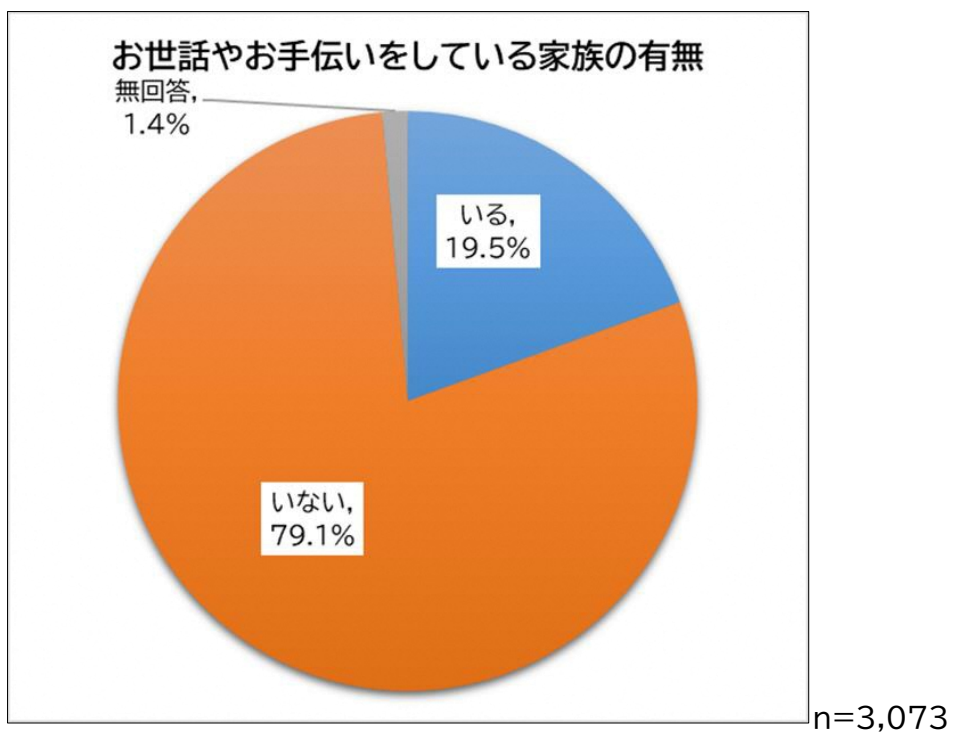


19. 枚方市には「子どもを守る条例」があることを知っているか
「知っている」が33%で、「知らない」が67%となっている



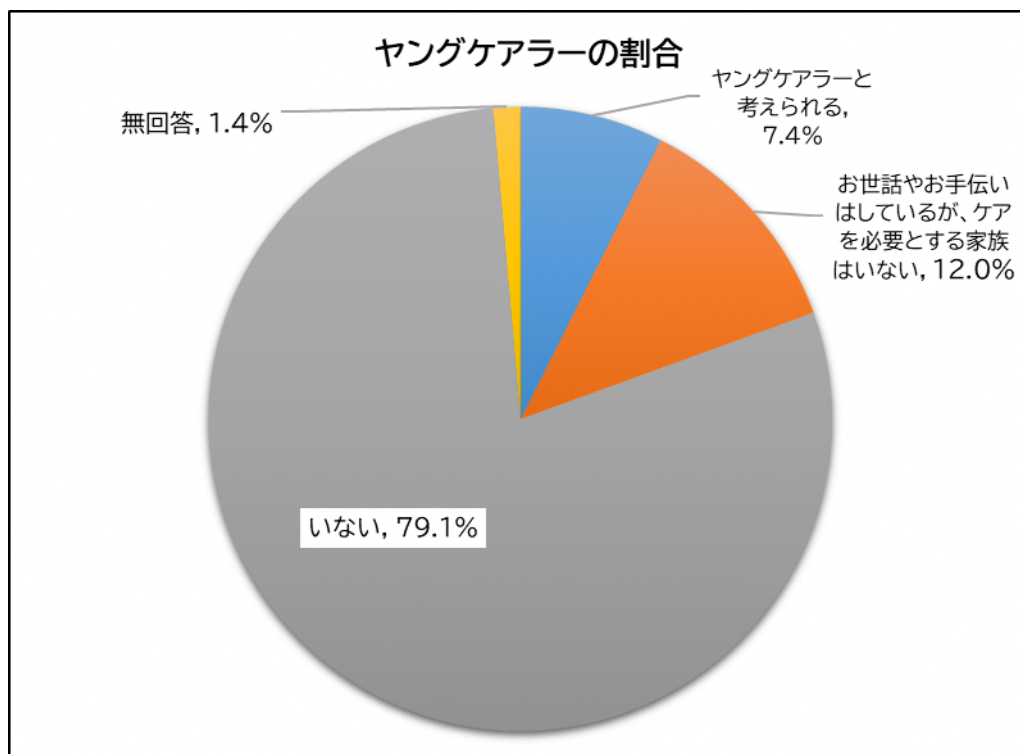
20. 家庭や家族のことについて

お世話やお手伝いをしている家族の有無については、19.5%が「いる」と答えている。



21. ヤングケアラーの割合

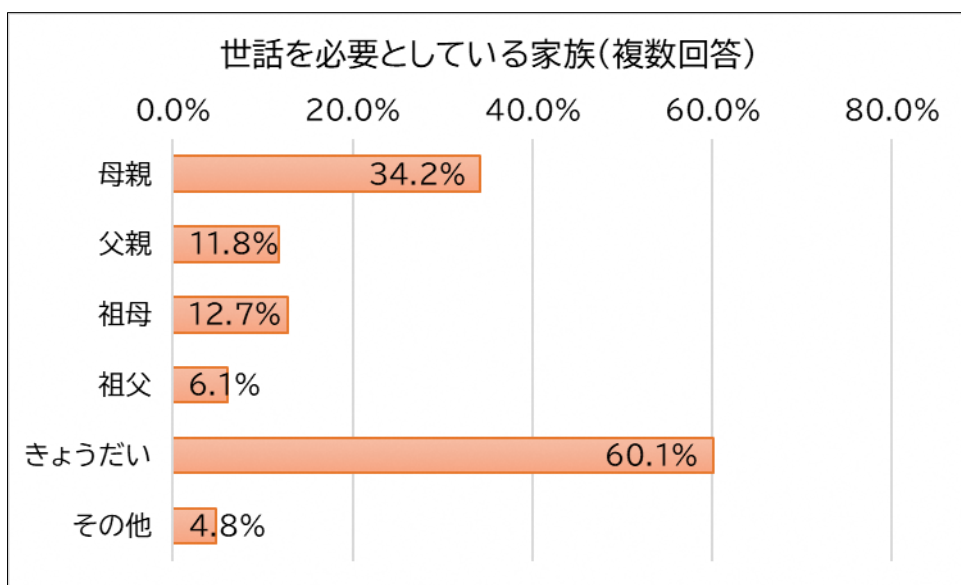
お世話をしている家族が「いる」と回答した中学生 19.5%のうち、後の質問により、お世話やお手伝いをしている理由が、「ケアを必要とする家族のため」と明確に読み取れたのは、228 人であった。すなわち、ヤングケアラーの可能性があると考えられるのは全体の7.4%であった。



n=3,073

22. 世話を必要としている家族

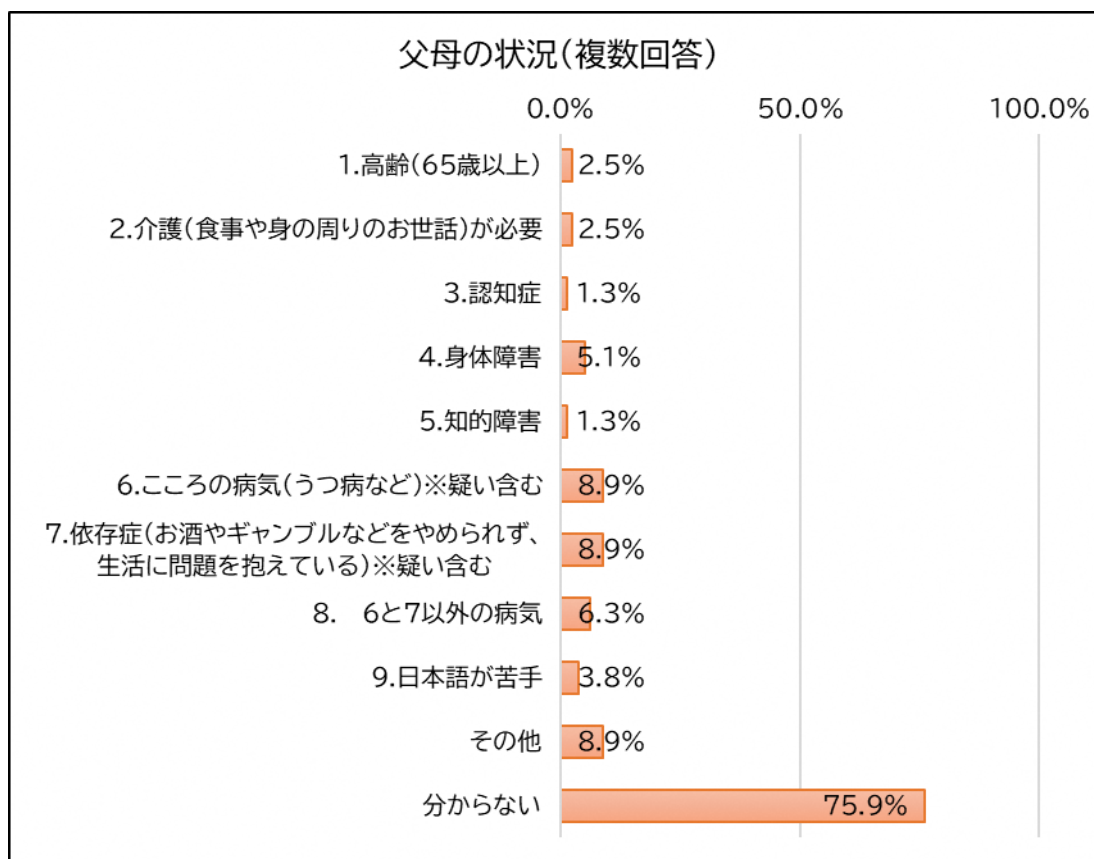
世話を必要としている家族については、きょうだいが60.1%と最も高く、次いで「母親」が、34.2%となっている。



n=228

23. 父母の状況

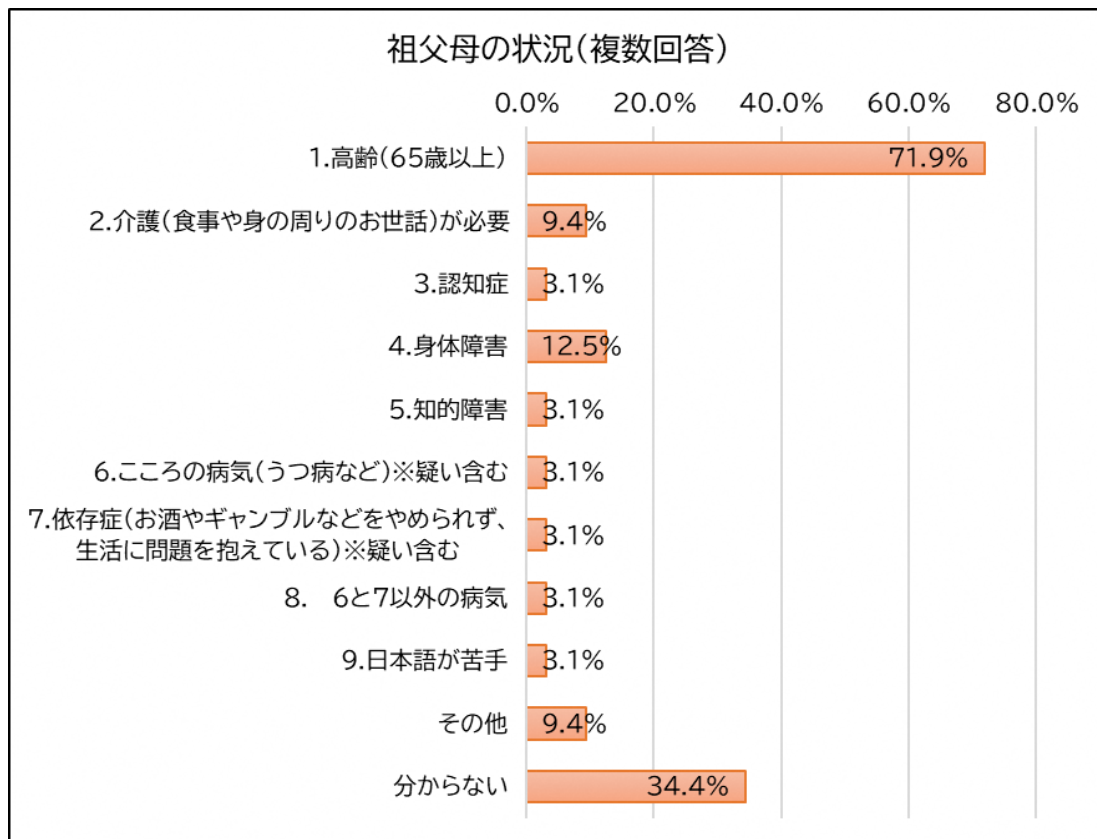
世話を必要としている家族として「父母」と回答した人に、父母の状況を聞いたところ、回答として最も多かったのは「分からない」(75.9%)であった。次いで、心の病気と依存症が8.9%となっている。



n=79

24. 祖父母の状況

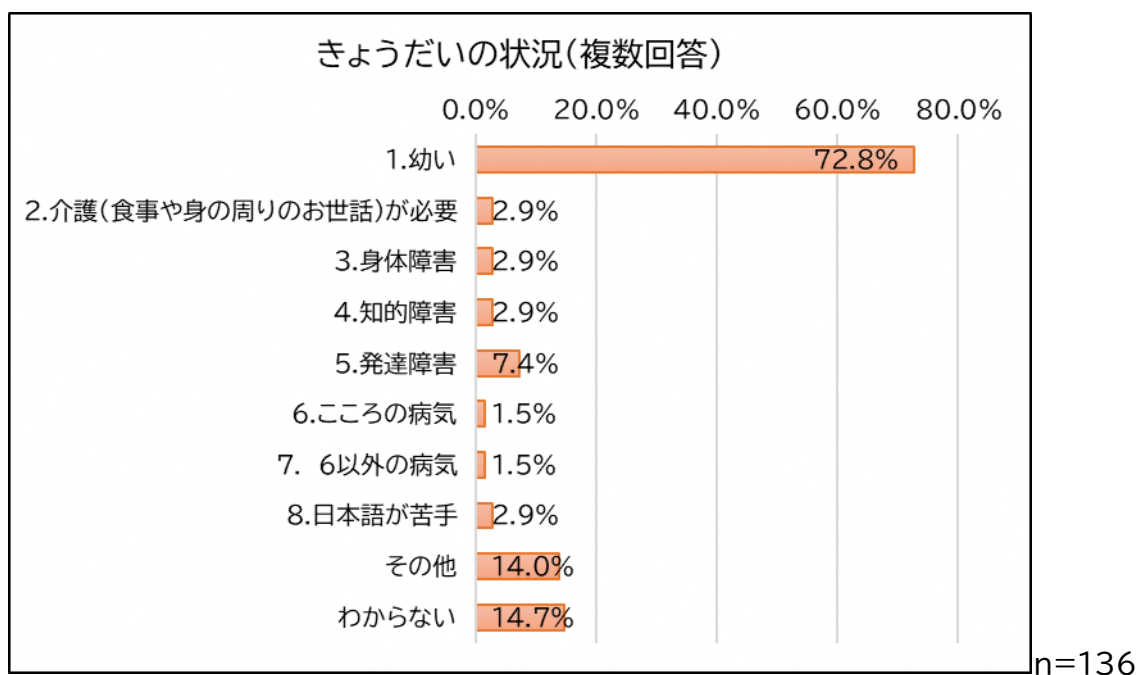
世話を必要としている家族として「祖父母」と回答した人に、祖父母の状況を聞いたところ「高齢」(71.9%)が最も高い。



n=32

25. きょうだいの状況

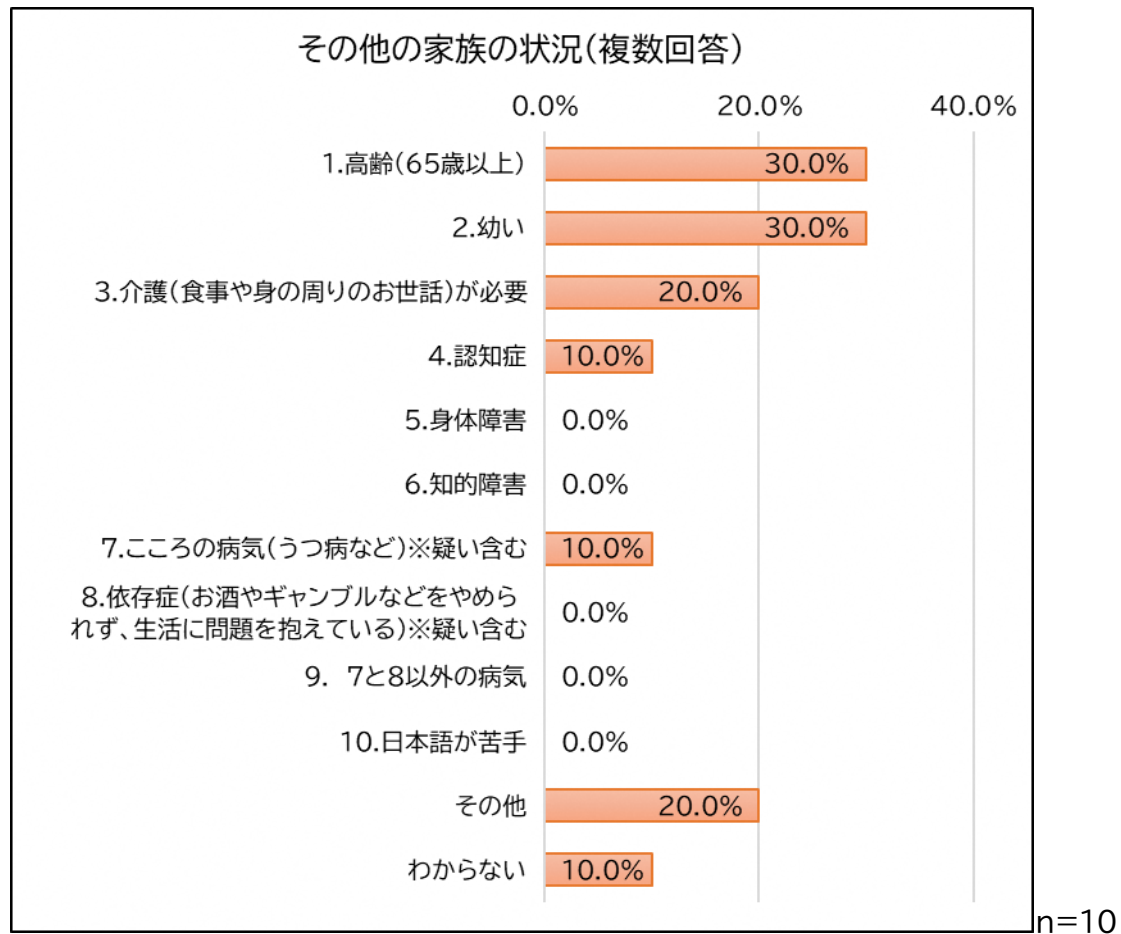
お世話を必要としている家族として「きょうだい」と回答した人に、きょうだいの状況を聞いたところ、「幼い」が最も高くなっている。



n=136

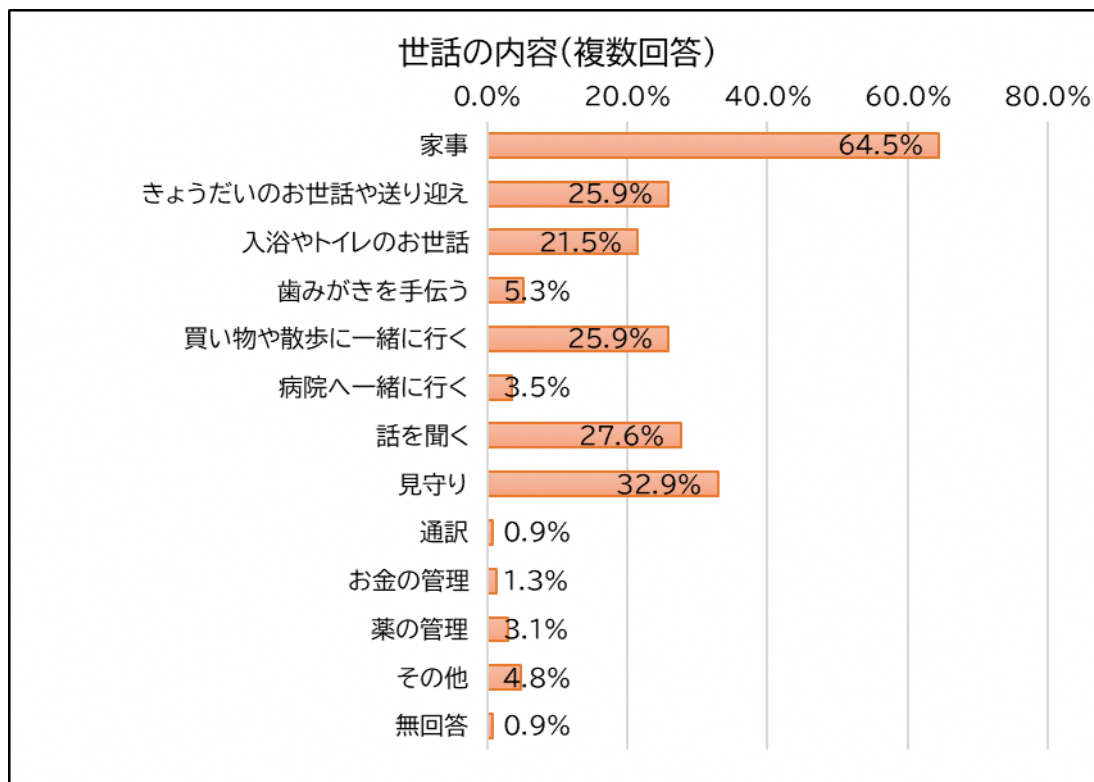
26. その他の家族の状況

世話を必要としている家族として「その他」と回答と回答した人に世話の内容について聞いたところ、「高齢」と「若い」がともに 30%と最も高くなっている。



27. 世話の内容

世話をしている家族がいると回答した人に世話の内容について聞いたところ、「家事」(64.5%)が最も高く、次いで「見守り」32.9%「話を聞く」(27.6%)となっている。



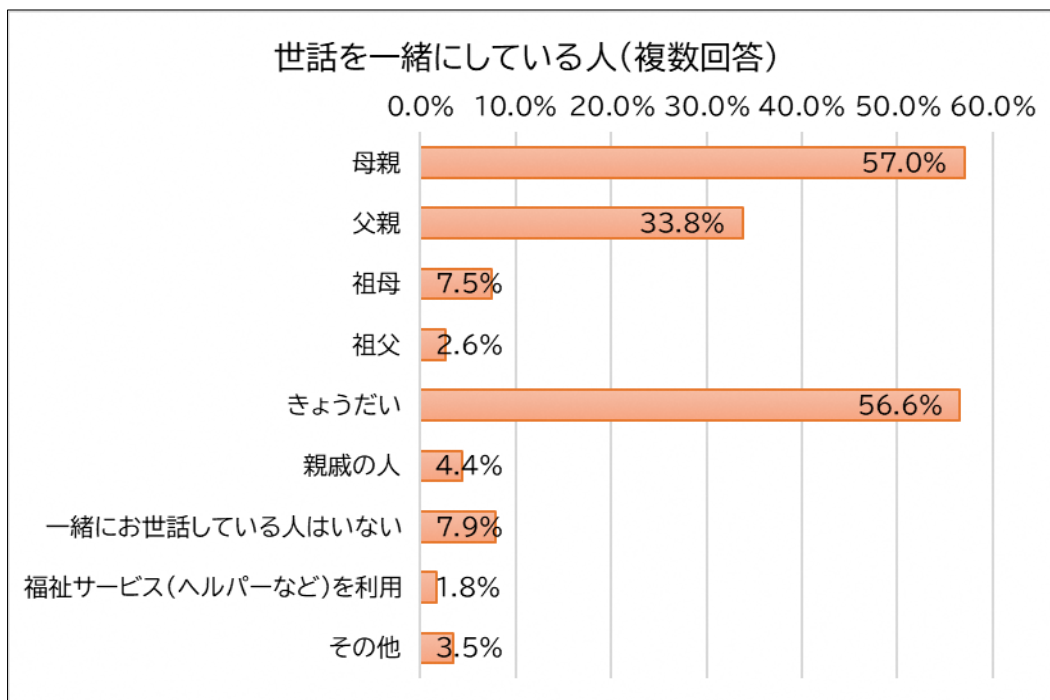
n=228

●その他の個別回答

勉強を教える、きょうだいと遊ぶ、洗濯 など

28. 世話を一緒にしている人

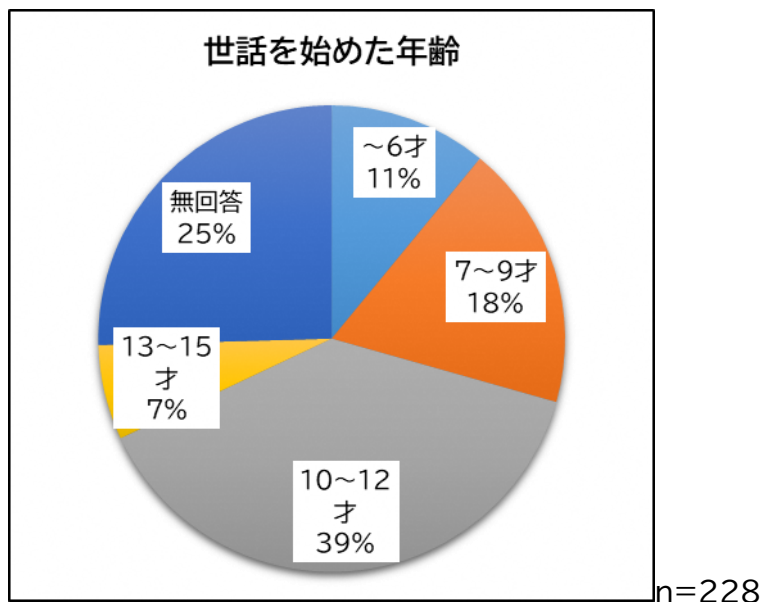
世話を一緒にしている人については、「母親」(57%)と最も高く、次いで「きょうだい」(56.6%)となっている。



n=228

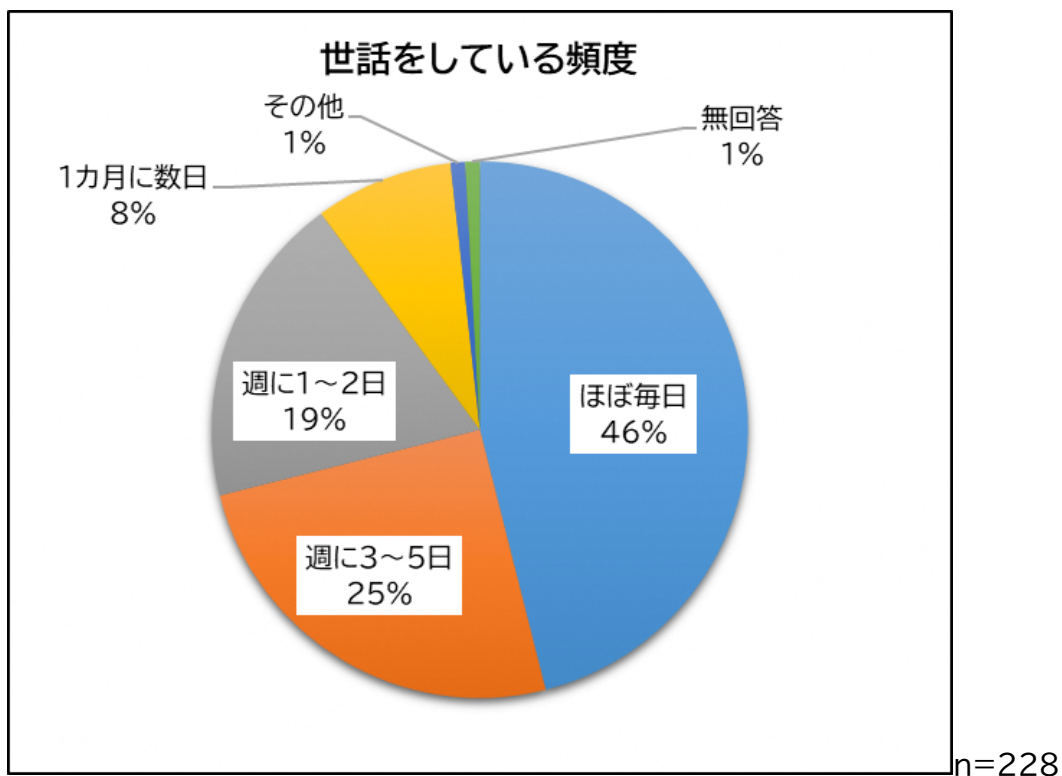
29. 世話を始めた年齢

世話を始めた年齢については、「10～12 才」が 39%と最も高くなっている。



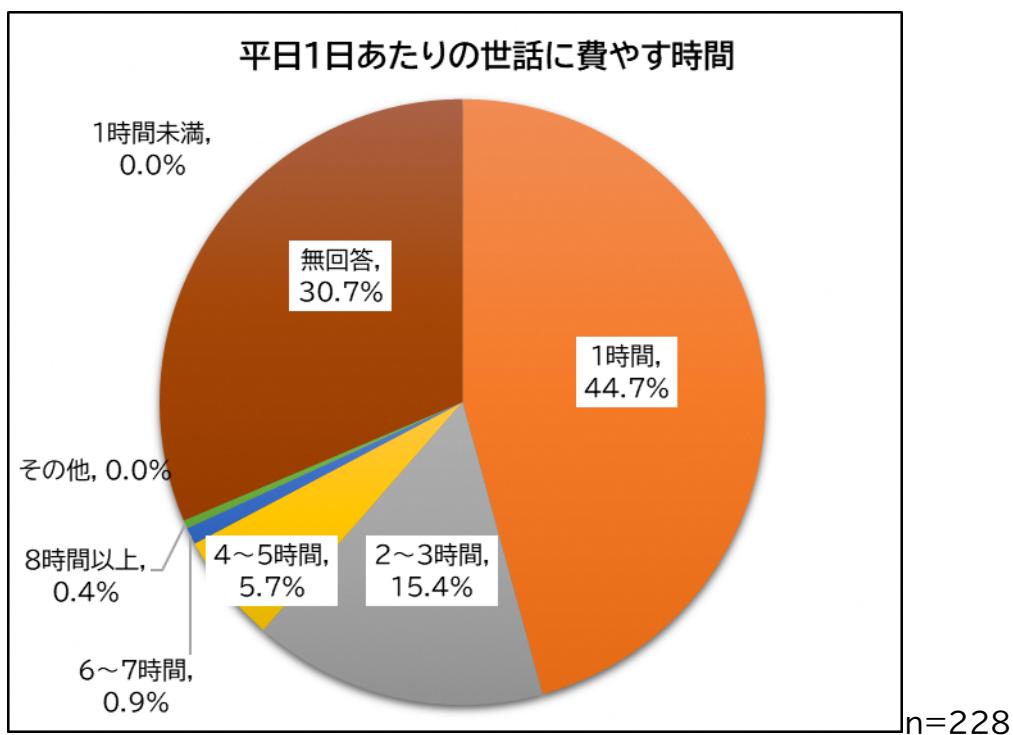
30. 世話をしている頻度

世話をしている頻度については、「ほぼ毎日」が46%と最も高くなっている。



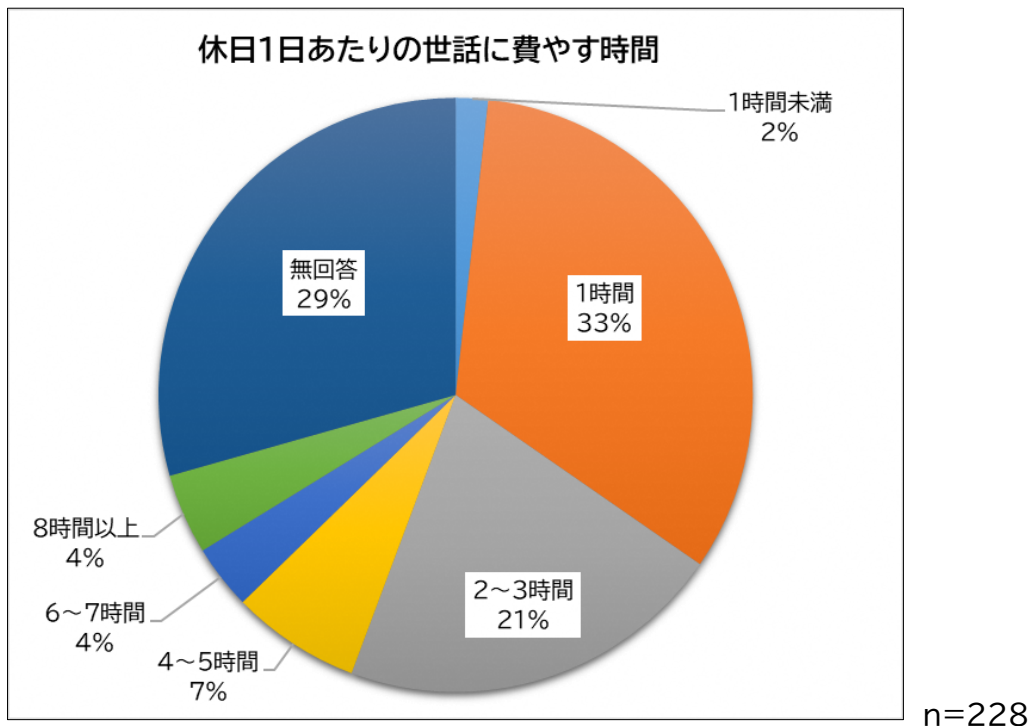
31. 平日1日あたりの世화에費やす頻度

平日1日あたりに世화에費やす時間については、1時間が44.7%と最も高くなっている。
無回答やその他を除いた回答者の平均は1.7時間となっている。



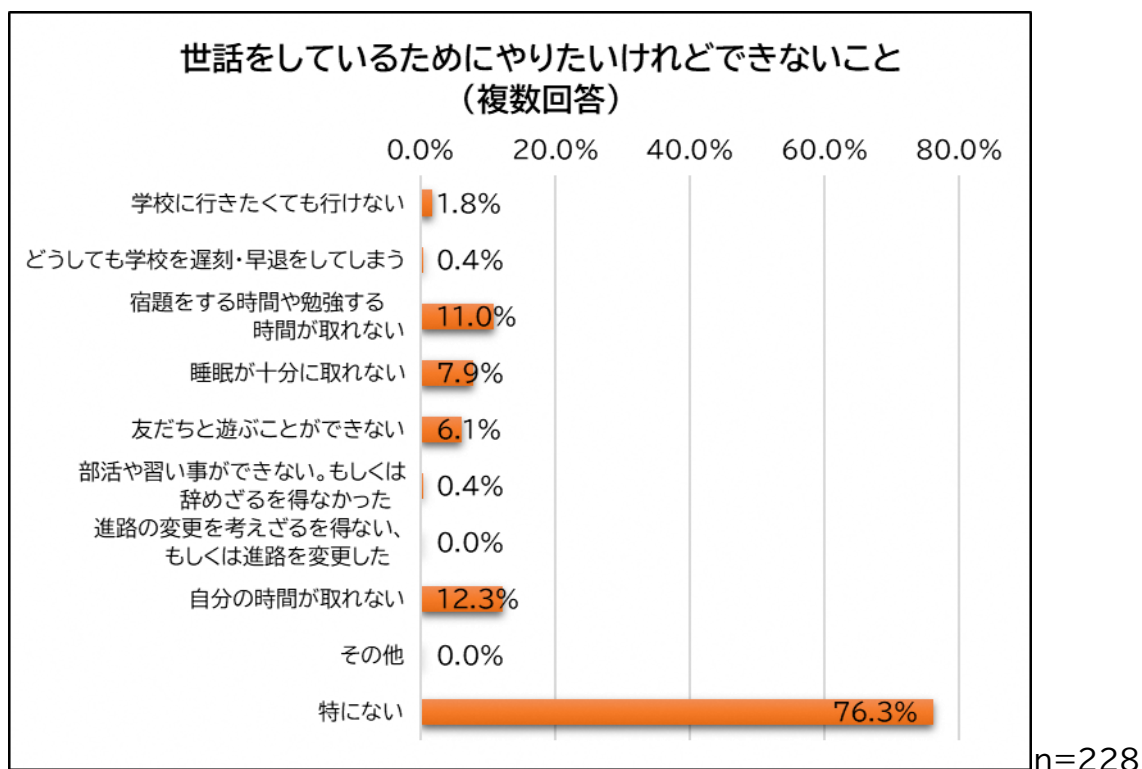
32. 休日 1 日あたりの世話に費やす時間

休日 1 日あたりの世話に費やす時間については、1 時間が 33%と最も高くなっている。無回答等を除いた回答者の平均は 2.6 時間となっている。



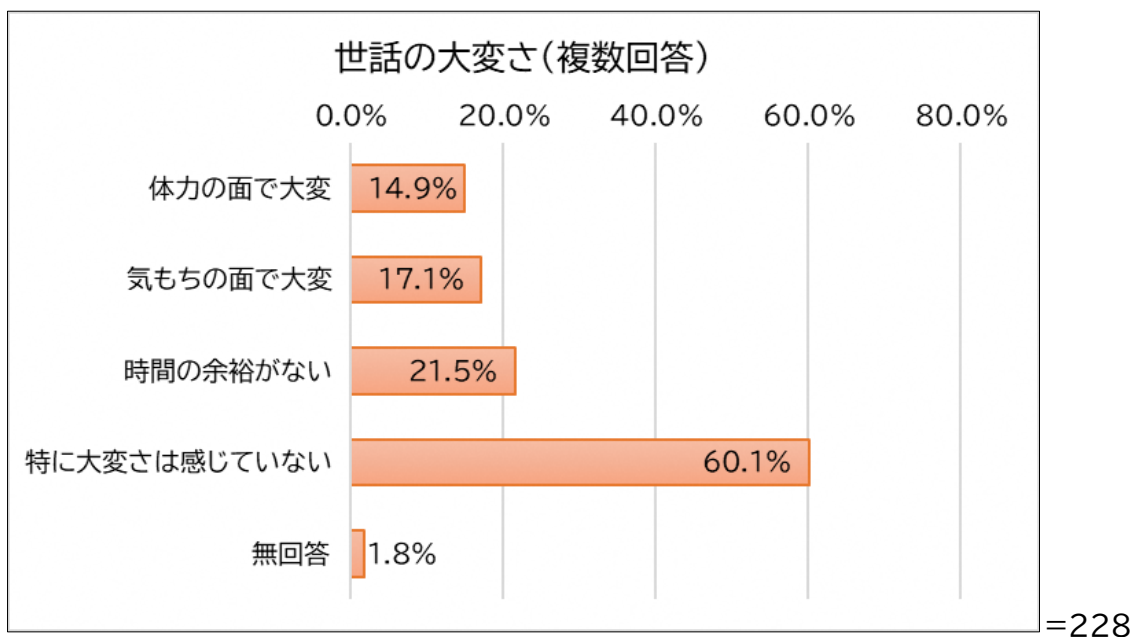
33. 世話をしているためにやりたいけれどできないこと

世話をしているためにやりたいけれどできていないことについては、「特にない」(76.3%)が最も高くなっているが、そのほかでは、「自分の時間が取れない」(12.3%)がほかと比べて高くなっている。



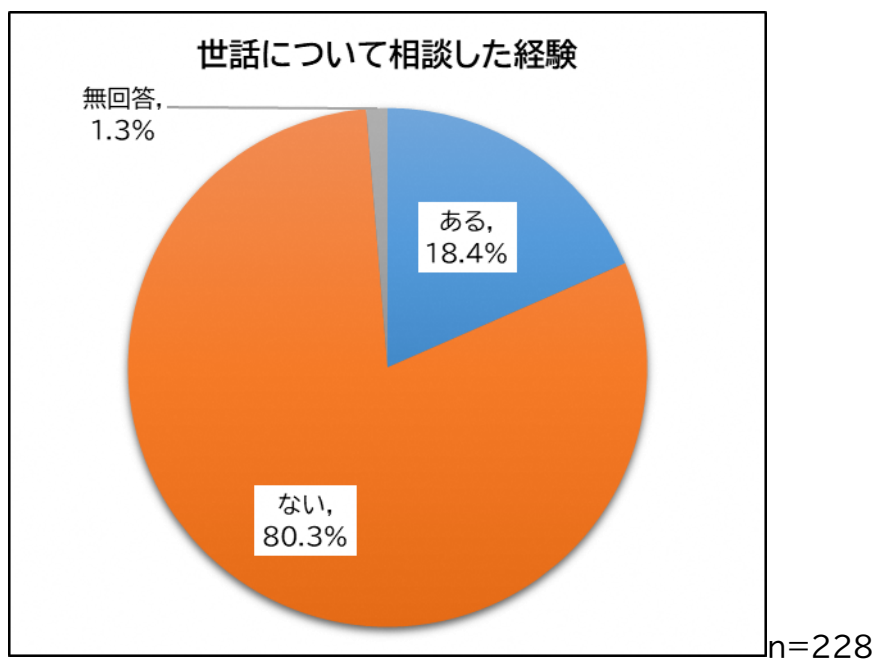
34. 世話の大変さ

世話の大変さについては、「特に大変さは感じていない」(60.1%)が最も高くなっている。次いで「時間の余裕がない」が 21.5%であった。



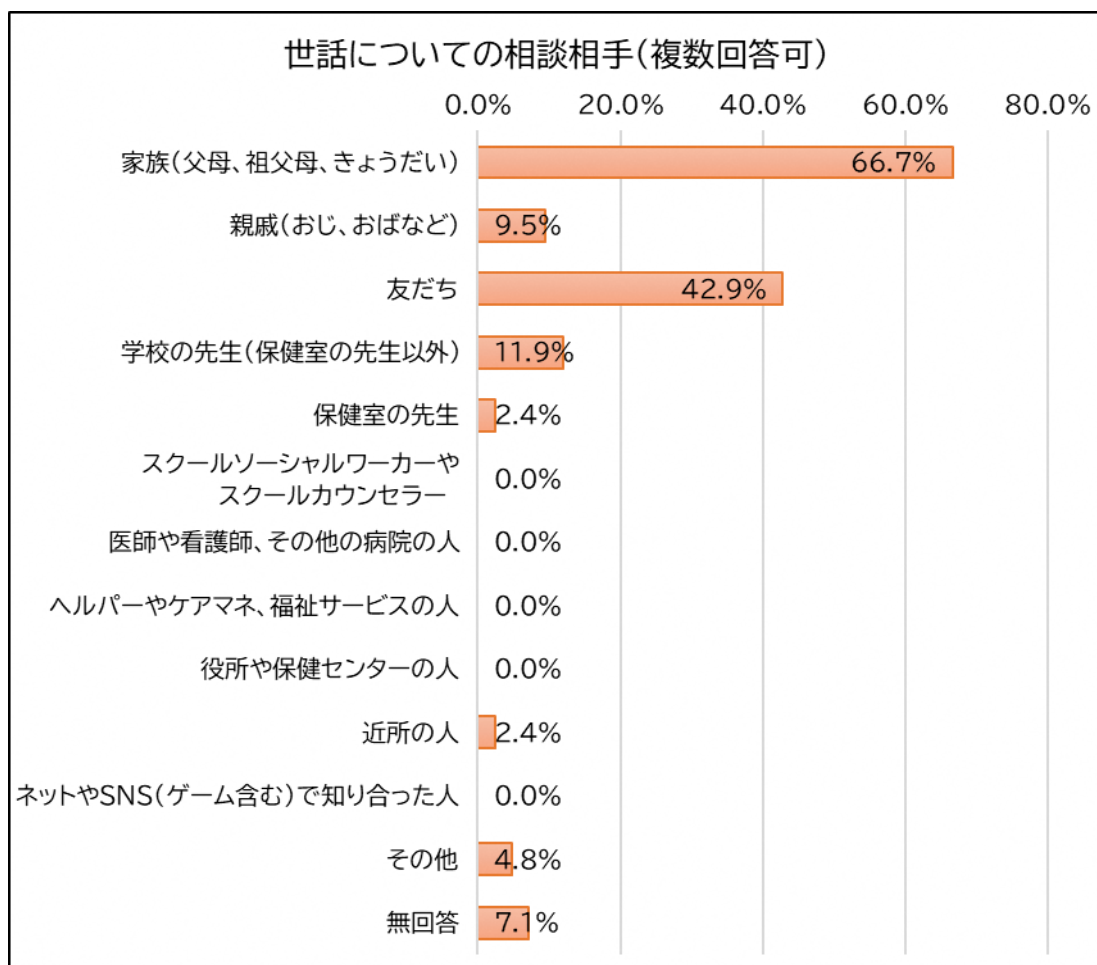
35. 世話について相談した経験

世話について相談した経験については、「ある」が、18.4%、「ない」が 80.3%となっている。



36. 世話についての相談相手

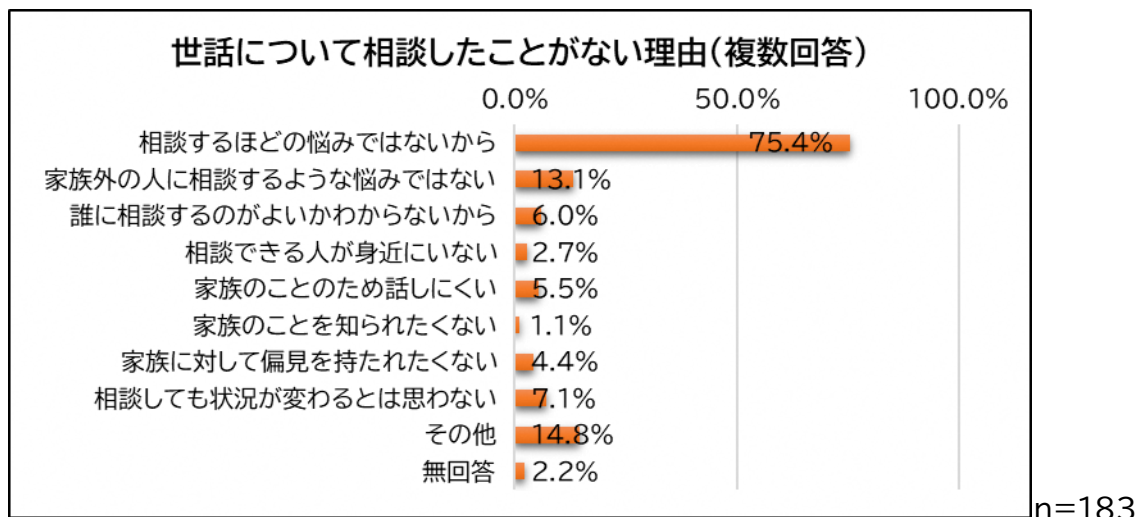
世話についての相談相手は、「家族(父母、祖父母、きょうだい)」(66.7%)が最も高く、次いで「友だち」(42.9%)となっている。



n=42

37. 世話について相談したことがない理由

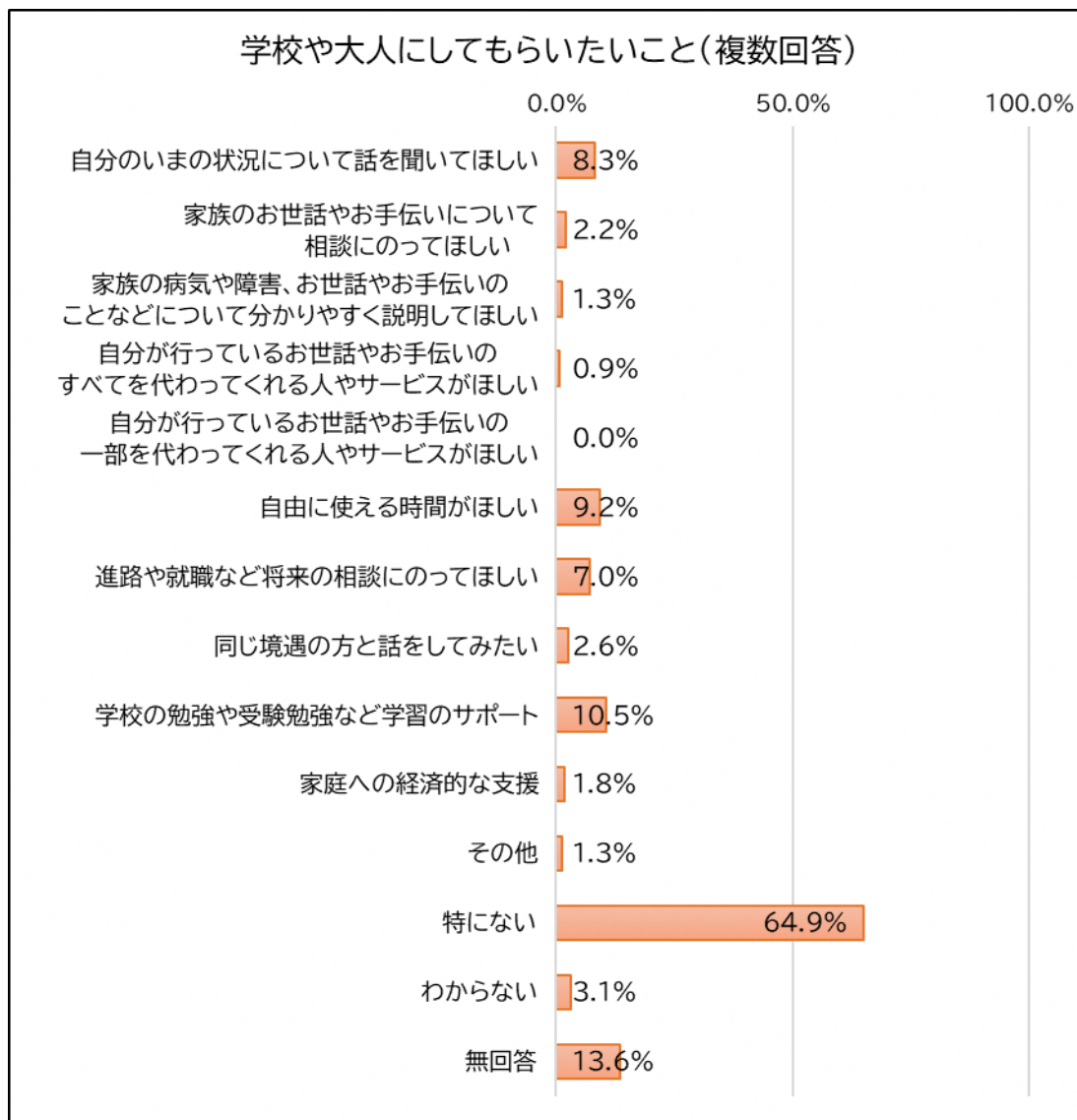
世話について相談した経験が「ない」と回答した人に、その理由について聞いたところ、相談するほどの悩みではないから」が 75.4%と最も高くなっている。



n=183

38. 学校や大人にしてもらいたいこと

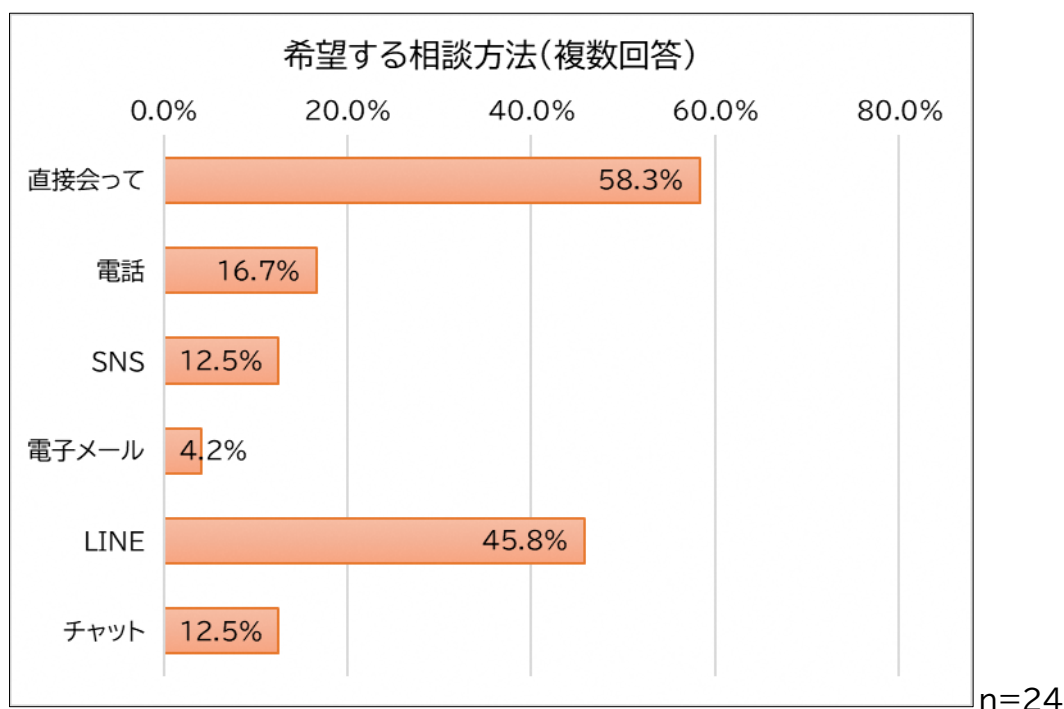
学校や大人にしてもらいたいことを聞いたところ、「特にない」(64.9%)が最も高くなっているが、そのほかでは「学校の勉強や受験勉強など学習のサポート」(10.5%)、「自由に使える時間がほしい」(9.2%)、「自分のことについて話を聞いてほしい」(8.3%)がほかと比べて高くなっている。



n=228

39. 希望する相談方法

前問で「自分のことについて話をきいてほしい」「家族のお世話やお手伝いについて相談にのってほしい」と回答した人に希望する相談方法について聞いたところ、「直接会って」が58.3%と最も高く、次いで「LINE」が45.8%であった



40. 自由回答

家族の世話をしている子どものために必要だと思うことや学校や周りの大人にしてもらいたいことについての主な自由記述は以下のとおり。 ※複数回答あり

「家族の世話をしている子どものために必要だと思うこと」

自由な時間(9件)、学習のサポート(5件)、相談に乗ってもらえる機会(12件)、家事を代わりにしてくれる存在(5件)、褒められる(4件)、周囲の大人からの声かけ(3件) など

「家族にしてもらいたいこと」

手伝ってほしい(3件)、お小遣いが欲しい(2件) など

「学校や周りの大人にしてもらいたいこと」

学習のサポート(2件)、相談した時にちゃんと話を聞いてほしい、先生ならアドバイスよりフォローが嬉しい など

「自身の気持ちや困っている状況について」

手伝いは家族のためにも自分のためにもした方がいい(8件)、無理のない範囲で手伝う(3件)、自分の時間を大切にする(2件) など

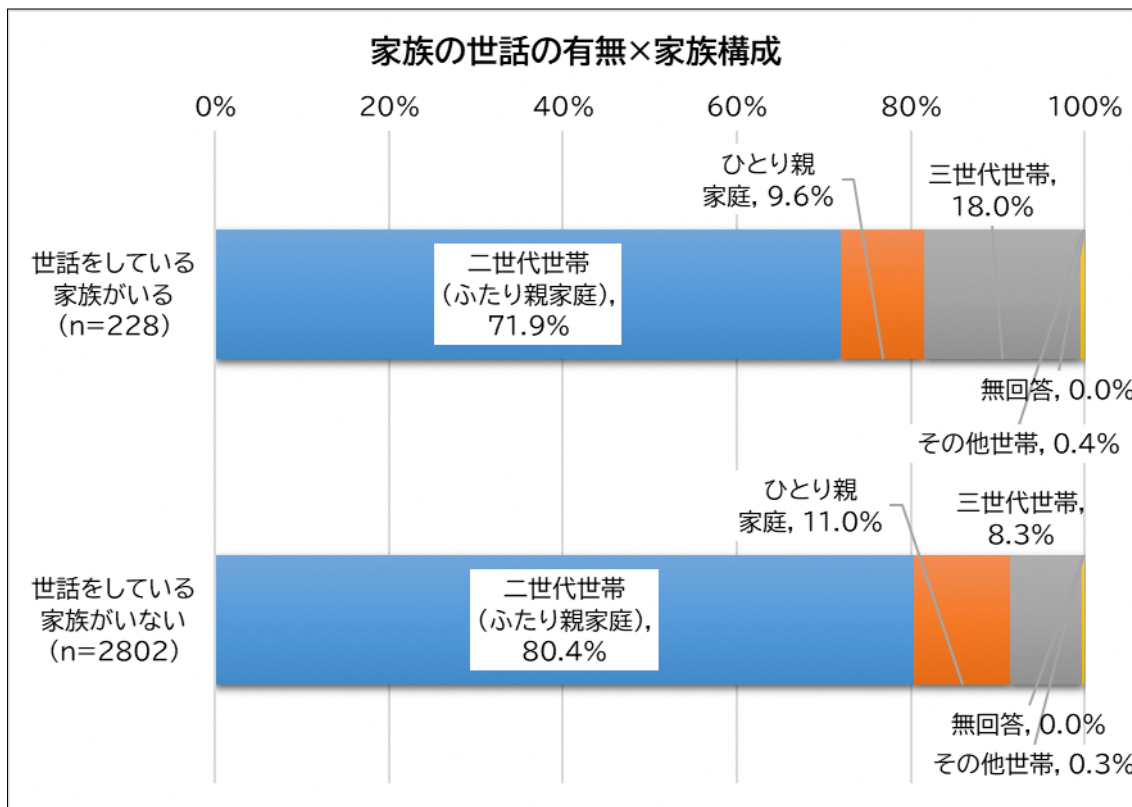
「その他意見」

学校や部活の時間を削る、子どもの気持ちを考えてほしい、頑張ってもらいたい など

中学生調査の結果(クロス集計)

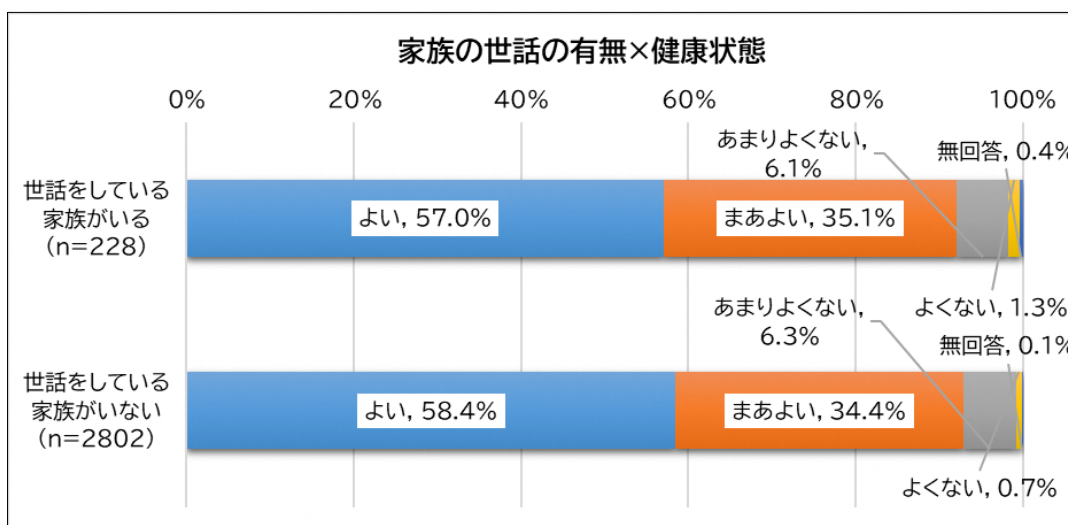
1. 家族の世話の有無×家族構成

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「三世代世帯」の割合が高くなっている。



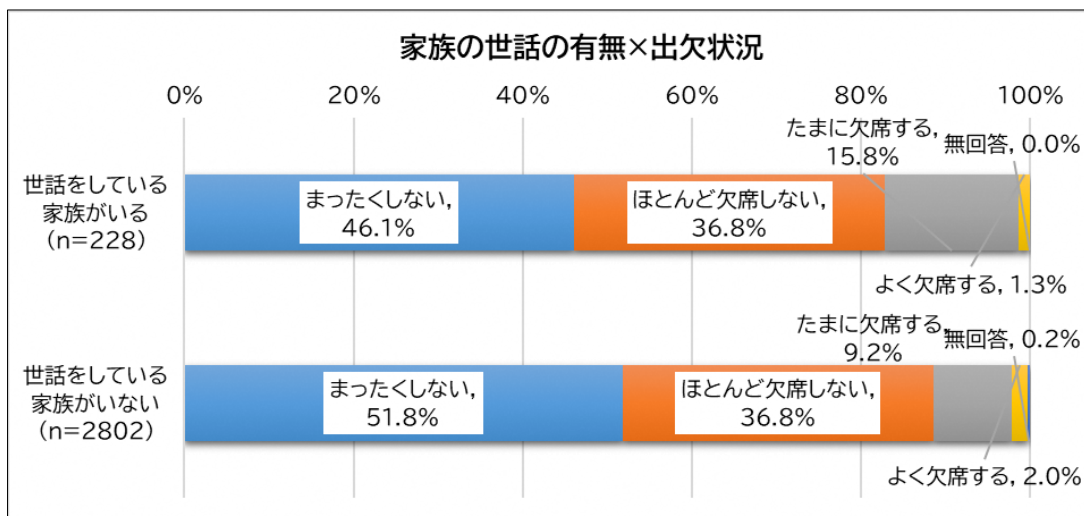
2. 家族の世話の有無×健康状態

世話をしている家族がいる場合は、「よい」「まあよい」が 92.1%であり、いない場合の 92.8%と大きな差はない。



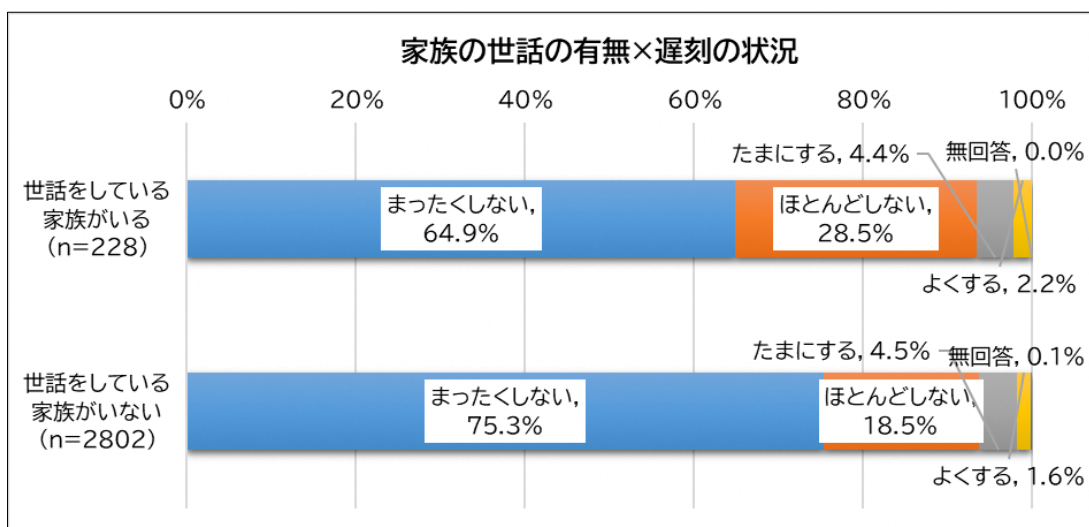
3. 家族の世話の有無×出席状況

世話をしている家族がいる場合は、「たまに欠席する」と「よく欠席する」を合わせると17.1%であり、いない場合の11.2%と比べて割合が高くなっている。



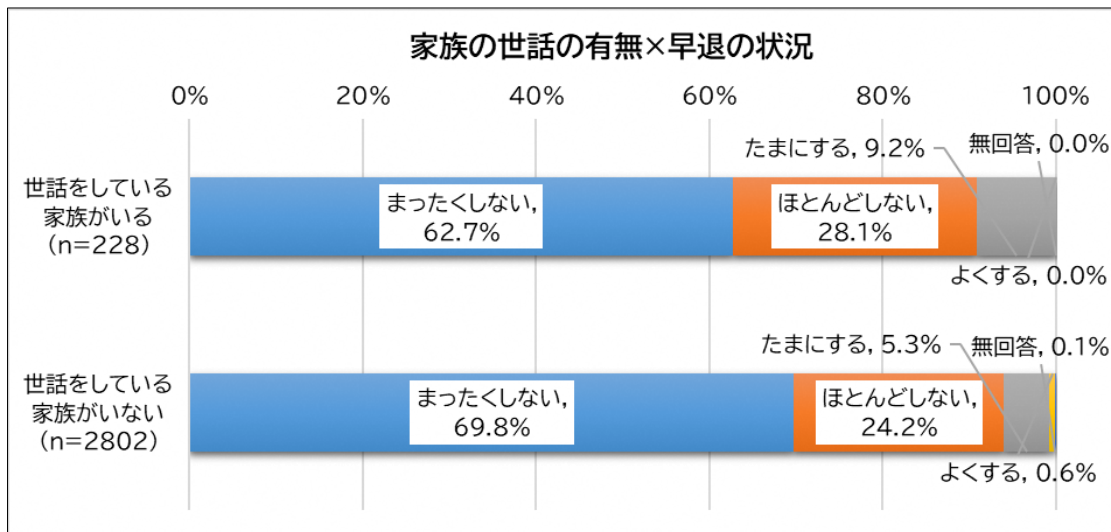
4. 家族の世話の有無×遅刻の状況

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「まったくしない」割合が低くなっている。



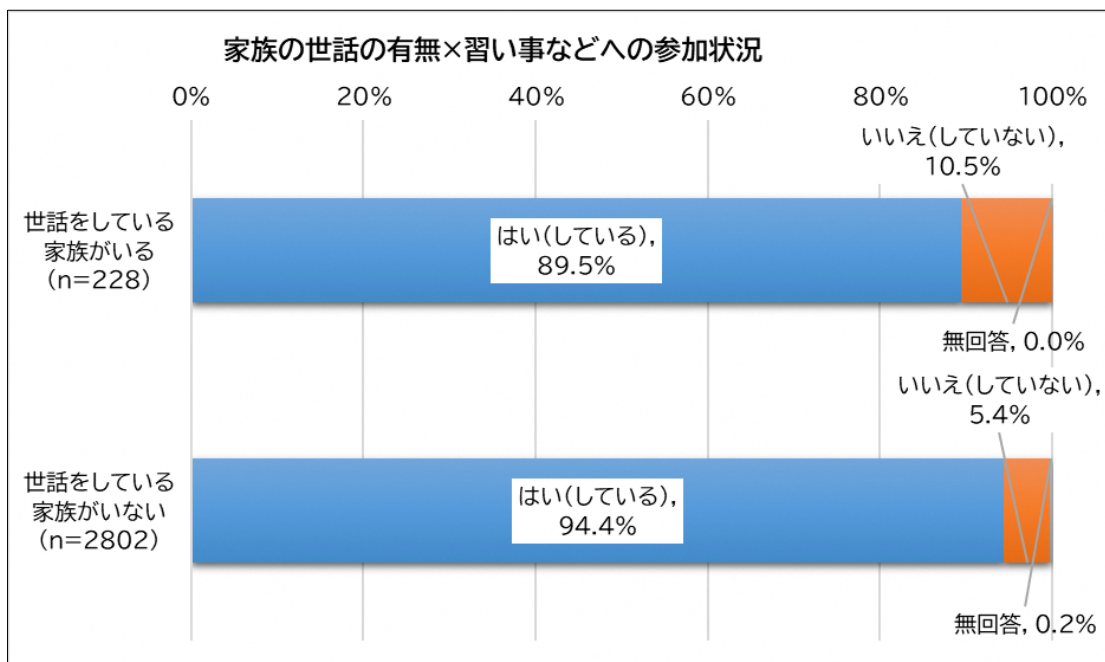
5. 家族の世話の有無×早退の状況

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「まったくしない」割合が低くなっている。



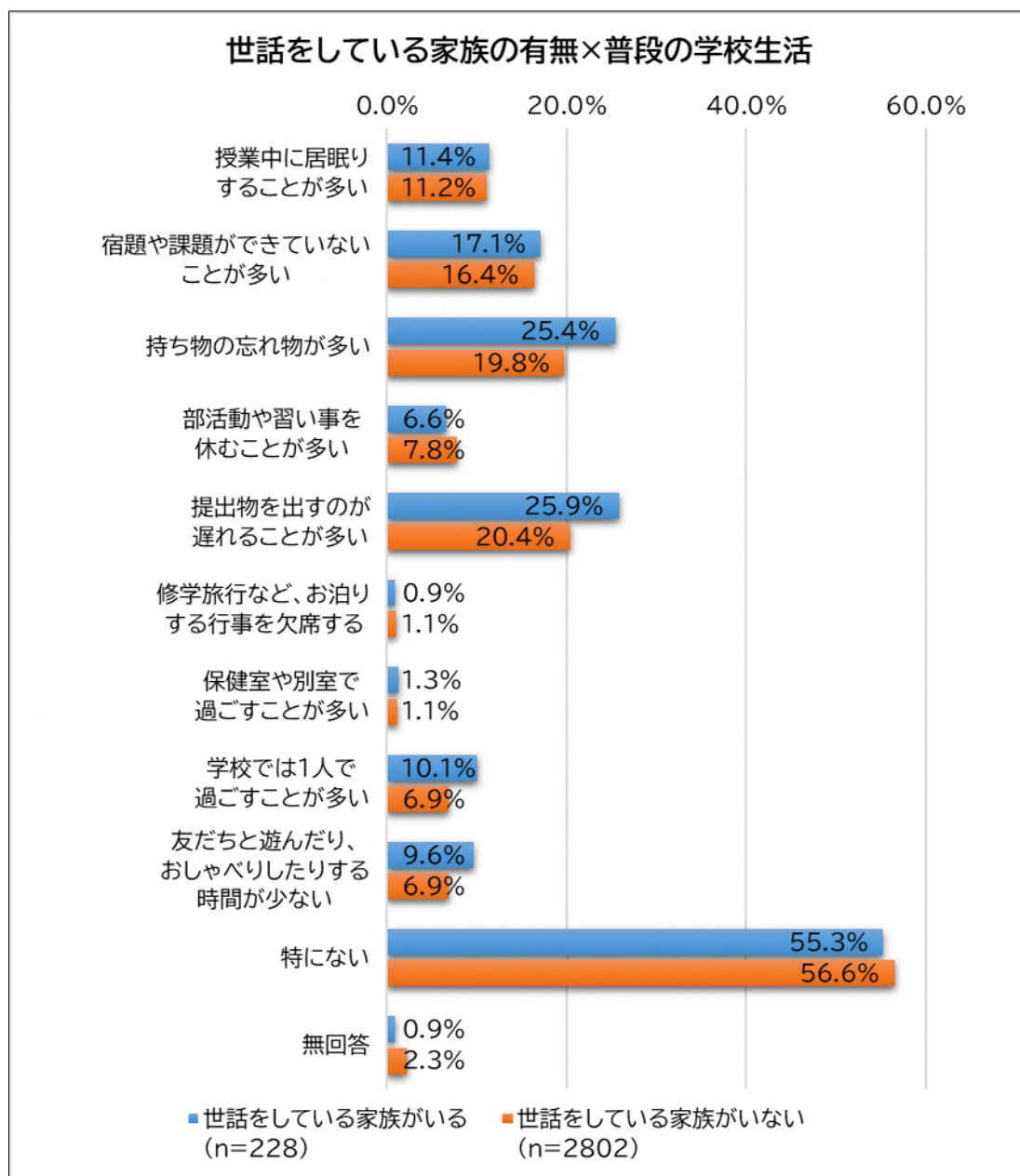
6. 家族の世話の有無×習い事などへの参加状況

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「していない」の割合が 5.1 ポイント高くなっている。



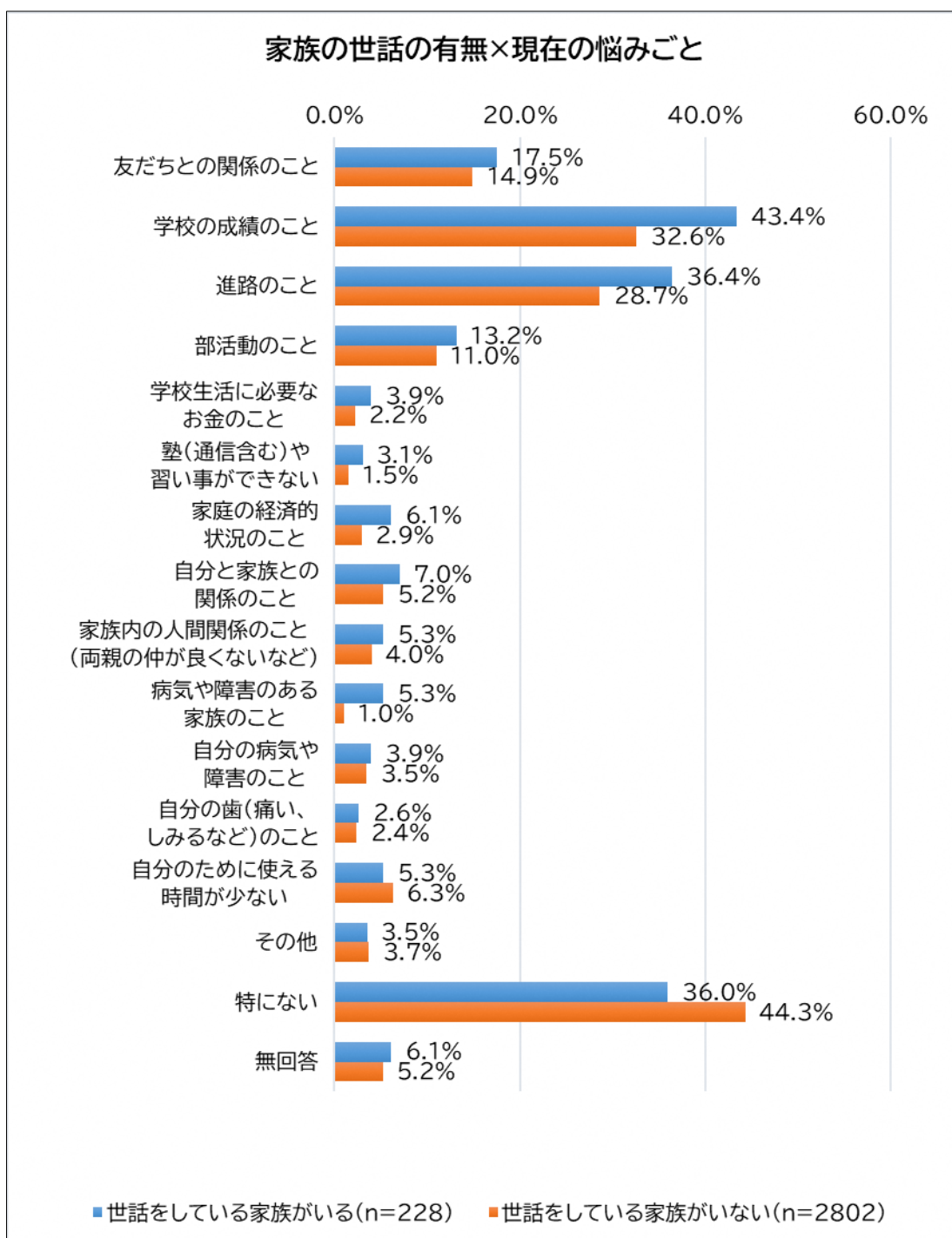
7. 家族の世話の有無×普段の学校生活などであてはまること

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて全体的に回答割合が高い傾向にある。特に「持ち物の忘れ物が多い」「提出物を出すのが遅れることが多い」「学校では一人で過ごすことが多い」「友だちと遊んだり、おしゃべりする時間が少ない」が高くなっている。

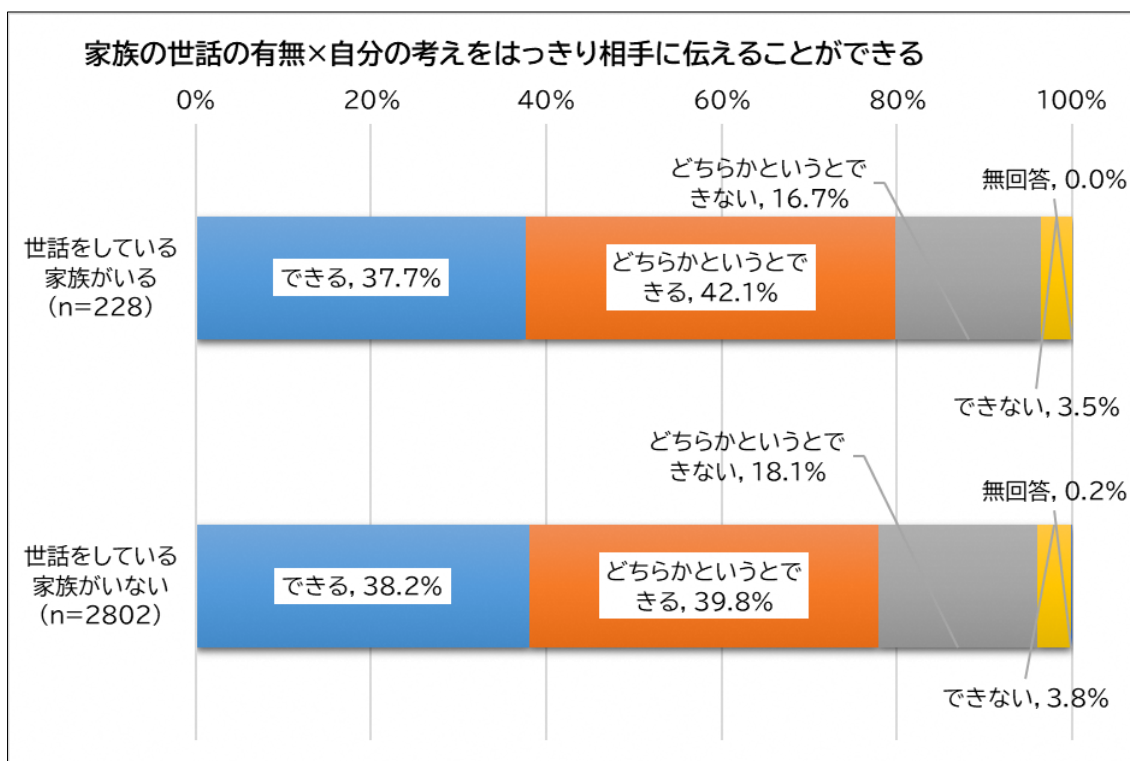


8. 家族の世話の有無×現在の悩みごと

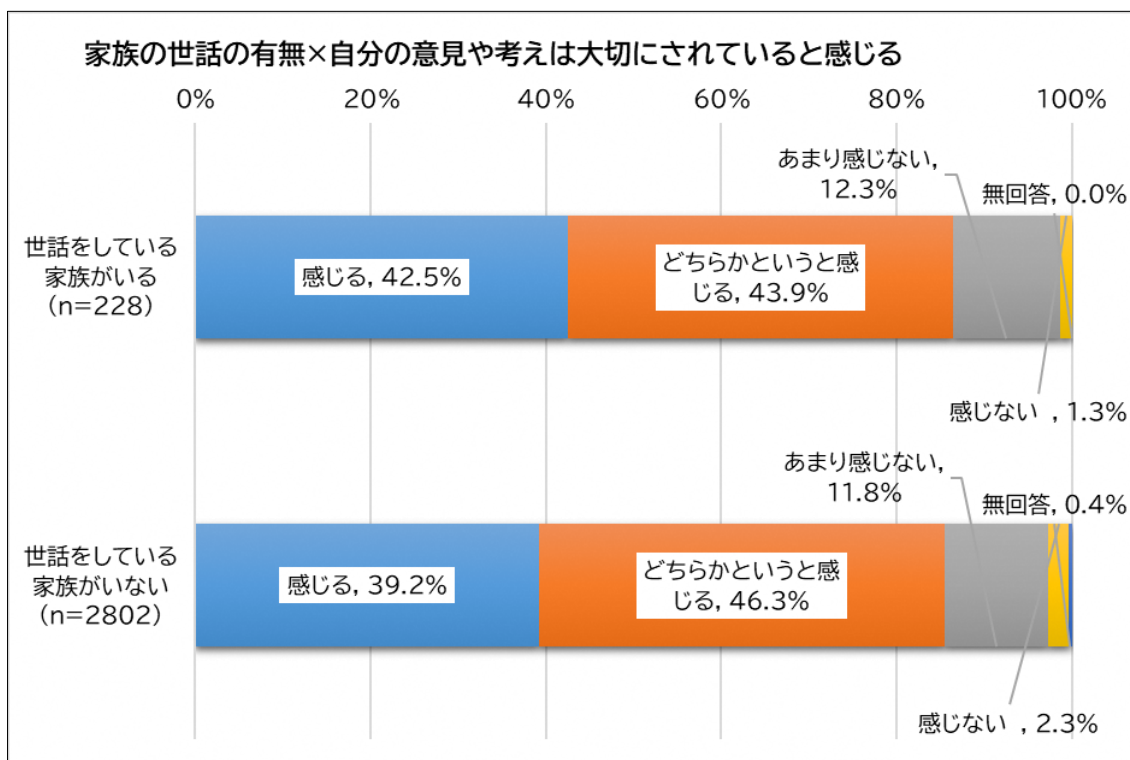
世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて全体的に回答割合が高い傾向にある。特に「病気や障害のある家族のこと」「家庭の経済的状況のこと」「学校の成績のこと」「進路のこと」が高くなっている。



9. 家族の世話の有無×自分の考えをはっきり相手に伝えることができる
世話をしている家族がいる場合といない場合を比べて大きな差はない。

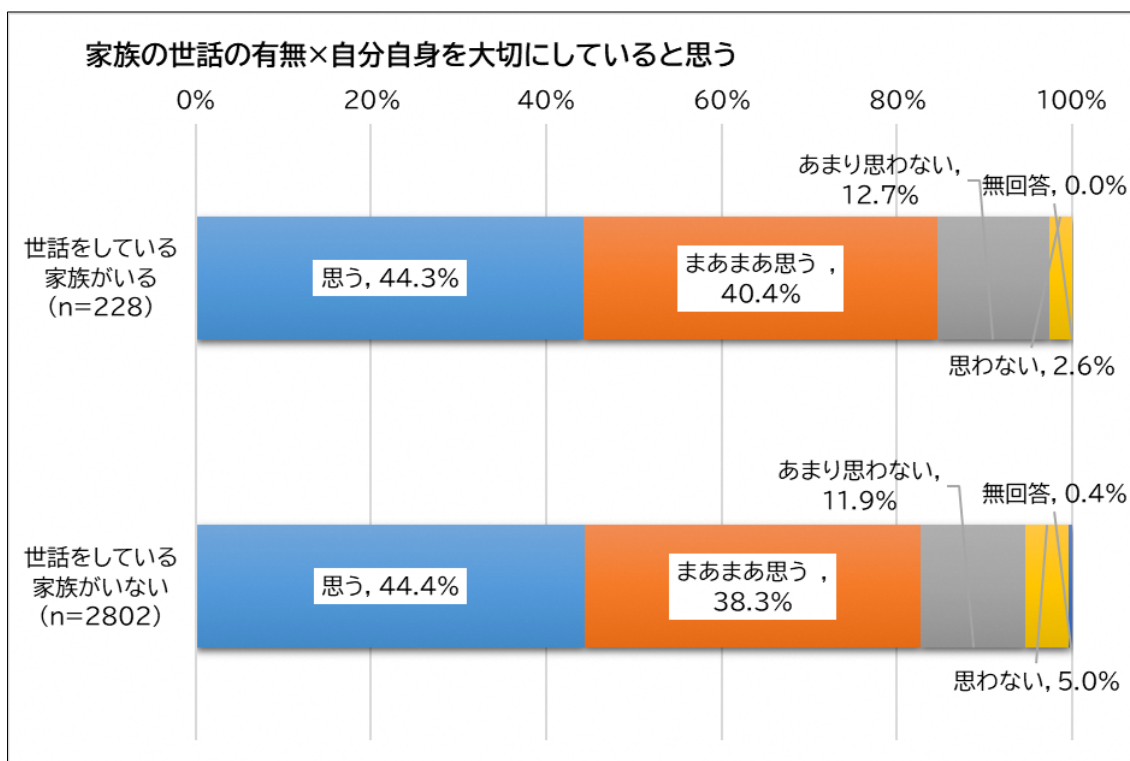


10. 家族の世話の有無×自分の意見や考えは大切にされていると感じる
世話をしている家族がいる場合といない場合を比べて大きな差はない。



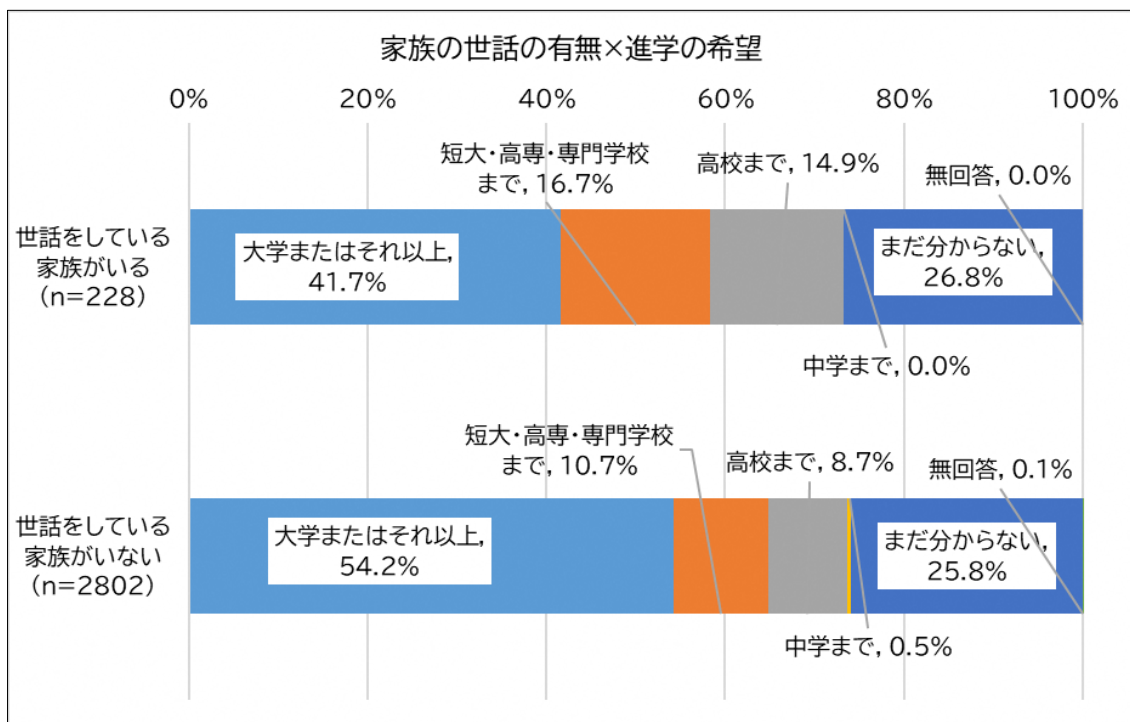
11. 家族の世話の有無×自分自身を大切にしていると思う

世話をしている家族がいる場合といない場合を比べて大きな差はない。



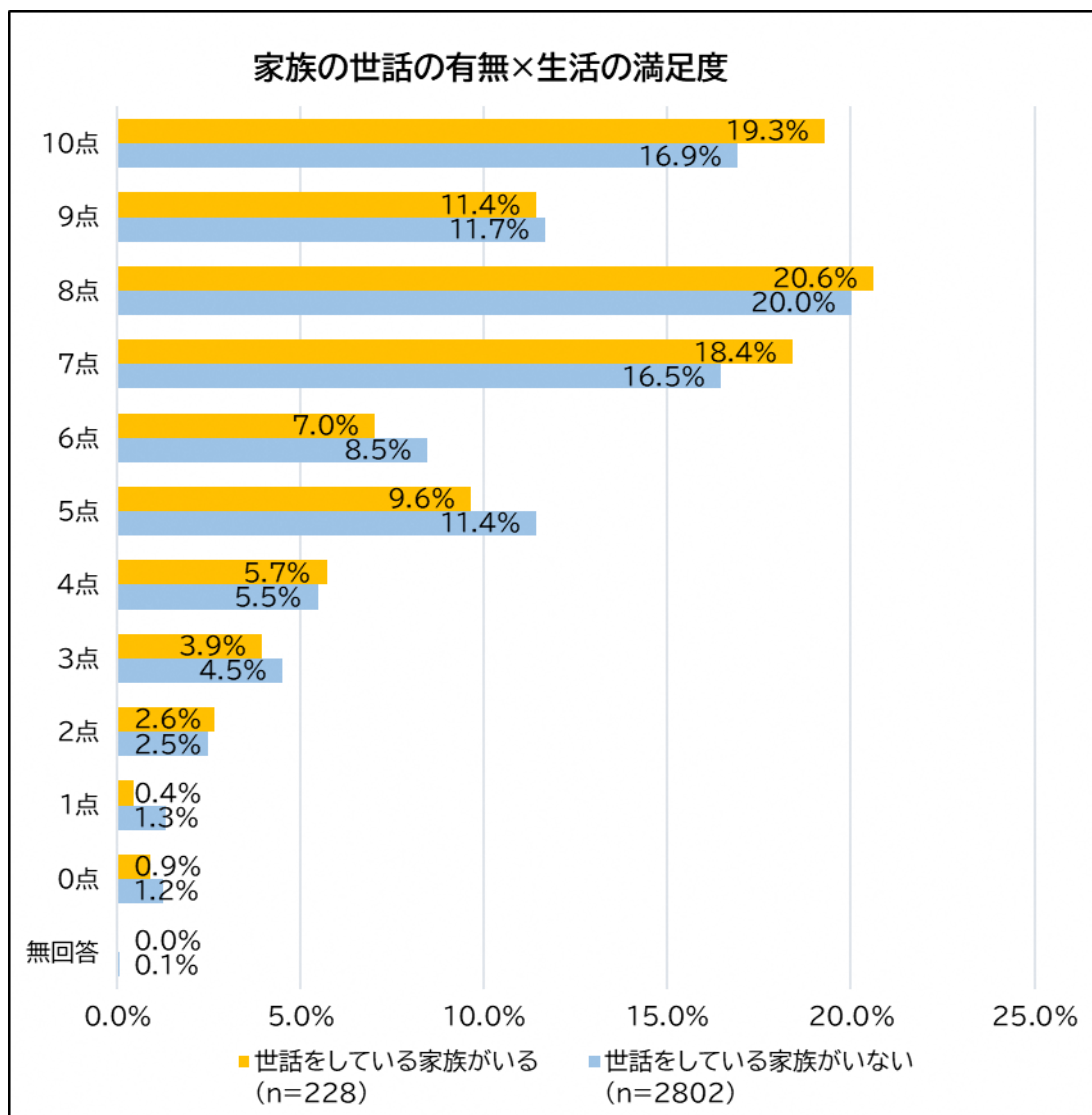
12. 家族の世話の有無×進学希望

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて「大学またはそれ以上」を選択している割合が低く、「短大・高専・専門学校まで」「高校まで」を選択している割合が高い。



13. 家族の世話の有無×生活の満足度

世話をしている家族がいる場合は、いない場合に比べて 10 点から7点がおおむね割合が高くなっている。

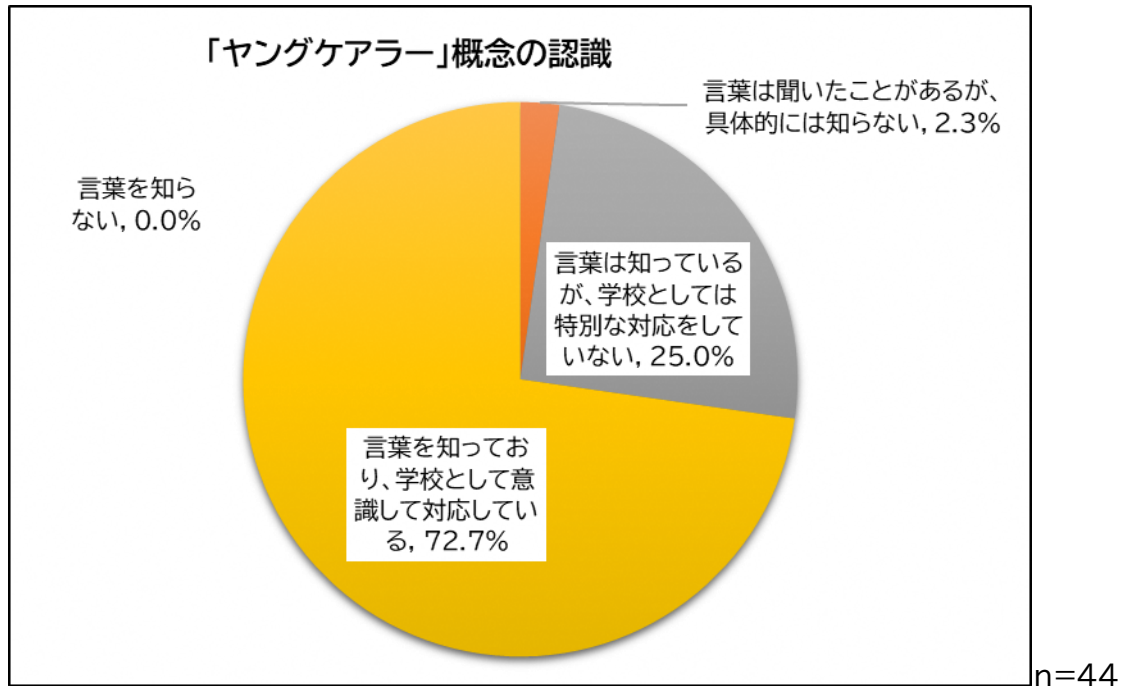


3. 小学校(組織)アンケート結果について

小学校(組織)調査の結果(単純集計)

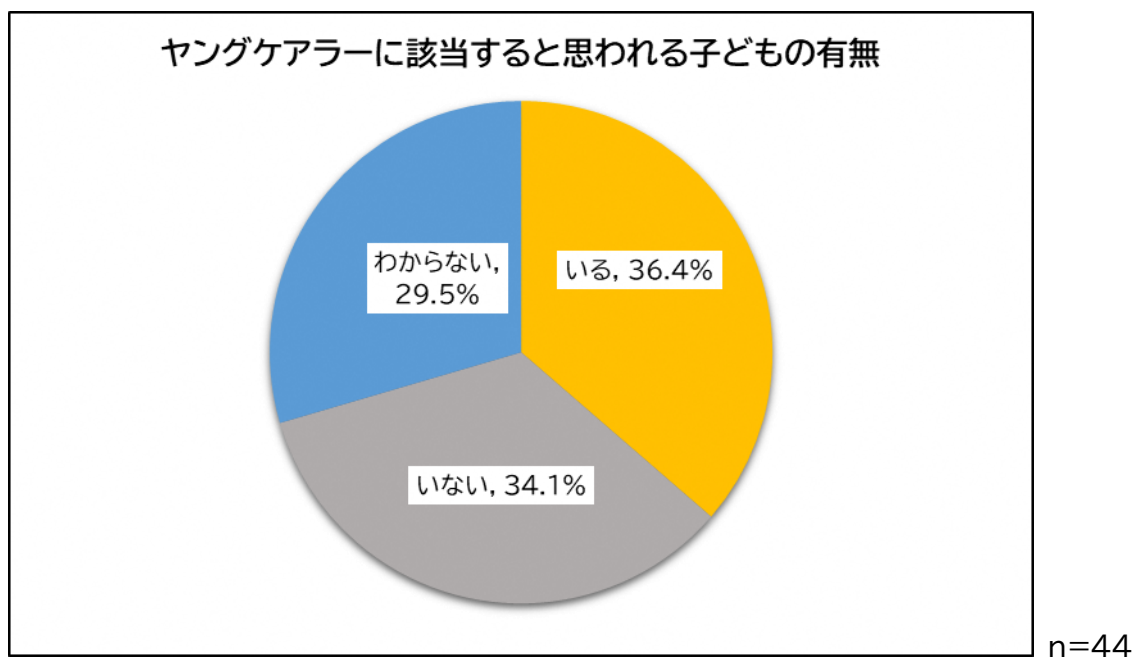
1. ヤングケアラー概念の認識

「ヤングケアラー」の概念の認識について聞いたところ、「言葉を知っており、学校として意識して対応している」が 72.7%、「言葉は知っているが、学校としては特別な対応をしていない」が 25%となっている。全体の 9 割以上が「ヤングケアラー」という言葉を知っていることが確認できた。



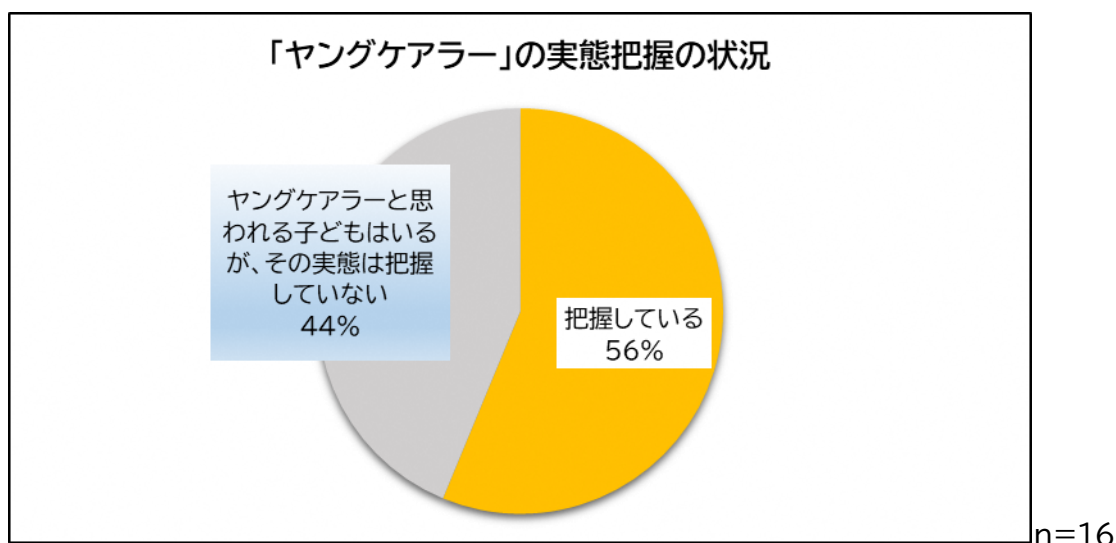
2. ヤングケアラーに該当する子どもの有無

「ヤングケアラー」の参考資料を示したうえで、該当すると思われる子どもの有無について聞いたところ、「いる」が 36.4%となっている



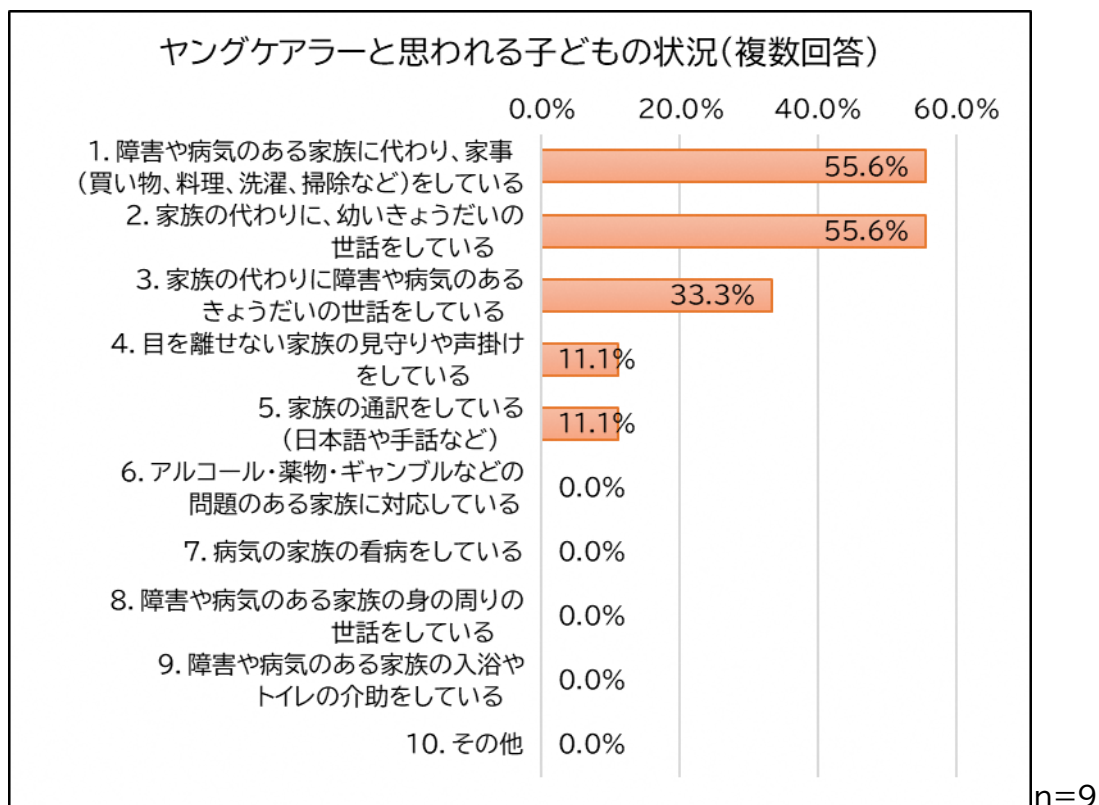
3. 「ヤングケアラー」の実態把握の状況

ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答したところに、実態把握の状況について聞いたところ、「把握している」は、56%、「ヤングケアラーと思われる子どもはいるが、その実態は把握していない」は、44%となっている。



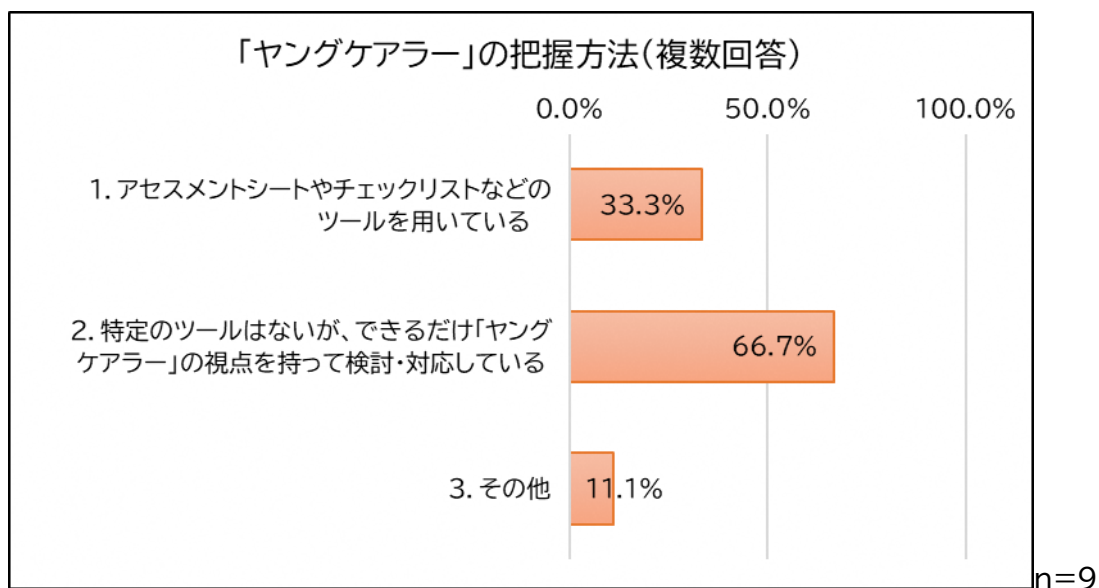
4. ヤングケアラーの状況について

ヤングケアラーの定義に該当すると思われる子どもが「いる」と回答した学校にヤングケアラーと思われる子どもの状況について聞いたところ、「障害や病気のある家族に代わり、家事(買い物、料理、洗濯、掃除など)をしている」と「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」が最も高く、55.6%となっている。



5. 「ヤングケアラー」の把握方法

ヤングケアラーを把握していると回答した学校に、把握方法について聞いたところ、「特定のツールはないが、できるだけ「ヤングケアラー」の視点を持って検討・対応している」が最も多く、66.7%となっている。

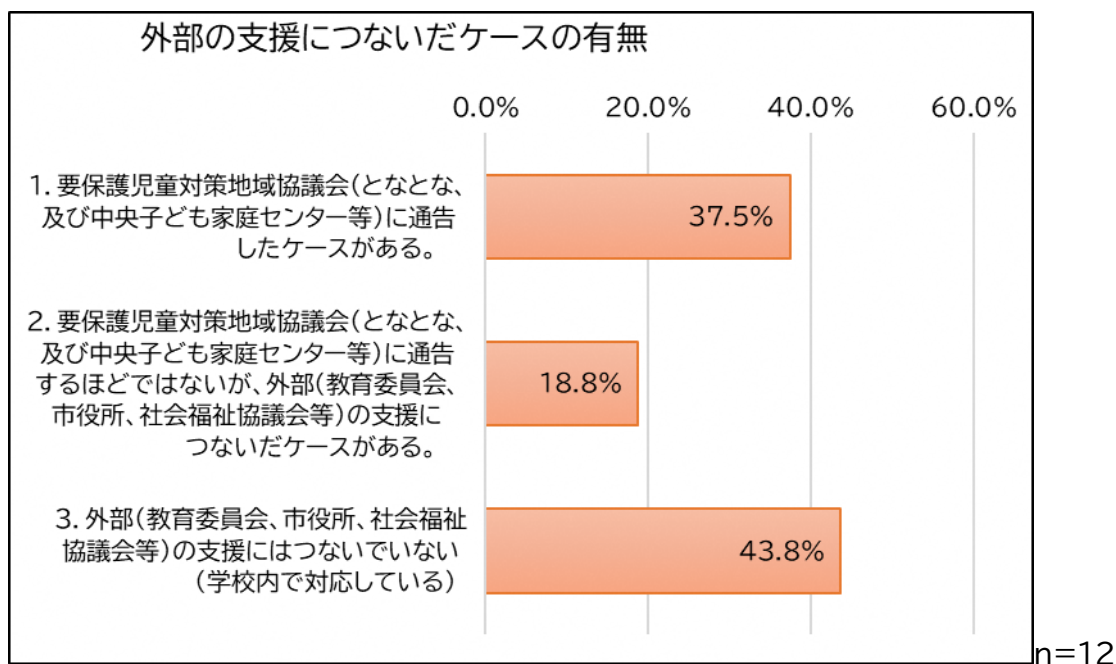


●その他の個別回答

○学校・担任・保護者・地域(民生委員・子ども食堂)・専門機関(子家セン・となとな・病院(主治医・SSW))と連携して現状の把握に努めている

6. 外部の支援につないだケースの有無(複数回答)

ヤングケアラーと思われる子どもについて、学校以外の外部に支援につないだケースがあるか聞いたところ、「要保護児童対策地域協議会(子どもの育ち見守りセンター、及び中央子ども家庭センター等)に通告したケースがある。」(37.5%)、「要保護児童対策地域協議会(子どもの育ち見守りセンター、及び中央子ども家庭センター等)に通告するほどではないが、外部(教育委員会、市役所、社会福祉協議会等)の支援につないだケースがある。」が18.8%となっている。



●外部の支援につなげなかったケースについて、つなげなかった理由及び対応方法の自由回答は以下の通り。

<主な意見>

繋がらなかった理由

○もともと関係機関と繋がっていた子であったため

○実態が把握できていなかったため

対応方法

○定期的に本人や保護者と話をしている。

○ケース会議でアセスメントし、見守っている

7. ヤングケアラーの把握や支援にあたって工夫していること

ヤングケアラーの把握や支援にあたって工夫していることについては、以下のような回答があった。

<主な意見>

- 担任任せではなく、学校全体として教職員間で情報共有を図り、対応していること
- 個人懇談会で家庭の様子を具体的に聞き取ること
- 年数回行っているアンケートを行うことで把握に努めている
- 日ごろから服装などこまめに気を配るようにしている
- ヤングケアラーについて理解を深める

8. ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じること

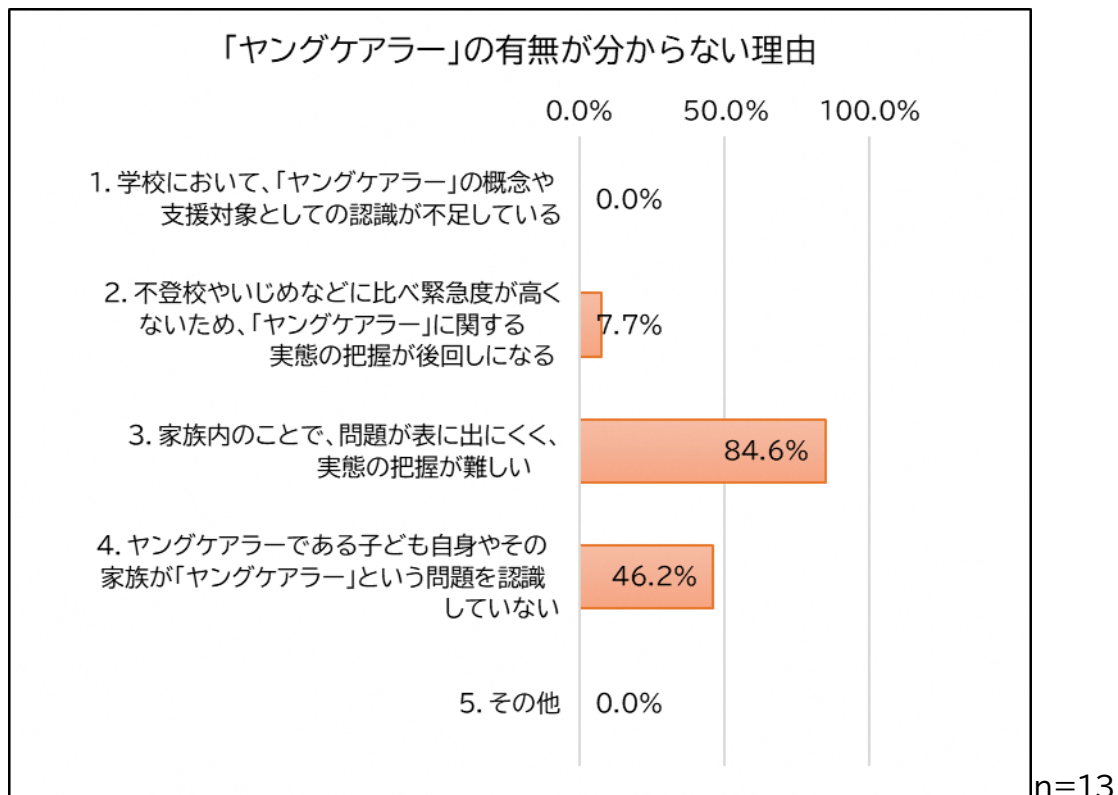
ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じることについては、以下のような回答があった。

<主な意見>

- 休みがちになると、実情を把握する術がなくなる
- 本人に自覚がないこと、及び本人に困り感がない
- 公的なサービスとして、どのようなことがあるのかわからない
- 事実確認が困難で、家庭への関わりが難しい

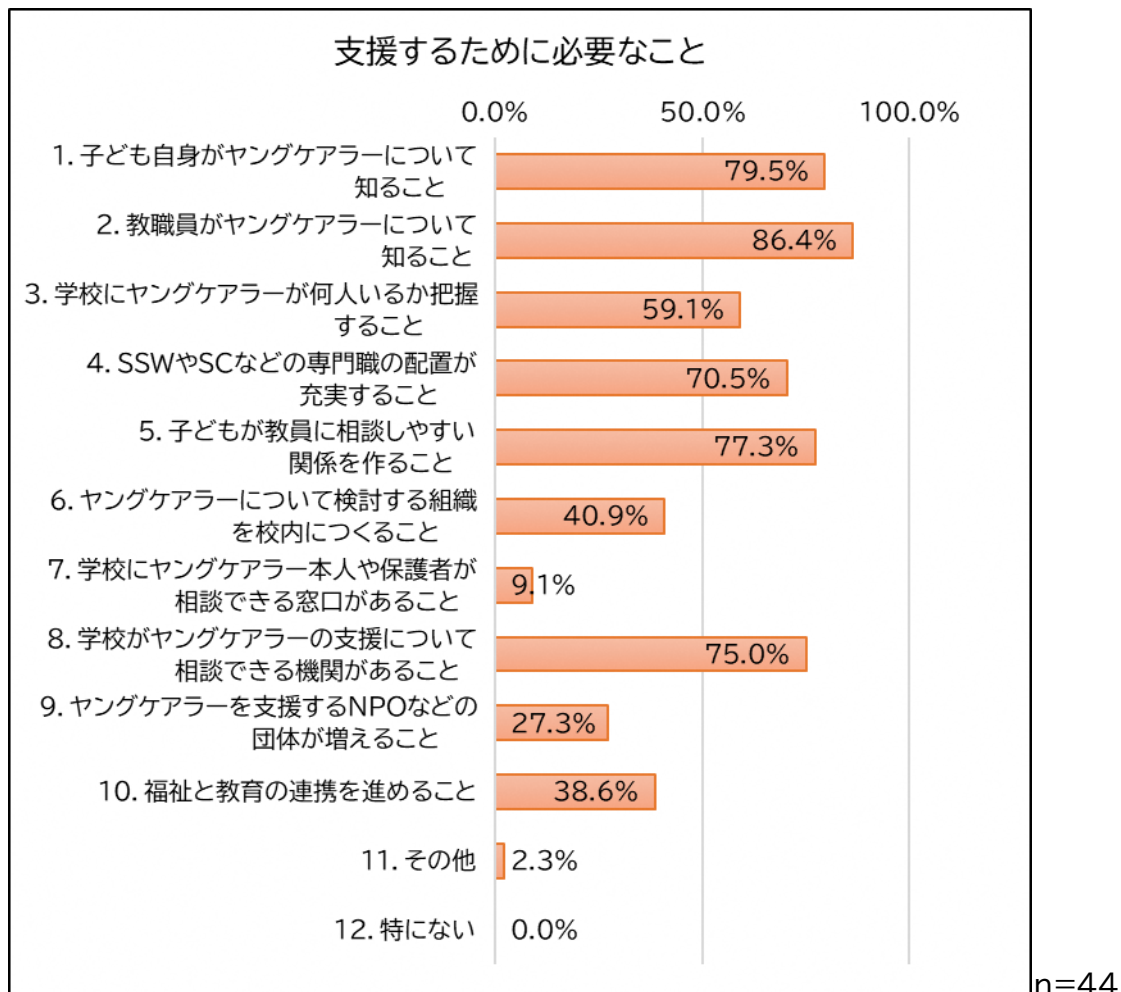
9. ヤングケアラーがいるか分からない理由(複数回答)

ヤングケアラーと思われる子どもがいるか「分からない」と回答した学校に、その理由を聞いたところ、「家族内のことで、問題が表に出にくく、実態の把握が難しい」という回答が84.6%と最も高くなっている。「ヤングケアラーである子ども自身やその家族が「ヤングケアラー」という問題を認識していない」(46.2%)となっている。



10. ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと(複数回答)

ヤングケアラーを支援するために必要だと思うことを聞いたところ、「教職員がヤングケアラーについて知ること」が 86.4%と最も高く、次いで「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」が 79.5%となっている。



●その他の個別回答

○保護者に対する支援

○保護者の理解

●「福祉と教育の連携をすすめること」に対する具体的な意見

<主な意見>

○学校で発見し、福祉に繋いでいく

○教育と福祉の情報交換

○学校から紹介できる相談窓口の設置

○地域での見守りや声かけ

○SSWとの連携

11. ヤングケアラーに関する自由意見 10 件

<主な意見>

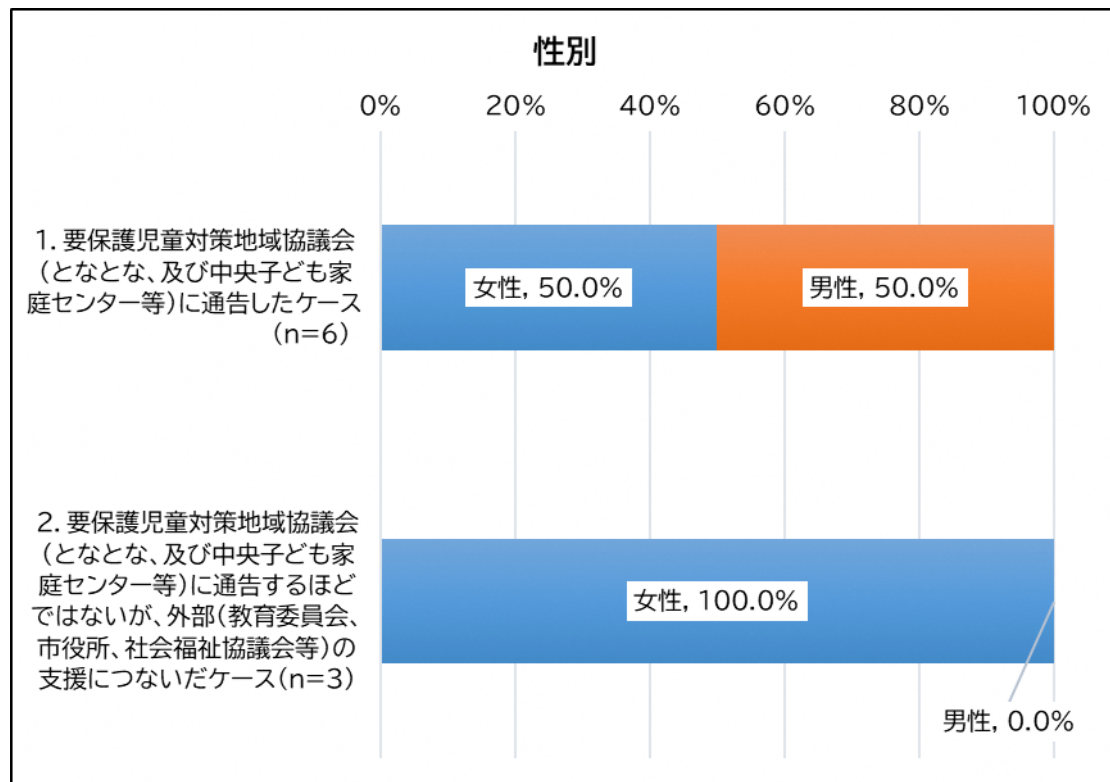
- 教育を受ける受けないは保護者や子どもが決められるという認識をしている保護者がいる
- 子どもにとってはふれてほしくないことであり、日ごろの会話等からしか推測できない難しさがある
- 教師が気づいたときに相談、対応してくれる SSW 等の配置があれば、把握もしやすくなる
- 子ども自身の認識と教員の正しい知識・理解
- 調査をきっかけに市の支援制度が分かり、学校でできることがあると感じた
- 一人で抱え込まないように相談しやすい環境づくり

個別事例

1. 要保護児童対策地域協議会(となとな、及び中央子ども家庭センター等)に通告したケース、2. 要保護児童対策地域協議会(となとな、及び中央子ども家庭センター等)に通告するほどではないが、外部(教育委員会、市役所、社会福祉協議会等)の支援につないだケースについて、直近のケースを聞いた。結果は以下の通りである。

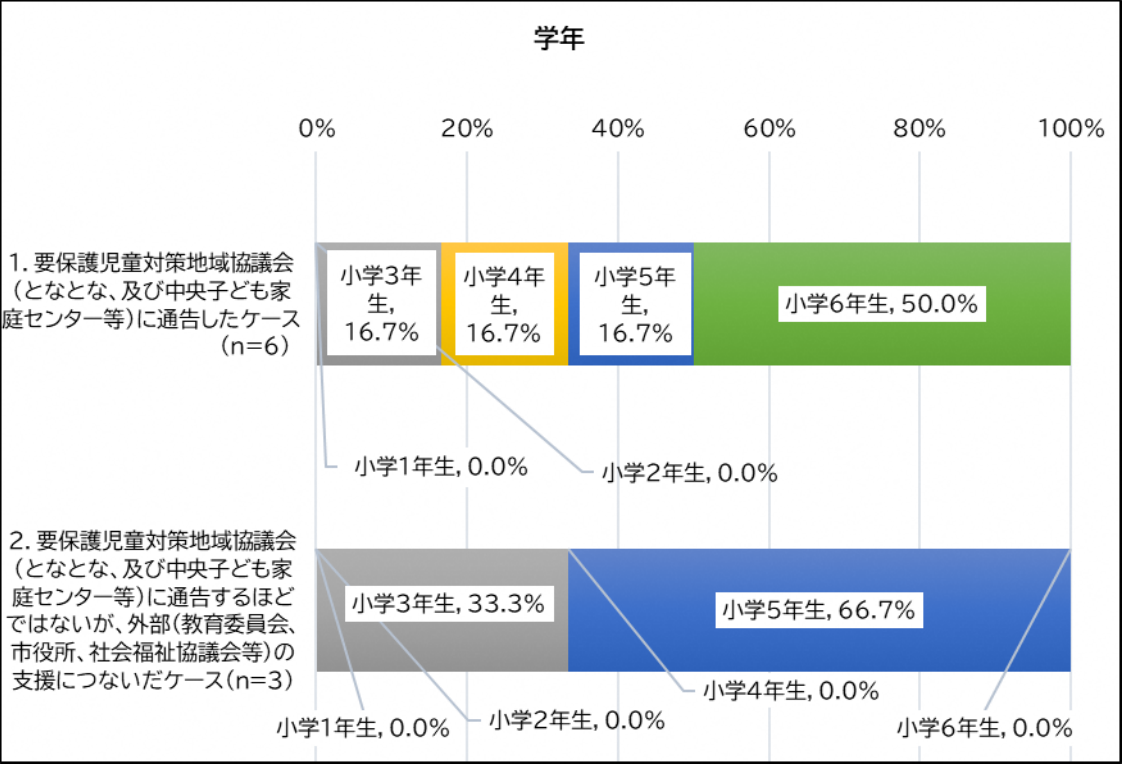
1. 性別

性別は以下の通り



2. 学年

学年は以下の通りである。



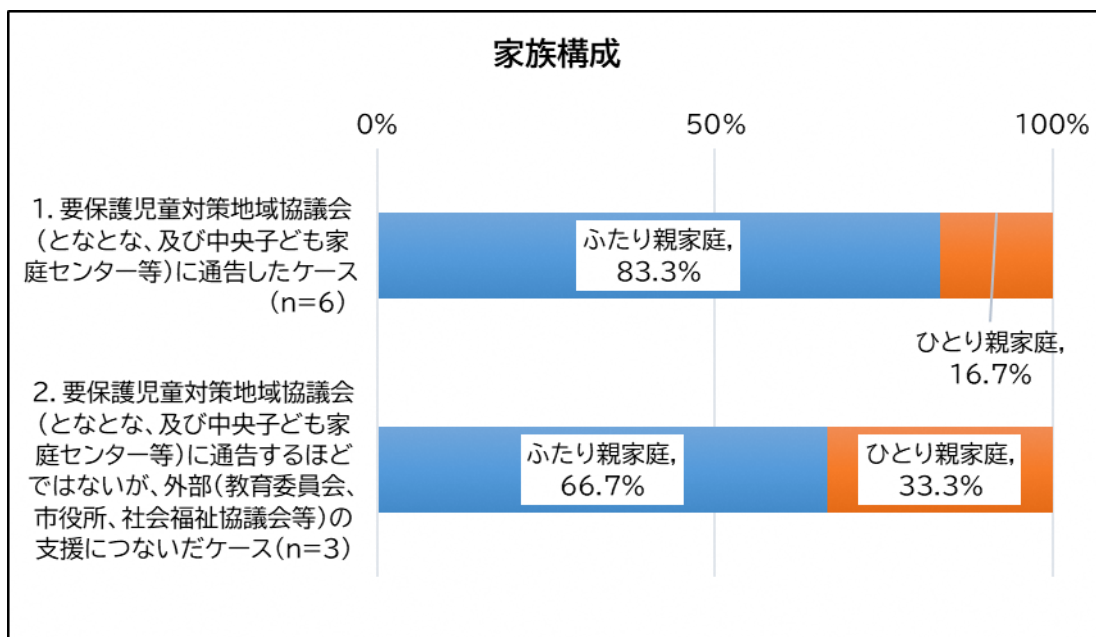
3. 学校生活の状況

「保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い」「遅刻や早退が多い」の割合が、1. 2ともに多い

	学校を休みがちである	遅刻や早退が多い	保健室で過ごしていることが多い	精神的な不安定さがある	身だしなみが整っていない	学力が低下している	宿題や持ち物の忘れ物が多い	提出遅れや提出忘れが多い書類等の	学校に必要なものを用意してもらえない	修学旅行や宿泊行事等を欠席する	校納金が遅れる。未払い	友だちと上手にうまくいっていない	疲れていることが多い	授業中寝ている	虫歯が多い	その他
1. 要保護児童対策地域協議会 (となとな、及び中央子ども家庭センター等)に通告したケース (n=6)	17%	50%	17%	33%	50%	50%	67%	67%	50%	0%	17%	0%	17%	0%	0%	17%
2. 要保護児童対策地域協議会 (となとな、及び中央子ども家庭センター等)に通告するほどではないが、外部(教育委員会、市役所、社会福祉協議会等)の支援につないだケース (n=3)	33%	67%	0%	0%	0%	0%	0%	67%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	33%

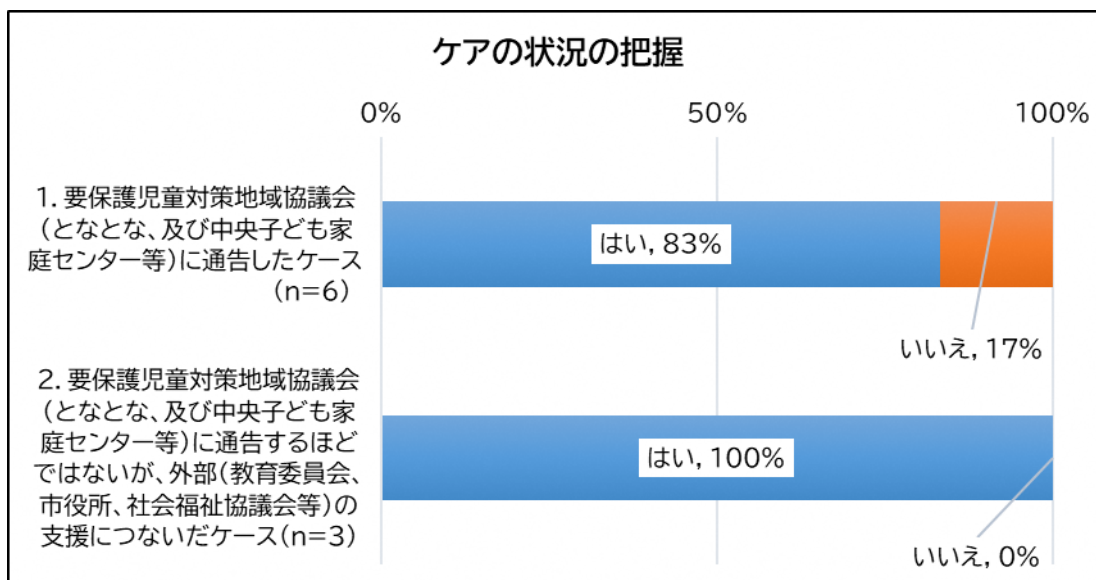
4. 家族構成

家族構成については、以下の通りである。



5. ケアの状況の把握

ケアの状況を把握しているかについては、1. では83%、2. では全て「はい」と回答している。



6. ケアの状況を把握していると回答した学校に、ケアを必要としている人、ケアを必要としている人の状況、ケアの内容を聞いた結果は以下の通りである。

①ケアを必要としている人

1. 2. のケースともに、「きょうだい」の割合が最も高い。

	母親	父親	祖母	祖父	きょうだい	その他
1. 要保護児童対策地域協議会（となとな、及び中央子ども家庭センター等）に通告したケース（n=5）	60.0%	20.0%	0.0%	0.0%	80.0%	0.0%
2. 要保護児童対策地域協議会（となとな、及び中央子ども家庭センター等）に通告するほどではないが、外部（教育委員会、市役所、社会福祉協議会等）の支援につないだケース（n=3）	33.3%	33.3%	0.0%	0.0%	66.7%	0.0%

②ケアを必要としている人の状況

1. では「若い」が、2. では「知的障害」が高い。

	高齢（65歳以上）	若い	要介護（介護が必要な状態）	認知症	身体障害	知的障害	精神疾患（疑い含む）	依存症（疑い含む）	精神疾患、依存症以外の病気	日本語を第一言語としない	その他	わからない
1. 要保護児童対策地域協議会（となとな、及び中央子ども家庭センター等）に通告したケース（n=5）	0.0%	80.0%	0.0%	0.0%	20.0%	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	40.0%	0.0%
2. 要保護児童対策地域協議会（となとな、及び中央子ども家庭センター等）に通告するほどではないが、外部（教育委員会、市役所、社会福祉協議会等）の支援につないだケース（n=3）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%

③ケアの内容

1.では「きょうだいの世話や保育所等への送迎」が、2.では「家事」の割合が高い。

	家事（食事の準備や掃除、洗濯）	きょうだいの世話や保育所等への送迎	身体的な介護（入浴やトイレのお世話など）	外出の付き添い（買い物、散歩など）	通院の付き添い	感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）	見守り	通訳（日本語や手話など）	金銭管理	薬の管理	その他	わからない
1. 要保護児童対策地域協議会（となと、及び中央子ども家庭センター等）に通告したケース（n=5）	40.0%	80.0%	0.0%	0.0%	0.0%	40.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	0.0%
2. 要保護児童対策地域協議会（となと、及び中央子ども家庭センター等）に通告するほどではないが、外部（教育委員会、市役所、社会福祉協議会等）の支援につないだケース（n=3）	100.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

7. ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけ

【要対協通告ケース】

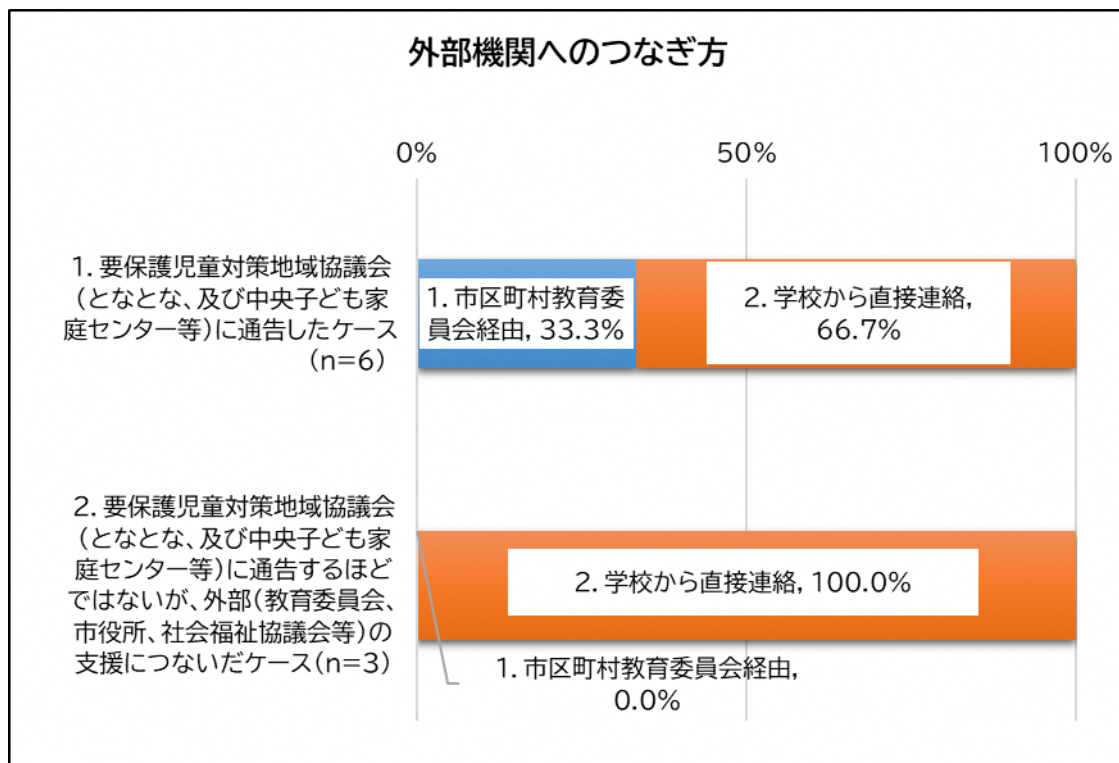
ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけ
保護者が、下の子の面倒を見させるために休ませると連絡してきた
祖父母からの情報
となとなからの情報
幼いきょうだいのお世話をしている話を、担任が本人との会話の中で感じた
家庭科の授業で行った生活時間調査の結果
中学校との連携
遅刻が多い。物が揃わない。衣服に汚れがついている。朝ごはんを食べてきていない。

【要対協通告以外のケース】

ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけ
担任が普段の会話から気がついた。
欠席や遅刻の回数
子どもの言動から朝食が摂れていないと感じたため。

8. 外部機関へのつなぎ方

外部機関へのつなぎ方は、1. 2. のケースともに「学校から直接連絡」の割合が高い。



9. 学校が行った支援（つなぎ先との連携も含めて）及び支援した結果、子どもへの変化
学校が行った支援等や、その結果の子どもへの変化についての自由記述の回答は以下の通り。＜主な意見＞

学校で行った支援

○関係機関との連携

○校内での情報共有

○校内でのケース会議による情報共有と見守り及び担任による心理的支援

○電話連絡や家庭訪問

支援した結果、子どもへの変化

○休むことは無くなったが、本人から欠席の連絡が入った時、病気なのか、面倒を見るためなのか、見極めが難しい

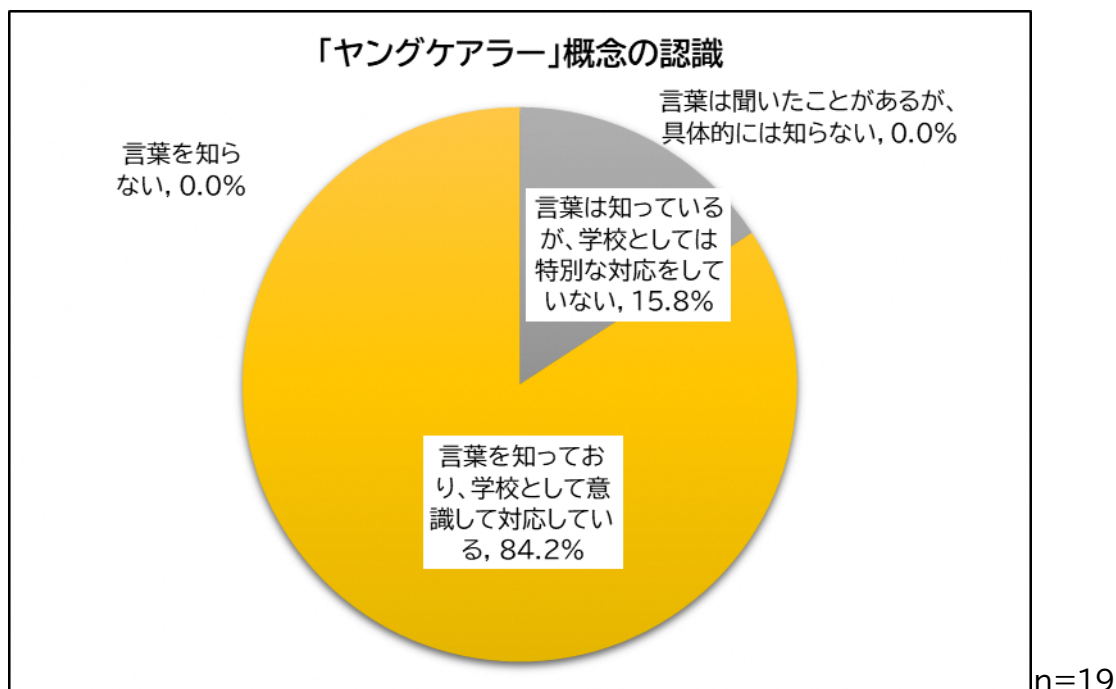
○登校できる日数が増えた

4. 中学校(組織)アンケート結果について

中学校(組織)調査の結果(単純集計)

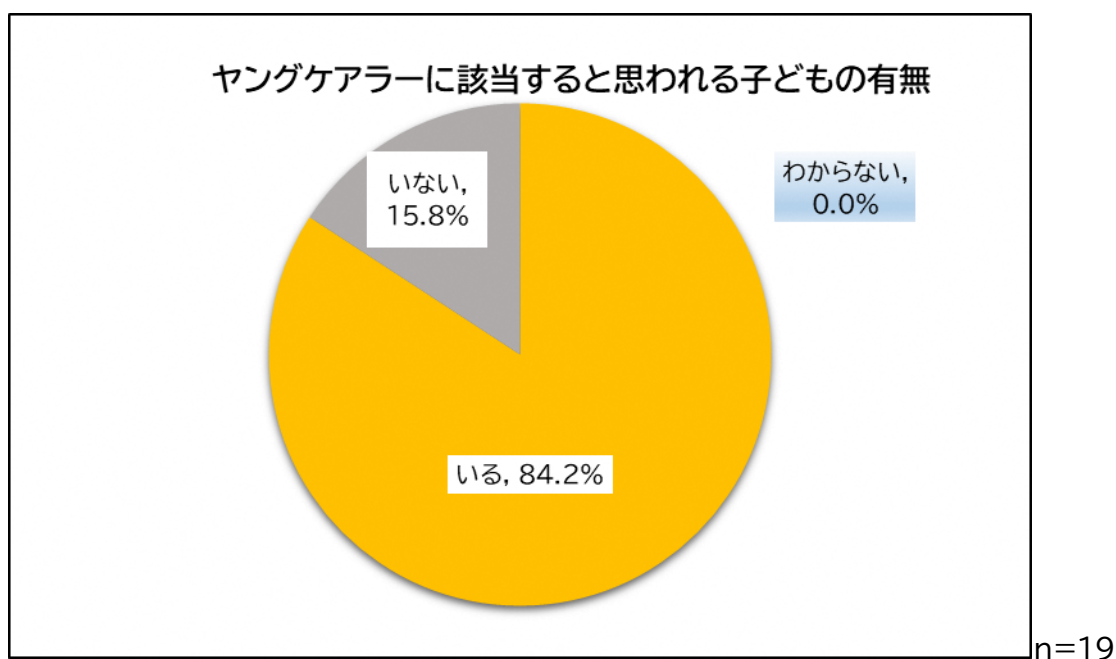
1. ヤングケアラー概念の認識

「ヤングケアラー」の概念の認識について聞いたところ、「言葉を知っており、学校として意識して対応している」が84.2%、「言葉は知っているが、学校としては特別な対応をしていない」が15.8%となっている。全体として全ての中学校が「ヤングケアラー」という言葉を知っていることが確認できた。



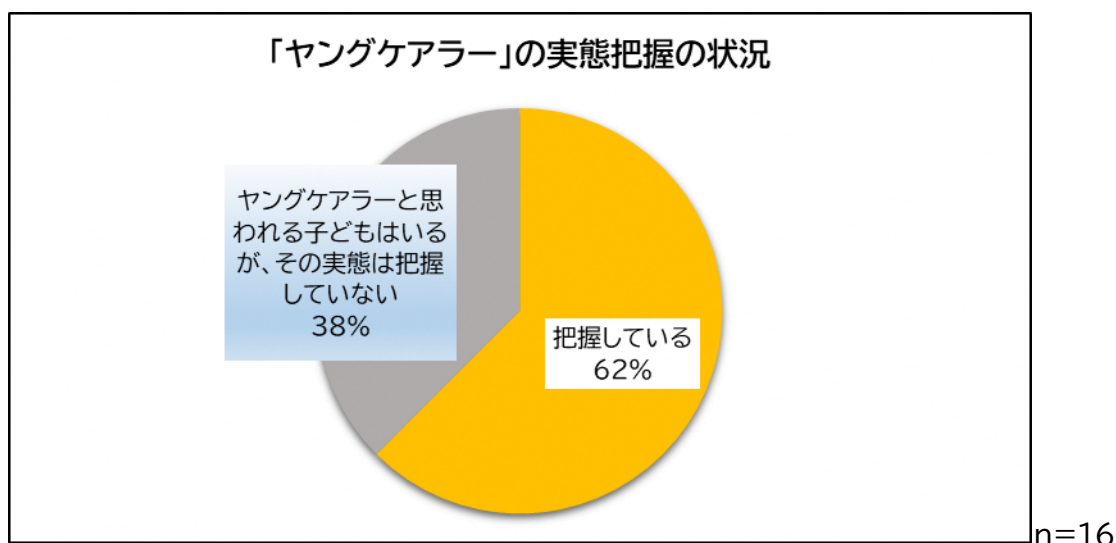
2. ヤングケアラーに該当する子どもの有無

「ヤングケアラー」の参考資料を示したうえで、該当すると思われる子どもの有無について聞いたところ、「いる」が84.2%となっている



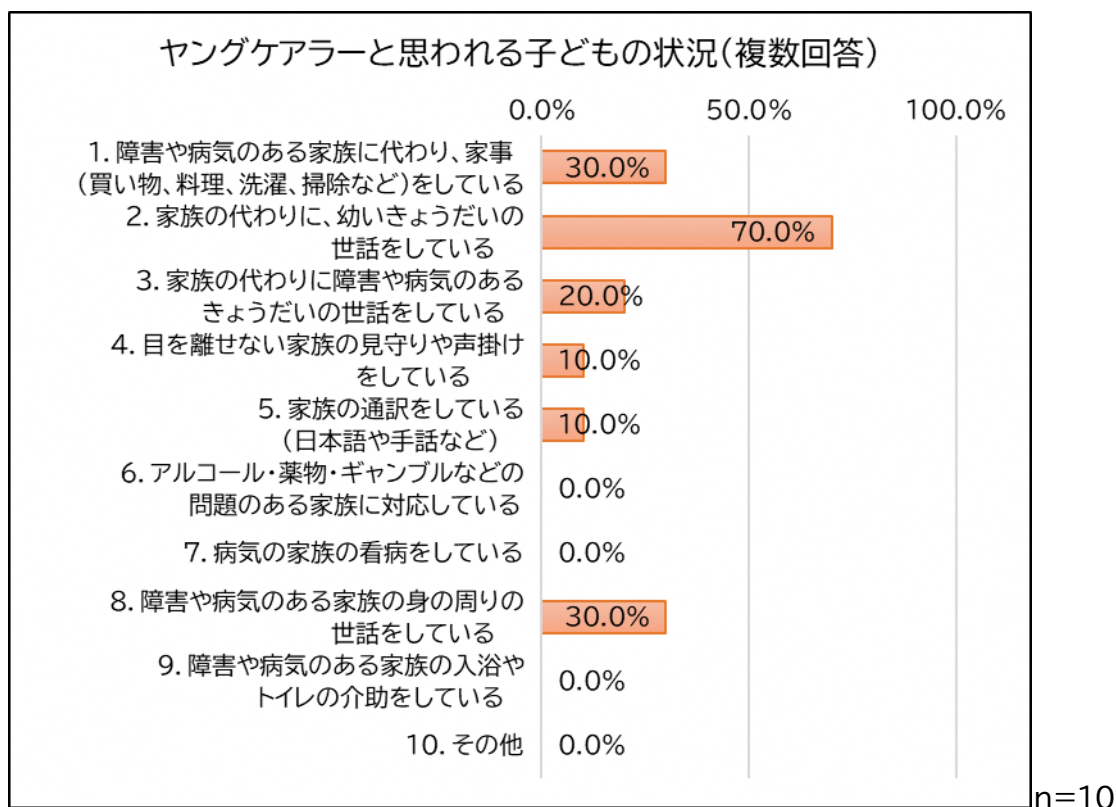
3. 「ヤングケアラー」の実態把握の状況

ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した学校に、実態把握の状況について聞いたところ、「把握している」は、62%、「ヤングケアラーと思われる子どもはいるが、その実態は把握していない」は、38%となっている。



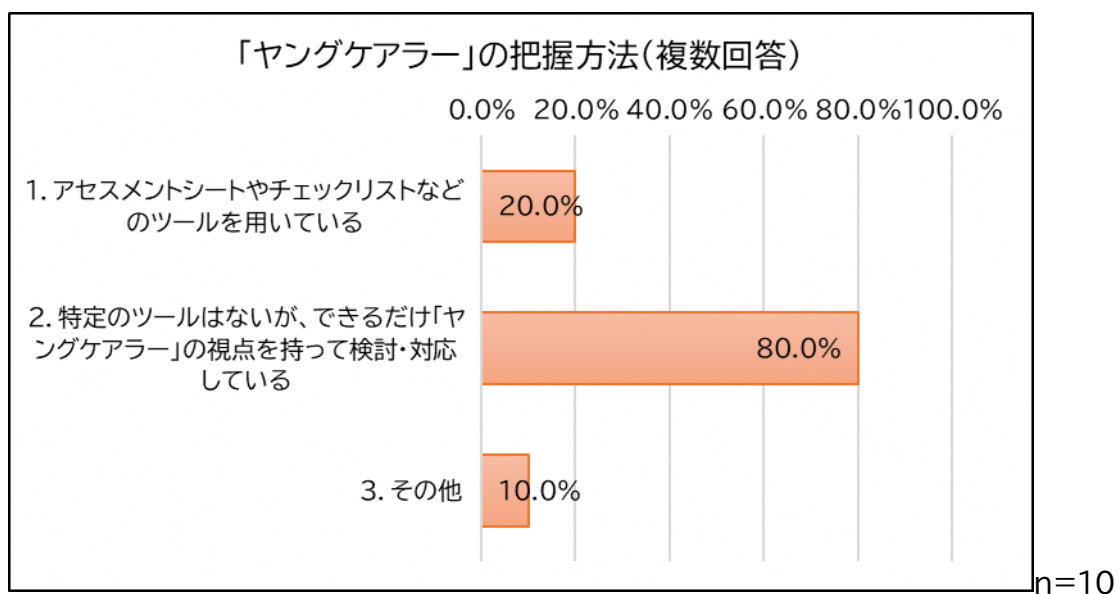
4. ヤングケアラーの状況について

ヤングケアラーの定義に該当すると思われる子どもが「いる」と回答した学校にヤングケアラーと思われる子どもの状況について聞いたところ、「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」が 70.0%と最も高く、「障害や病気のある家族に代わり、家事(買い物、料理、洗濯、掃除など)をしている」「障害や病気のある家族の身の周りの世話をしている」が、30.0%となっている。



5. 「ヤングケアラー」の把握方法

ヤングケアラーを把握していると回答した学校に、把握方法について聞いたところ、「特定のツールはないが、できるだけ「ヤングケアラー」の視点を持って検討・対応している」が最も多く、80.0%となっている。

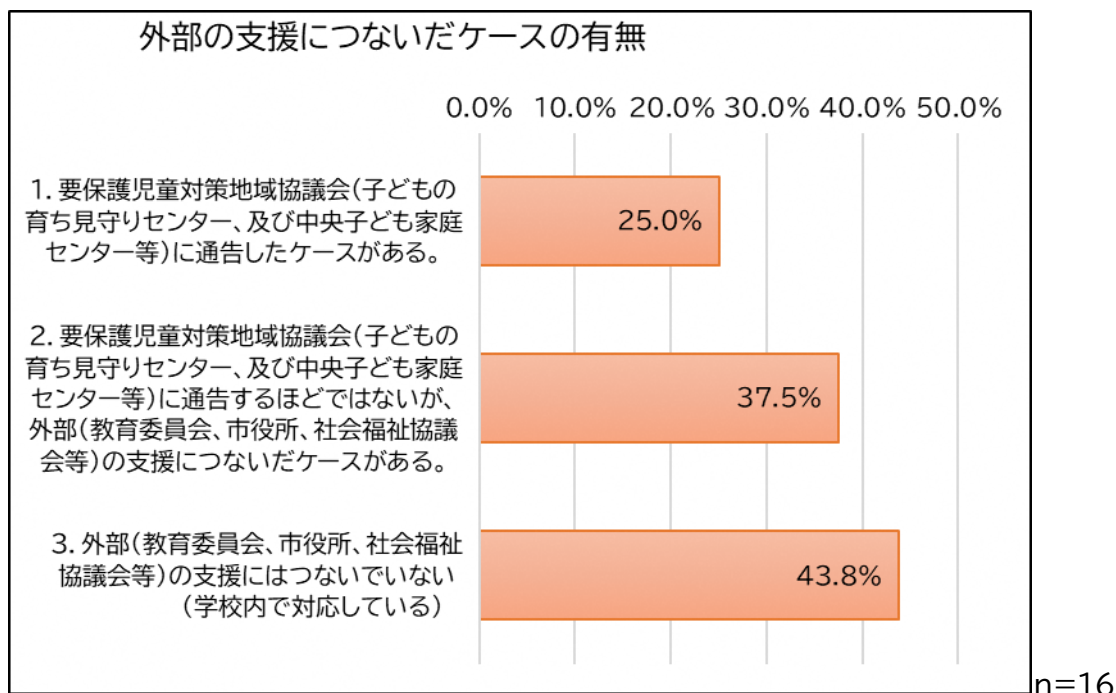


●その他の個別回答

○当該生徒、保護者への聞き取り

6. 外部の支援につないだケースの有無(複数回答)

ヤングケアラーと思われる子どもについて、学校以外の外部に支援につないだケースがあるか聞いたところ、「要保護児童対策地域協議会(子どもの育ち見守りセンター、及び中央子ども家庭センター等)に通告したケースがある。」(25%)、「要保護児童対策地域協議会(子どもの育ち見守りセンター、及び中央子ども家庭センター等)に通告するほどではないが、外部(教育委員会、市役所、社会福祉協議会等)の支援につないだケースがある。」が 37.5%となっている。



●外部の支援につなげなかったケースについて、つなげなかった理由及び対応方法の自由回答は以下の通り。

<主な意見>

繋がらなかった理由

○親族に支えられて過ごしている部分もある

○家庭環境の把握方法が乏しい

○学校だけで対応する問題ではない

○相談を受けて、状況をみている

対応方法

○校内での情報共有

○見守りや現状の把握

7. ヤングケアラーの把握や支援にあたって工夫していること

ヤングケアラーの把握や支援にあたって工夫していることについては、以下のような回答があった。

<主な意見>

- 学校生活がみんなと同じように過ごせているか等、様子の把握
- スクリーニングシートや生活アンケートの活用
- 不登校生徒に対する定期的な電話や家庭訪問
- 安心して相談できる人間関係の構築

8. ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じること

ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じることについては、以下のような回答があった。

<主な意見>

- 家庭の中のことは見えにくい
- 家庭環境に入り込むことが難しい

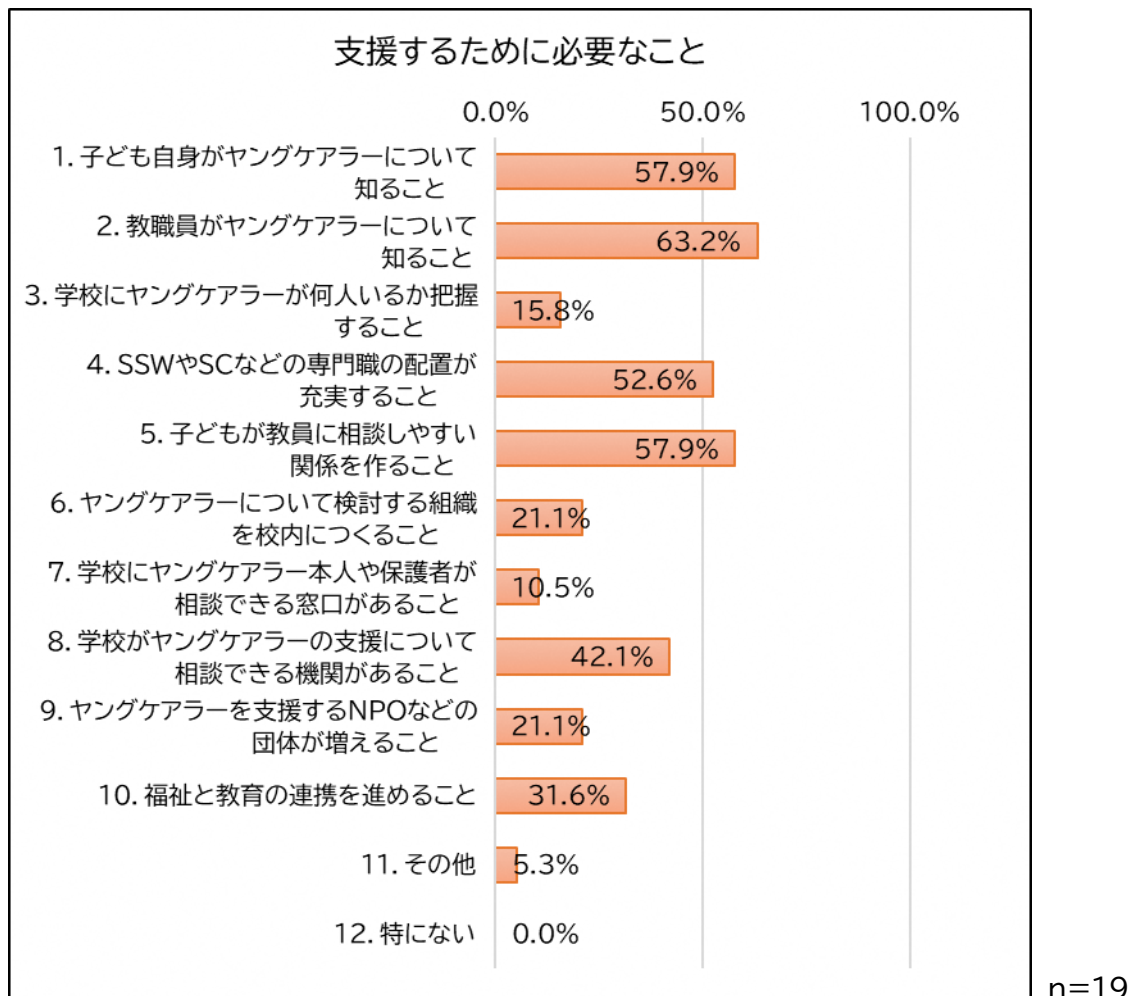
9. ヤングケアラーがいるか分からない理由

中学校では、ヤングケアラーと思われる子どもがいるか「分からない」と回答した学校はなかった。

該当なし

10. ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと(複数回答)

ヤングケアラーを支援するために必要だと思うことを聞いたところ、「教職員がヤングケアラーについて知ること」が、63.2%と最も高く、次いで「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」と「子どもが教員に相談しやすい関係を作ること」が 57.9%となっている。



●その他の個別回答

○福祉施設が主として対応する意識と体制

●「福祉と教育の連携をすすめること」に対する具体的な意見

<主な意見>

○学校が気づき、福祉に繋いでいく

○福祉からの助言と、学校が相談できる窓口の設置が必要

○行政と学校における人員増加

○家庭への(金銭的・人的)な援助

○家庭へのケアについてケース会議での検討

11. ヤングケアラーに関する自由意見 7 件

<主な意見>

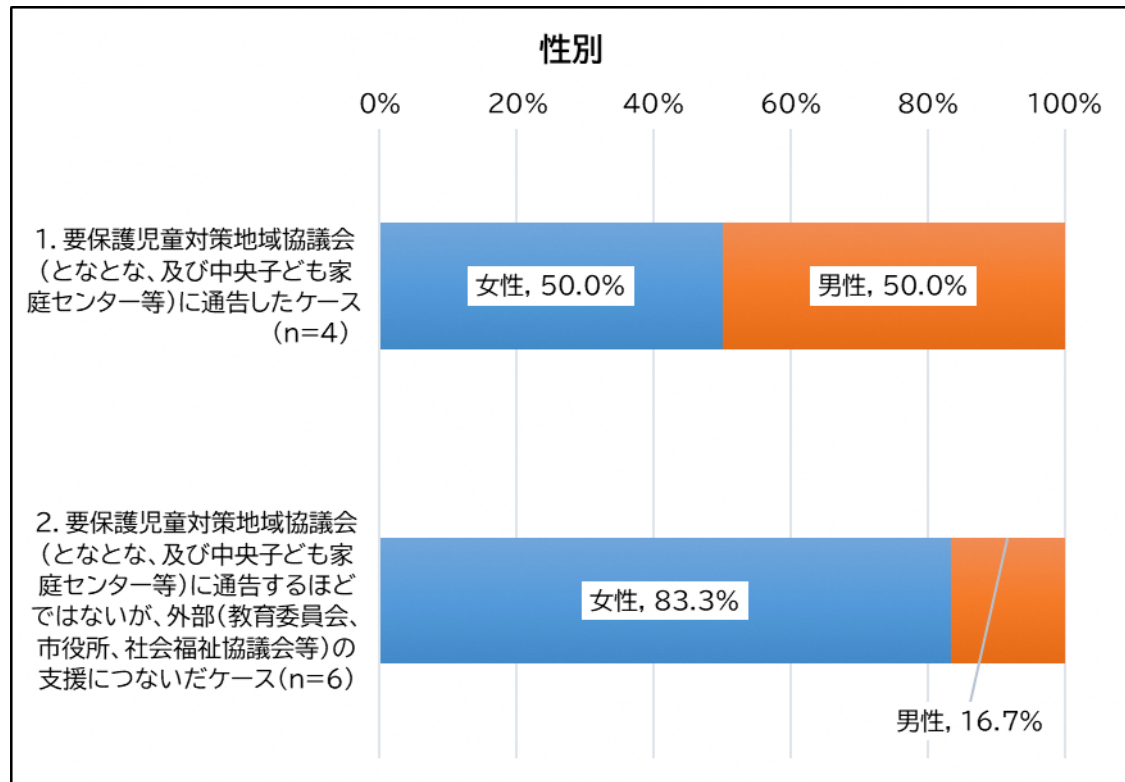
- ヤングケアラーなのか、お手伝いの範疇なのかの判断が難しい
- ケアが必要な大人への支援が行き届かないと解決しない
- 家庭の中の把握は難しいので、子どもとの関係作りが大事
- 保護者に代わり、幼いきょうだいの世話をしなければならないケースが最近散見される
- あなたは厳しい状況なんだよと、知らせても、何ら助ける手立てがないということにならないように、具体の方策を示すことが必要

個別事例

1. 要保護児童対策地域協議会(となとな、及び中央子ども家庭センター等)に通告したケース、2. 要保護児童対策地域協議会(となとな、及び中央子ども家庭センター等)に通告するほどではないが、外部(教育委員会、市役所、社会福祉協議会等)の支援につないだケースについて、直近のケースを聞いた。結果は以下の通りである。

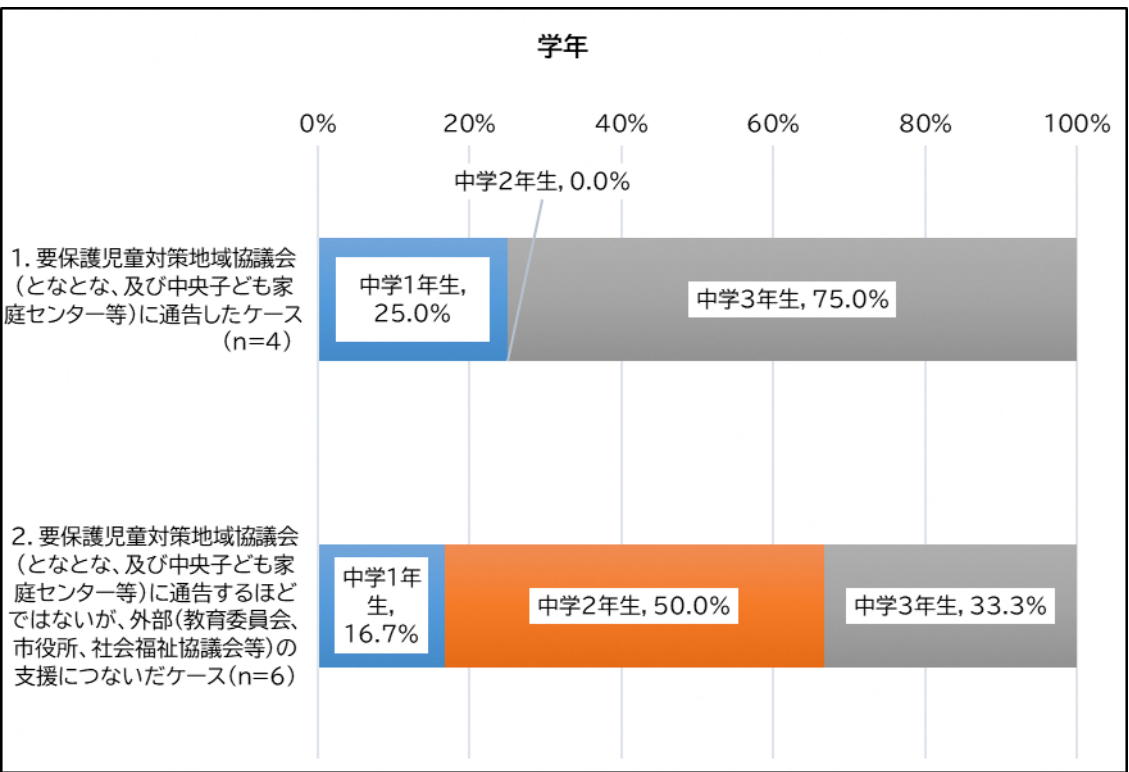
1. 性別

性別は以下の通り



2. 学年

学年は以下の通りである。



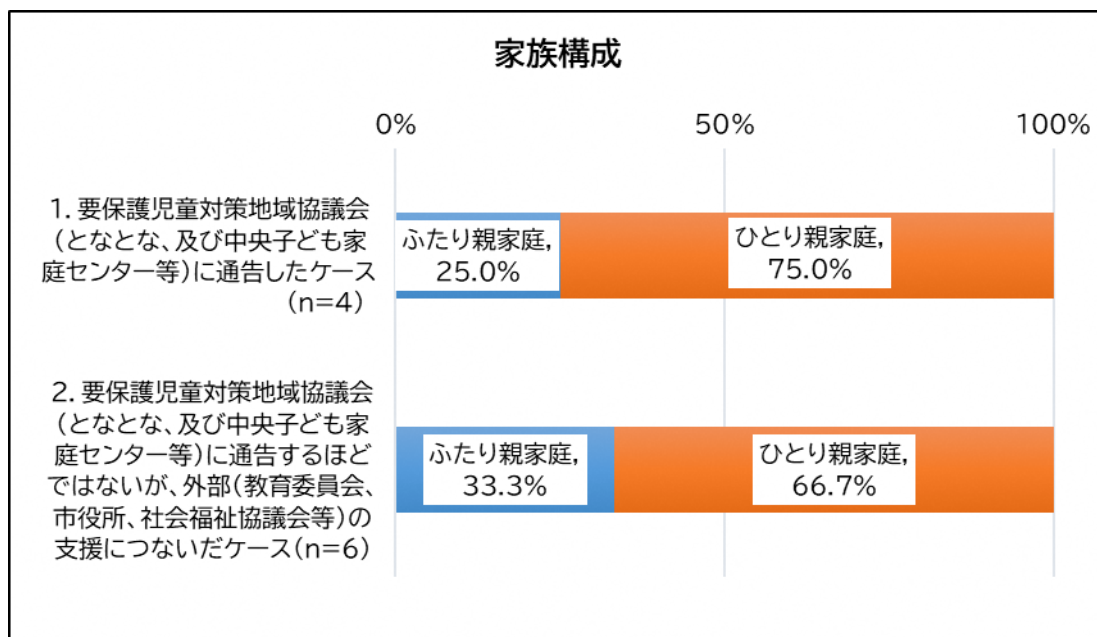
3. 学校生活の状況

1. では、「精神的な不安定さがある」が、2. では、「学校を休みがちである」が最も高い。

	学校を休みがちである	遅刻や早退が多い	保健室で過ごしていることが多い	精神的な不安定さがある	身だしなみが整っていない	学力が低下している	宿題や持ち物の忘れ物が多い	提出遅れや提出忘れが多い	保護者の承諾が必要な書類等	学校に必要なものを用意してもらえない	修学旅行や宿泊行事等を欠席する	校納金が遅れる。未払い	友達と上手に付き合っていない	疲れていることが多い	授業中寝ている	虫歯が多い	その他
1. 要保護児童対策地域協議会（となと、及び中央子ども家庭センター等）に通告したケース（n=4）	25%	25%	0%	75%	25%	25%	0%	25%	0%	0%	0%	0%	25%	25%	0%	0%	25%
2. 要保護児童対策地域協議会（となと、及び中央子ども家庭センター等）に通告するほどではないが、外部（教育委員会、市役所、社会福祉協議会等）の支援につないだケース（n=6）	83%	50%	0%	0%	17%	33%	0%	17%	0%	17%	33%	0%	0%	0%	0%	0%	17%

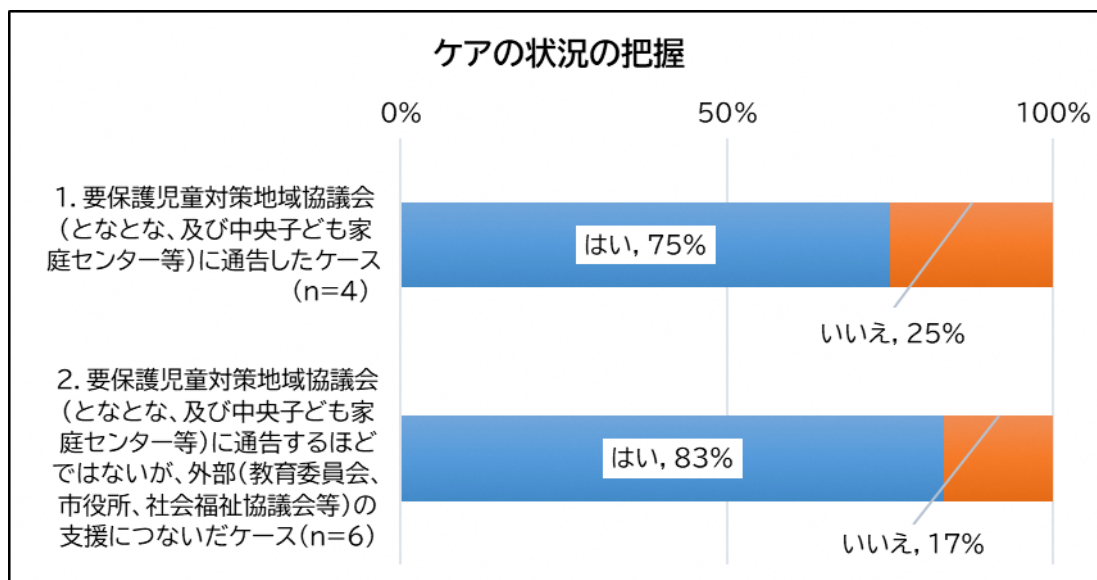
4. 家族構成

家族構成については、以下の通りである。



5. ケアの状況の把握

ケアの状況を把握しているかについては、1. では 75%、2. では 83%が「はい」と回答している。



6. ケアの状況を把握していると回答した学校に、ケアを必要としている人、ケアを必要としている人の状況、ケアの内容を聞いた結果は以下の通りである。

①ケアを必要としている人

1. 2. のケースともに、「きょうだい」の割合が最も高い。

	母親	父親	祖母	祖父	きょうだい	その他
1. 要保護児童対策地域協議会（となとな、及び中央子ども家庭センター等）に通告したケース（n=3）	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	66.7%	0.0%
2. 要保護児童対策地域協議会（となとな、及び中央子ども家庭センター等）に通告するほどではないが、外部（教育委員会、市役所、社会福祉協議会等）の支援につないだケース（n=5）	20.0%	20.0%	0.0%	0.0%	80.0%	0.0%

②ケアを必要としている人の状況

1. 2. とともに高く、2. では知的障害も高い。

	高齢（65歳以上）	幼い	要介護（介護が必要な状態）	認知症	身体障害	知的障害	精神疾患（疑い含む）	依存症（疑い含む）	精神疾患、依存症以外の病気	日本語を第一言語としない	その他	わからない
1. 要保護児童対策地域協議会（となとな、及び中央子ども家庭センター等）に通告したケース（n=3）	0.0%	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%	33.3%	33.3%	33.3%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%
2. 要保護児童対策地域協議会（となとな、及び中央子ども家庭センター等）に通告するほどではないが、外部（教育委員会、市役所、社会福祉協議会等）の支援につないだケース（n=5）	0.0%	60.0%	20.0%	0.0%	0.0%	40.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

③ケアの内容

1.では「家事」と「きょうだいの世話や保育所等への送迎」が、2.では「きょうだいの世話や保育所等への送迎」の割合が高い。

	家事（食事の準備や掃除、洗濯）	きょうだいの世話や保育所等への送迎	身体的な介護（入浴やトイレのお世話など）	外出の付き添い（買い物、散歩など）	通院の付き添い	感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）	見守り	通訳（日本語や手話など）	金銭管理	薬の管理	その他	わからない
1. 要保護児童対策地域協議会（となと、及び中央子ども家庭センター等）に通告したケース（n=3）	66.7%	66.7%	0.0%	33.3%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2. 要保護児童対策地域協議会（となと、及び中央子ども家庭センター等）に通告するほどではないが、外部（教育委員会、市役所、社会福祉協議会等）の支援につないだケース（n=5）	40.0%	80.0%	20.0%	20.0%	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

7. ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけ

【要対協通告ケース】

ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけ

保護者や生徒との会話を通じて

【要対協通告以外のケース】

ヤングケアラーと気づいた理由・きっかけ

小学校や他機関からの引継ぎ

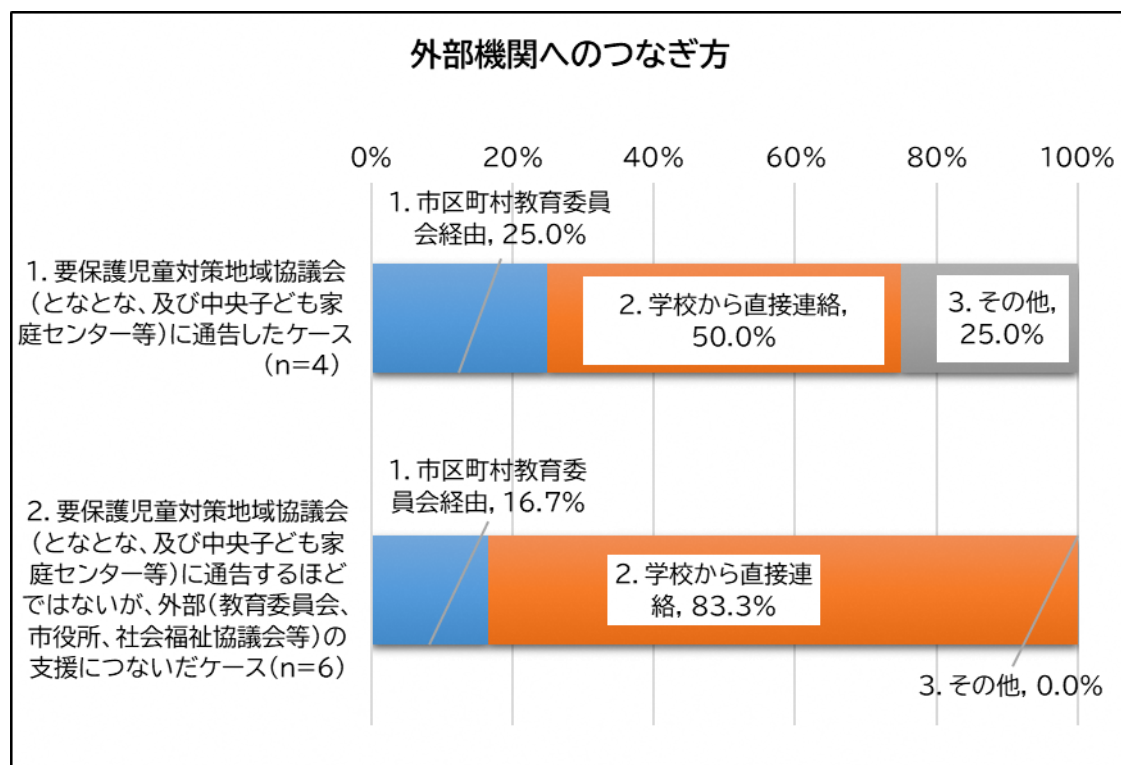
担任との会話

身だしなみ

幼いきょうだいを学校に連れていく姿を見て

8. 外部機関へのつなぎ方

外部機関へのつなぎ方は、1. 2. のケースともに「学校から直接連絡」の割合が高い。



9. 学校が行った支援（つなぎ先との連携も含めて）及び支援した結果、子どもへの変化
学校が行った支援等や、その結果の子どもへの変化についての自由記述の回答は以下の通り。＜主な意見＞

学校で行った支援

- 家庭訪問、ケース会議、本人へのアプローチ
- 生徒指導主事が小学校との情報共有
- となとなと学校での様子(担任との会話)の共有

支援した結果、子どもへの変化

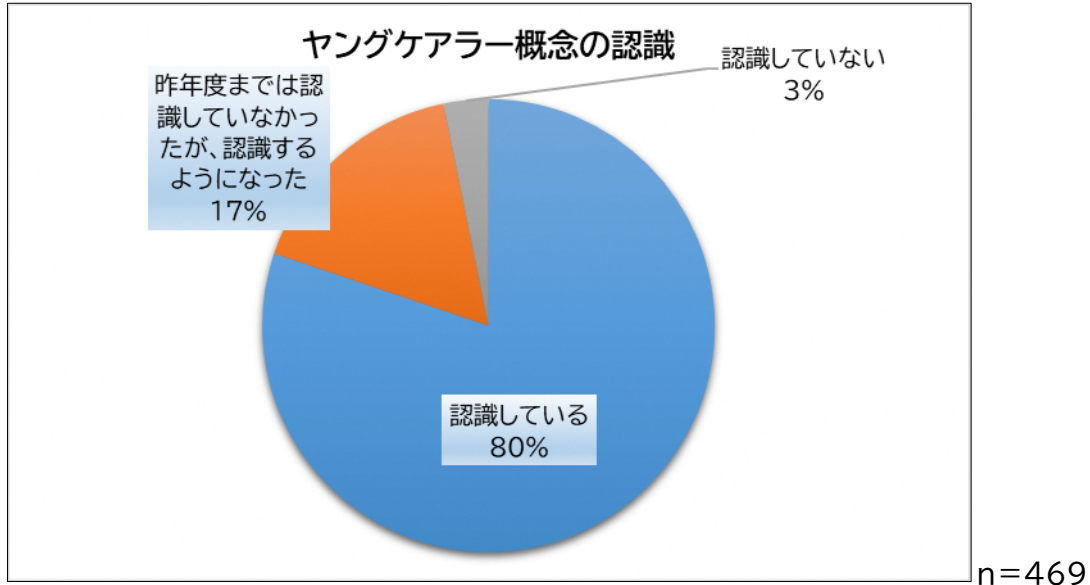
- 家庭での本人への負担が減ってきているのか、学校では落ち着いて生活している
- 別室登校が増えた
- 家庭の状況が厳しいため、現在もなかなか学校に来ることができていない

5. 教職員(小学校)アンケート結果 について

教職員(小学校)調査の結果(単純集計)

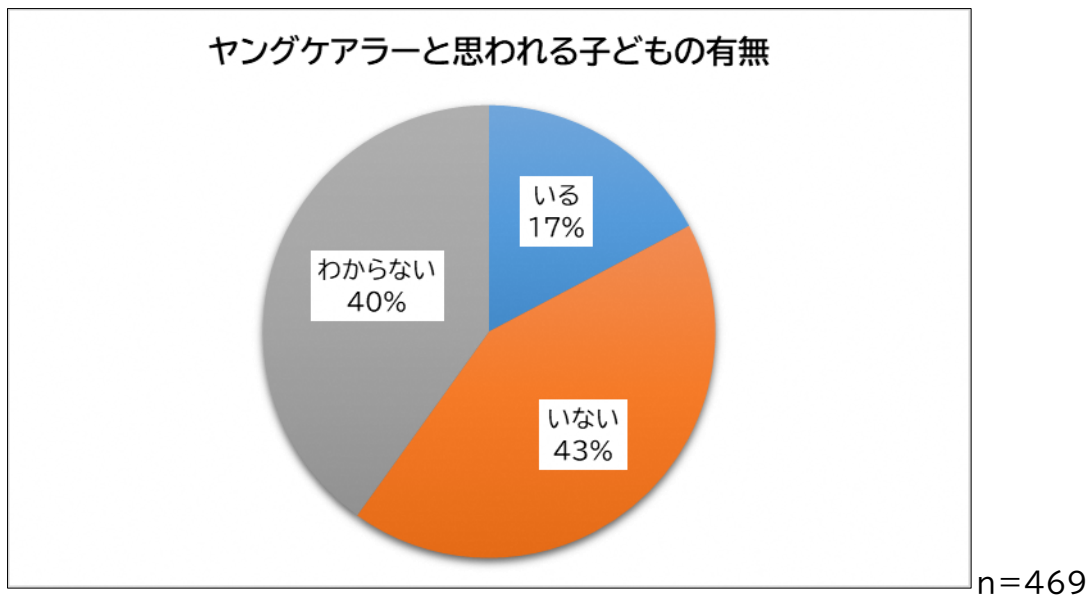
1. 「ヤングケアラー」という概念の認識

「昨年度までは認識していなかったが認識するようになった」17%も含めて、認識の割合は97%にのぼる。



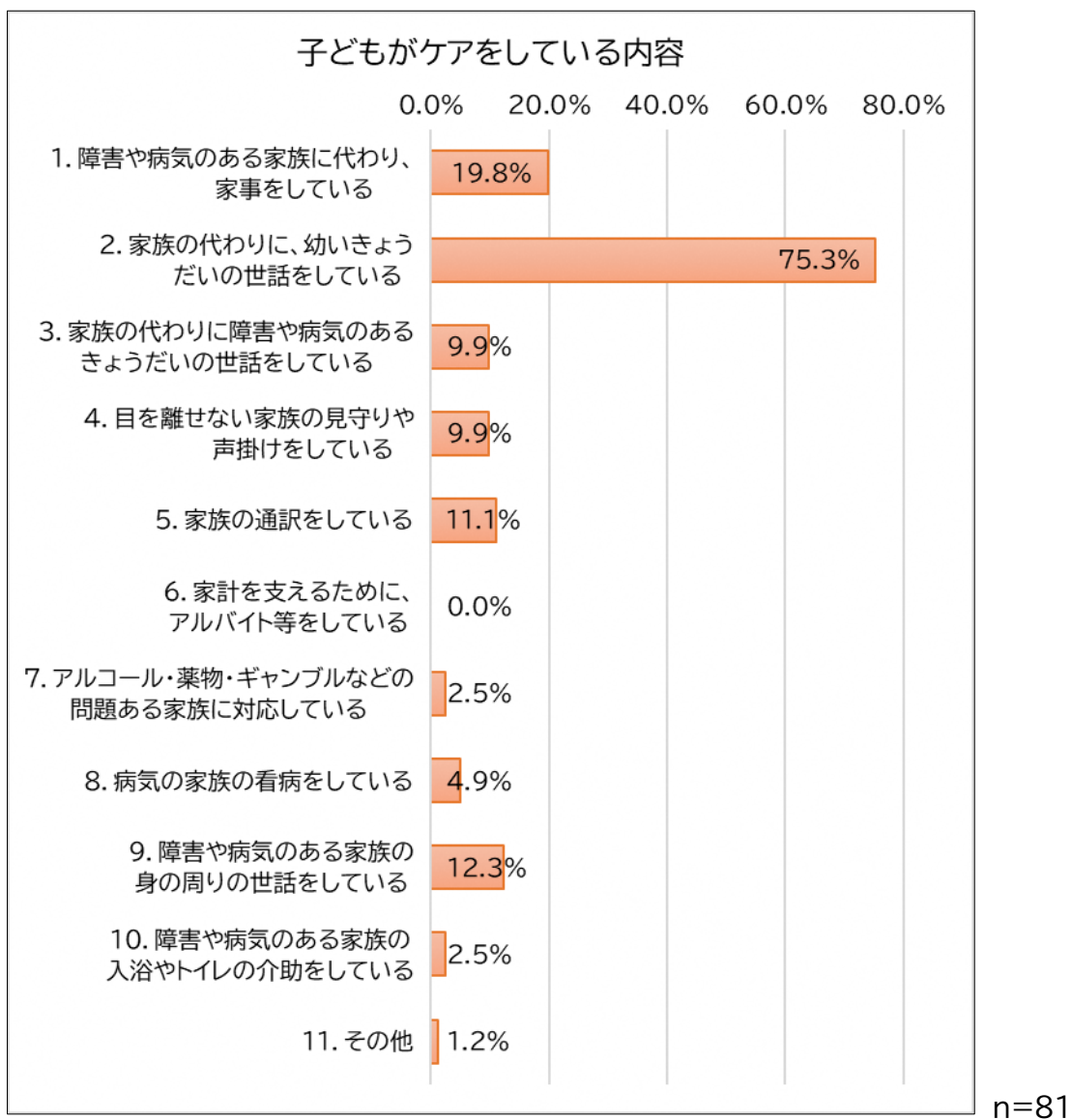
2. ヤングケアラーの定義に該当すると思われる子どもの有無

「ヤングケアラー」の説明を見て、現在関わっている子どもや家庭で該当する子どもの有無を聞いたところ、「いる」が17%、「わからない」が40%。



3. 【設問2】で「いる」と回答のあったもののうち、子どもが行っているケアの内容(複数回答)

「幼いきょうだいの世話をしている」が 75.3%と最も高く、「障害や病気のある家族に代わって家事」「障害や病気のある家族の身の回りの世話」が続いている。



●その他の個別回答

○よく遅刻をしてくる

4. 以下の「ヤングケアラー」と思われる子どもを把握するための主なチェック項目について

- ・学校を休みがちである
- ・遅刻や早退が多い
- ・保健室で過ごしていることが多い
- ・精神的な不安定さがある
- ・身だしなみが整っていない
- ・学力が低下している
- ・宿題や持ち物の忘れ物が多い
- ・保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い
- ・学校に必要なものを用意してもらえない
- ・修学旅行や宿泊行事等を欠席する
- ・校納金が遅れる、未払い
- ・いつも一人でいたり、友だちと上手くいっていない
- ・疲れていることが多い
- ・授業中寝ている
- ・虫歯が多い

チェック項目以外に、注意すべき状況

<主な意見>

- トラブルが比較的多い
- 友だちからの誘いを断ることが多い
- 児童の表情
- お金の滞納
- 休みがち、遅刻、行事等欠席
- 欠席の連絡が保護者からではなく本人からしか入らない
- 保護者との連絡が取れない
- 先生への距離感が近い、異常に甘える
- 家のことを話したまらない
- 給食のおかわりをよくする

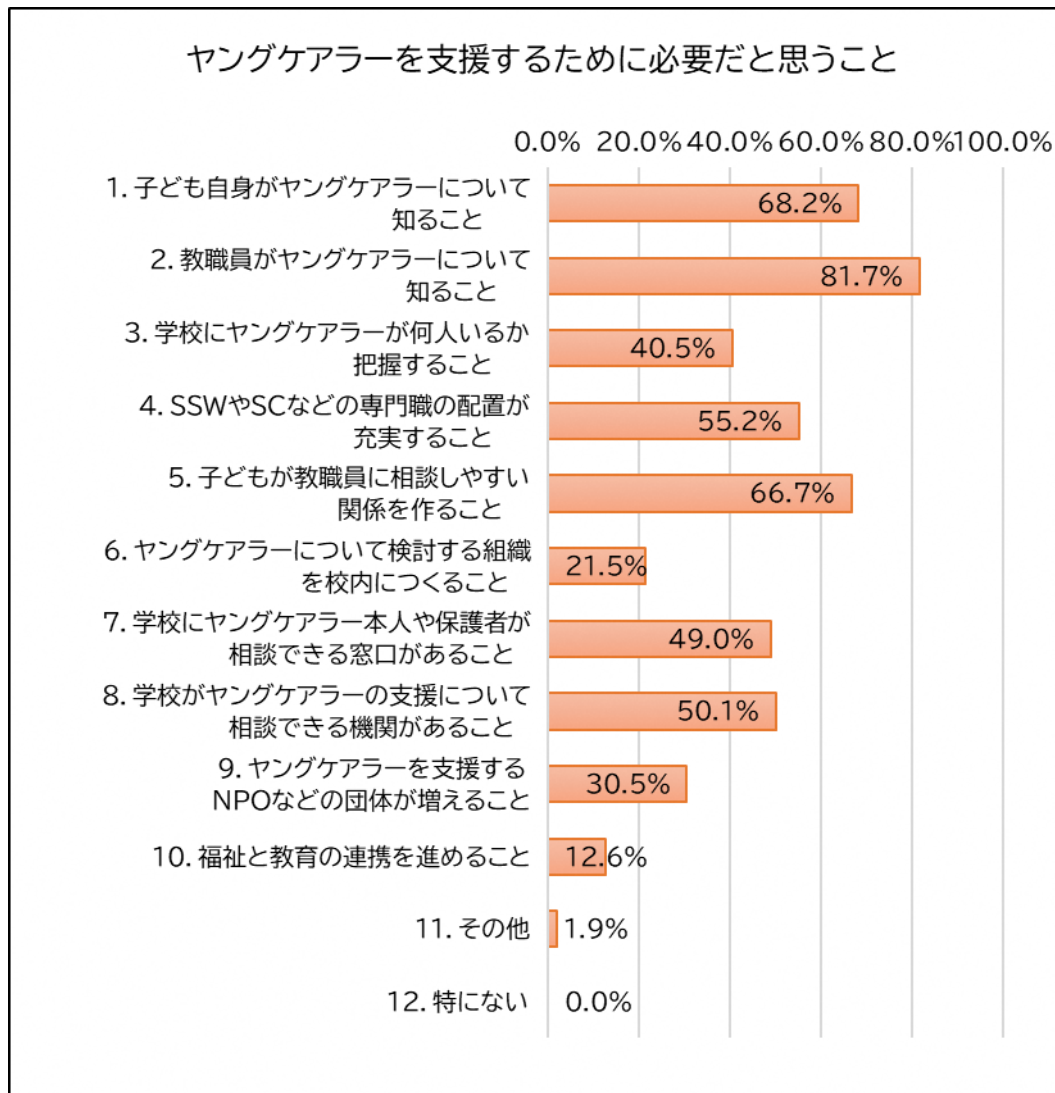
チェック項目に関する意見(変更した方がいい項目や追加した方がいい項目等)

<主な意見>

- ネグレクトのチェック項目とほぼ同じ。より生活に基づいた項目にすべきではないか
- 「友だちと上手くいっていない」の表記を「関わりを自ら避ける」という表現にすべき
- 精神的な不安定さの例を挙げてはどうか

5. ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと(複数回答)

ヤングケアラーを支援するために必要だと思うことを聞いたところ、「教職員がヤングケアラーについて知ること」81.7%と最も多く、次いで「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」(68.2%)となっている。



n=469

●福祉と教育の連携を進めることと回答した人に対して、具体的な内容を聞いた結果は以下の通り。

<主な意見>

○情報共有について

- ・情報共有の場の設定、ケース会議のこまめな実施
- ・教育現場からは、ヤングケアラーを発見できる立場にあるが、支援を組織的にすることは難しいから、福祉とお互いが情報を交換できると良い

○啓発・研修

- ・福祉機関にどのようなものがあるか、各機関がどのような支援ができるかを知ること
- ・福祉の専門職が学校に来て研修を行う

○体制整備

- ・役割分担を明確にして(学校は発見、把握、福祉は介入等)、連携する
- ・ヘルパー派遣など具体的な支援制度を教員が知りつなげていく
- ・介護事業者も含めたさまざまな機関が把握すれば必ず通告するような仕組みと、どのような関係機関が連携するのかを明確にする必要がある
- ・保護者に働きかける機能を強化する必要がある
- ・保護者も相談できる環境を整える

6. ヤングケアラーに関する自由意見 52 件

<主な意見>

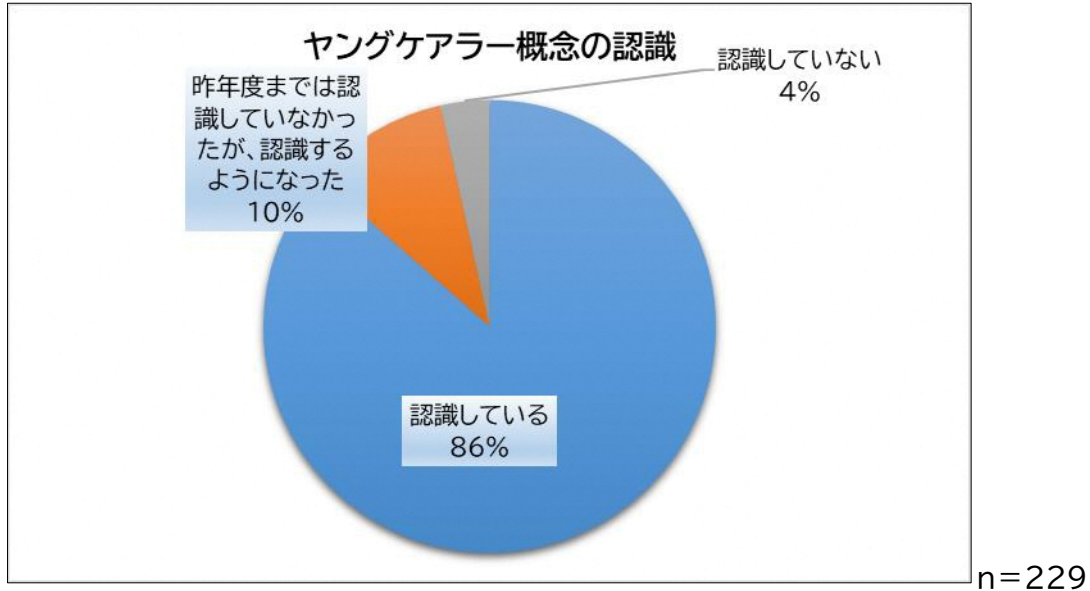
- 早期に気づくために、こういった視点が大切なのか共有したい
- 調査をきっかけに改めて知ることもあった。新たな視点を持って発見につなげたい
- 教師が見逃さないようにしたい
- 学校ができるのは児童に対して寄り添うこと。その家庭への関わりは福祉がやるべき
- 家庭の中のことは見えにくく、介入は難しい
- 関係機関と連携して対応していくことが必要であり、その関係機関の周知も必要
- SSW や SC など専門家が各校に常駐で配置されなければ問題は解決しない
- 家庭環境によって、どの子どもにも起こりうる事例

6. 教職員(中学校)アンケート結果 について

教職員(中学校)調査の結果(単純集計)

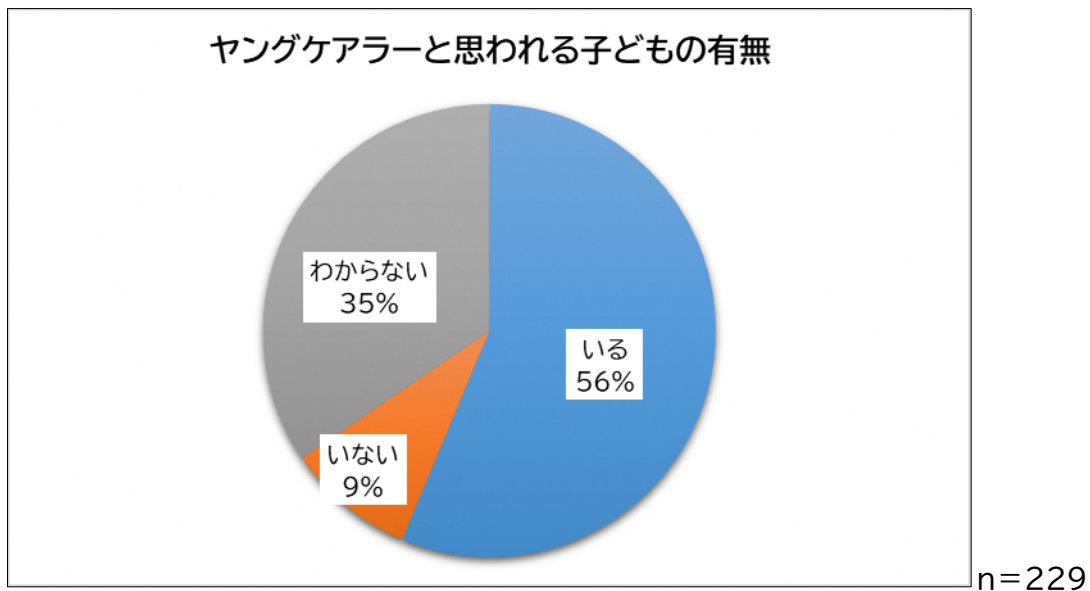
1. 「ヤングケアラー」という概念の認識

「昨年度までは認識していなかったが認識するようになった」10%も含めて、認識の割合は96%にのぼる。



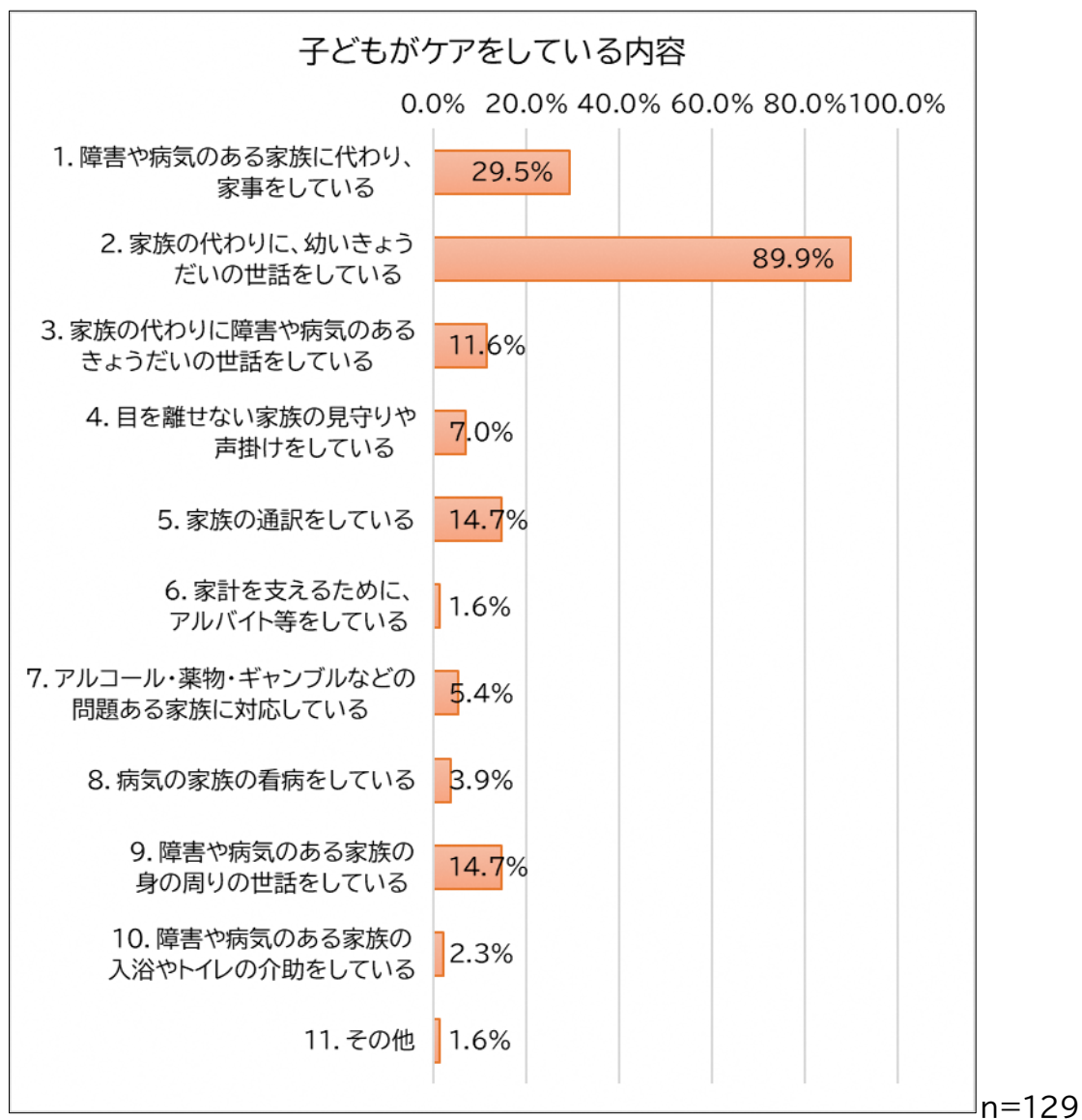
2. ヤングケアラーの定義に該当すると思われる子どもの有無

「ヤングケアラー」の説明を見て、現在関わっている子どもや家庭で該当する子どもの有無を聞いたところ、「いる」が56%、「わからない」が35%



3. 【設問2】で「いる」と回答のあったもののうち、子どもが行っているケアの内容(複数回答)

「幼いきょうだいの世話をしている」が 89.9%と最も高く、「障害や病気のある家族に代わって家事」「障害や病気のある家族の身の回りの世話」が続いている。



●その他の個別回答

○親の代わりに家事をしている

4. 以下の「ヤングケアラー」と思われる子どもを把握するための主なチェック項目について

- ・学校を休みがちである
- ・遅刻や早退が多い
- ・保健室で過ごしていることが多い
- ・精神的な不安定さがある
- ・身だしなみが整っていない
- ・学力が低下している
- ・宿題や持ち物の忘れ物が多い
- ・保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い
- ・学校に必要なものを用意してもらえない
- ・修学旅行や宿泊行事等を欠席する
- ・校納金が遅れる、未払い
- ・いつも一人でいたり、友だちと上手くいっていない
- ・疲れていることが多い
- ・授業中寝ている
- ・虫歯が多い

チェック項目以外に、注意すべき状況

<主な意見>

- 放課後のクラブ活動が好きだが、よく休む
- 生徒の表情
- 校納金が遅れる
- 休みがち、遅刻、行事等欠席
- 欠席の連絡が保護者からではなく本人からしか入らない
- 保護者との連絡が取れない

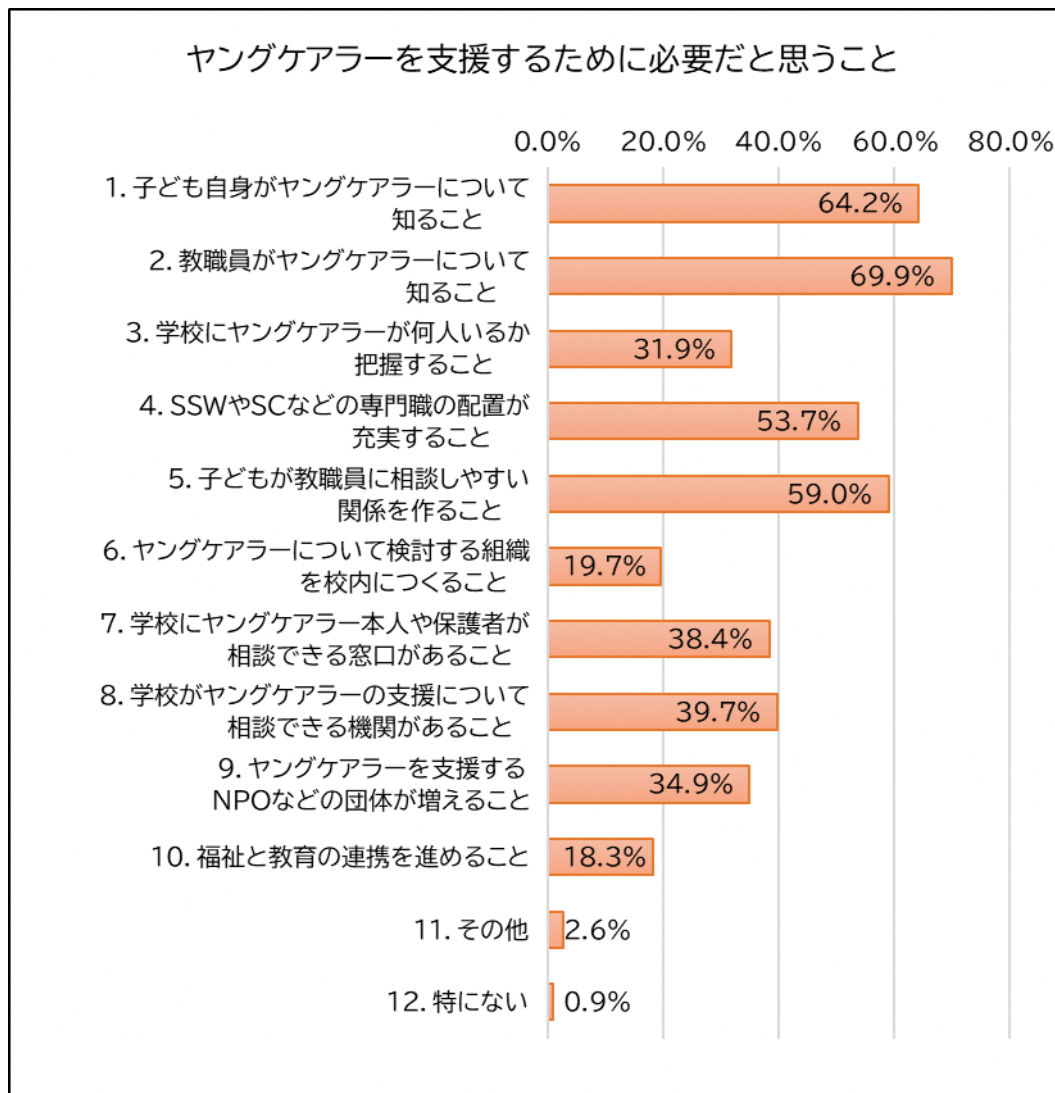
チェック項目に関する意見(変更した方がいい項目や追加した方がいい項目等)

<主な意見>

- 変化の兆しが集約できる項目が必要
- 周囲に相談せず自己で抱え込みがちな児童・生徒には要注意で観察が必要
- 知られたくない、と思っている生徒が多いのではないか
- 学校への欠席連絡を誰がしているかを確認することが重要

5. ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと(複数回答)

ヤングケアラーを支援するために必要だと思うことを聞いたところ、「教職員がヤングケアラーについて知ること」69.9%と最も多く、次いで「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」(64.2%)となっている。



n=229

●福祉と教育の連携を進めることと回答した人に対して、具体的な内容を聞いた結果は以下の通り。

<主な意見>

○情報共有について

- ・通院している病院や福祉サービスに関する情報を学校と共有すること
- ・経済的支援、生活的支援などは行政が行い、学校は見守り話を聞いて、関係機関と連携する
- ・福祉の方と連携を取りやすくしてほしい。こまめに情報交換する場が欲しい

○啓発・研修

- ・福祉機関にどのようなものがあるか、各機関がどのような支援ができるかを知ること
- ・「福祉」を知る研修を行い、頼れる機関にはしっかりと頼る

○体制整備

- ・中長期にわたっての支援が必要でその計画を個別に立てていく
- ・学校から紹介して福祉が対応するという流れを作らないと子どもたちは助からない
- ・福祉などの外部の機関とも相談、連携する事が大切
- ・ソーシャルワーカーの常駐。教員が気づかないことや、違う視点からの気づきが多いため、専門職の介入が必要
- ・どこの誰とどのように連携を取ったらいいかわからない

6. ヤングケアラーに関する自由意見 42件

<主な意見>

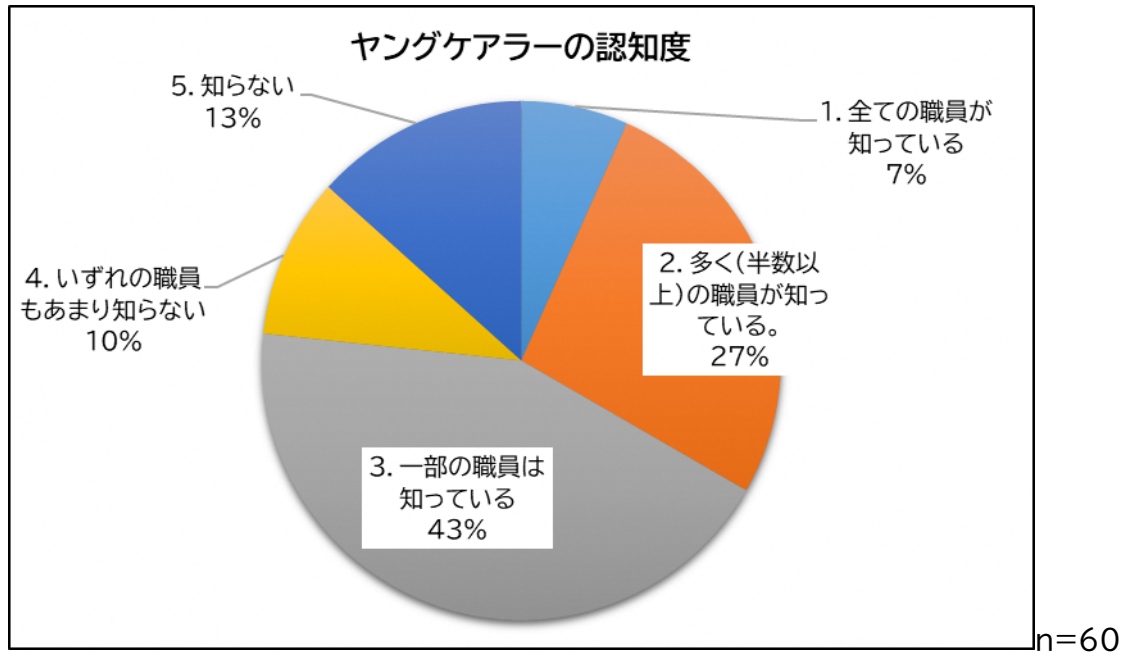
- 小学校や中学校家庭科の課題の中に「家族の手伝いをする」というものがあるが、推奨されるお手伝いや家事の練習とヤングケアラーの境目がわかりにくい
- 先に周りの大人がヤングケアラーの知識を増やすべき、子どもへの啓発はその後が良い
- ケアされる大人が適切なサービスにつながっていることが必要
- 支援制度の充実
- 親には絶対に言わないで欲しいというパターンが多く、そうした場合は深刻
- 家庭内のことの把握、介入が難しい
- 学校で把握してもその後の支援へとつながらない
- 社会の認知度の向上
- 子ども自身が自分の状況を認識しておらず、気づけるような取り組みが必要

7. 関係機関(教育・保育機関) アンケート結果について

関係機関(教育・保育施設)調査の結果(単純集計)

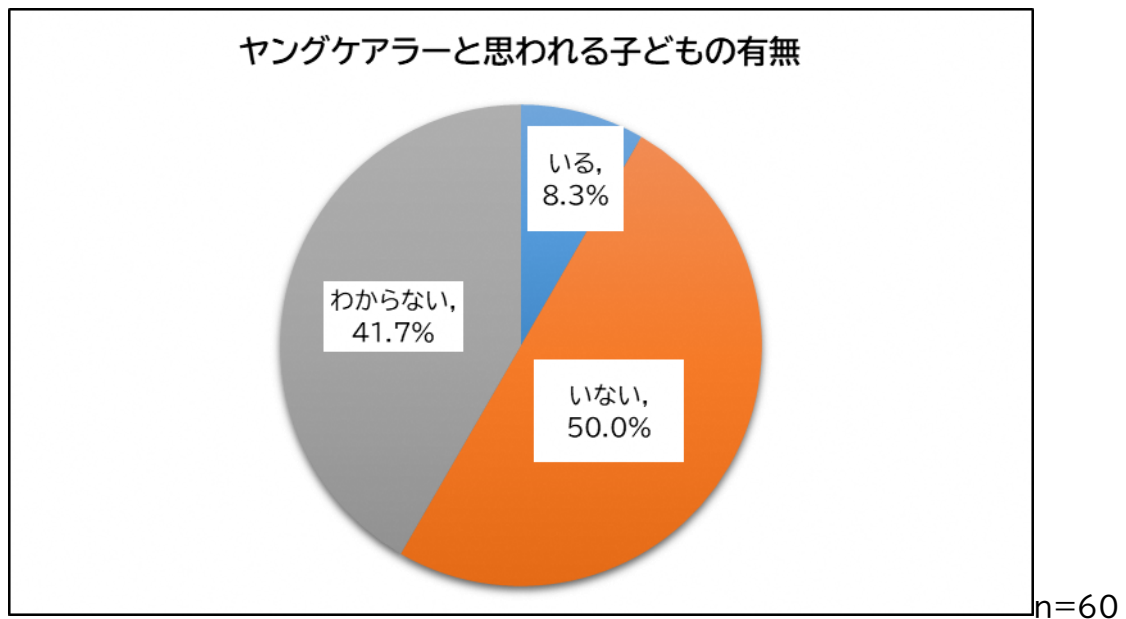
1. ヤングケアラーの認知度

最も多いのは「一部の職員は知っている」で 43%であった。次いで、「多く(半数以上)の職員が知っている」が27%となっている。



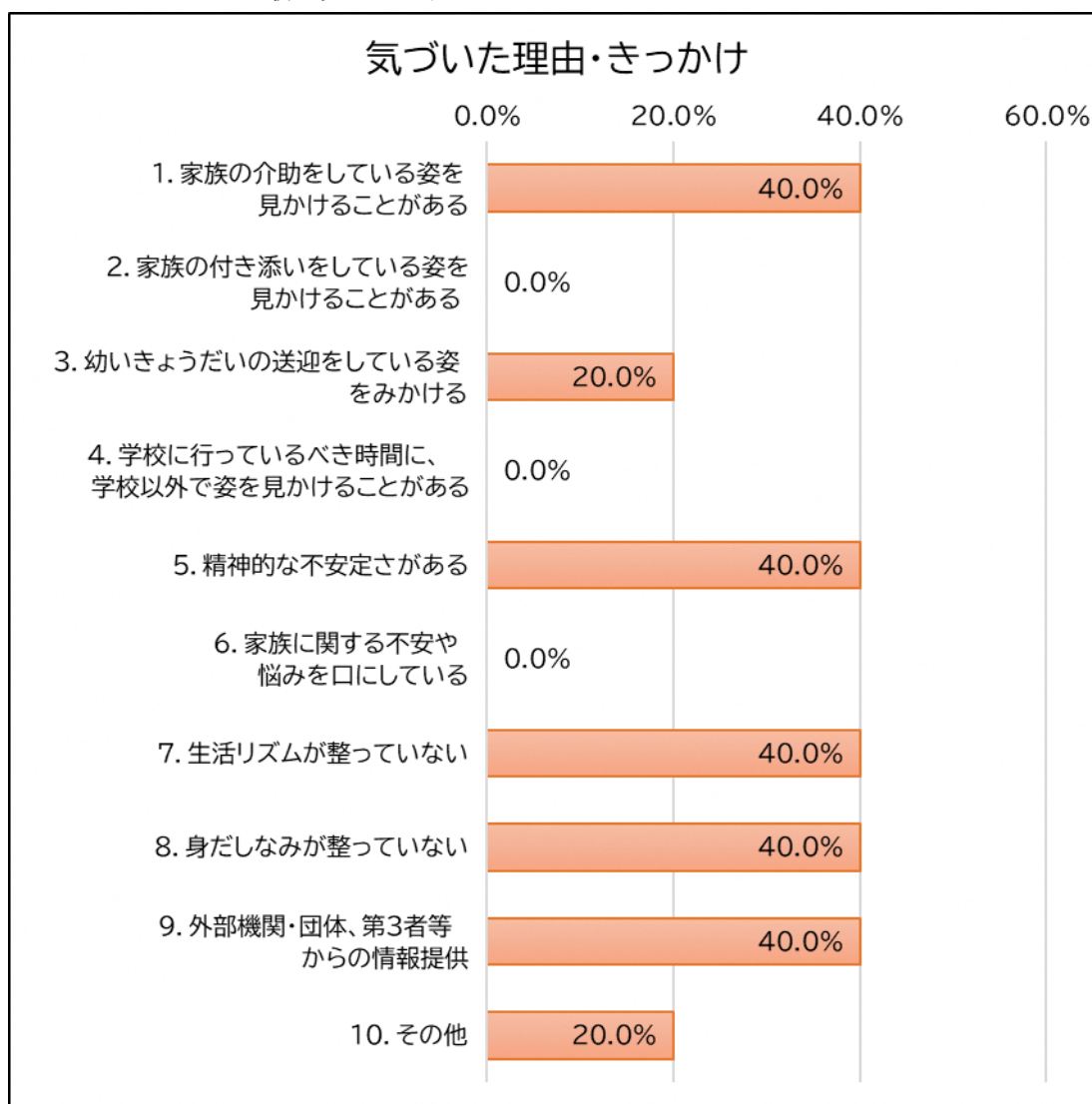
2. ヤングケアラーと思われる子どもの有無

「ヤングケアラー」の説明を見て、現在関わっている子どもや家庭で該当する子どもの有無を聞いたところ、「いない」が 50%で最も多く、次いで「わからない」が 42%であった。



3. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ヤングケアラーと気づいたきっかけ
(複数回答)

「家族の介助をしている姿を見かけることがある」「精神的な不安定さがある」「生活リズムが整っていない」「身だしなみが整っていない」「外部機関・団体、第三者等からの情報提供」が並んで 40%となり、最も多かった。



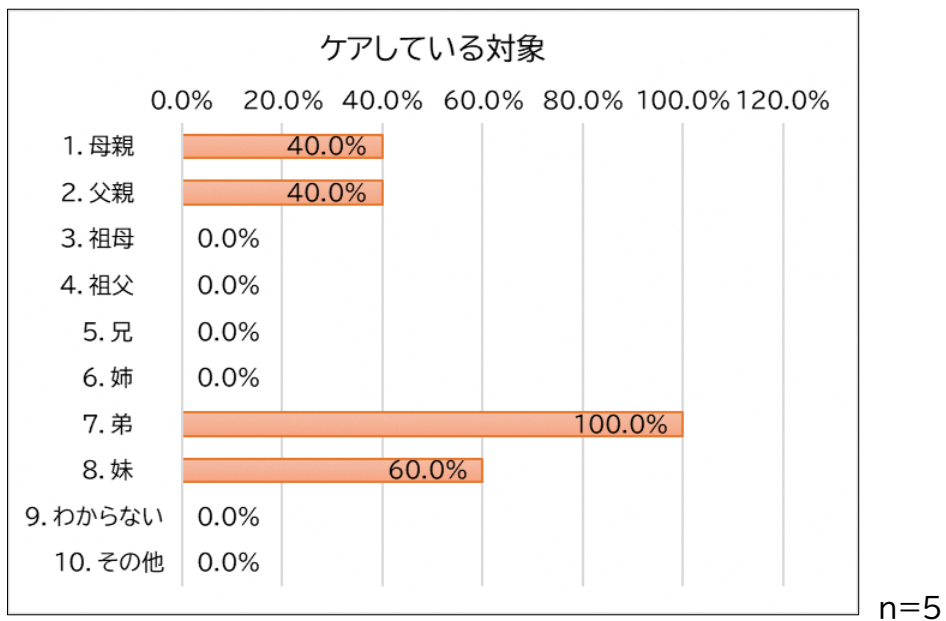
n=5

●その他の個別回答

○家族の通訳を引き受けている

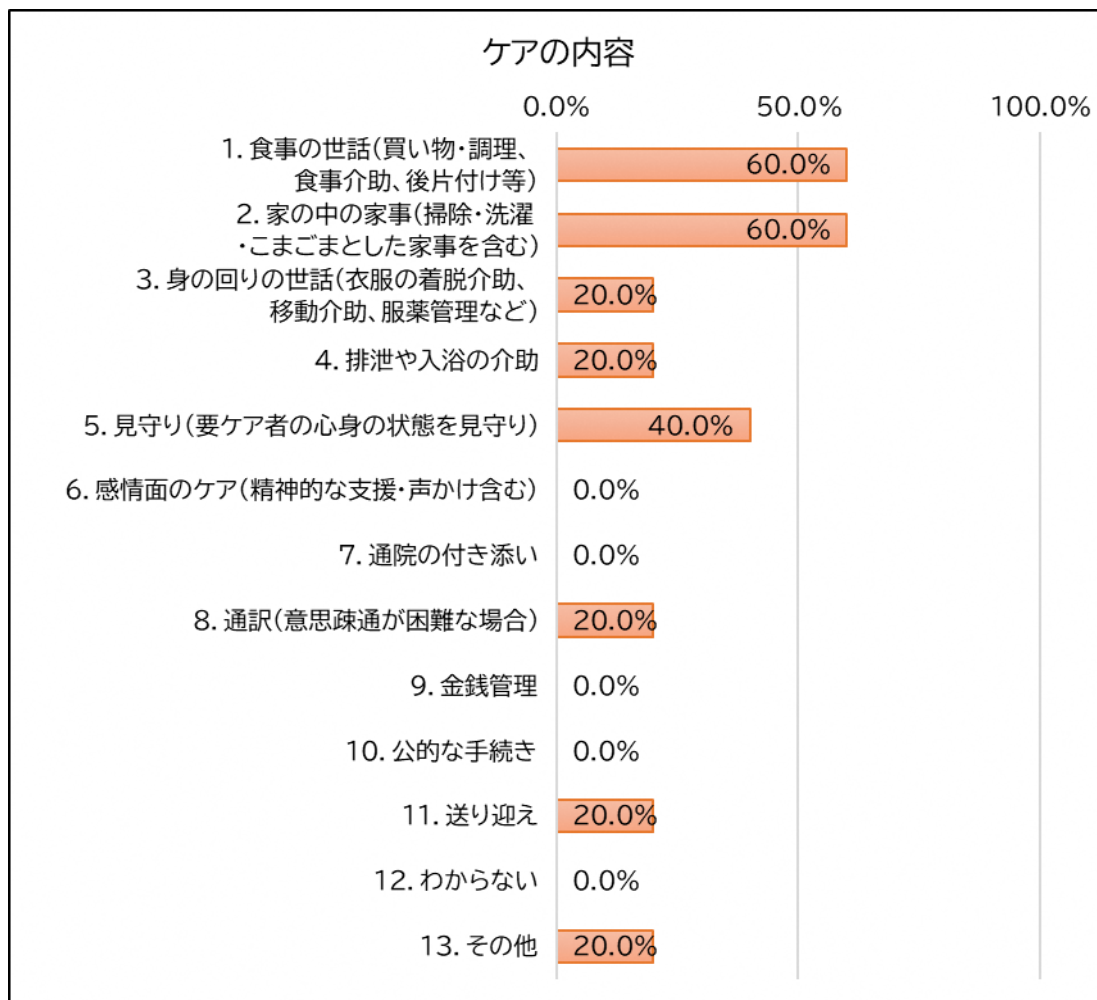
4. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアを必要としている人
(複数回答)

最も多いのは「弟」で 100%であった。次いで、「妹」が 60%となっている。



5. 【設問2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアの内容（複数回答）

「食事の世話(買い物・調理、食事介助、後片付け等)」「家の中の家事(掃除・洗濯・こまごまとした家事を含む)」が 60%と最も高く、「見守り(要ケア者の心身の状態を見守り)」が続いている。



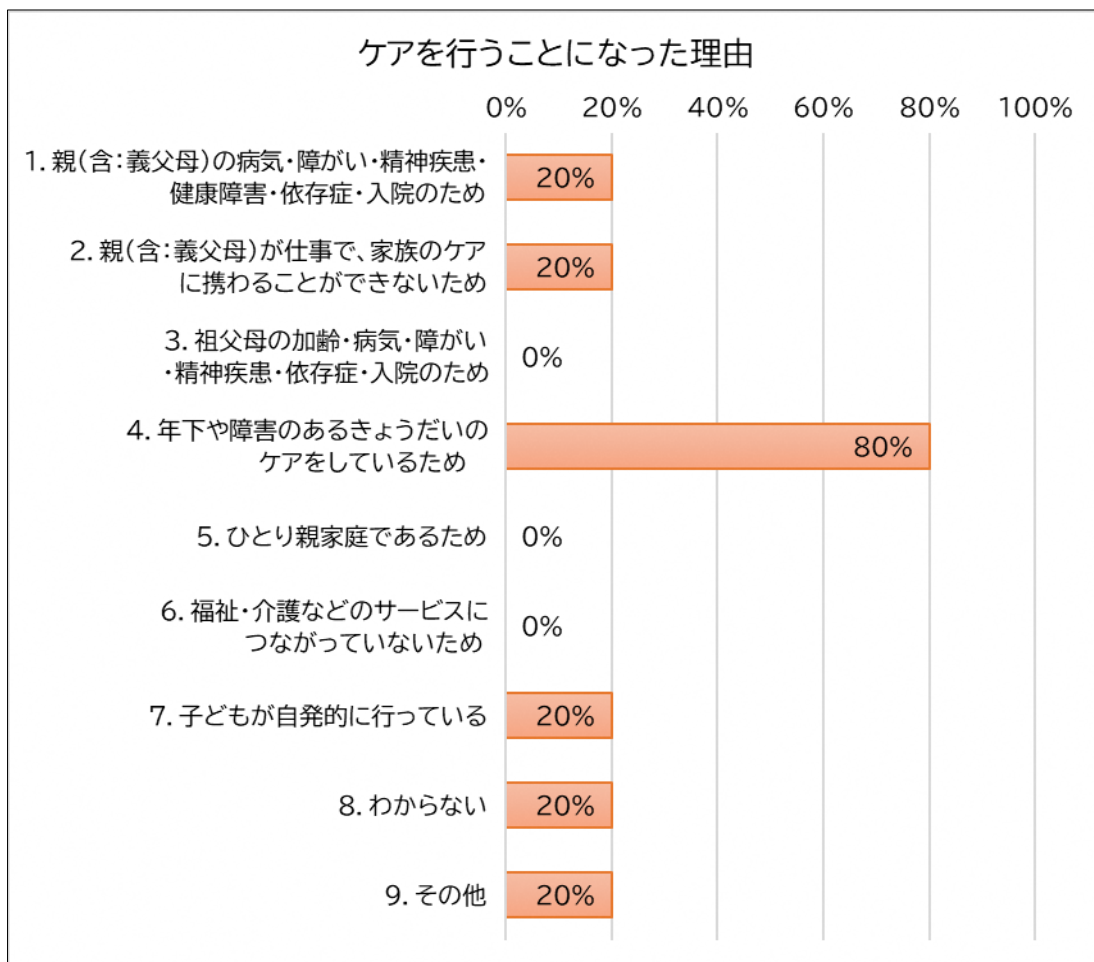
n=5

●13.その他の個別回答

○幼いきょうだいの遊び相手や見守り

6. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアを行うことになった理由(複数回答)

最も多いのは「年下や障害のあるきょうだいのケアをしているため」で 80%であった。



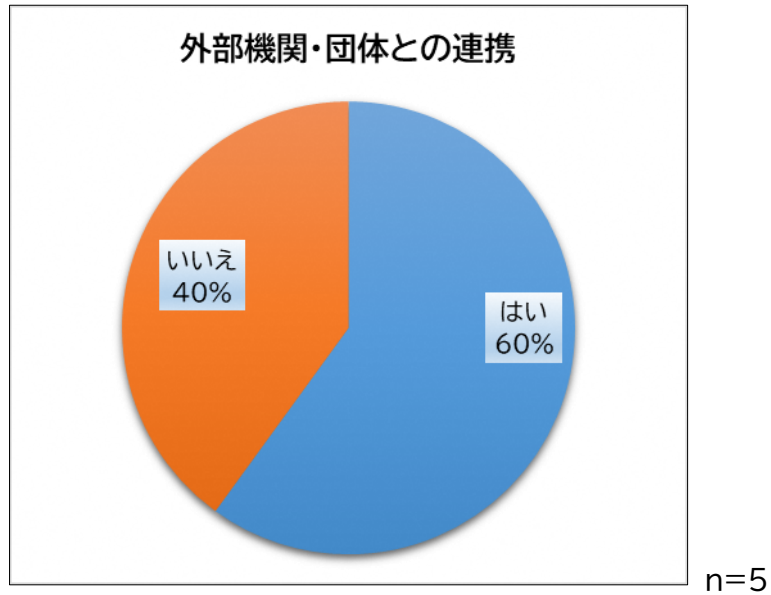
n=5

●9.その他の個別回答

○親の育児への理解不足

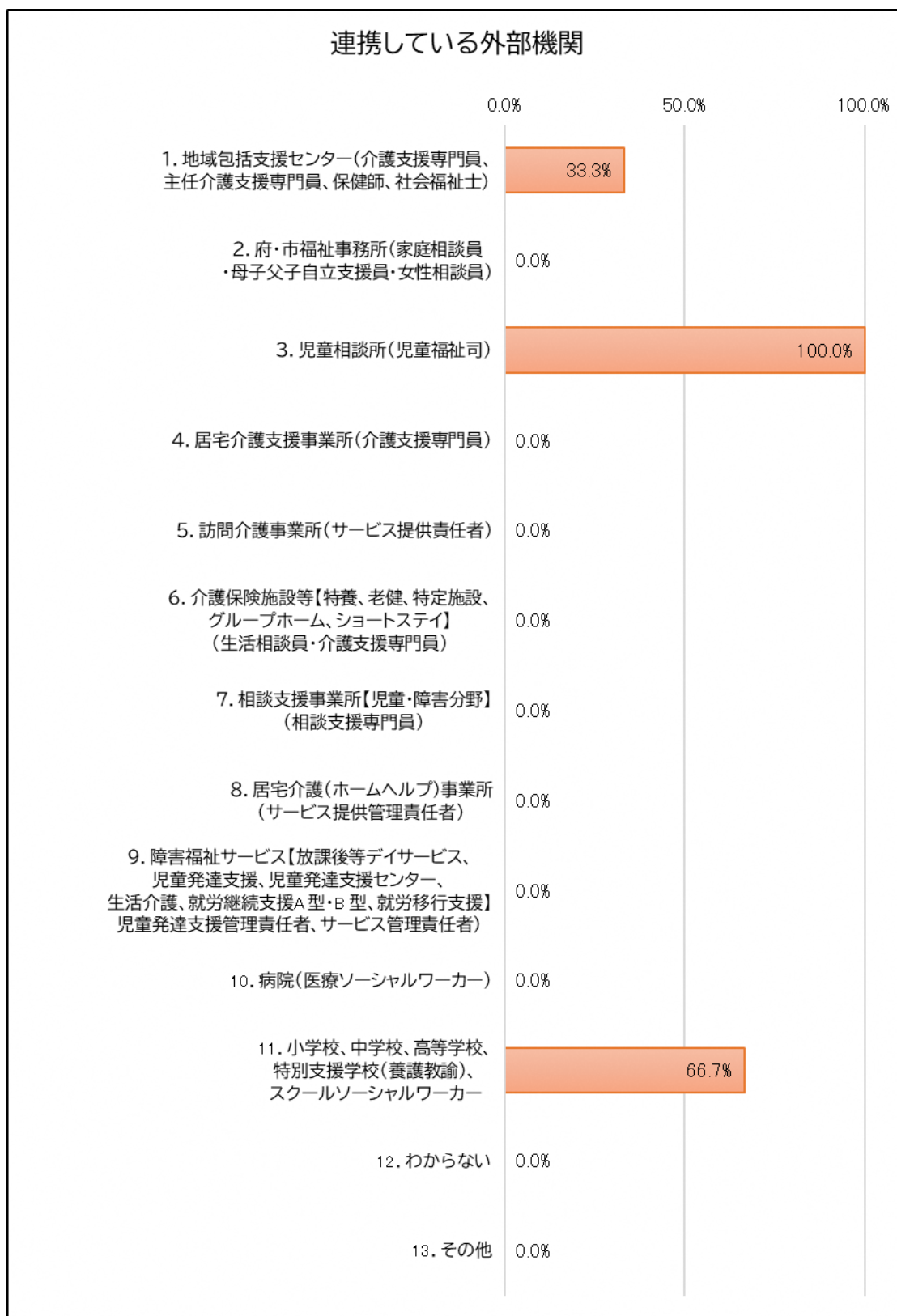
7. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ヤングケアラーと思われる子どもへの支援として、外部の支援につないだケースの有無

「はい」が 60%、「いいえ」が 40%となっており、外部機関・団体と連携しているケースが多い結果となっている。



8. 【設問7】で「外部機関・団体と連携している」と回答したもののうち、ヤングケアラーと思われる子どもへの支援として、連携している外部機関・団体(複数選択)

最も多いのは「児童相談所(児童福祉司)」で 100%であった。次いで、「小学校、中学校、高等学校、特別支援学校(養護教諭)、スクールソーシャルワーカー」が 66.7%となっている。



n=3

9. 【設問7】で「外部機関・団体と連携している」と回答したもののうち、連携している理由及びきっかけ

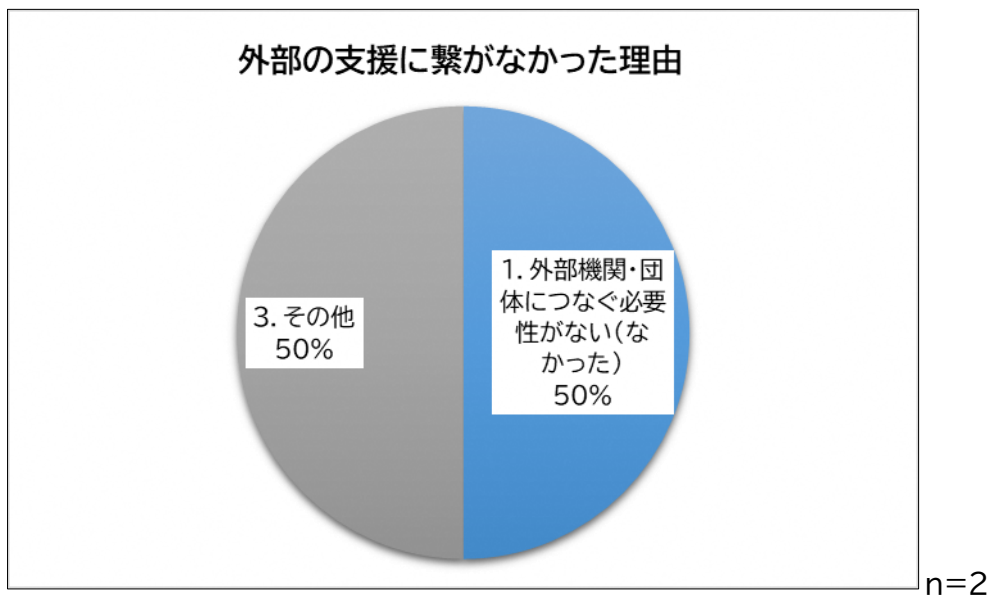
<主な事例>

○となとなと連携している。

○他市からの引き継ぎもあり、要保護児童対策地域協議会の見守り対象となる。

10. 【設問7】で「外部機関・団体と連携していない」と回答したもののうち、外部の支援につながらなかった理由及び対応方法(複数選択)

「外部機関・団体につなぐ必要がない(なかった)」、「その他」ともに 50%という結果になった。その他の回答では「ヤングケアラーかどうか分からない」ということが主な理由であった。



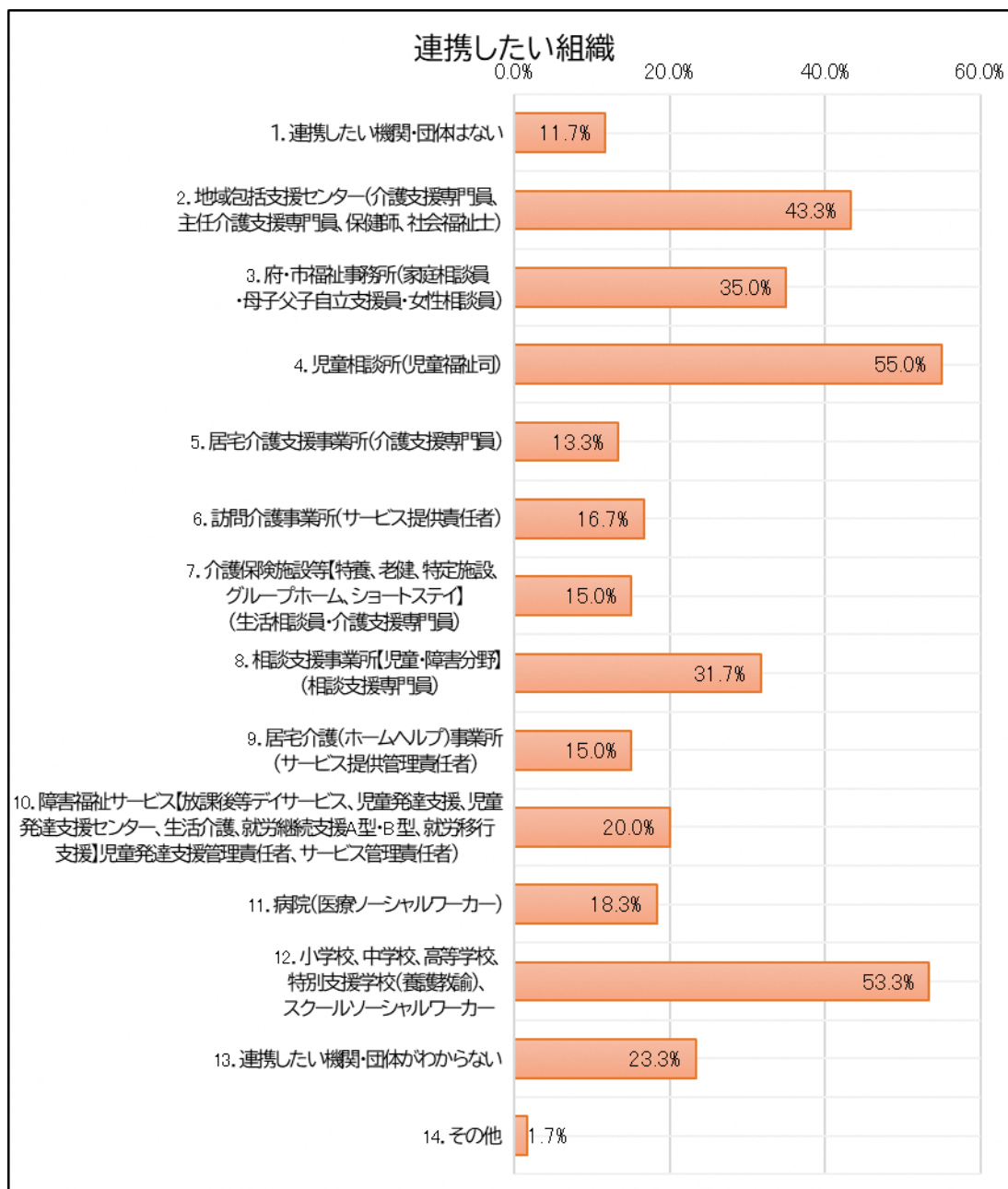
●その他の個別回答

○お手伝いとヤングケアラーの線引きが分かりづらい

○家庭の中の状況が見えにくい

11. ヤングケアラーと思われる子どもへの支援として、連携したい機関・団体の有無(複数回答)

最も多いのは「児童相談所(児童福祉司)」で 55%であった。次いで、「小学校、中学校、高等学校、特別支援学校(養護教諭)、スクールソーシャルワーカー」が 53.3%、「地域包括支援センター(介護支援専門員、主任介護支援専門員、保健師、社会福祉士)」が 43.3%と続いている。



n=60

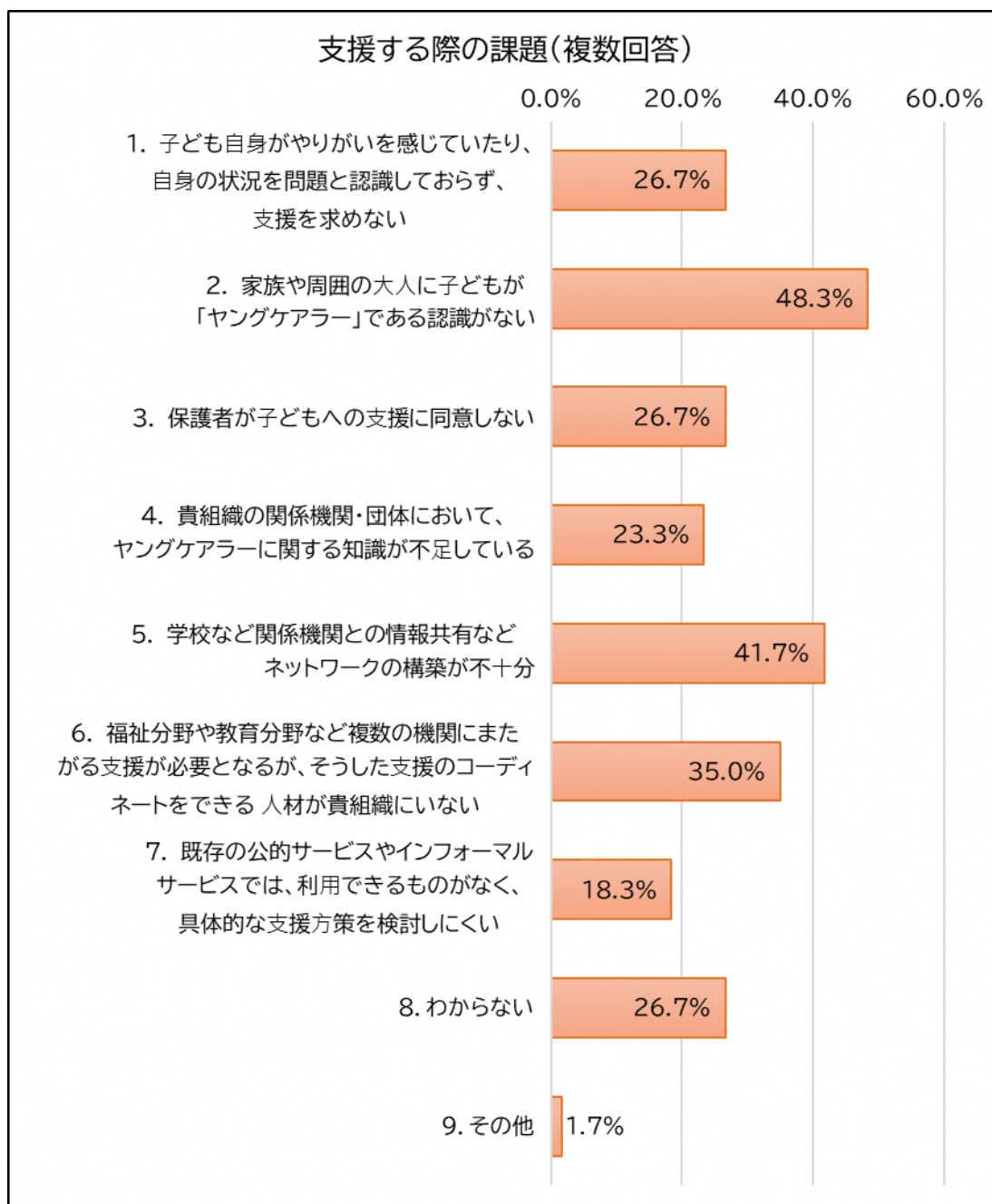
12.【設問11】で「連携したい機関・団体がある」と答えたもののうち、その理由

<主な意見>

- 1機関では支援を行えないため
- 社会や地域全体で取り組む必要があるため
- 専門的な立場からアドバイスがほしいため
- 子ども支援だけでなく、保護者支援も必要であると考えするため
- すでに連携した取り組みを行っている等身近な機関であるため
- 子どもや家庭に必要な支援はさまざまな機関が行っているため
- 普段から関わりのある機関の方がアプローチしやすいため
- 状況を把握し支援の検討を行うには情報共有が必要であるため
- 一番身近な人が気づき、話を聞いていくことが大事であるため

13. 「ヤングケアラー」と思われる子どもに対して支援をする際に、課題として考えられること。
(複数回答)

最も多いのは「家族や周囲の大人に子どもが「ヤングケアラー」である認識がない」で48.3%であった。次いで、「学校など関係機関との情報共有などネットワークの構築が不十分」が41.7%、「福祉分野や教育分野など複数の機関にまたがる支援が必要となるが、そうした支援のコーディネートができる人材が貴組織にいない」が35%と続いている。



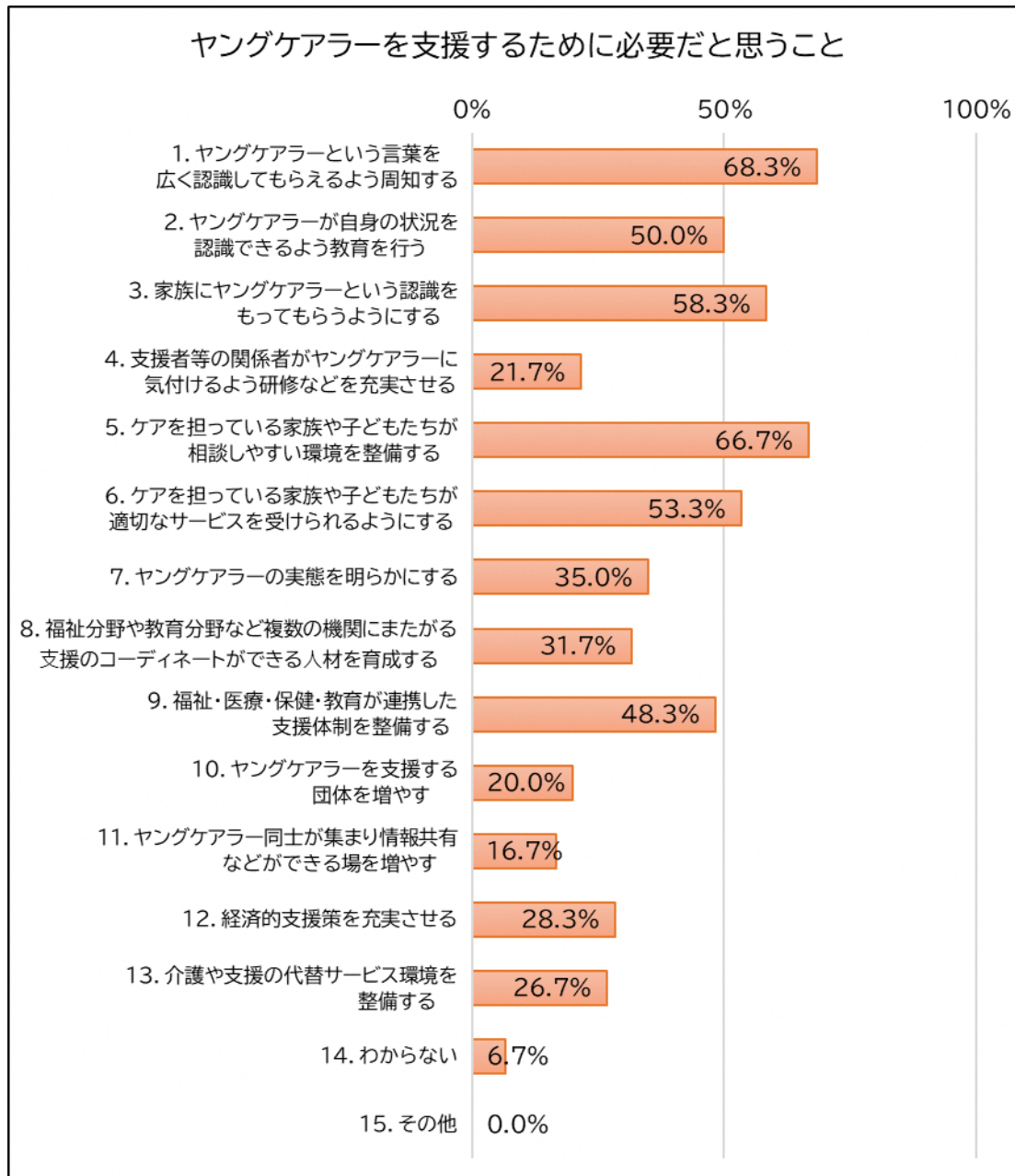
n=60

●9.その他の個別回答

○管理職が知識を深め職員に伝えていく必要がある

14. ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと(複数回答)

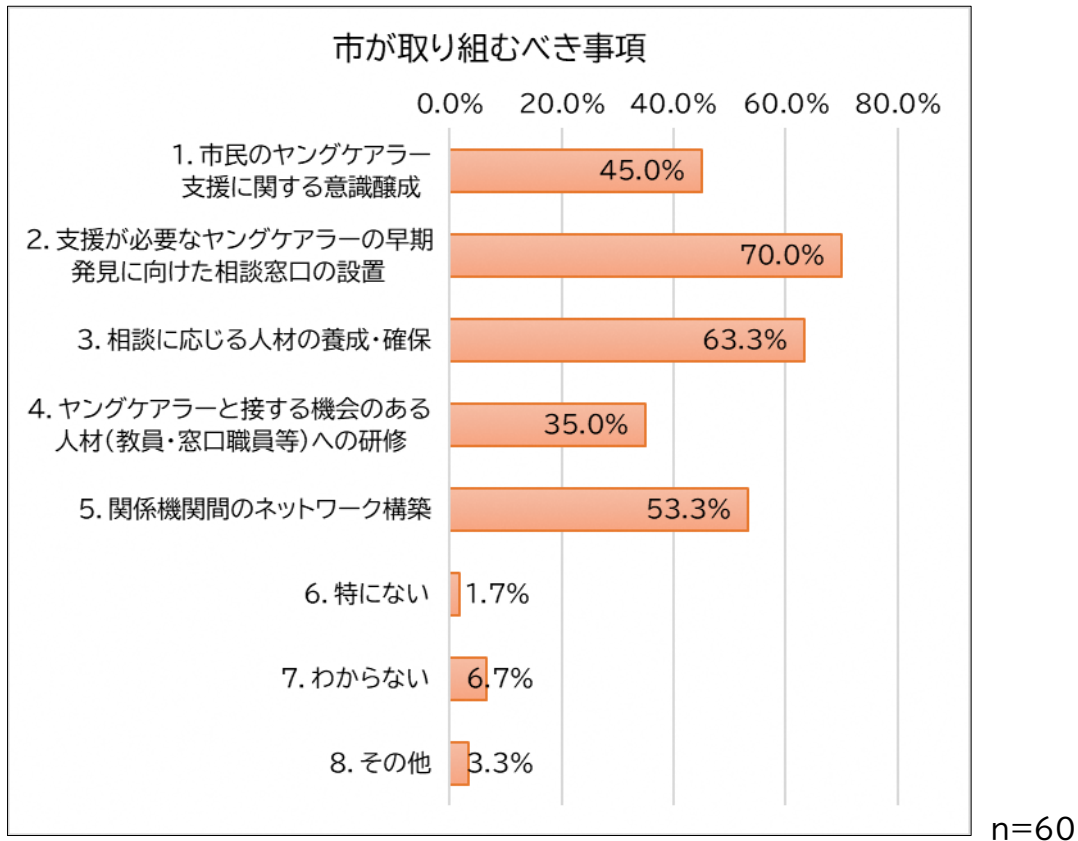
最も多いのは「ヤングケアラーという言葉を広く認識してもらえるよう周知する」で 68.3%であった。次いで、「ケアを担っている家族や子どもたちが相談しやすい環境を整備する」が 66.7%、「家族にヤングケアラーという認識をもってもらうようにする」が 58.3%と続く。



n=60

15. 支援を実現するため、市が取り組むべきと考えること(複数選択)

市が取り組むべき事項として最も多いのは「支援が必要なヤングケアラーの早期発見に向けた相談窓口の設置」で 70%であった。次いで、「相談に応じる人材の養成・確保」が 63.3%となっている。



●8.その他の個別回答

- 日々の対応に追われており、きちんとした人員の確保や育成を進めてほしい
- どこまで情報共有してよいか指針を示してほしい

16. ヤングケアラーに関してご自由に意見をお書きください。 20件

<主な意見>

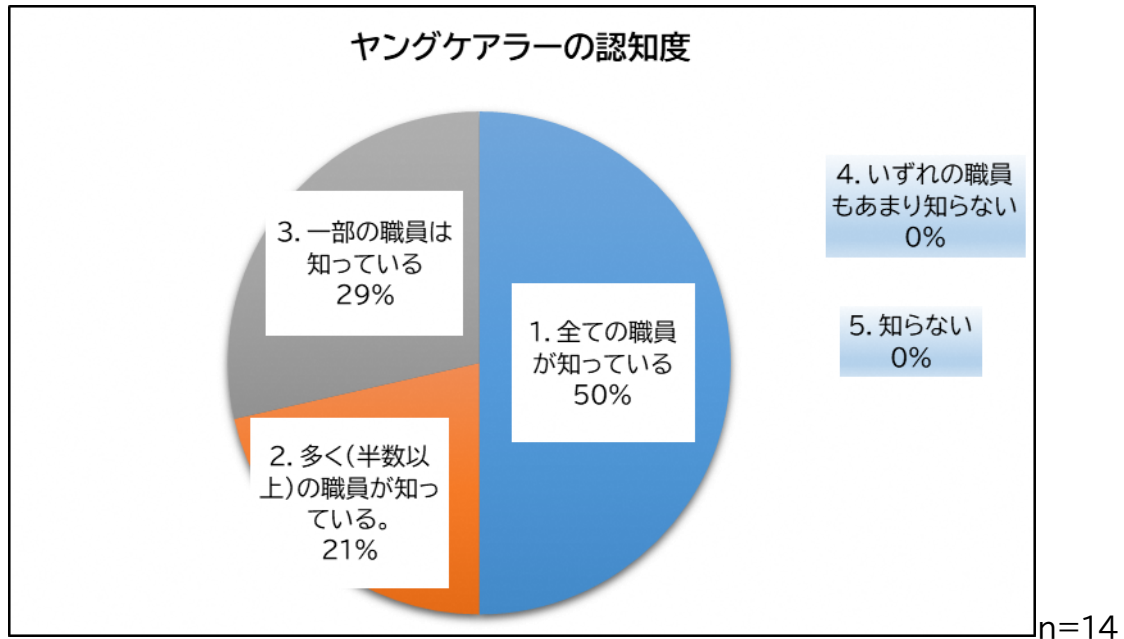
- ヤングケアラー＝マイナスのイメージがつくと家族間の関係が崩れるのではないか
- お手伝いと線の引きが難しい
- 家庭の中への介入の難しさがある
- 周囲の大人が気づけるための周知啓発
- 直接的支援の充実
- 本人の自覚・認識を促す必要がある
- この調査によりヤングケアラーの理解が深まった
- これまでは無縁だと思っていたが自分たちにも家族支援などできることがあると思った

8. 関係機関(相談支援機関) アンケート結果について

関係機関(相談支援機関)調査の結果(単純集計)

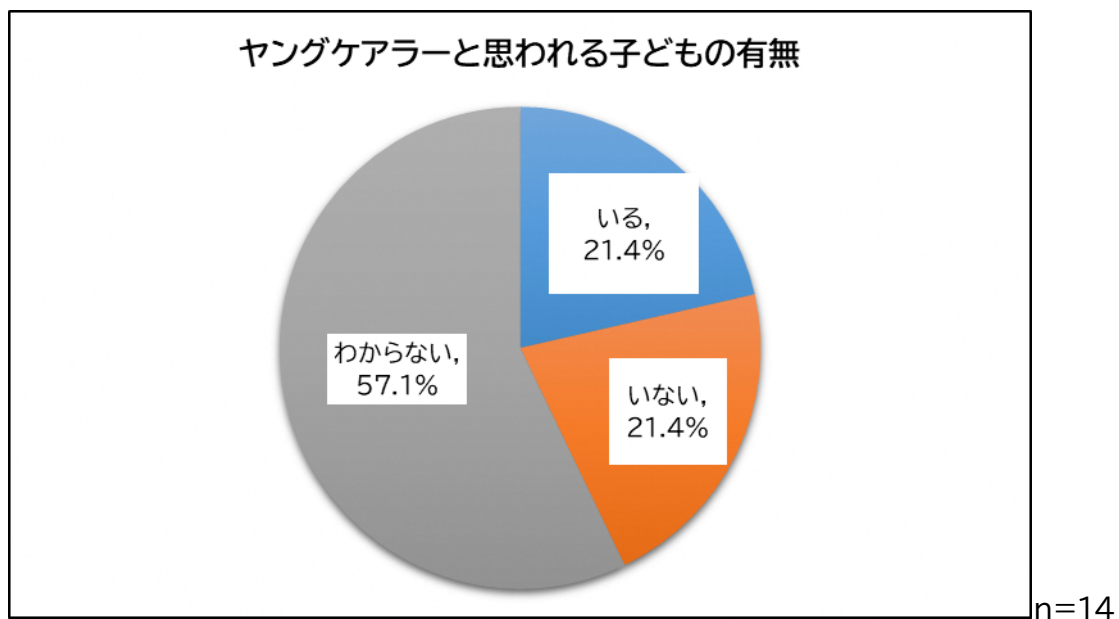
1. ヤングケアラーの認知度

最も多いのは「全ての職員が知っている」の 50%であった。次いで、「一部の職員は知っている」29%、「多く(半数以上)の職員が知っている」21%と続いており、相談支援機関における認知度は高い結果となっている。



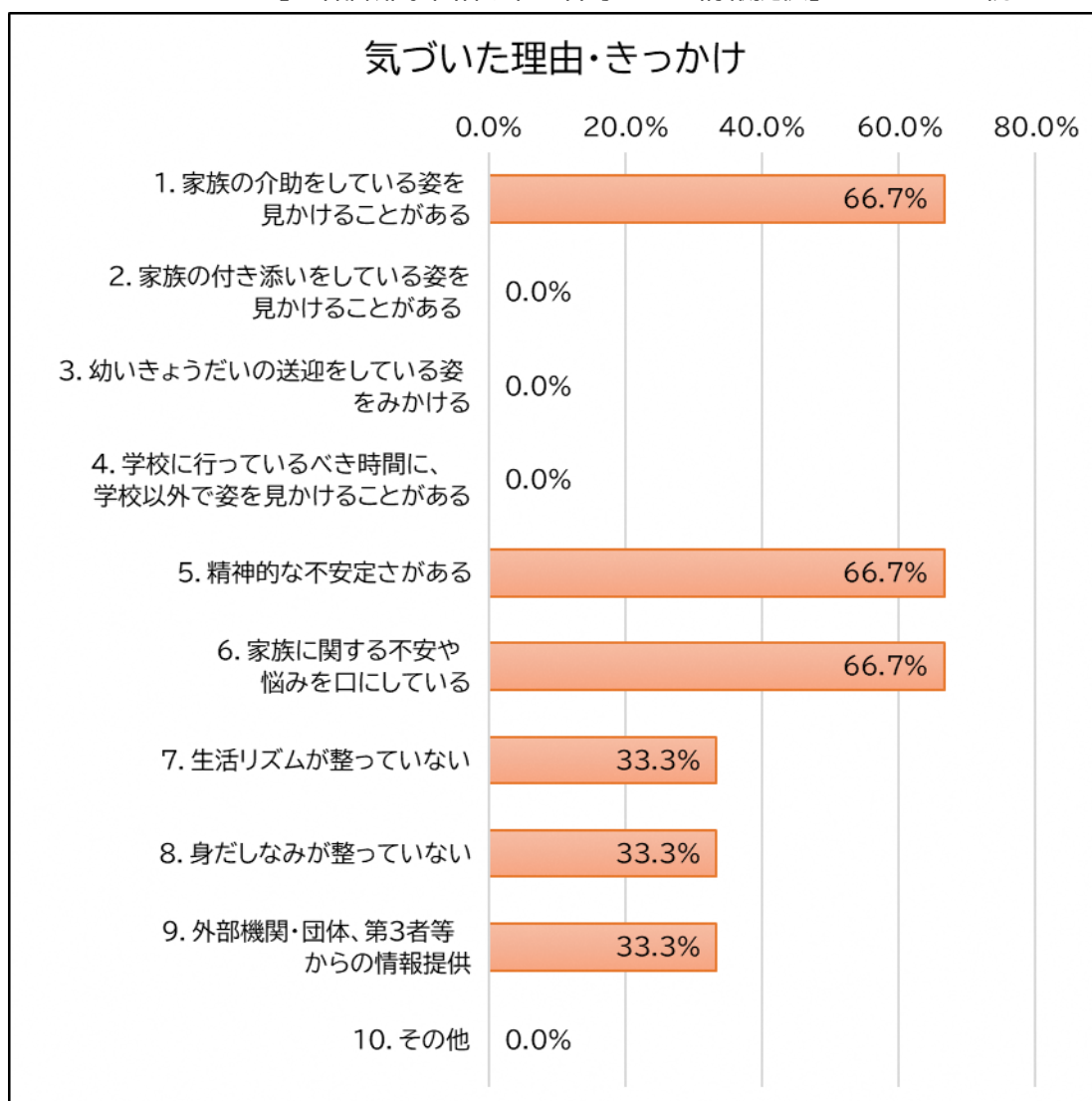
2. ヤングケアラーと思われる子どもの有無

「ヤングケアラー」の説明を見て、現在関わっている子どもや家庭で該当する子どもの有無を聞いたところ、「わからない」が57%で最も多い。次いで、「いる」が22%で、実態を把握している組織のうち、約半数となっている。



3. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ヤングケアラーと気づいたきっかけ
(複数回答)

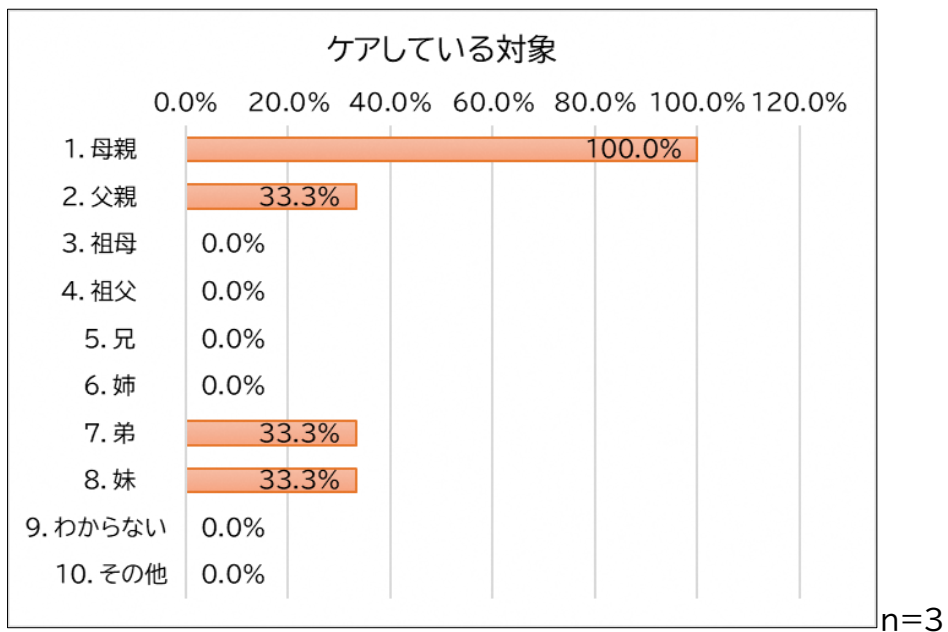
「家族の介助をしている姿を見かけることがある」「精神的な不安定さがある」「家族に関する不安や悩みを口に出している」が 66.7%で最も多く、次いで「生活リズムが整っていない」「身だ
しなみが整っていない」「外部機関・団体、第三者等からの情報提供」が 33.3%と続いている。



n=3

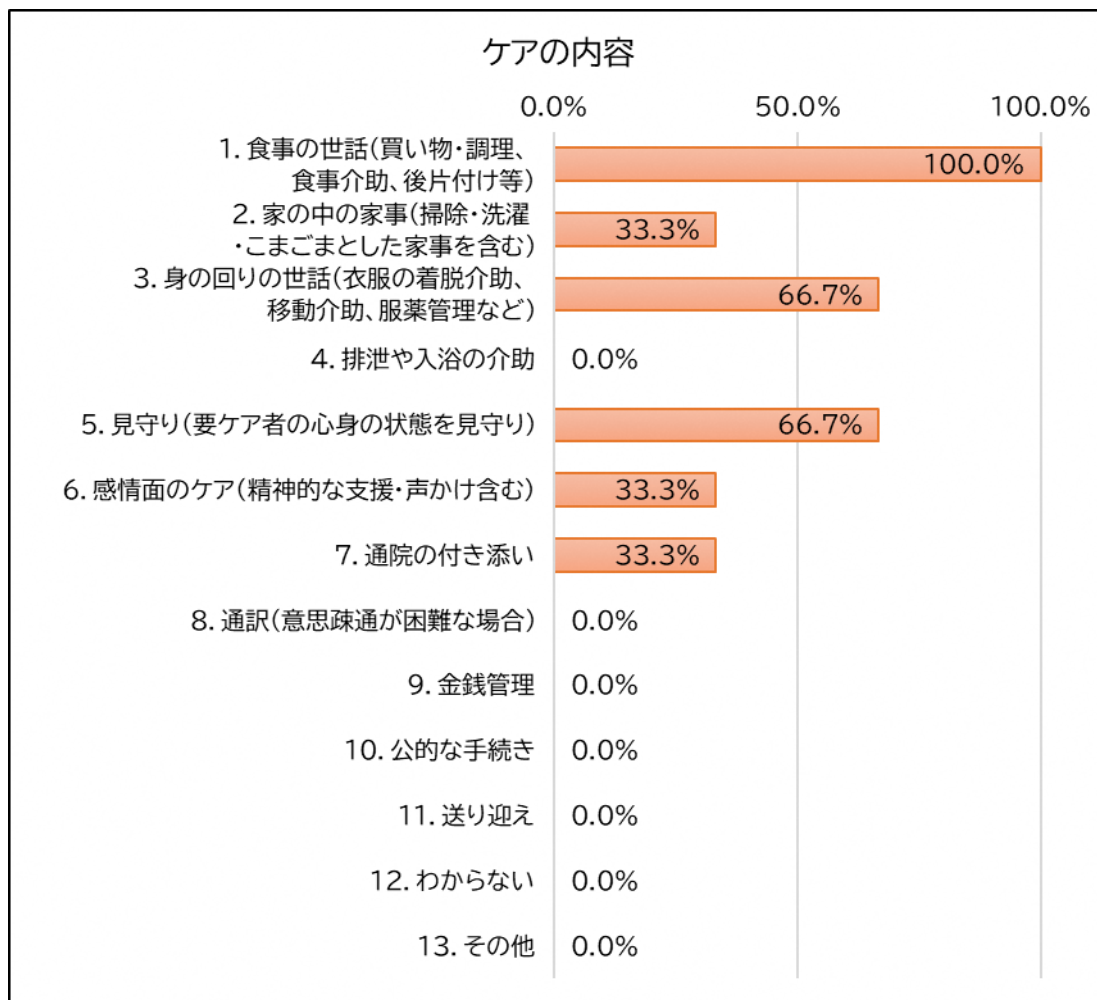
4. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアを必要としている人
(複数回答)

最も多いのは「母親」で 100%であった。次いで、「父親」「弟」「妹」が 33.3%で並んでいる。



5. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアの内容（複数回答）

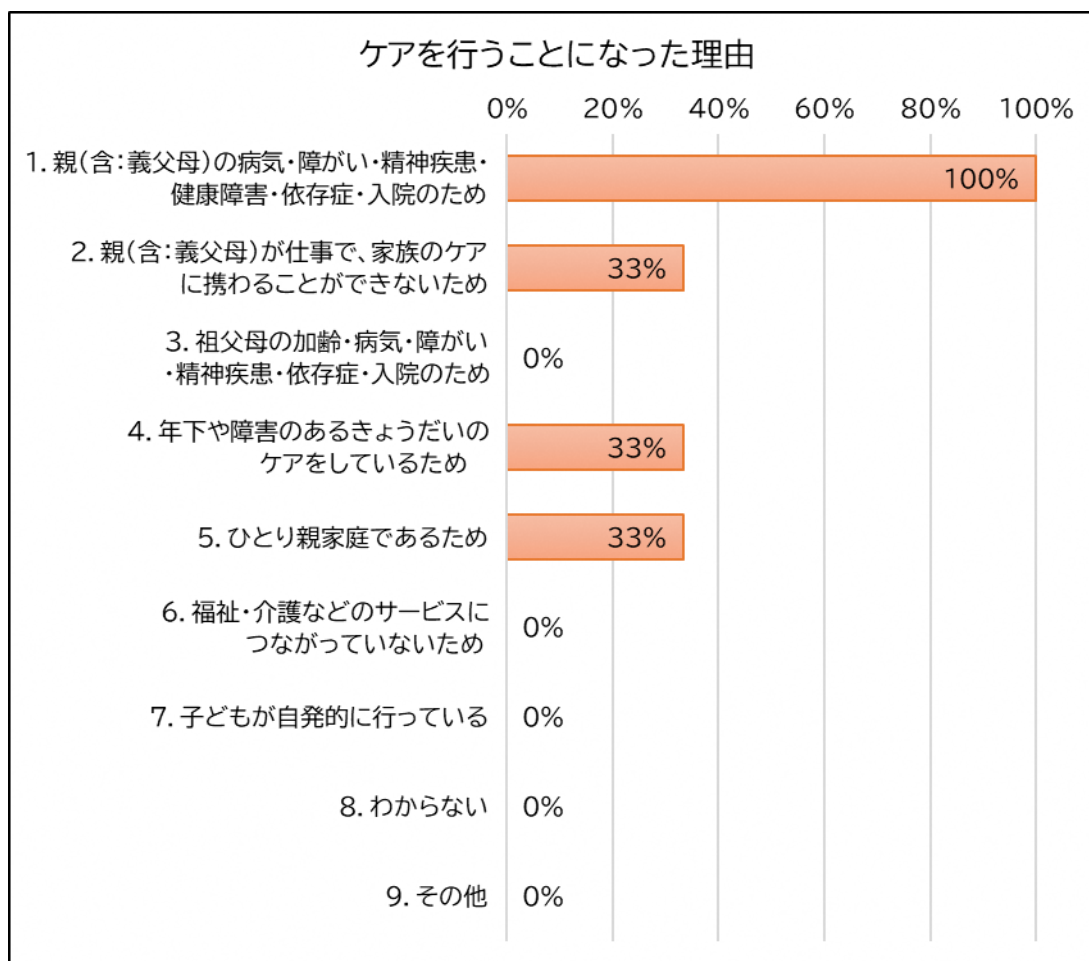
最も多いのは「食事の世話(買い物・調理、食事介助、後片付け等)」で 100%であった。次いで、「身の回りの世話(衣服の着脱介助、移動介助、服薬管理など)」「見守り(要ケア者の心身の状態を見守り)」が 66.7%となっている。



n=3

6. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアを行うことになった理由(複数回答)

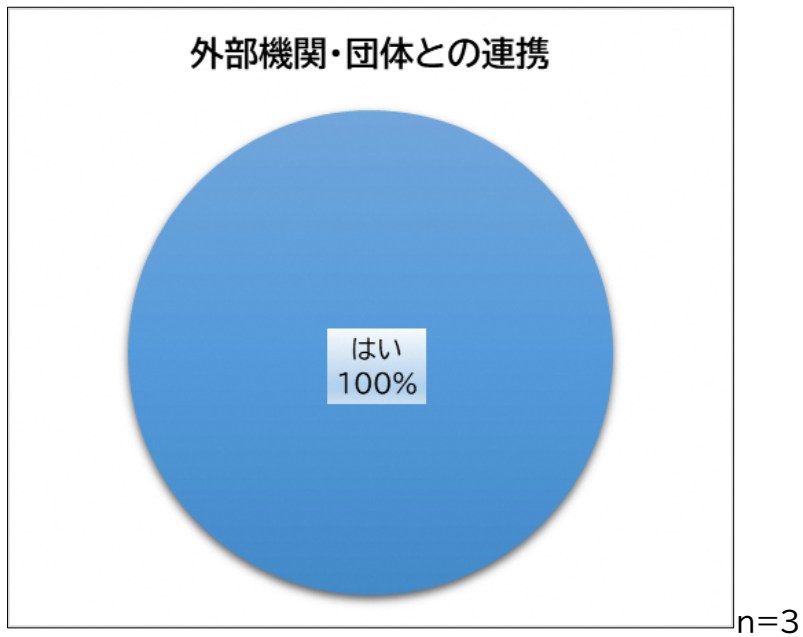
最も多いのは「親(含:義父母)の病気・障がい・精神疾患・健康障害・依存症・入院のため」で100%であった。次いで、「親(含:義父母)が仕事で、家族のケアに携わることができないため」「年下や障害のあるきょうだいのケア」「ひとり親家庭」が33%となっている。



n=3

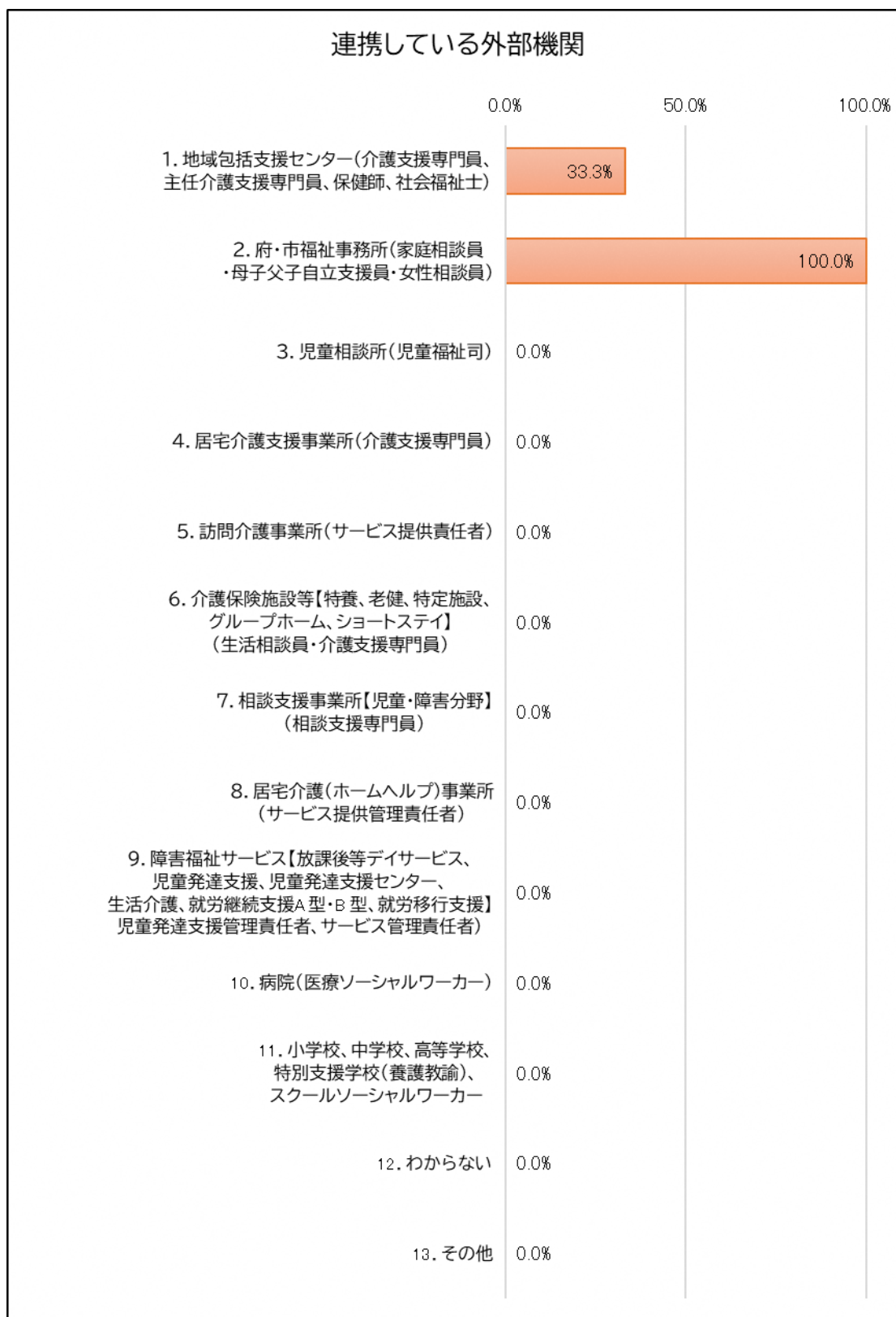
7. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ヤングケアラーと思われる子どもへの支援として、外部の支援につないだケースの有無

100%が外部機関・団体と連携しているとの結果であった。



8. 【設問7】で「外部機関・団体と連携している」と回答したもののうち、ヤングケアラーと思われる子どもへの支援として、連携している外部機関・団体(複数選択)

最も多いのは「府・市福祉事務所(家庭相談員・母子父子自立支援員・女性相談員)」で100%であった。次いで、「地域包括支援センター(介護支援専門員、主任介護支援専門員、保健師、社会福祉士)」が33.3%となっている。



n=3

9. 【設問7】で「外部機関・団体と連携している」と回答したもののうち、連携している理由及びきっかけ

<主な事例>

○重層的支援体制整備事業の対象者として相談に上がったため。

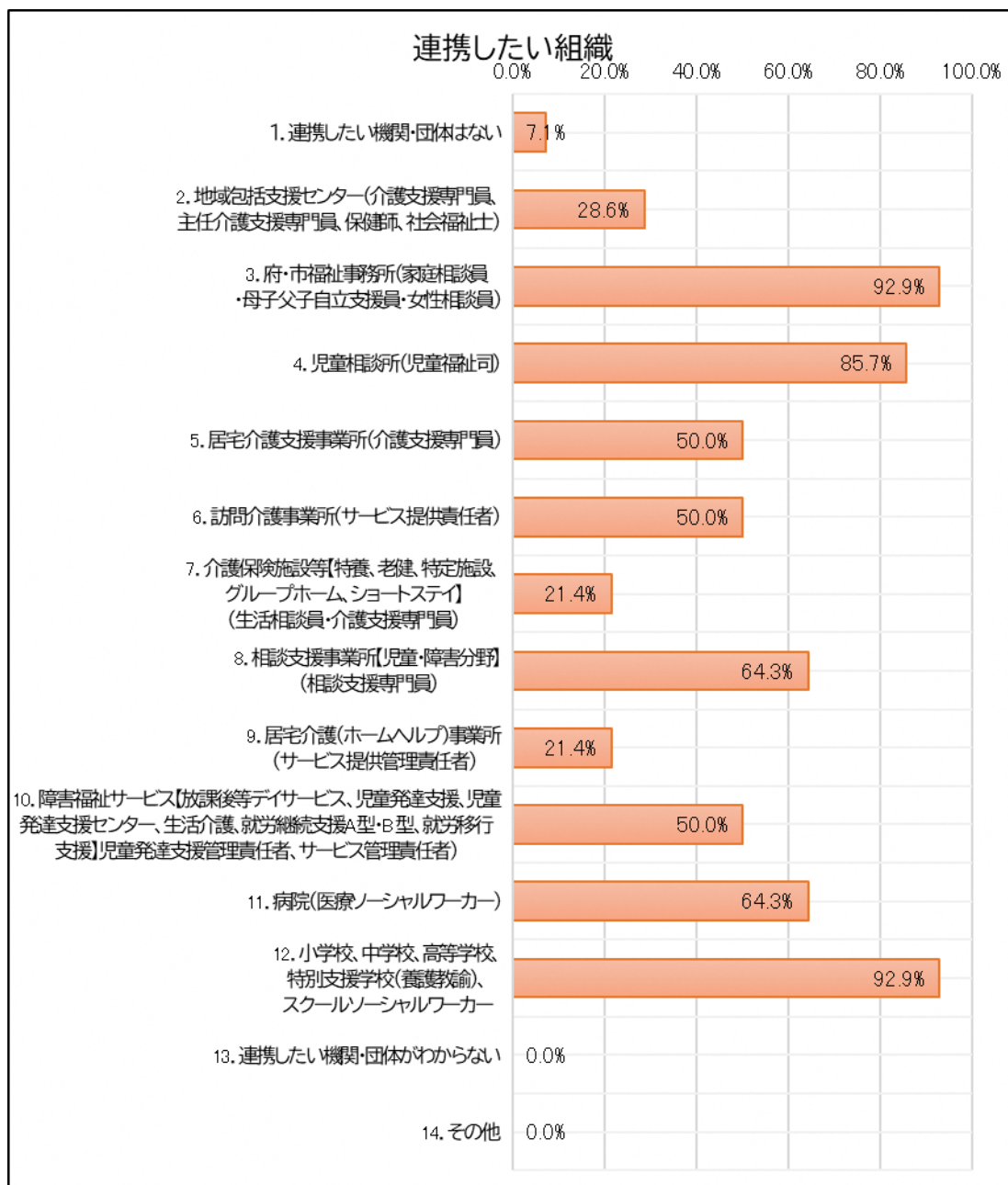
○包括的に支援しなければ支援が難しいため。

10. 【設問7】で「外部機関・団体と連携していない」と回答したもののうち、外部の支援につながなかった理由及び対応方法(複数選択)

該当なし

11. ヤングケアラーと思われる子どもへの支援として、連携したい機関・団体の有無(複数回答)

最も多いのは「府・市福祉事務所(家庭相談員・母子父子自立支援員・女性相談員)」と「小学校、中学校、高等学校、特別支援学校(養護教諭)、スクールソーシャルワーカー」で 92.9%。次いで、「児童相談所(児童福祉司)」が 85.7%であった。



n=14

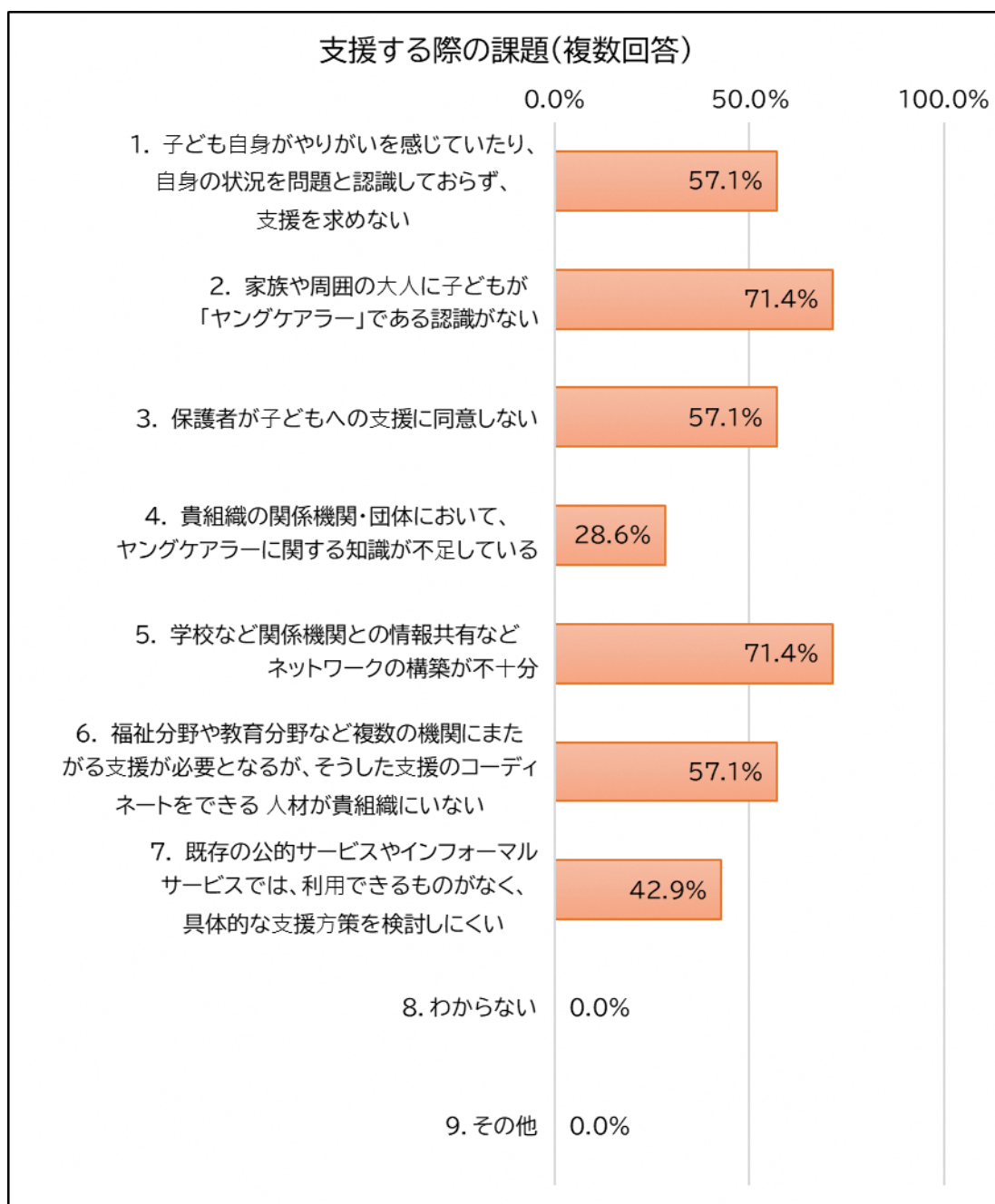
12.【設問11】で「連携したい機関・団体がある」と答えたもののうち、その理由

<主な意見>

- 1機関では支援を行えないため
- 社会や地域全体で取り組む必要があるため
- すでに連携した取り組みを行っている等身近な機関であるため
- 状況を把握し支援の検討を行うには情報共有が必要であるため

13. 「ヤングケアラー」と思われる子どもに対して支援をする際に、課題として考えられること。
(複数回答)

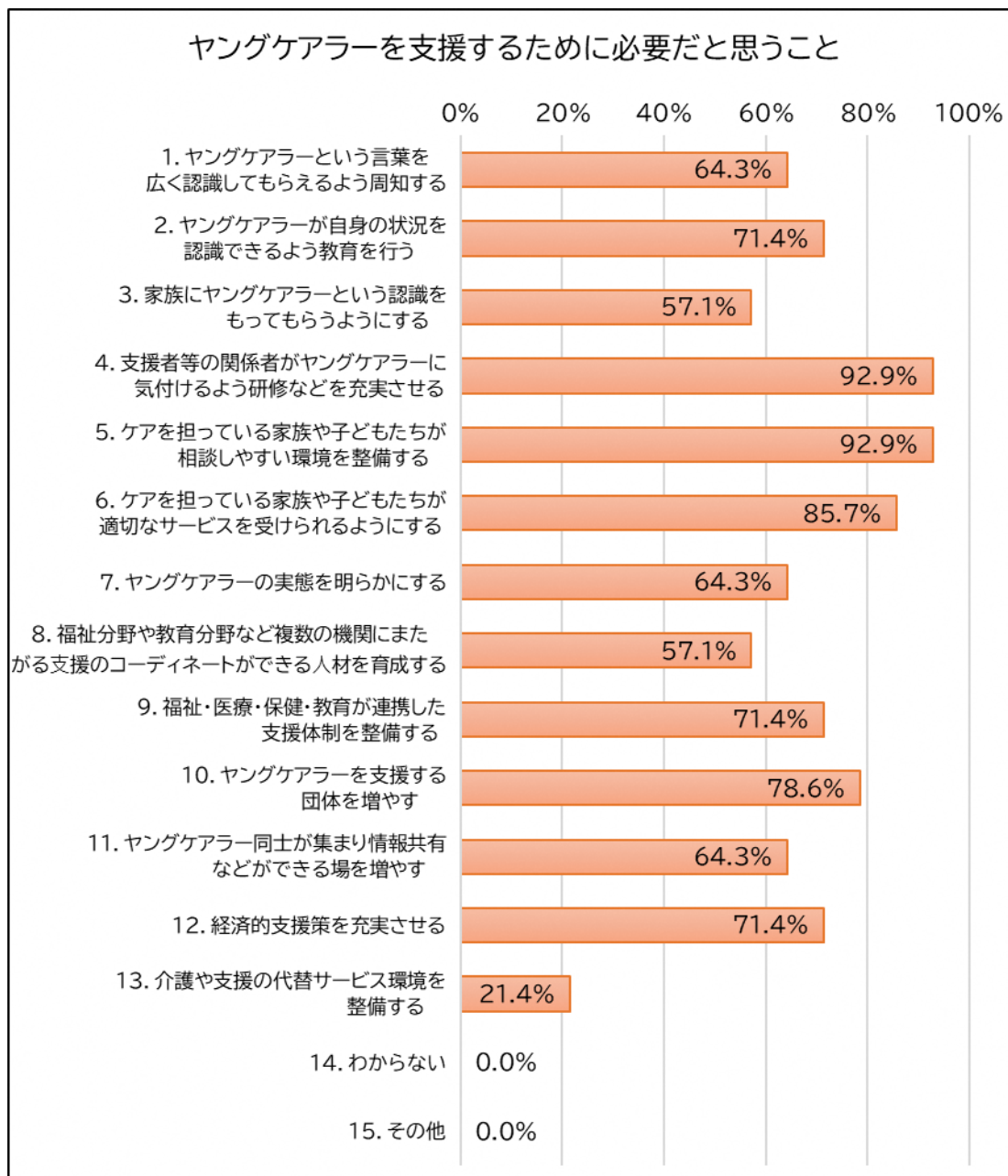
最も多いのは「家族や周囲の大人に子どもが「ヤングケアラー」である認識がない」「学校など関係機関との情報共有などネットワークの構築が不十分」が並んで 71.4%である。次いで、「子ども自身がやりがいを感じていたり、自身の状況を問題と認識しておらず、支援を求めない」「保護者が子どもへの支援に同意しない」「支援のコーディネートができる人材が貴組織にいない」との回答が多かった(57.1%)。



n=14

14. ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと(複数回答)

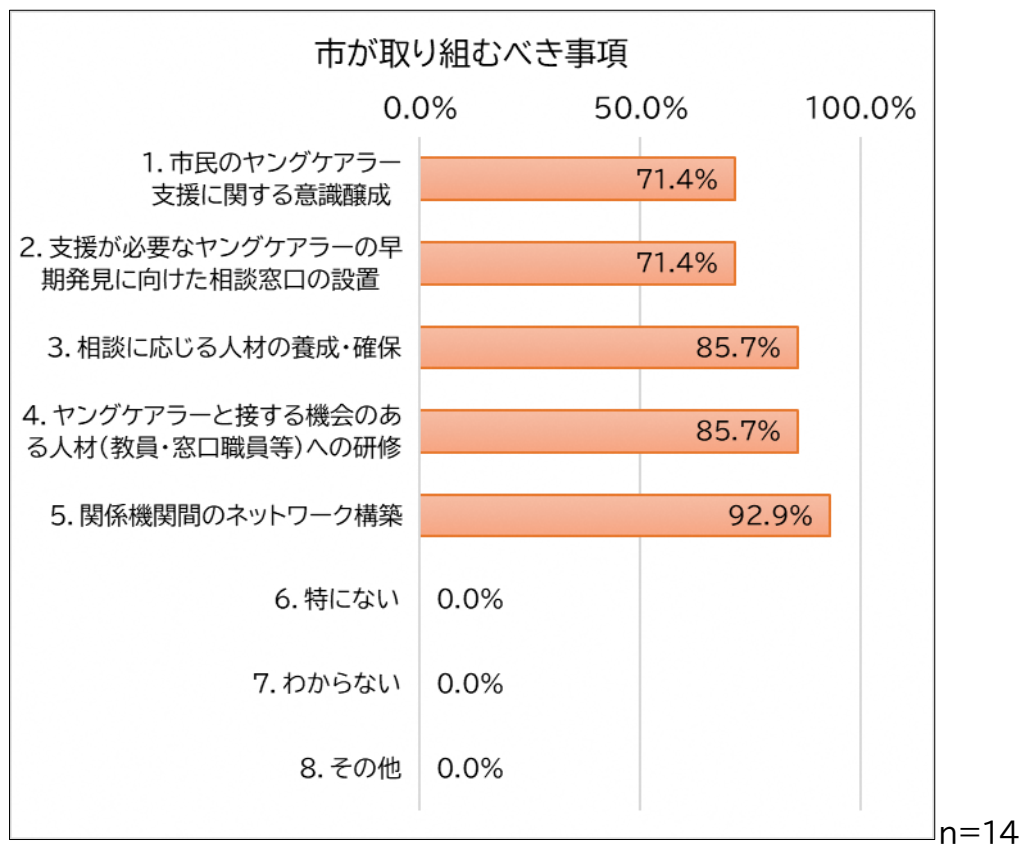
最も多いのは「支援者等の関係者がヤングケアラーに気付けるよう研修などを充実させる」「ケアを担っている家族や子どもたちが相談しやすい環境を整備する」で 92.9%であった。次いで、「ケアを担っている家族や子どもたちが適切なサービスを受けられるようにする」が 85.7%となっている。



n=14

15. 支援を実現するため、市が取り組むべきと考えること(複数選択)

最も多いのは「関係機関間のネットワーク構築」で 92.9%であった。次いで、「相談に応じる人材の養成・確保」「ヤングケアラーと接する機会のある人材(教員・窓口職員等)への研修」が 85.7%となっている。



16. ヤングケアラーに関してご自由に意見をお書きください。

○社会の認知度の向上

○情報共有など連携できる体制づくりが必要

○先進市が行っている独自事業を参考に支援策を検討すべき

○各機関が集まってどういう支援が必要か話し合える場の設定

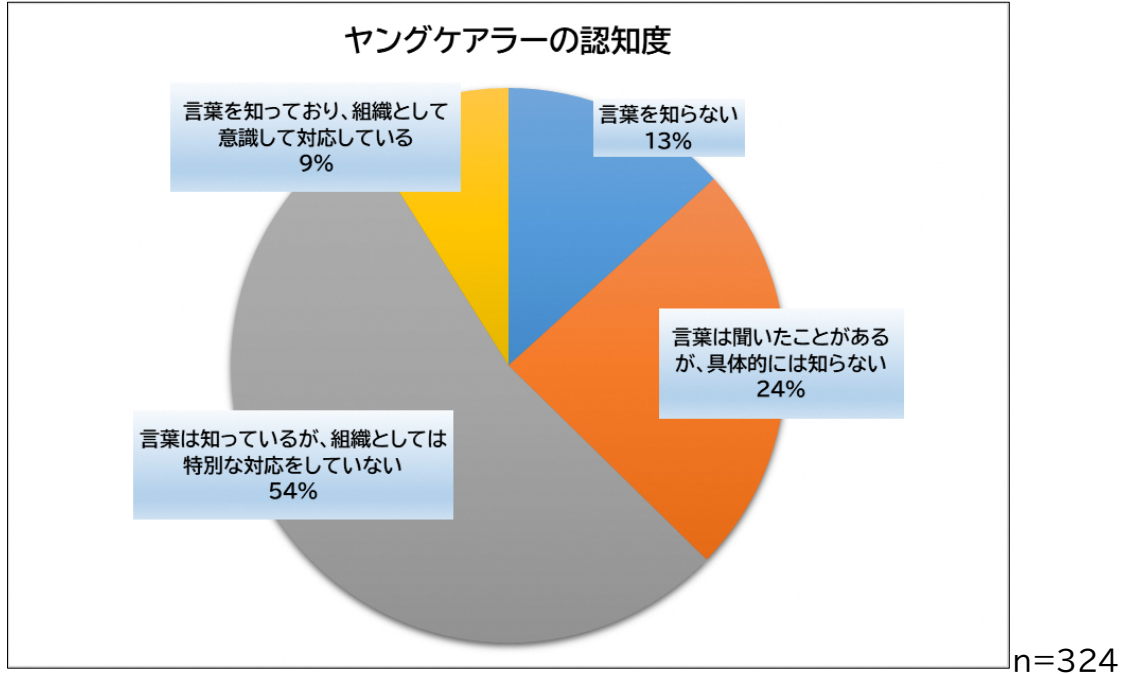
○窓口の設置が必要

9. 関係機関職員(教育・保育施設) アンケート結果について

関係機関職員(教育・保育機関)調査の結果(単純集計)

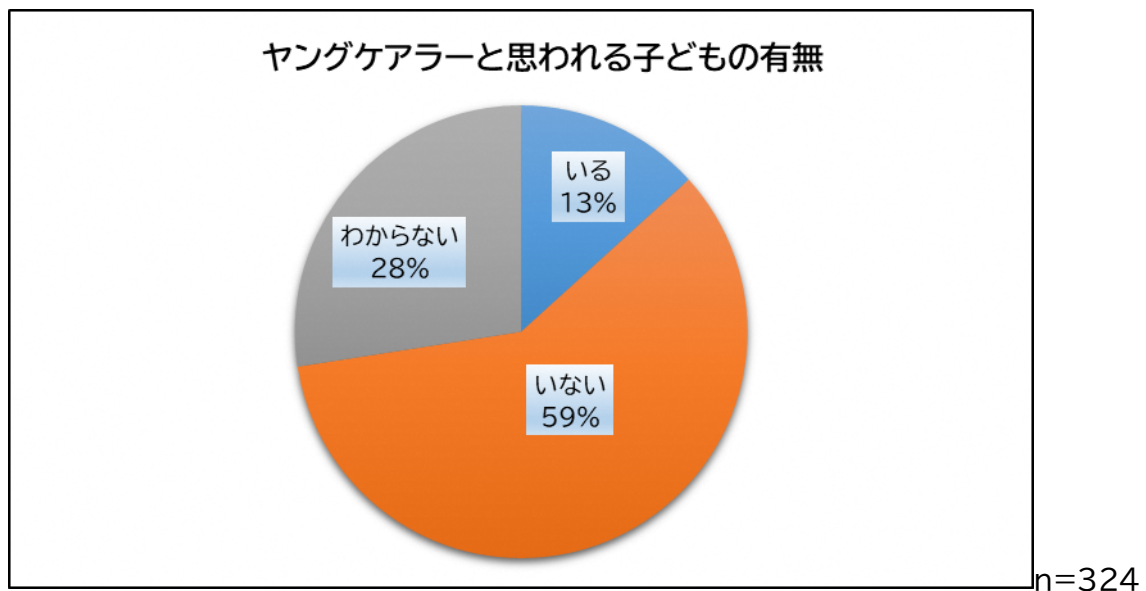
1. ヤングケアラーの認知度

最も多いのは「言葉は知っているが、組織としては特別な対応をしていない」が 54%であった。次いで、「言葉は聞いたことがあるが、具体的には知らない」が 24%となっている。



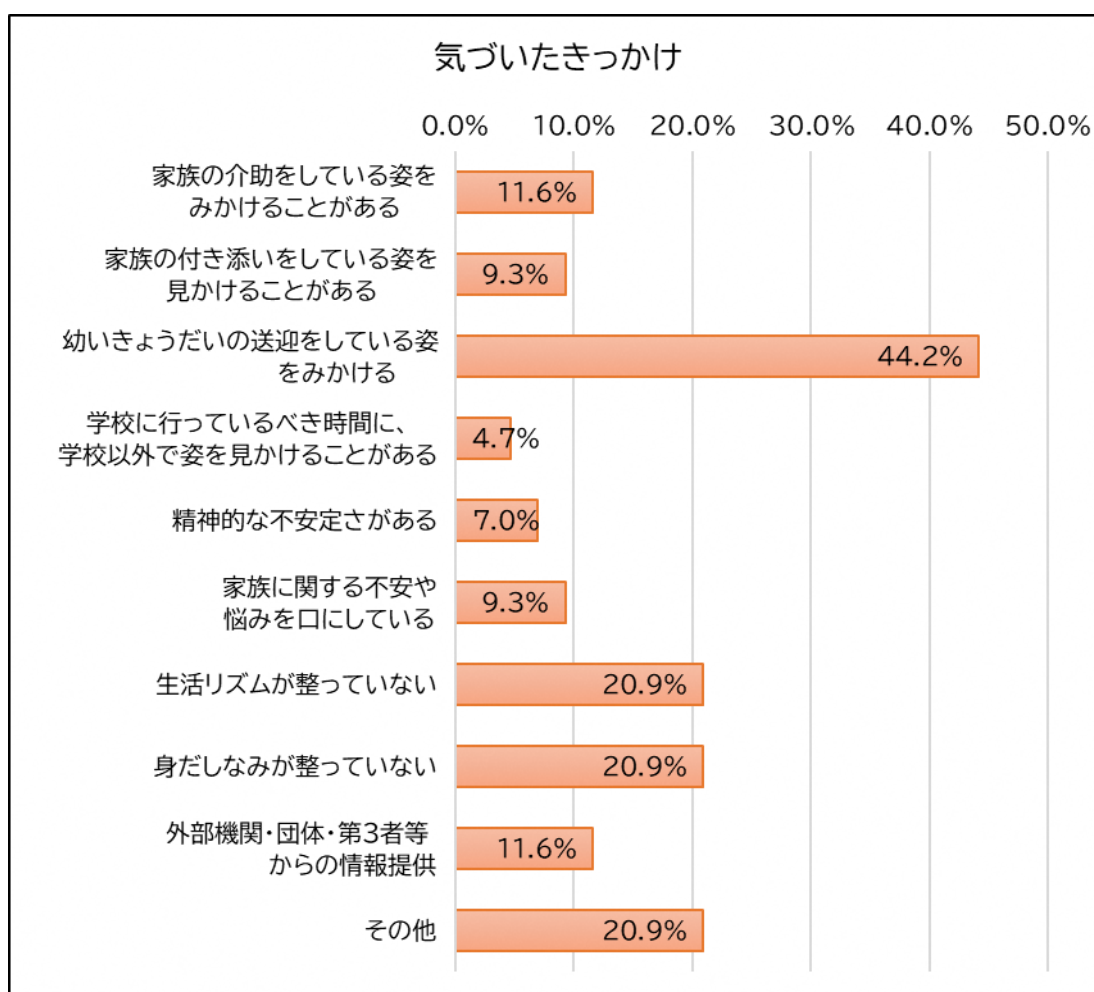
2. ヤングケアラーと思われる子どもの有無

「いない」が 59%と最も多く、次いで「わからない」が 28%、「いる」が 13%となっている。



3. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ヤングケアラーと気づいたきっかけ(複数回答)

「幼いきょうだいの世話をしている姿をみかける」が 44.2%と最も多く、「生活リズムが整っていない」「身だしなみが整っていない」「その他」が続いている。



n=43

●その他の個別回答

○休みがち

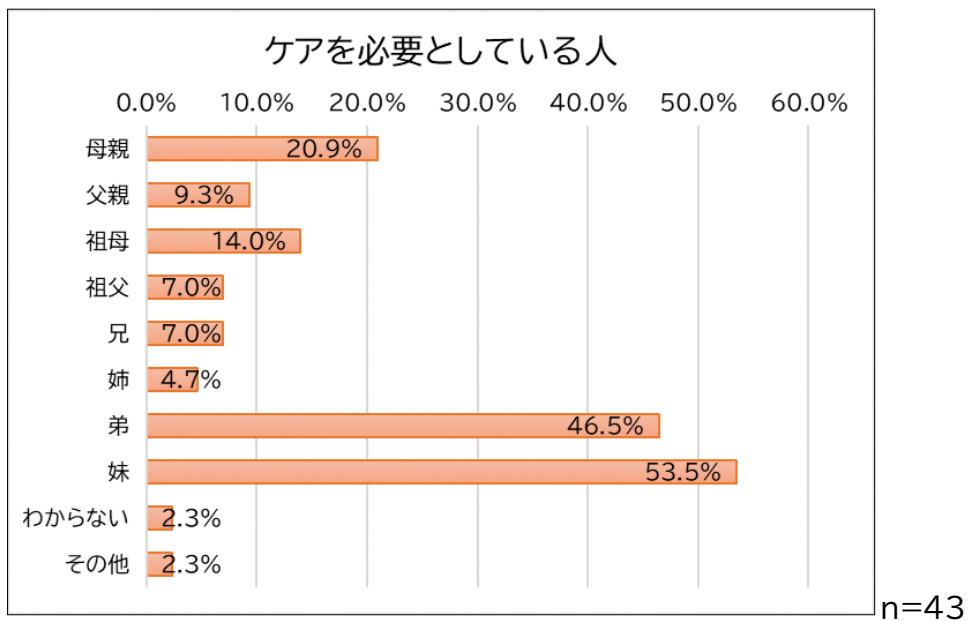
○幼いきょうだいの世話をしていることを聞いた

○「家で料理をしている」としばしば発言があり、詳しく質問すると、言葉を濁す

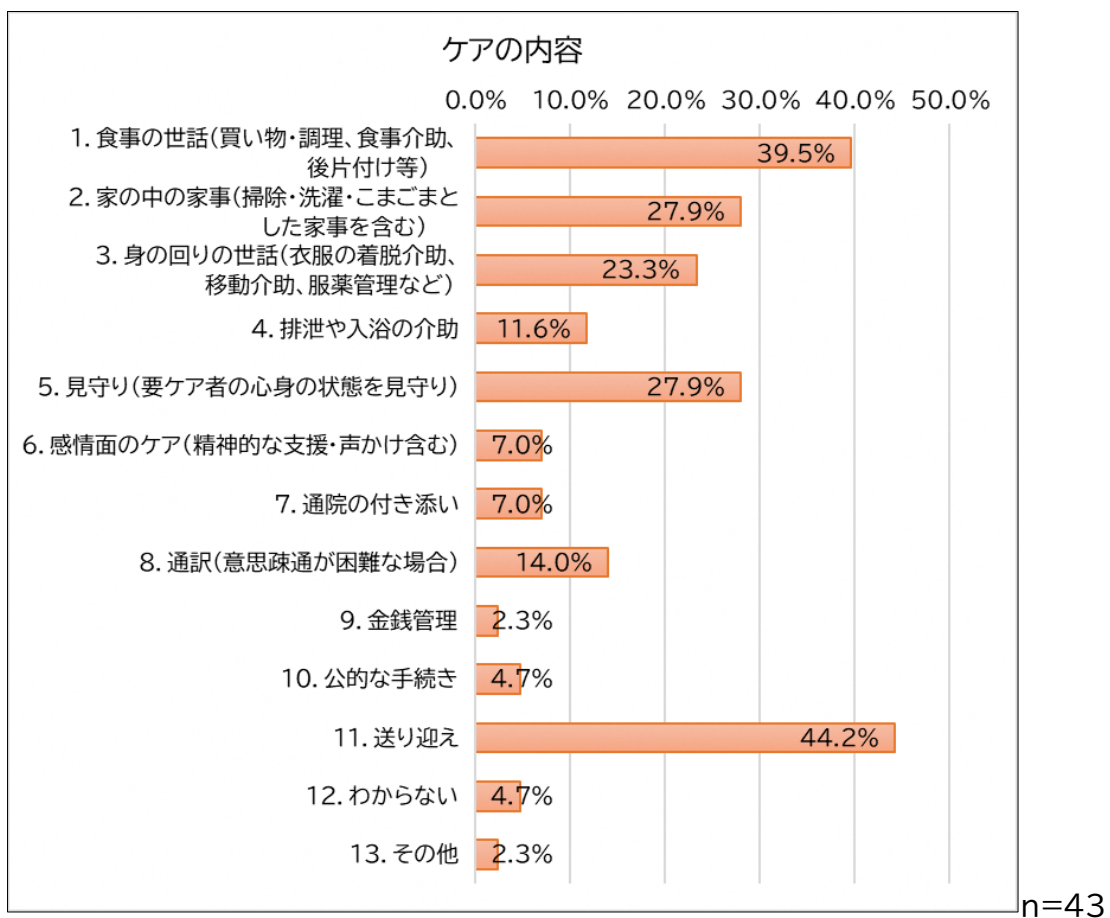
○幼いきょうだいが体調を崩すと学校を休んでいる

○ごはんを自分たちで用意している

4. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアを必要としている人(複数回答)
最も多いのは「妹」で 53.5%であった。次いで、「弟」が 46.5%となっている。



5. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアの内容(複数回答)
「送り迎え」が 44.2%と最も多く、次いで、「食事の世話」が 39.5%となっている。



6. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ヤングケアラーの把握や支援にあたって工夫していること

<主な意見>

- 保護者とも信頼関係を築き、家庭の様子を把握
- 持ち物の準備・管理状況(忘れ物など)の確認
- 会話の中で出てくる家庭の様子や家族の話題について気にかける
- 遅刻や寝不足などの時に様子を見たり、理由を聞いたりする
- 本人の情報は分からないが、幼いきょうだいが通う保育園も休みがちなため、家に電話をしたり訪ねるようにしている
- 幼いきょうだいの送迎時の際に伝達は手紙を書くなどの負担軽減や気持ちの労いを行う
- 学校との連携

7. 以下の「ヤングケアラー」と思われる子どもを把握するための主なチェック項目以外に注意すべき状況

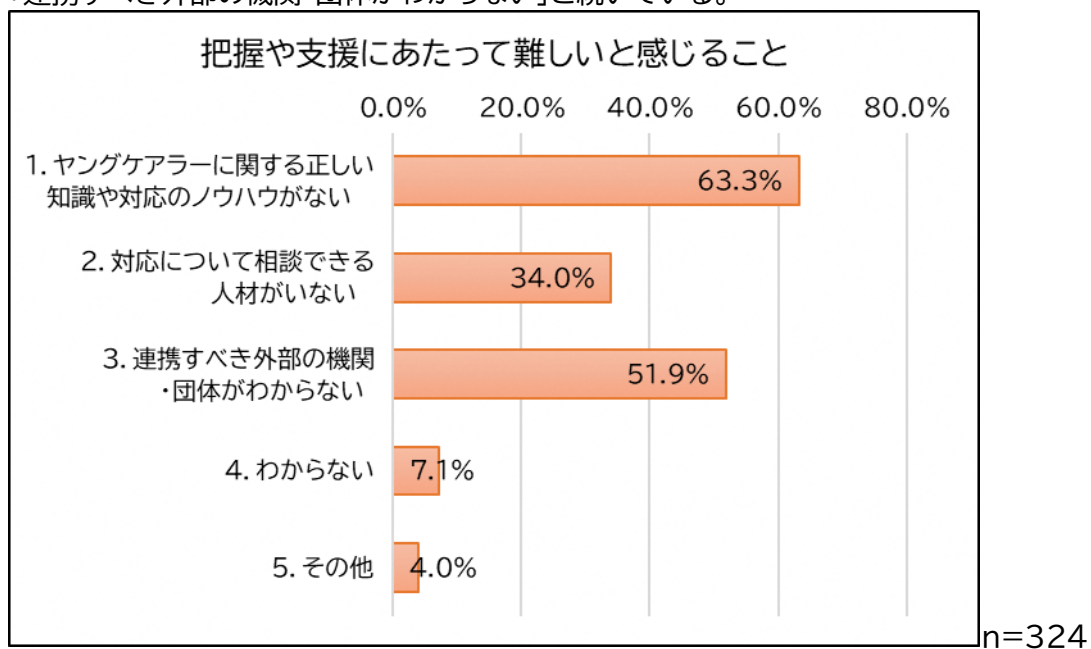
- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・家族の介助をしている姿を見かけることがある・家族の付き添いをしている姿を見かけることがある・幼いきょうだいの送迎をしている姿をみかける・学校に行っているべき時間に、学校以外で姿を見かけることがある・精神的な不安定さがある・家族に関する不安や悩みを口に出している・生活リズムが整っていない・身だしなみが整っていない |
|--|

<主な意見>

- ともだちの話が出てこない
- 幼いきょうだいだけで留守番をしている。
- 食事が摂れていない
- いつも寝不足である
- 忘れ物が多い
- 家族に代わり買い物、料理、掃除、洗濯などの家事をしている
- 必要な病院に連れて行ってもらっていない
- 学校に行けていない

8. ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じること(複数回答)

「ヤングケアラーに関する正しい知識や対応のノウハウがない」が 63.3%と最も多く、「連携すべき外部の機関・団体がわからない」と続いている。



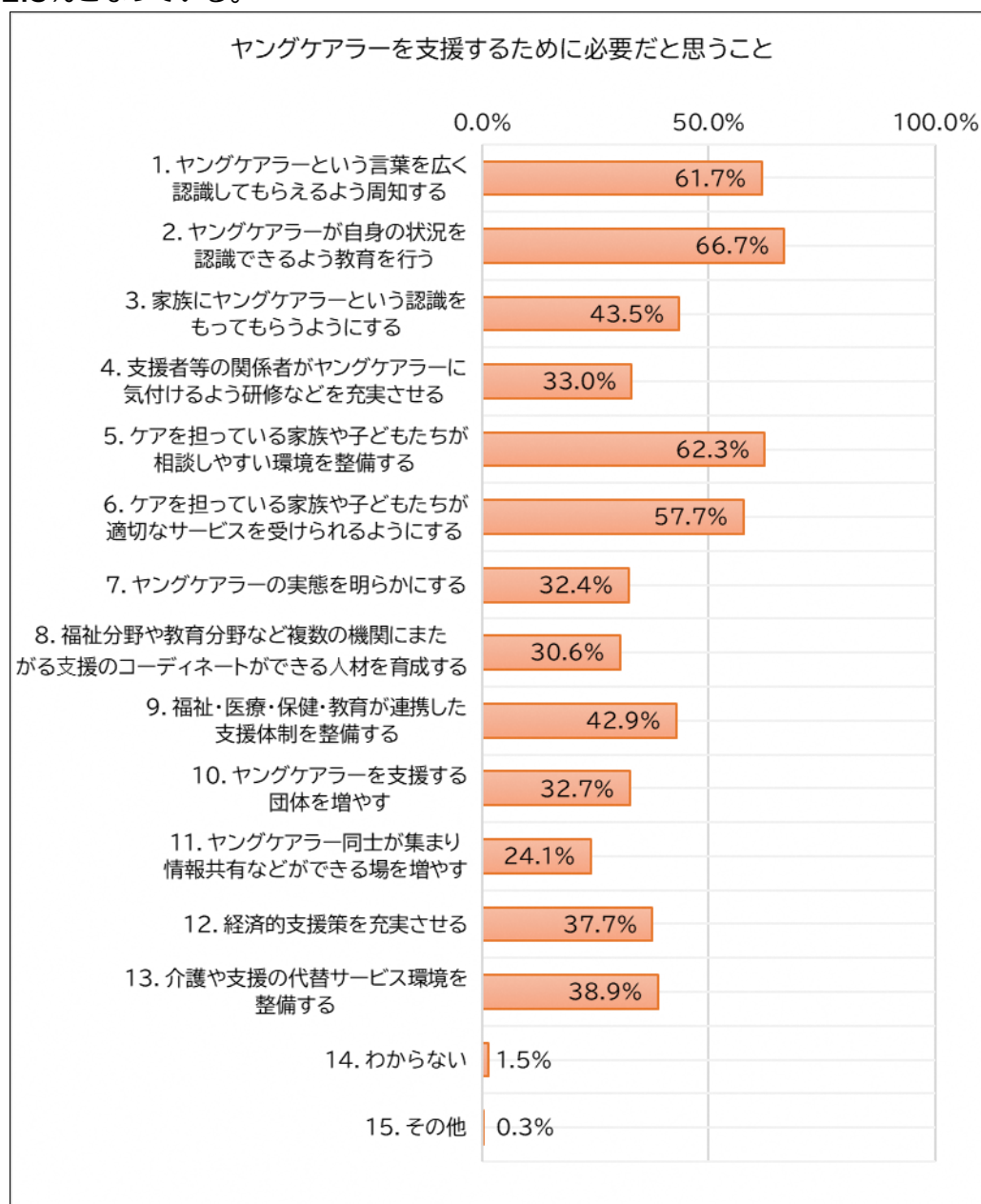
●その他の個別回答

<主な意見>

- 保護者対応が難しい
- どこまで突っ込んで聞いて良いのかわからない
- 他機関と上手く連携ができない
- 本人は助けてもらいたくても、当事者家族が助けを必要と思わない
- 家庭内の役割分担の範囲なのか、判断が難しい
- 家の中の様子が見えづらく話さなければ分からない

9. 今後の支援策として必要と思われること

最も多いのは「ヤングケアラーが自身の状況を認識できるよう教育を行う」で 66.7%であった。次いで、「ケアを担っている家族や子どもたちが相談しやすい環境を整備する」が 62.3%となっている。



n=324

●その他の個別回答

○子どもがケアを担わなくていいように、介護や支援のサービスを充実させる

○親を対象に、子どもにケアをさせることは問題であると認識させる

10. ヤングケアラーに関する自由意見 68件

<主な意見>

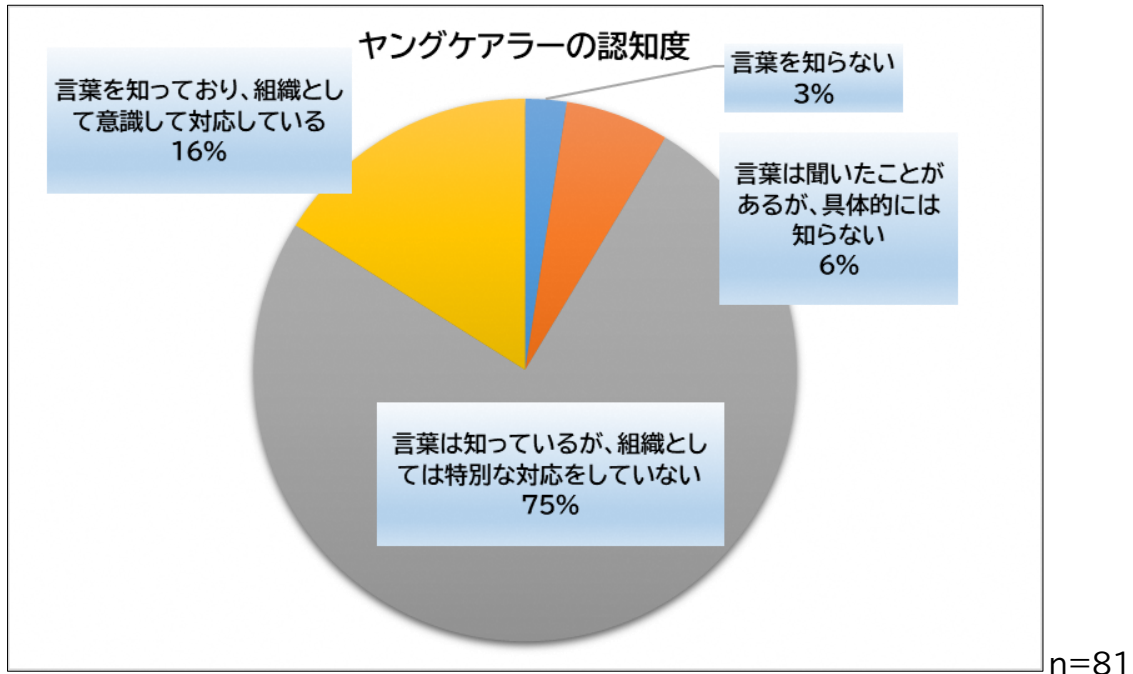
- 社会の認知度の向上
- 今回の調査でヤングケアラーへの理解が深まった
- ケアされる大人が適切なサービスにつながっていることが必要
- 相談しやすい、SOS を発することができる環境づくり
- 家族を大事にしている本人の気持ちも尊重する必要がある
- 子ども自身が自分の状況を認識しておらず、気づけるような周知啓発が必要
- お手伝いと線の引きもネグレクトと線の引きも難しい
- 本人はそれが当たり前と生活しているので周囲が気づくことが第一歩
- 保護者も子どもに頼らざるを得ない状況があるのではないか
- 一人一人の状況にあわせたきめ細やかな支援が必要
- 子どもと関わる関係機関はもとよりケアが必要な大人と関わる周囲の大人みんなの気づきが必要
- 1つの機関だけではどうにもできない。連携する体制が必要

10. 関係機関職員（相談支援機関） アンケート結果について

関係機関職員(相談支援機関)調査の結果(単純集計)

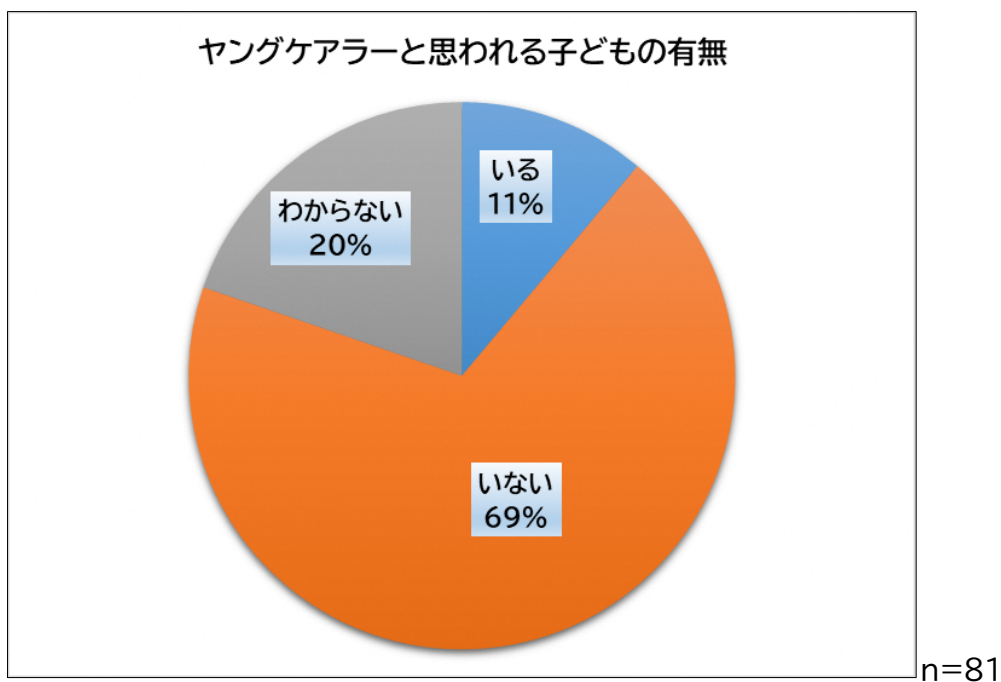
1. ヤングケアラーの認知度

「言葉は知っているが組織としては特別な対応をしていない」が 75%と最も高い。「言葉を覚えており、組織として意識して対応している」は 16%、「言葉を知らない」は 3%。



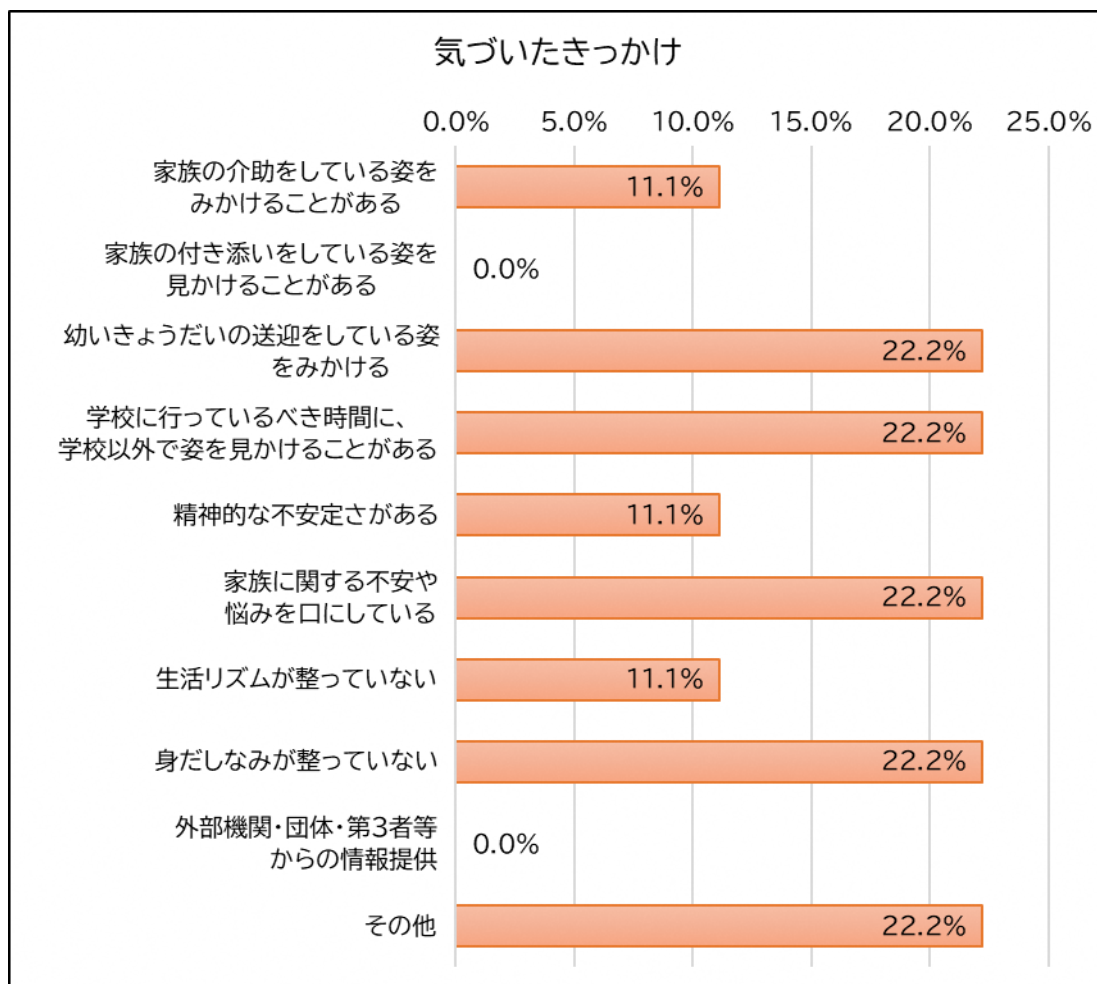
2. ヤングケアラーと思われる子どもの有無

「いる」が 11%、「いない」が 69%。



3. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ヤングケアラーと気づいたきっかけ(複数回答)

「幼いきょうだいの世話をしている姿を見かける」「学校に行っているべき時間に学校以外で姿を見かけることがある」「家族に関する不安や悩みを口にしている」「身だしなみが整っていない」が同率で高い。



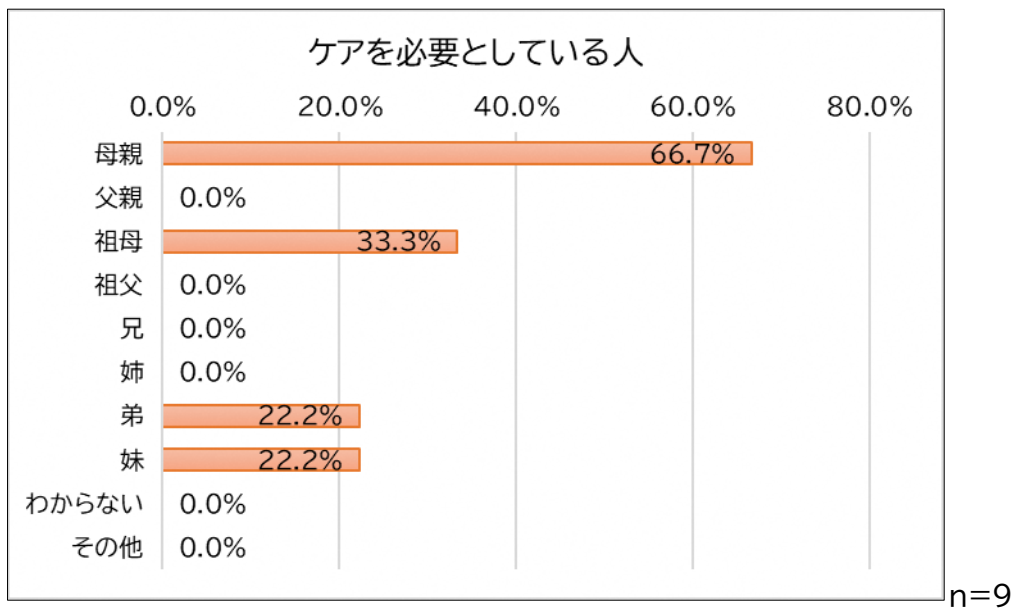
n=9

●その他の個別回答

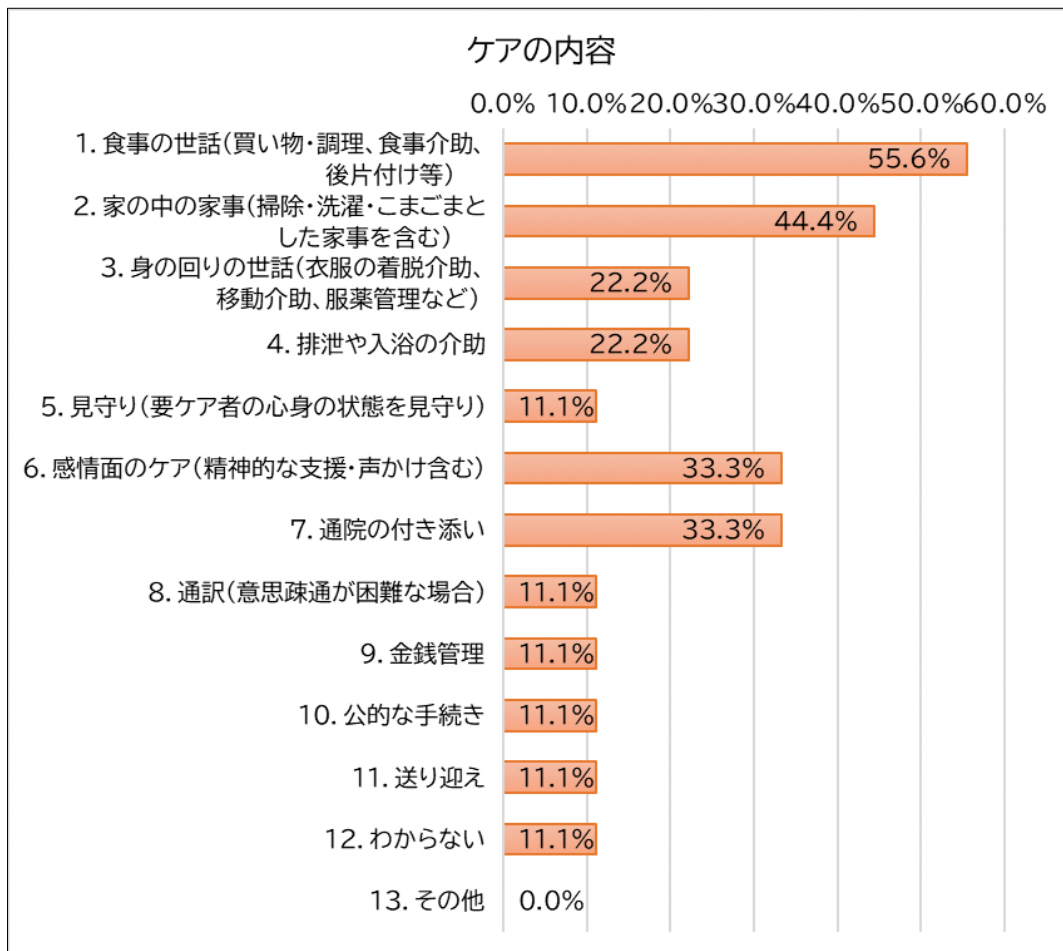
<主な意見>

○日本語を母国語としない家族を支援していること

4. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアを必要としている人(複数回答)
「母親」が 66.7%と最も高く、次いで「祖母」が 33.3%。「弟」「妹」は同率で 22.2%。



5. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアの内容(複数回答)
「食事の世話」が 55.6%と最も高く、次いで「家の中の家事」「感情面のケア」「通院の付き添い」が続く。



n=9

6. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ヤングケアラーの把握や支援にあたって工夫していること

<主な意見>

- 関係機関が介入することで、家族関係が悪化しないように、声掛けなどを慎重に行う
- 子どもの思いを第一に受け止める
- 子どもを孤立させないようにする
- 家族構成の把握、家族内の役割の把握

7. 以下の「ヤングケアラー」と思われる子どもを把握するための主なチェック項目以外に注意すべき状況

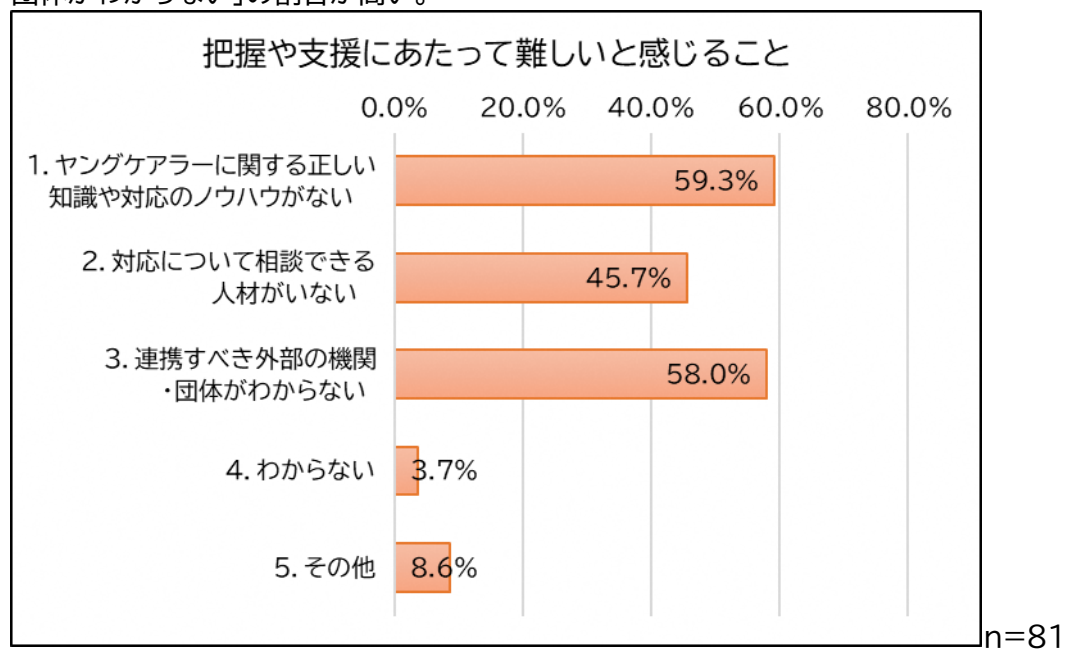
- ・家族の介助をしている姿を見かけることがある
- ・家族の付き添いをしている姿を見かけることがある
- ・幼いきょうだいの送迎をしている姿をみかける
- ・学校に行っているべき時間に、学校以外で姿を見かけることがある
- ・精神的な不安定さがある
- ・家族に関する不安や悩みを口に出している
- ・生活リズムが整っていない
- ・身だしなみが整っていない

<主な意見>

- 本人や家族が発達の遅れなどを抱えている
- 学校に来ない
- 友達と遊んでいる姿を見かけない
- 疲れているような表情をしていることが多い
- 同居家族に支援が必要な方がいる
- アルバイトをする時間数が極端に多い
- お金の管理をしている

8. ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じること(複数回答)

「ヤングケアラーに関する正しい知識や対応のノウハウがない」「連携すべき外部の機関・団体がわからない」の割合が高い。



●その他の個別回答

<主な意見>

○本人の、親を大事にする気持ちとケアすることによる負担のバランス

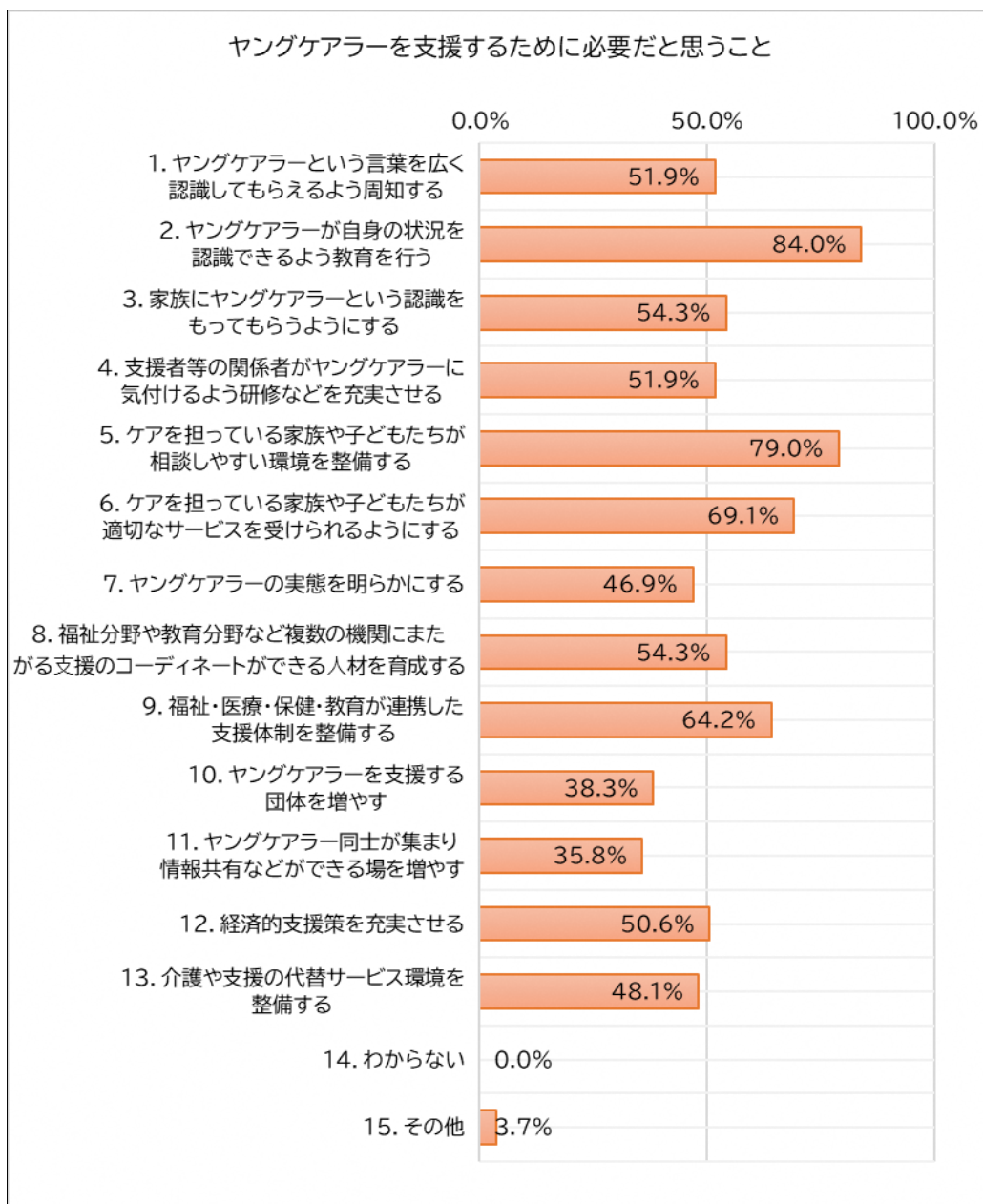
○介入を拒否される

○本人に自覚がなく、把握しづらい

○組織的な対応

9. 今後の支援策として必要と思われること

「ヤングケアラーが自身の状況を認識できるよう教育を行う」が 84.0%と最も高く、次いで「ケアを担っている家族や子どもたちが相談しやすい環境を整備する」「ケアを担っている家族や子どもたちが適切なサービスを受けられるようにする」が続く。



n=81

●その他の個別回答

○強い権限を持った組織が必要

○子どもと一番接する教育機関による気づき

10. ヤングケアラーに関する自由意見 30 件

<主な意見>

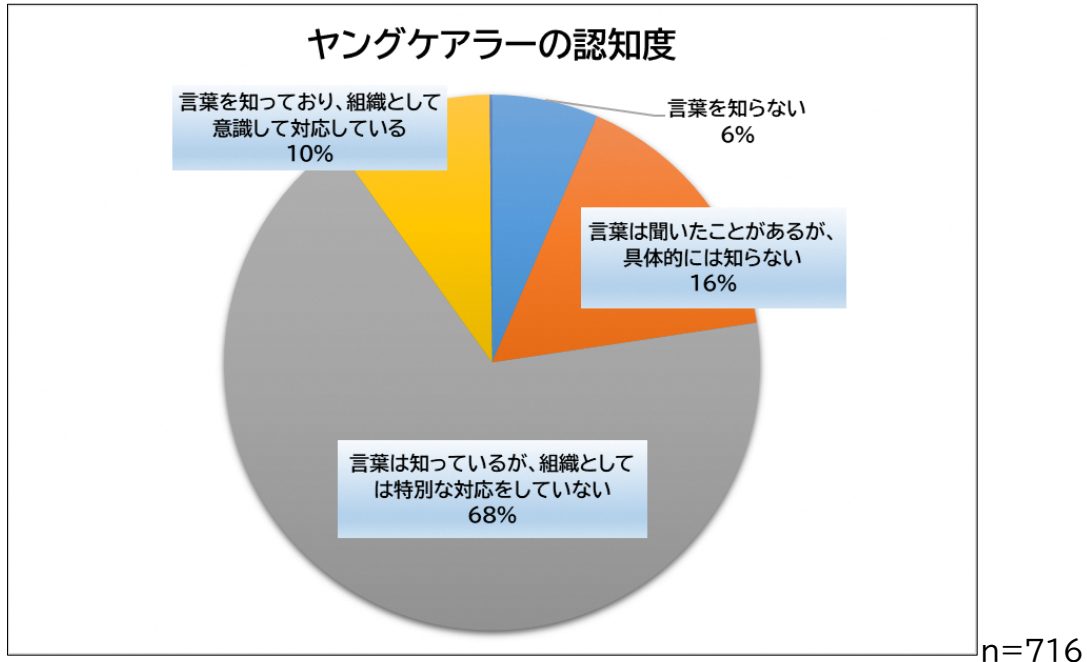
- ケアされる大人が適切なサービスにつながっていることが必要
- 相談しやすい、SOS を発することができる環境づくり
- 将来生活をしていけるまでの継続した見守りが必要
- 発見から支援につなげるまでの支援ルートの確立
- 社会の認知度の向上
- 子ども自身が自分の状況を認識しておらず、気づけるような取り組みが必要
- お手伝いとの線引きが難しい中で本人が声をあげられる環境づくり
- コーディネートできる機関、人材が必要
- 本人はそれを当たり前として生活しているので、周囲が気づくことが第一歩

11. 地域アンケート結果について

地域調査の結果(単純集計)

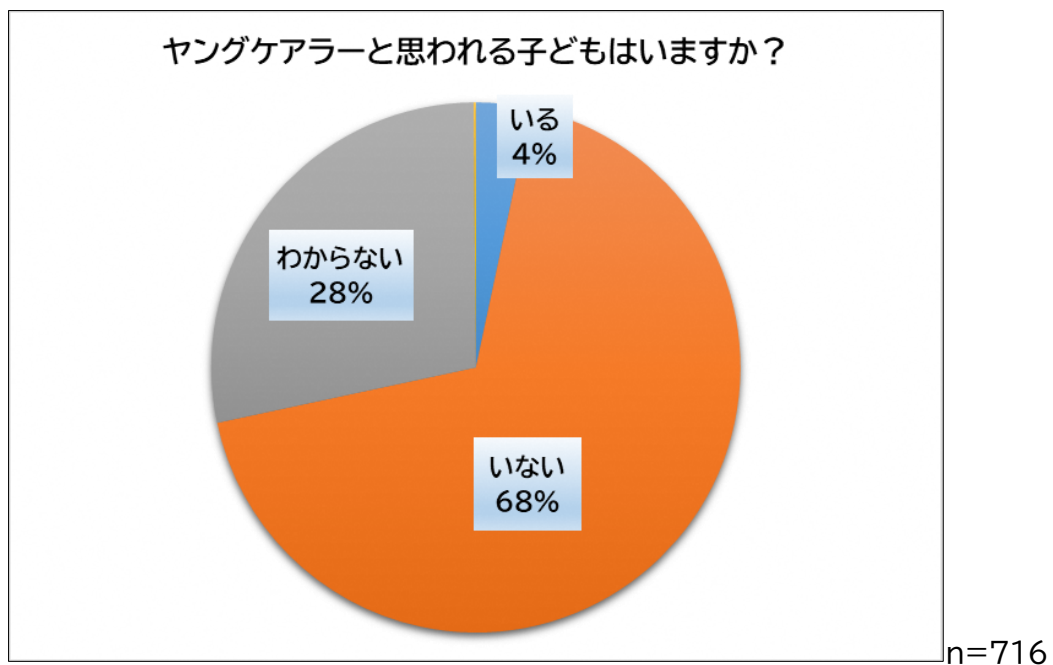
1. ヤングケアラーの認知度

「言葉は知っているが組織として特別な対応をしていない」が 68%と最も高い。「組織として対応している」のは 10%、「言葉を知らない」は 6%。



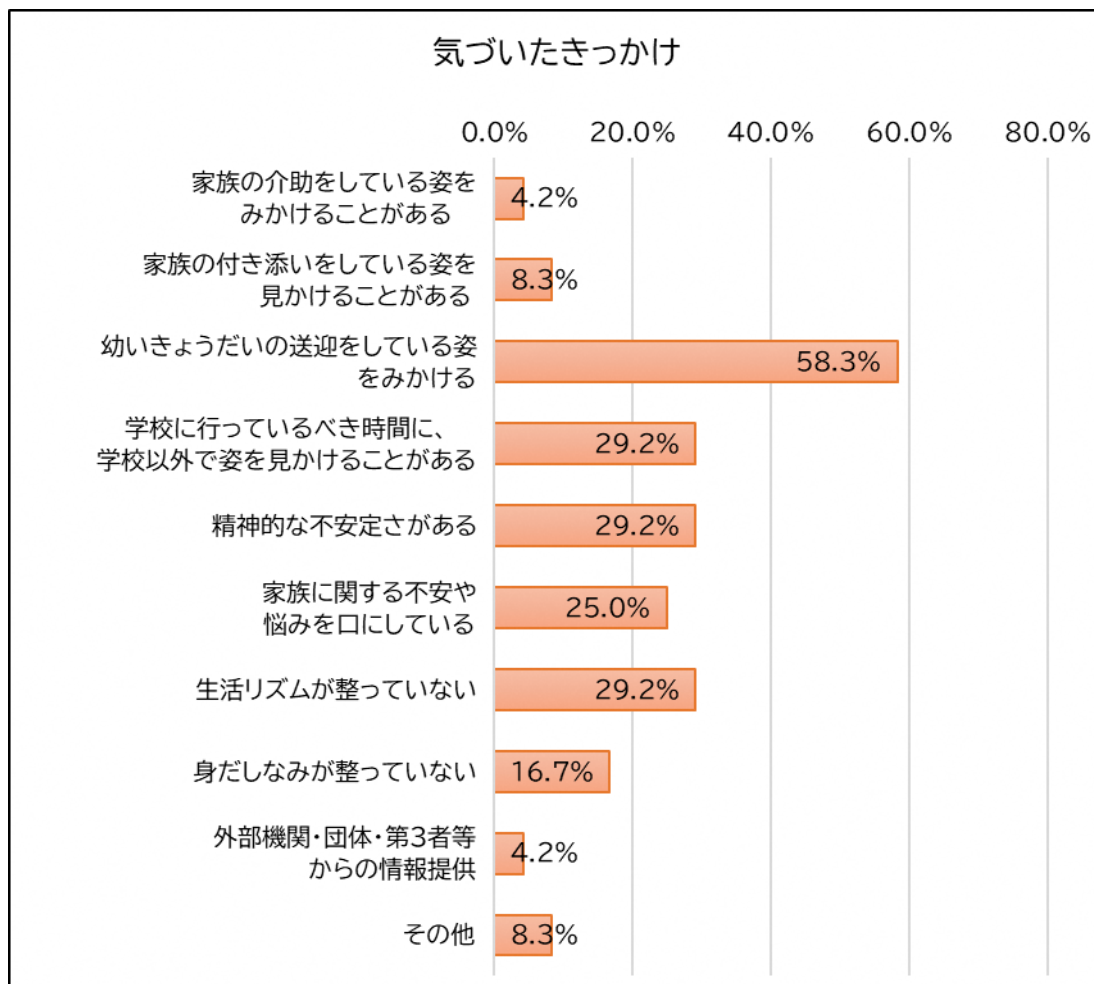
2. ヤングケアラーと思われる子どもの有無

「いる」が 4%、「いない」が7割近くにのぼる。



3. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ヤングケアラーと気づいたきっかけ(複数回答)

「幼いきょうだいの世話をしている姿をみかける」が 58.3%と最も高く、次いで「学校に行っているべき時間に学校以外で姿をみかけることがある」「精神的な不安定さがある」「生活リズムが整っていない」が同率で続く。



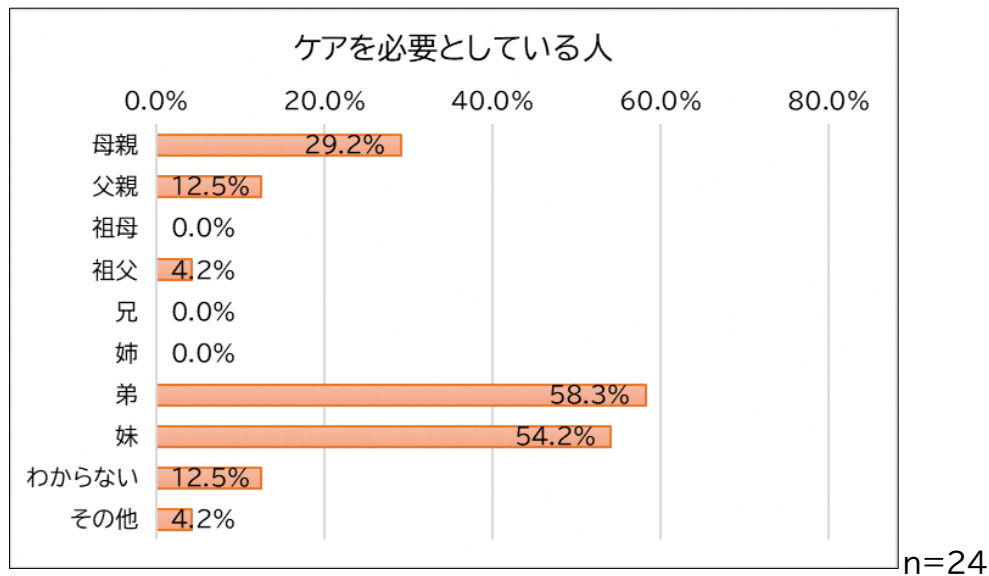
n=24

●その他の個別回答

- 幼いきょうだいの面倒を見ている
- 子どもと話すときの会話の内容
- 保護者に会えない
- 生活の様子

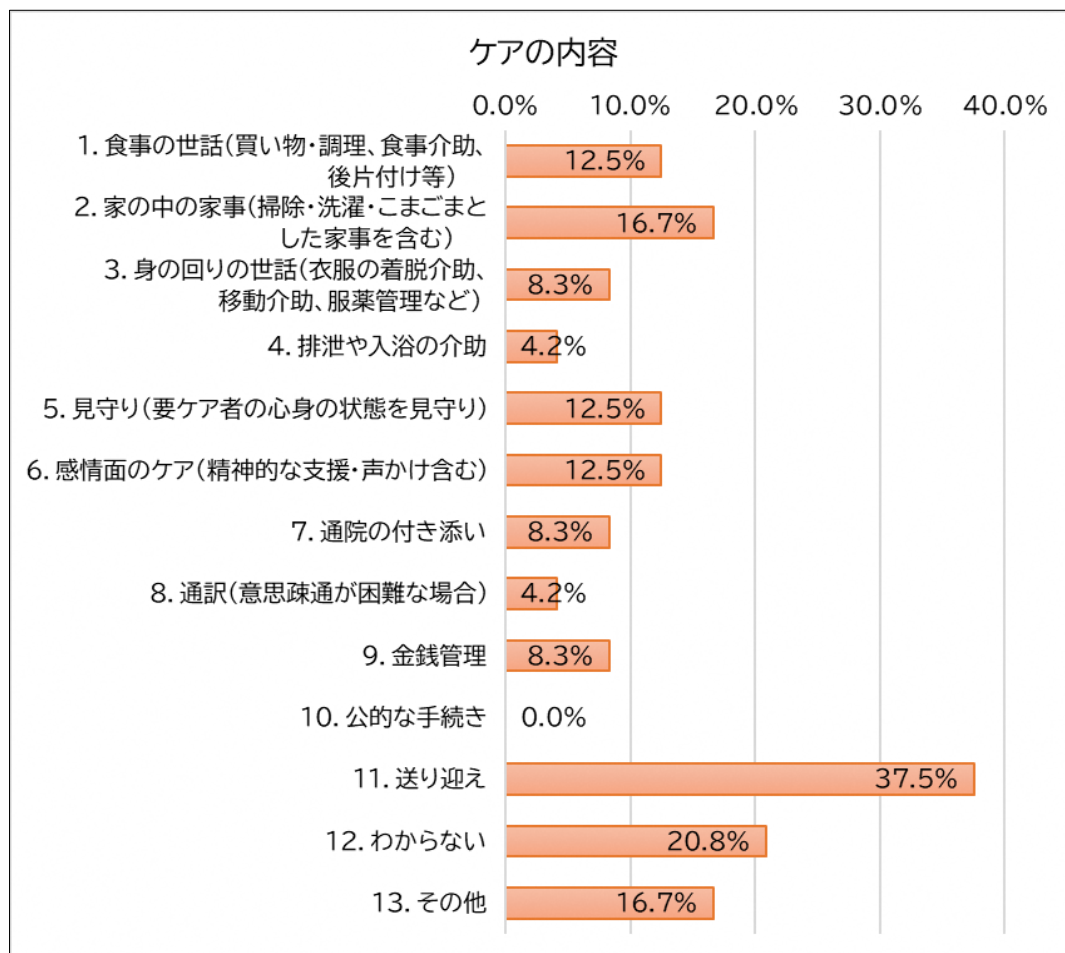
4. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアを必要としている人(複数回答)

「弟」58.3%、「妹」54.2%が高く、【設問3】の「きづいたきっかけ」で「幼いきょうだいの世話をしている姿をみかける」が最も高いことと同様の傾向が出ている。



5. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ケアの内容(複数回答)

「送り迎え」が 37.5%と最も高く、「家の中の家事」「食事の世話」「見守り」「精神面のケア」も高い割合となっている。



n=24

6. 【設問 2】で「いる」と回答があったもののうち、ヤングケアラーの把握や支援にあたって工夫していること

<主な意見>

- 子どもの言動や変化に注意している
- 服装又は身体
- 声掛け
- できる範囲の情報共有

7. 以下の「ヤングケアラー」と思われる子どもを把握するための主なチェック項目以外に注意すべき状況

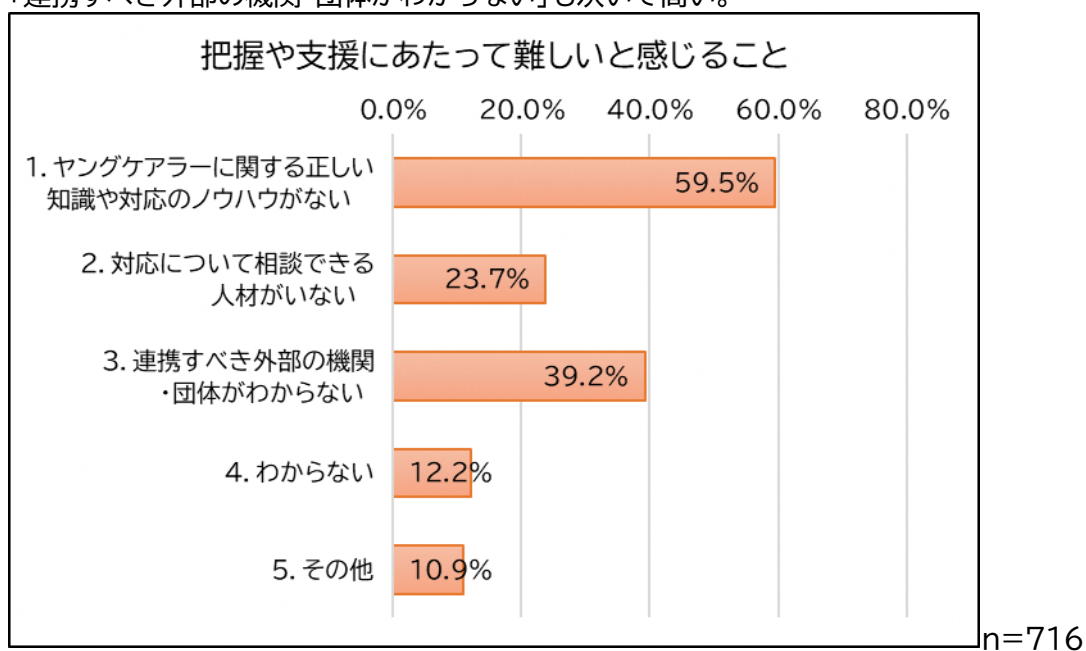
- ・家族の介助をしている姿を見かけることがある
- ・家族の付き添いをしている姿を見かけることがある
- ・幼いきょうだいの送迎をしている姿を見かける
- ・学校に行っているべき時間に、学校以外で姿を見かけることがある
- ・精神的な不安定さがある
- ・家族に関する不安や悩みを口に出している
- ・生活リズムが整っていない
- ・身だしなみが整っていない

<主な意見>

- 買い物をしている姿を見かける
- 登校が定時でない
- 遅刻、早退、欠席が多い、不登校
- 親と連絡がとれない
- 食事がとれていない
- 遊んだりしていない
- 一人でいる姿をよく見かける
- 家庭の様子(家の内外が不衛生)
- 家族のお世話をしている姿や関連する会話

8. ヤングケアラーの把握や支援にあたって難しいと感じること(複数回答)

「ヤングケアラーに関する正しい知識や対応のノウハウがない」が 59.5%と最も高く、「連携すべき外部の機関・団体がわからない」も次いで高い。



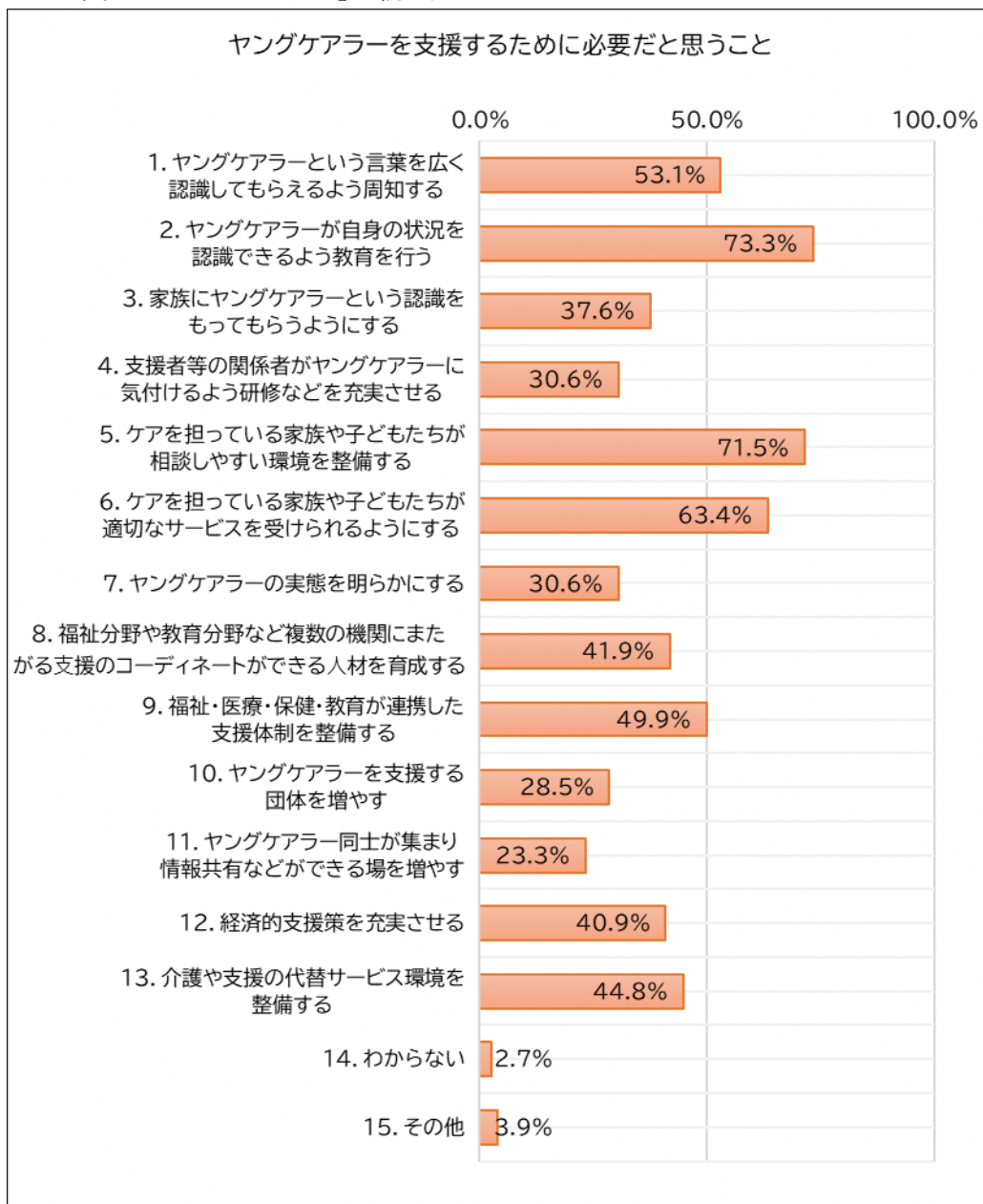
●その他の個別回答

<主な意見>

- 把握や支援方法が分からない
- 他機関との連携ができない、難しい
- 声掛けが難しい
- 情報がない
- 子どもや家族の理解、認識の無さ、薄さ
- 家庭背景の複雑さ

9. 今後の支援策として必要と思われること

「ヤングケアラーが自身の状況を認識できるように教育を行う」が 73.3%と最も高く、次いで「ケアを担っている家族や子どもたちが相談しやすい環境を整備する」「適切なサービスを受けられるようにする」が続く。



n=716

●その他の個別回答

<主な意見>

○連携体制の構築が必要

○相談体制の整備・充実

○子ども自身が認識できるような啓発、周囲の大人が認識できるための研修

○ヤングケアラーとお手伝いの違いの明確化

○市による支援体制の充実

10. ヤングケアラーに関する自由意見 274 件

<主な意見>

○ヤングケアラーへの支援の難しさについて

- ・実態の把握が難しい
- ・ヤングケアラーとなり得る境界線、線引きが難しい
- ・個人情報の取り扱いもあり、家庭への介入が難しい
- ・子どもも家族もケアをする状況が当たり前だと思っている
- ・把握しても支援につなげていくのが難しい
- ・子どもは相談したくてもできないのではないかな
- ・ヤングケアラーという言葉を知っていても、課題が複雑でどのように対応すればよいか分からない
- ・学校や行政が持っている情報を共有できないと支援できない

○今後取り組んでいくべきことについて

- ・子ども自身が自分の状況を認識しておらず、気づけるような取り組み
- ・相談しやすい、SOS を発することができる環境づくり
- ・関係機関への研修、講演会の実施等周りの大人が正しい知識を持ち対応できる機会づくり
- ・周りの大人が声掛けをして話を聞く
- ・子どもに一番身近な学校が発見・把握すべき
- ・アンテナをはって把握に努める
- ・学校と地域が連携して支援につなげていく
- ・必要な支援を届けられるよう制度の充実
- ・社会全体の認知度の向上
- ・人とのつながりができ自由に利用できる交流の場
- ・学校、地域、行政間の情報共有
- ・ケアされる大人が適切なサービスにつながっていること
- ・相談窓口と、どのような支援があるのか示すべき

○その他

- ・自分の周りにはそうした家庭はいない
- ・介護の負担は子どものときだけで終わるものではなく続いていく
- ・昔は家族を世話することは当たり前でそういう感覚の人もある
- ・今回の調査でヤングケアラーのことを理解することができた